

中野遺跡第49地点

－ 東京電力志木変電所の埋蔵文化財発掘調査報告 －

2004

埼玉県志木市遺跡調査会



打越式土器



下吉井式土器

は じ め に

志木市遺跡調査会
会長 細田 信良

この度、中野遺跡第49地点の発掘調査報告書が刊行されたことを喜ばしく思います。

この調査は、株式会社東京電力の志木変電所増設工事に伴い実施されたものです。今回の変電所の工事内容は、電気を市内の各家庭へ供給し続けながらの改良工事ということもあり、一度に全面を更地状態にして実施するという訳にはいきませんでした。そのため、発掘調査は、その工事計画に合わせ、平成12年から14年にかけての3ヶ年5回（第1～5工程）にわたりました。

さて、調査の内容ですが、今回の調査では、旧石器時代から中・近世までの幅広い年代の資料が発見されており、中でも、縄文時代の遺物包含層が調査区全域で確認され、中期後葉から後期前葉を中心とした多くの土器・石器が検出されています。

さらに中・近世の段切状遺構と呼ばれる一連の遺構が発見され、そのうちの一つの土坑からは、頭を北に向か顔を西に向けて屈葬された人骨1体が検出されました。この一連の遺構については、平成7年度に志木市の指定文化財に指定された『館村旧記』に記載されている宝幢寺の西方の「村中の墓場」に関連する遺構ではないかと考えられます。

このような貴重な発見により、志木市の歴史にまた新たなる1ページが追加されたことは大変喜ばしいことであり、同時に本書が郷土の歴史研究のために広く活用されますよう切に願っています。

最後になりましたが、本書の刊行にあたり、ご指導ご協力をいただきました文化庁、埼玉県文化財保護課、そして深いご理解とご協力を賜りました地元の多くの方々並びに関係者に對し、心から厚くお礼申し上げます。

例　　言

1. 本書は、埼玉県志木市に所在する中野遺跡（県No.09-002）の第49地点の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査及び整理作業は、志木市教育委員会の斡旋により、東京電力株式会社から志木市遺跡調査会が委託を受け実施した。
3. 本書の作成において、編集は尾形則敏・深井恵子が行い、執筆は下記以外は尾形則敏が行った。
　　深井恵子 第3章第1・3～6節の遺構
　　青木 修 第3章第2節、第7節第2群1類、第4章1
4. 旧石器・縄文時代の石器と中・近世の陶磁器の実測及び観察表の作成は、（有）アルケーリサーチ代表取締役藤波啓容に依頼した。また、打越式・下吉井式土器については富士見市立水子見塚資料館の早坂廣人氏に、中・近世の陶磁器については朝霞市教育委員会の野沢 均氏に、「館村旧記」の行光寺関連については志木市文化財保護委員長の神山健吉氏に助言をいただいた。
5. 自然科学分析については、下記の方々に依頼し、その結果を付編に併載するものとする。
　　西本豊弘（国立歴史民俗博物館） 植田弥生（株式会社パレオ・ラボ）
　　鈴木 茂（株式会社パレオ・ラボ） 桶泉岳二（早稲田大学）
　　新山雅広（株式会社パレオ・ラボ）
6. 遺物の実測は、鎌本あけみ・星野恵美子・松浦恵子・山口優子が行い、遺構・遺物のトレースは、深井恵子が行った。写真撮影は、尾形則敏・青木 修が行った。
7. 本書の遺構・遺物の挿図版の指示は、以下のとおりである。
 - 挿図版の縮尺は、それぞれに明記した。
 - 遺構挿図版中の水糸レベルは、海拔標高を示す。
 - ピット・掘り込み内の数値は、床面もしくは確認面からの深さを示し、単位はcmである。
 - 遺構挿図版中のドットは遺物出土位置を示し、その番号は遺物挿図版中の遺物番号と一致する。
 - 遺構の略記号は、以下のとおりである。
8. 各遺跡の発掘調査及び整理作業・報告書作成には、以下の諸機関・諸氏のご教示・ご援助を賜った。記して感謝する次第である（敬称略）。
　　埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課・朝霞市教育委員会・新座市教育委員会・和光市教育委員会・朝霞市博物館・富士見市立水子見塚資料館
　　会田 明・浅野晴樹・荒井幹夫・石井 寛・飯田充晴・井上洋一・上田 寛・江原 順・大野邦彦・加藤秀之・片平雅俊・川辺賛一・隈本健介・栗原和彦・小出輝雄・肥沼正和・小瀧 勉・小林寛子・小宮恒雄・齋藤欣延・笹森健一・斯波 治・鈴木一郎・鈴木重信・隅田 真・高橋 学・田代雄介・田中広明・都築恵美子・照林敏郎・並木 隆・根本 靖・野沢 均・原 京子・早坂廣人・廣田吉三郎・福田 聖・藤波啓容・堀 善之・松本 完・松本富雄・水口由紀子・三田光明・村本周三・山田尚友・和田晋治
　　開発主体者（東京電力株式会社埼玉支店志木支社 志木市幸町1丁目8番50号）

志木市遺跡調査会組織

1. 発掘調査

(1) 平成11・12年度 (第1・2工程)

〈役員〉

会長 秋山太藏 (志木市教育委員会教育長) (～平成12年6月)
細田信良 (") (平成12年7月～)
副会長 川口憲夫 (志木市教育委員会生涯学習部長) (～平成12年3月)
谷合弘行 (志木市教育委員会生涯学習部長) (平成12年4月～)
理事事務局長 神山健吉 (志木市文化財保護委員長)
井上國夫 (志木市文化財保護副委員長)
高橋長次 (志木市文化財保護委員)
高橋 豊 (")
内田正子 (")
鈴木重光 (志木市教育委員会生涯学習課長) (～平成12年3月)
土橋春樹 (") (平成12年4月～)

〈監査〉

監事 萩原洋子 (志木市立郷土資料館長)
永田伸夫 (社会教育指導員)

〈事務局〉

担当課・係 志木市教育委員会教育総務部生涯学習課文化財保護係 (～平成12年3月)
志木市教育委員会生涯学習部生涯学習課文化財保護担当 (平成12年4月～)
理事兼事務局長 鈴木重光 (生涯学習課長) (～平成12年3月)
土橋春樹 (") (平成12年4月～)
事務局 金子雅佳 (生涯学習課長補佐) (平成12年4月～)
関根正明 (生涯学習課文化財保護係長)
佐々木保俊 (")
清水あや子 (生涯学習課文化財保護係主任) (～平成12年3月)
新井由起子 (") (平成12年4月～)
尾形則敏 (")

〈第1工程発掘調査〉

調査担当者 尾形則敏
調査員 深井恵子
調査協力員 梅原裕子・遠藤英子・鎌本あけみ・川井信子・下村康代・高田美智子・中嶋清美・中村逸子・橋本好子・星野恵美子・本郷妙子・松浦恵子・松本靖子・山口優子

〈第2工程発掘調査〉

調査担当者 尾形則敏
調査員 深井恵子
調査協力員 足立裕子・阿部公子・阿部ふみ子・岩森都・梅原裕子・遠藤英子・鎌本あけみ・高田美智子・塙田和枝・中嶋清美・中村逸子・橋本好子・久留浪子・星野恵美子・本郷妙子・松崎陽子・松浦恵子・山口優子・吉谷顯子

(2) 平成13年度 (第3・4工程)

〈役員〉

会長 細田信良 (志木市教育委員会教育長)
副会長 谷合弘行 (志木市教育委員会生涯学習部長)
理事事務局長 神山健吉 (志木市文化財保護委員長)
井上國夫 (志木市文化財保護副委員長)
高橋長次 (志木市文化財保護委員)
高橋 豊 (")
内田正子 (")

理事兼事務局長 土橋春樹 (志木市教育委員会生涯学習課長)

〈監査〉

監事 萩原洋子 (志木市立郷土資料館長)
三ツ矢美代子 (社会教育指導員)

〈事務局〉

担当課・係
理事兼事務局長
事務局
志木市教育委員会生涯学習部生涯学習課文化財保護担当
土橋春樹（生涯学習課長）
金子雅佳（生涯学習課長補佐）
関根正明（生涯学習課文化財保護担当主査）
佐々木保俊（“）
新井由起子（生涯学習課文化財保護担当主任）
尾形則敏（“）

〈第3工程発掘調査〉

調査担当者 尾形則敏
調査員 深井恵子
調査協力員 遠藤英子・奥野恭子・鎌本あけみ・鈴木浩子・高田美智子・星野恵美子・
松浦恵子・山口優子
佐々木潤（東洋大学生）

〈第4工程発掘調査〉

調査担当者 尾形則敏
調査員 深井恵子
調査協力員 遠藤英子・奥野恭子・鎌本あけみ・鈴木浩子・高田美智子・星野恵美子・
松浦恵子・山口優子
佐々木潤（東洋大学生）

（3）平成14年度（第5工程）

役員
会副会長 細田信良（志木市教育委員会教育長）
理事長 谷合弘行（志木市教育委員会教育政策部長）
理事 事務室 神山健吉（志木市文化財保護委員長）
理事 事務室 井上國夫（志木市文化財保護副委員長）
理事 事務室 高橋長次（志木市文化財保護委員）
理事 事務室 高橋豊（“）
理事 事務室 内田正子（“）
理事兼事務局長 土橋春樹（志木市教育委員会教育政策部参事兼生涯学習課長）
監査監事 金子雅佳（生涯学習課主幹）（平成14年4月～8月）
荒井正夫（生涯学習課主査）（平成14年8月～）
福田鲇子（社会教育指導員）

〈事務局〉

担当課・係
理事兼事務局長
事務局
志木市教育委員会教育政策部生涯学習課埋蔵文化財グループ
土橋春樹（教育政策部参事兼生涯学習課長）
下河辺信行（生涯学習課主幹）（平成14年4月～8月）
金子雅佳（“）（平成14年8月～）
関根正明（生涯学習課埋蔵文化財グループ主査）
佐々木保俊（“）
尾形則敏（生涯学習課埋蔵文化財グループ主任）
倉部恵子（“）

〈第5工程発掘調査〉

調査担当者 尾形則敏
調査員 深井恵子
調査協力員 遠藤英子・奥野恭子・鎌本あけみ・鈴木浩子・高田美智子・星野恵美子・
松浦恵子・山口優子
佐々木潤（東洋大学生）・藤岡智子（早稲田大学生）

2. 整理作業

調査員 深井恵子
調査補助員 青木修
整理協力員 遠藤英子・奥野恭子・鎌本あけみ・鈴木浩子・高田美智子・高野美子・
中嶋清美・中村逸子・橋本好子・星野恵美子・松浦恵子・山口優子・
佐々木潤（東洋大学生）

目 次

巻頭図版／はじめに	
例 言／志木市遺跡調査会組織／目 次／挿図目次／表目次／図版目次	
第1章 遺跡の立地と環境	1
第1節 市域の地形と遺跡	1
第2節 遺跡の概要	8
第2章 発掘調査の概要	14
第1節 調査に至る経過	14
第2節 各工程の調査方法と経過	15
第3章 掘出された遺構と遺物	23
第1節 旧石器時代	23
(1) 概要	23
(2) 基本層序	23
(3) 出土遺物	30
第2節 繩文時代	31
(1) 概要	31
(2) 住居跡	31
(3) 炉穴	31
(4) 土坑	33
(5) ピット	41
(6) 遺物包含層	42
第3節 弓生時代	61
(1) 概要	61
(2) 住居跡	62
(3) ピット	69
第4節 古墳時代	71
(1) 概要	71
(2) 住居跡	71
(3) 土坑	79
(4) ピット	80
第5節 平安時代	80
(1) 概要	80
(2) 住居跡	81
(3) 土坑	83
(4) ピット	84
第6節 中・近世	87
(1) 概要	87
(2) 段切状遺構	87
(3) 土坑	91
(4) 井戸跡	94
(5) ピット	98
第7節 遺構外出土遺物	98
第4章 まとめ	113
〔付 編〕 自然科学分析	
I. 67号土坑・71号土坑出土の人骨・獸骨	123
II. 71号土坑出土の灰資料	124
III. 71号土坑出土の炭化種実	126
IV. 71号土坑出土の炭化材の樹種同定	128
V. 71号土坑出土の貝類遺体	129
VI. 66号住居跡から出土した炭化種実	129
図 版	
報告書抄録	

挿図目次

第1図	市域の地形と遺跡分布 (1/20000) —	2
第2図	中野遺跡の調査地点 (1/3000) —	9
第3図	変電所増設の工事予定図 (1/400) —	15
第4図	遺構分布図 (1/200) —	21
第5図	旧石器時代の遺物分布図 (1/200) —	24
第6図	基本断面・縄文時代遺物包含層断面図 (1/50) —	25
第7図	器種別分布図 (1/60) —	26
第8図	母岩別分布図 (1/60) —	27
第9図	旧石器時代の遺物 1 (2/3) —	28
第10図	旧石器時代の遺物 2 (2/3) —	29
第11図	縄文時代の遺構及び包含層出土遺物分布図 (1/200) —	32
第12図	2号住居跡・出土遺物 (1/60・1/3) —	34
第13図	11号炉穴・出土遺物 (1/60・1/3) —	34
第14図	土坑 (1/30・1/60) —	35
第15図	79・80号土坑出土遺物 1 (1/4・1/3) —	36
第16図	79・80号土坑出土遺物 2 (1/3・2/3) —	37
第17図	81・97・98号土坑・20号ピット出土遺物 (1/3) —	40
第18図	包含層早期土器分布図 (1/200) —	45
第19図	包含層前期土器分布図 (1/200) —	46
第20図	包含層中期前・中葉土器分布図 (1/200) —	47
第21図	包含層中期後葉土器分布図 1 (1/200) —	48
第22図	包含層中期後葉土器分布図 2 (1/400) —	49
第23図	包含層後期上器分布図 (1/200) —	50
第24図	包含層土器分布図 (図版掲載分) (1/200) —	51
第25図	包含層石器分布図 (1/200) —	52
第26図	包含層出土遺物 1 (1/3) —	54
第27図	包含層出土遺物 2 (1/3) —	55
第28図	包含層出土遺物 3 (1/3) —	56
第29図	包含層出土遺物 4 (1/3・1/4) —	57
第30図	包含層出土遺物 5 (2/3・1/3) —	58
第31図	13号住居跡・出土遺物 (1/60・1/3) —	62
第32図	14号住居跡・72号土坑 (1/60) —	64
第33図	14号住居跡出土遺物 (1/3) —	65
第34図	15号住居跡 (1/60) —	66
第35図	15・17号住居跡・1号ピット出土遺物 (1/4・1/3) —	67
第36図	18号住居跡・出土遺物 (1/60・1/4・1/3) —	70
第37図	19号住居跡・出土遺物 (1/60・1/3) —	70
第38図	66号住居跡 (1/60) —	72
第39図	66号住居跡遺物出土状態 (1/60・1/9) —	73
第40図	66号住居跡カマド (1/30) —	74
第41図	66号住居跡出土遺物 1 (1/4) —	76
第42図	66号住居跡出土遺物 2 (1/4・1/3) —	77
第43図	100・101号土坑・101号土坑出土遺物 (1/60・1/3) —	79
第44図	65号住居跡・出土遺物 (1/60・1/4) —	82
第45図	土坑 (1/60・1/30) —	85
第46図	77号土坑・10号ピット出土遺物 (1/4) —	85
第47図	段切状遺構・66・67号土坑 (1/60・1/30) —	89
第48図	土坑・3号井戸跡 (1/60) —	92
第49図	71号土坑 (1/60) —	93
第50図	4～6号井戸跡 (1/60) —	95
第51図	出土遺物 1 (1/2・1/4) —	96

第52図	出土遺物 2 (1/3・4/5)	96
第53図	遺構外出土石器 1 (2/3)	102
第54図	遺構外出土石器 2 (2/3・1/3)	103
第55図	遺構外出土石器 3 (1/3)	104
第56図	遺構外出土遺物 1 (1/3)	105
第57図	遺構外出土遺物 2 (1/3)	106
第58図	遺構外出土遺物 3 (1/3)	107
第59図	遺構外出土遺物 4 (1/3・1/4)	108
第60図	縄文時代の包含層・遺構外出土土器の割合	114
第61図	67号土坑人骨出土状態 (1/15)	123
第62図	71号土坑炭化物出土状態 (1/40)	124

表 目 次

第1表	志木市の時代別にみた考古資料一覧 (1)	4
	志木市の時代別にみた考古資料一覧 (2)	5
	志木市の時代別にみた考古資料一覧 (3)	6
第2表	志木市の発掘調査報告書一覧	7
第3表	中野遺跡調査一覧 (1)	10
	中野遺跡調査一覧 (2)	11
第4表	各工程の調査概要	20
第5表	旧石器時代の石器一覧	30
第6表	79・80号土坑出土土器一覧	38
第7表	土坑出土石器一覧	41
第8表	包含層出土の縄文土器一覧 (1)	59
	包含層出土の縄文土器一覧 (2)	60
第9表	包含層出土の石器一覧	61
第10表	遺構出土の陶磁器・土器一覧	97
第11表	遺構外出土の旧石器時代石器一覧	108
第12表	遺構外出土の縄文土器一覧 (1)	109
	遺構外出土の縄文土器一覧 (2)	110
	遺構外出土の縄文土器一覧 (3)	111
第13表	遺構外出土の縄文時代石器一覧	112
第14表	遺構外出土の陶磁器・土器一覧	112
第15表	出土した炭化種実	126
第16表	出土炭化種実一覧	130

図 版 目 次

図版 1	1. 第1工程 表土剥ぎ風景 (②-A区)	2. 第1工程 調査風景 (②-A区)
	3. 第1工程 表土剥ぎ風景 (②-B区南半)	4. 第1工程 調査風景 (②-B区南半)
	5. 第1工程 表土剥ぎ風景 (②-B区北半)	6. 第1工程 調査風景 (②-B区北半)
	7. 第2工程 調査区近景 (③区)	8. 第2工程 基礎撤去作業風景
図版 2	1. 第2工程 表土剥ぎ風景 (③区)	2. 第2工程 調査風景 (③区)
	3. 第3工程 表土剥ぎ風景 (④区)	4. 第3工程 調査風景 (④区)
	5. 第4工程 表土剥ぎ風景 (⑤区)	6. 第4工程 調査風景 (⑤区)
	7. 第5工程 表土剥ぎ風景 (⑥区)	8. 第5工程 調査風景 (⑥区)
図版 3	1~4. 旧石器時代遺物出土状態	5. 石器 (No.4) 出土状態
	6. 石器 (No.11) 出土状態	7. 基本土層 A-B
		8. 基本土層 G-H

図版 4	1. 2号住居跡 4. 79・80号土坑遺物出土状態 7. 81・82号土坑	2. 11号炉穴 5. 80号土坑石器出土状態 8. 97号土坑	3. 79・80号土坑調査風景 6. 79・80号土坑
図版 5	1. 98・99号土坑 4. 104号土坑 7. 13号住居跡	2. 102号土坑 5. 包含層調査風景 8. 13号住居跡堀り方	3. 103号土坑 6. 包含層遺物出土状態
図版 6	1. 14号住居跡調査風景 6. 15号住居跡貯藏穴遺物出土状態	2. 14号住居跡 7. 15号住居跡	3～5. 15号住居跡遺物出土状態 8. 15号住居跡貯藏穴
図版 7	1. 18号住居跡（⑤区） 4・5. 19号住居跡遺物出土状態	2. 18号住居跡（⑥区） 6. 19号住居跡	3. 19号住居跡調査風景 7. 100号土坑
図版 8	1～2. 66号住居跡遺物出土状態（④区） 3～8. 66号住居跡遺物出土状態（⑤区）	5. 66号住居跡貯藏穴	
図版 9	1～3. 66号住居跡カマド遺物出土状態	6～8. 66号住居跡遺物出土状態（⑥区）	
図版10	1～3. 65号住居跡遺物出土状態 6. 74・75号土坑 9. 65号土坑	4. 65号住居跡 7. 77号土坑	5. 73号土坑 8. 64号土坑
図版11	1. 66号土坑 4. 67号土坑人骨出土状態 7. 69号土坑	2. 66号土坑遺物出土状態 5. 70号土坑 8. 94～96号土坑	3. 67号土坑 6. 68号土坑・3号井戸跡
図版12	1. 71号土坑貝出土状態 4. 71号土坑主体部 6. 71号土坑連絡口（主体部から）	2. 71号土坑（地下式坑） 5. 71号土坑連絡口（堅坑部から） 7. 71号土坑 炭化物2	3. 71号土坑堅坑部 8. 71号土坑主体部工具痕
図版13	1. 段切状遺構北半（西から） 4. 段切状遺構北半	2. 段切状遺構南半（西から） 5. 段切状遺構北半（柱穴）	3. 段切状遺構北半 6. 段切状遺構北半（工具痕）
図版14	1. 段切状遺構南半（西から） 4. 段切状遺構南半 7. 5号井戸跡	2. 段切状遺構南半（東から） 5. 段切状遺構南半（柱穴） 8. 6号井戸跡	3. 段切状遺構南半 6. 段切状遺構南半（柱穴）
図版15	1. 旧石器時代出土遺物 3. 79号土坑出土遺物	2. 2号住居跡・11号炉穴出土遺物	
図版16	1. 80号土坑出土遺物	2. 81・97・98号土坑・20号ピット出土遺物	
図版17	包含層出土遺物		
図版18	包含層出土遺物		
図版19	1. 包含層出土遺物	2. 繊維植物底のある土器	
図版20	13～15・17～19号住居跡・1号ピット出土遺物		
図版21	66号住居跡出土遺物		
図版22	1. 101号土坑出土遺物 4. 段切状遺構出土遺物	2. 77号土坑出土遺物	3. 65号住居跡・10号ピット出土遺物
図版23	1. 68号土坑出土遺物 4. 72号土坑出土遺物	2. 66・69号土坑出土遺物 5. 3号井戸跡出土遺物	3. 71号土坑出土遺物
図版24	1. 4号井戸跡出土遺物	2. 6号井戸跡出土遺物	
図版25	遺構外出土石器		
図版26	遺構外出土遺物		
図版27	遺構外出土遺物		
図版28	遺構外出土遺物		
図版29	67号土坑出土ヒトの歯		
図版30	67号土坑出土ヒトの歯室部、71号土坑出土歯骨		
図版31	71号土坑出土灰試料の植物珪膜体		
図版32	71号土坑出土炭化種実		
図版33	71号土坑出土炭化材		
図版34	71号土坑出土イシガイ、66号住居跡出土炭化種実		

第1章 遺跡の立地と環境

第1節 市域の地形と遺跡

志木市は、埼玉県の南西部に位置し、市域はおおよそ南北4.71km、東西4.73kmの広がりをもち、面積は9.06km²、人口約6万6千の自然と文化の調和する都市である。

地理的景観を眺めてみると、市域東部の宗岡地区は、荒川（旧入間川）の形成した沖積低地が拡がり、市域西部の本町・柏町・幸町地区は、古多摩川によって形成された武藏野台地の上にある。また、市内には東部に荒川、中央に古くは舟運で利用された新河岸川、そして西部から中央に新河岸川と合流する柳瀬川の3本の川が流れている。

こうした自然環境の中で、西原大塚遺跡をはじめ市域の大部分の遺跡は、柳瀬川・新河岸川右岸流域の台地縁辺部に帶状に存在している。遺跡は柳瀬川上流から、西原大塚遺跡（7）、中道遺跡（5）、新郷遺跡（8）、城山遺跡（3）、中野遺跡（2）、市場裏遺跡（15）、田子山遺跡（10）、富士前遺跡（11）、大原遺跡（16）の順に名付けられている。また、荒川・新河岸川が形成した沖積低地でも、馬場遺跡（12）、宿遺跡（14）、関根兵庫館跡（13）のように自然堤防上に存在する遺跡も明らかにされつつあり、将来的には新たな遺跡が相次いで発見される可能性がある。なお、市内の遺跡総数は、現在前述した12遺跡に塚ノ山古墳（6）、城山貝塚（9）を加えた14遺跡である（第1図）。

次に市内の遺跡を時代順に概観してみることにする。

志木市内に最初に人が住みついたのは、旧石器時代からで、この時代の遺跡としては、柳瀬川右岸の西原大塚・中道・城山・中野遺跡がある。中道遺跡では、昭和62（1987）年の富士見・大原線（現ユリノキ通り）の工事に伴う調査により、立川ローム層のIV層上部・VI層・VII層で文化層が確認されており、礫群、石器集中地点が検出されている。これにより、黒曜石製のスクレイバー・ナイフ形石器や安山岩や凝灰岩の石核・剥片などが発見されている。

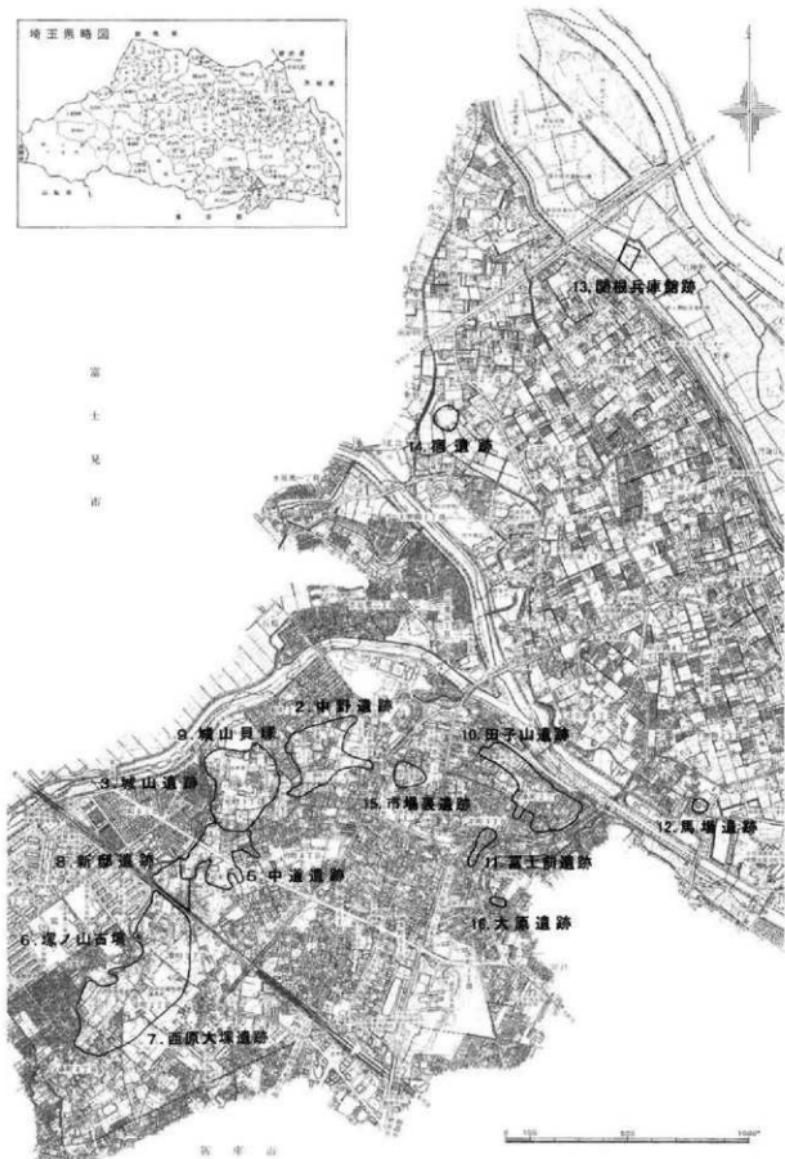
平成11～14年度にかけて発掘調査が実施された本地点からも立川ローム層のIV層下部から、黒曜石・頁岩の石材の石核・剥片が約60点出土している。

縄文時代になると、草創期では、平成4年度に発掘調査が実施された城山遺跡第16地点から爪形文系土器1点、平成10年度の田子山遺跡第51地点から有茎尖頭器1点が出土している。

早期では、田子山遺跡から撫糸文・沈線文・条痕文系土器、富士前・城山遺跡から撫糸文系土器が数点出土している。住居跡としては、西原大塚・新郷遺跡の前期黒浜式期のものが最古に位置付けられ、それぞれ1軒検出されている。そのうち、新郷遺跡のものは貝層をもつ住居跡である。また、平成2年度に市指定文化財に認定された城山貝塚も縄文海進期にあたるこの頃の時代に形成された斜面目塚と考えられる。

遺跡が最も増加するのは、中期中葉から後葉の勝板式～加曾利E式期である。西原大塚遺跡では、多くの住居跡が環状に配置する可能性のあることが指摘されている。その他、中道・城山・中野・田子山遺跡からも住居跡・土坑などが発見されている。中期末葉からは遺跡が減少し、現在のところ西原大塚遺跡から敷石をもつ住居跡が1軒確認されるのみである。

さらに後期では報告書として刊行された住居跡は皆無であるが、田子山遺跡第31地点では1基、西原



第1図 市域の地形と遺跡分布 (1/20000)

大塚遺跡第54地点では2基の土坑が検出されている。特に田子山遺跡第31地点の184号土坑は、下層から名寺I式期の土器、上層からII式の特徴をもつ土器が出土している。

晩期になると、中野・田子山遺跡から安行III式・千網式の土器片が少量発見されるにとどまり、以降市内では遺跡が希薄になる傾向にあるが、平成12年度の西原地区特定区画整理事業に伴う発掘調査により、後期の堀之内式期の住居跡1軒と遺物集中地点、晩期の溝跡1本が検出されている。

弥生時代では、現在のところ、前・中期に遡る遺跡は存在しない。大部分が後期末葉から古墳時代前期にかけての遺跡であろうと考えられる。その中で、田子山遺跡21号住居跡は後期中葉に比定される可能性があり、その住居跡からは、多数の土器をはじめ、大量の炭化種子（イネ・アワ・ダイズなど）、炭化材が出土し、当時の食糧事情を考える上で重要である。富士前遺跡では、志木市史にも掲載されているが、不時の中見に伴い、籠目痕をもつ壺形土器をはじめとした多くの土器が発見されている。

西原大塚遺跡では後期末葉から古墳時代前期にかけての住居跡が200軒以上確認されており、市内最大の集落跡であることが判明している。特に、122号住居跡からは、全国的にも稀な「イヌ」を象ったと思われる動物形土製品が出土している。

当時の墓域の可能性として、方形周溝墓が、昭和62（1987）以降、西原大塚・市場裏・田子山遺跡の3遺跡から相次いで確認されており、集落跡との関連の中で今後注目されるであろう。古墳時代前期では、特に西原大塚遺跡10号方形周溝墓の溝底から一括出土した中に、畿内系の庄内式の長脚高杯が出土地に注目される。また、平成11年度に西原大塚遺跡第45地点で発見された一辺20mを超える市内最大規模の17号方形周溝墓が特筆すべきであろう。この方形周溝墓の溝からは、珍しい鳥形土器をはじめ、畿内系の有段口縁壺、吉ヶ谷式系の壺、在地系の壺などと大きく畿内・比企地域・在地の3要素の特徴を示す壺が出土しており、こうした地域に関わる被葬者の人物像が浮き彫りにされたことで、当地域の弥生時代後期から古墳時代前期の歴史を紐解く手がかりになったことは重要である。

最新では、平成15年6～8月に発掘調査が実施された新邸遺跡第8地点から、古墳時代前期に比定される住居跡8軒・方形周溝墓が1基検出されている。方形周溝墓については、遺跡名は異なっても墓群の中心をもつ西原大塚遺跡から見れば北東端に含まれるものと考えることができる。ただし、集落跡の様相から察すると、新邸遺跡第2地点から古墳時代前期終末から中期に比定される住居跡1軒が検出されていることから、現時点では西原大塚遺跡から継続して集落が広がったものではないかと推測される。

古墳時代でも前期末葉から中期になると、遺跡が減少する。中期の遺跡では、中道・城山・中野遺跡から住居跡が発見されている。特に中道遺跡第37地点の19号住居跡は、5世紀中葉に比定され、市内最古のカマドをもつ住居跡として注目される。

5世紀末葉になると、遺跡が増加傾向にあり、特に6世紀後半から7世紀後半にかけては、縄文中期を越えるほどの爆発的な増加をみる。こうした集落跡は現在、中道・城山・中野遺跡に比較的古い5世紀代の住居跡が確認されていることから、柏町地区を中心に存在した集落が、6世紀後半以降、周辺の地域に拡散するという動きを読み取ることができる。

平成15年には、新邸遺跡でも初めて7世紀代の住居跡が1軒検出されている。この住居跡は、3×3.5mの小型の長方形を呈するもので、焼失住居であり、床面上からは土器・炭化材の他ベンガラ塊が出土している。

現在、5世紀後半から7世紀後半にかけての時期に比定できる住居跡の軒数は、最も多い城山遺跡で120軒を越え、次いで中野遺跡で約50軒、中道遺跡で約15軒、田子山遺跡で約10軒、新邸遺跡で1軒を

1. 旧石器時代

地名	地點名	掲載された主な遺構・遺物	報告書名及び資料索引
7 西原大塚	区画整理 市史収蔵	石器集中地点 2ヵ所 ナイフ型石器、尖頭器など	『志木市史』No.19 1984「志木市史 原始・古代資料編」

2. 總文時代

2 中野	第2地点	包含層出土土器	中期	No.2
	第16地点	集石 1基	不明	No.17
	第25地点	住居跡 1軒、土坑 9基、剖穴 5基、土器、石器	早～中期	No.25
	第43地点	包含層出土土器	早～後期	No.20
	A地点	住居跡 1軒	前期	『志木市史 原始・古代資料編』
	第3地点	包含層出土土器	早～後期	No.7
	第4地点	理窓 1基	中期	No.8
	第5地点	土坑 1基	不明	No.11
	第11地点	住居跡 1軒、土坑 3基、剖穴 1基、土器	前・中期	No.12
	第12地点	包含層出土土器	早～後期	No.17
	第16地点	包含層出土土器、集石 1基、土器(爪形文系など)、石器	草創～後期	No.27
	第29地点	土坑 1基	早～後期	No.18
	第32地点	包含層出土土器	早～中期	No.18
	第34地点	包含層出土土器	早～中期	No.20
	第35地点	包含層出土土器	早～後期	No.20
5 中道	第2地点	住居跡 3軒、土坑 8基、集石 2基、土器、石器	中期	No.6
	第12地点	住居跡 2軒、土器	中期	No.13
	第13地点	住居跡 1軒、土坑 1基、土器	中期	No.13
	第21地点	包含層出土土器	前期	No.17
	第27地点	包含層出土土器	前～後期	No.22
	第41地点	包含層出土土器	早～後期	No.20
	第44地点	包含層出土土器	早～後期	No.21
7 西原大塚	第1地点	住居跡 4軒、土坑 8基、土器、石器	中期	No.1
	第3地点	住居跡 5軒、土坑 2基、土器	中期	No.2
	第5地点	住居跡 1軒、土坑 24基、土器、石器	中期	No.9
	第34地点	住居跡 3軒、土坑 6基、土器、石器	中期	No.18
	第39地点	住居跡 3軒、土器、石器	中期	No.21
	第43地点	住居跡 10軒、土坑 22基、土器、石器	中期	No.24
	第47地点	土坑 1軒、道構外出土土器	中期	No.26
	第51地点	土坑 7軒、土器	中・後期	No.28
8 新郷	第1地点	住居跡 1軒(貝塚)、土坑 2基、包含層出土土器	前・中期	No.3
	第2地点	住居跡 1軒(第1地点と同一)、土器、石器、貝類	前・中期	No.4
	第3地点	包含層出土土器	早・前期	No.10
10 田子山	第4地点	土坑 1基	不明	No.13
	第15地点	住居跡 1軒、土器	中期	No.17
	第19地点	土坑 2基、道構外出土土器	早～後期	No.22
	第21地点	道構外出土土器片	早～後期	No.22
	第25地点	剖穴 1基、道構外出土土器	早～後期	No.22
	第32地点	土坑 1軒、道構外出土土器	早～中期	No.16
	第37地点	道構外出土土器	早期	No.16
	第38地点	土坑 3軒、集石 2基、剖穴 2基、土器	早期	No.18
	第47地点	道構外出土土器	早・前期	No.20
	第49地点	道構外出土土器	早期	No.20
	第69地点	集石 1基	中期	No.26
	第78地点	集石 1軒、土器	前・中期	No.28

3. 弥生時代

2 中野	第3地点	住居跡 2軒、土器	後期	No.2
	第9地点	住居跡 1軒、土器	後期	No.8
	第25地点	住居跡 1軒、土坑 1基、土器	後期	No.25
3 城山	B地点	住居跡 1軒	後期	『志木市史 原始・古代資料編』
	第4地点	住居跡 2軒、土器	後期	No.8
	第35地点	住居跡 1軒、土器、砾石	後期	No.20
7 西原大塚	第1地点	住居跡 1軒、土器	後期～古墳	No.1
	第2地点	住居跡 3軒、土器	後期～古墳	『志木市史 原始・古代資料編』
	第3地点	住居跡 2軒、土器	後期～古墳	No.2
	第4地点	住居跡 3軒、土器、砾石	後期～古墳	No.4
	第6地点	住居跡 1軒、土器	後期～古墳	No.8
	第7地点	小形穴状遺構 1基	後期～古墳	No.10
	第8地点	住居跡 15軒、方形周溝墓 1基、圓柱建物跡 1基	後期～古墳	No.9
	第9地点	住居跡 1軒、土器	後期～古墳	No.9
	第10地点	住居跡 1軒、土器	後期～古墳	No.9
	第14地点	住居跡 4軒、土器	後期～古墳	No.17
	第21地点	方形周溝墓 1基、土器	後期～古墳	No.22
	第32地点	住居跡 2軒、土器	後期～古墳	No.16
	第36地点	住居跡 4軒、土器	後期～古墳	No.20

第1表 志木市の時代別にみた考古資料一覧（1）

No	遺跡名	地点名	開拓された主な遺構・遺物	報告書一覧No及び資料索引
7 西原大塚	第37地点	住居跡 7軒、土器		後期～古墳 №21
	第39地点	住居跡 1軒、方形周溝墓 1基、土器、石器		後期～古墳 №21
	第43地点	住居跡 9軒、土器		後期～古墳 №24
	第45地点	住居跡 72軒、方形周溝墓 1基、土器（鳥居型十四）		後期～古墳 №23
	第47地点	溝跡 1本		後期～古墳 №26
	第54地点	方形周溝墓 1基、土器		後期～古墳 №28
	区间整理	（住居跡 30軒、方形周溝墓 4基（記述のみ））		後期～古墳 №19
10 田子山	第1地点	住居跡 1軒、土器		後期 №9
	第4地点	住居跡 1軒、土器		後期 №13
	第10地点	住居跡 5軒、土器		後期 №17
	第19地点	遺構外出土土器		後期 №22
	第31地点	住居跡 17軒（21号柱跡記述のみ）		後期 『志子山富士』文化財第22集
15 市場裏	第32地点	方形周溝墓 1基		後期～古墳 №16
	第1地点	住居跡 1軒、土器		後期～古墳 №17
	第2地点	方形周溝墓 2基、土器小片		後期～古墳 №17
	第3地点	方形周溝墓 1基、土器小片		後期～古墳 №14
4. 古墳時代				
2 中野	第2地点	住居跡 1軒、土器跡		後期 №2
	第7地点	住居跡 1軒		後期 №10
	第12地点	住居跡 1軒、土器跡多數		後期 №12
	第16地点	住居跡 1軒、土器跡		後期 №17
	第18地点	住居跡 1軒、土器跡、鐵器多數		後期 №14
	第25地点	住居跡 10軒、土器跡多數		後期 №25
	第31地点	住居跡 1軒、土器跡、鐵器、砾石		後期 №15
	第41地点	住居跡 1軒、土器跡多數、鉄劍車		後期 №18
	第50地点	住居跡 1軒		後期 №24
	B地帯	住居跡 2軒、土器・須恵器		後期 『志木市史 原始・古代資料編』
3 城山	第1・2地点	住居跡 5軒、土器跡多數、須恵器、鍬・土製品		前・後期 №5
	第3地点	住居跡 4軒、土器跡		前・後期 №7
	第4地点	住居跡 1軒、土器跡多數		後期 №8
	第6地点	住居跡 2軒、土坑 1基、土器跡多數		後期 №10
	第7・9地点	住居跡 7軒、土器跡多數、鉄製品		中・後期 №11
	第11地点	住居跡 3軒、土器跡		前・後期 №12
	第13地点	住居跡 1軒、土器跡		後期 №17
	第15地点	住居跡 6軒、土器跡		後期 №27
	第25地点	住居跡 2軒、土器跡、初期須恵器		中・後期 №16
	第29地点	住居跡 1軒、土器・須恵器		後期 №18
5 中道	第34地点	住居跡 3軒、土器跡		後期 №20
	第35地点	住居跡 1軒、土器跡多數		後期 №20
	第2地点	住居跡 5軒、土器跡		後期 №6
7 西原大塚	第12地点	住居跡 3軒、土器跡		後期 №13
	第13地点	住居跡 1軒、土器跡		後期 №13
	第21地点	住居跡 2軒、溝跡 1本、土器跡、鐵製品（鍬形1点）		後期 №17
	第33地点	住居跡 1軒、土器・須恵器		後期 №16
	第36地点	住居跡 1軒、土器跡		前期 №18
	第37地点	住居跡 1軒、土器跡多數、須恵器小片、土製品		中・後期 №18
8 断跡	市史掲載	土器		『志木市史 原始・古代資料編』
	第11地点	方形周溝墓 1基、壺形 1基、土器		前・後期 №11
	第43地点	住居跡 1軒、土器跡		後期 №24
	第45地点	住居跡 2軒、土器跡		後期 №23
10 田子山	第2地点	住居跡 1軒、土器跡		前・後期 №4
	第5地点	住居跡 1軒、土器・須恵器、焼化種子（ヤマモモ多數）		後期 №13
11 富士前	第13地点	住居跡 1軒、土器・須恵器（暗文土器 1点あり）		後期 №17
	第29地点	住居跡 2軒、土器・須恵器		後期 №15
	第48地点	住居跡 1軒、土器跡（統合型壺形あり）		後期 №20
	第69地点	住居跡 1軒、土器跡		後期 №26
	市史掲載	土器跡多數		『志木市史 原始・古代資料編』
12 馬場	第15地点	住居跡 1軒、土器跡（元堅底系高窓あり）		前・後期 №20
	市史掲載	土器跡（S字窓か）		前・後期 『志木市史 原始・古代資料編』
5. 奈良・平安時代				
2 中野	第2地点	住居跡 1軒、須恵器	8世後半	№2
	第16地点	住居跡 3軒、須恵器	9世中期	№17
	第25地点	住居跡 2軒	平安時代	№25
	第41地点	住居跡 1軒、土器・須恵器、鐵製品、転用彷彿車	9世後半	№18
	第43地点	住居跡 1軒、土器・須恵器、鐵器、鉄矛	9世前半	№20
3 城山	第1・2地点	住居跡 6軒、灰釉陶器・土器・須恵器多數、鍬・石製品	8～10c	№5
	第4地点	土坑 24基、灰釉陶器・須恵器（新闡・栗谷ツ部）	10世前半	№8
	第7地点	住居跡 1軒、灰釉陶器	9世か？	№11

第1表 志木市の時代別にみた考古資料一覧（2）

No.	遺跡名	地点名	発見された主な遺構・遺物	報告書一覧及び資料索引	
				報告書	資料索引
3	城 山	第11地点	住居跡 1軒	平安時代	No.12
		第15地点	住居跡 1軒、土師・須恵器	平安時代	No.27
		第29地点	住居跡 1軒	平安時代	No.18
		第35地点	住居跡 2軒、銅器、布目瓦、綠釉陶器片、土師・須恵器	9~後半	No.20
5	中 道	第12地点	住居跡 2軒、土師・須恵器	9~後半	No.13
		第21地点	住居跡 1軒、溝跡 1本、灰陶陶器片、土師・須恵器	9~後半	No.17
		第41地点	住居跡 1軒、溝跡 1本、灰陶陶器片、須恵器、炭化米	9~10c	No.20
		第44地点	土坑 1基	平安時代	No.21
		第8地点	住居跡 3軒	平安時代	No.9
7	西原大塚	第34地点	住居跡 1軒	平安時代	No.18
		第4地点	住居跡 9軒、土師・須恵器	8~10c	No.13
10	田 子 山	第5地点	住居跡 1軒、土師・須恵器	8~10c	No.13
		第6地点	住居跡 1軒、土師・須恵器、刀子、土師	9~後半	No.12
		第7地点	住居跡 1軒、布目瓦小片2点、格子目叩き瓦小片1点	8~後半	No.12
		第19地点	住居跡 1軒、土師・須恵器、鉄製品	9~10c	No.22
		第21地点	住居跡 1軒、土坑 1基、土師・須恵器、鉄製品	9c代	No.22
		第25地点	住居跡 5軒、土師・須恵器、紙石	9~後半	No.22
		第29地点	住居跡 1軒、須恵器、布目瓦1点	9~10c	No.16
		第37地点	土坑 2基、須恵器	9~10c	No.16
		第39地点	溝跡 3本、土師・須恵器小片	9c代	No.18
		第41~42地点	住居跡 1軒、土坑 1基、土師・須恵器、鐵・銅製品	9~10c	No.18
6. 中・近世		第47地点	住居跡 2軒、土坑 1基、土師・須恵器、鉄・石製品	9c中頃	No.20
		第49地点	住居跡 2軒、土師・須恵器	10c代	No.20
		第69地点	住居跡 1軒、溝跡 1本、土師・須恵器	9c中頃	No.26
		第78地点	住居跡 2軒、土師・須恵器	9c前~後半	No.28
2	中 野	第2地点	溝跡 1本	不明	No.2
		第6地点	溝跡 1本	不明	No.8
		第8地点	土坑 1基	不明	No.10
		第11地点	土坑 1基、陶・織器小片	18~19c	No.17
		第25地点	土坑 15基、陶・磁器・瓦器小片	近世	No.25
3	城 山	第43地点	井戸跡 1基	不明	No.20
		A地点	溝跡 1本	中世	『志木市史 原始・古代資料編』
		C地点	柏城跡の大堀跡 1本、陶・磁器	中・近世	『志木市史 中世資料編』
		第1~2地点	柏城跡開通の堀跡 5本、土坑32基、井戸跡10基、掘立柱建築跡、ビット群、陶・磁器多款、銅鏡、鉄・石製品	中・近世	No.5
		第3地点	土坑 16基、溝跡 2本	中・近世	No.7
		第4地点	土坑 1基	14~15c	No.8
		第6地点	土坑 7基	中・近世	No.10
		第7~9地点	土坑 3基、土製品	中・近世	No.11
		第11地点	土坑 3基、井戸跡 1基、陶・織器、板瓦、馬廻	中・近世	No.12
		第12地点	土坑 2基、井戸跡 1基、溝跡 5本、陶・磁器、古鏡	中・近世	No.17
5	中 道	第15地点	溝跡 2本 (柏城開闢)、陶・磁器、かわらけ	中・近世	No.27
		第16地点	井戸跡 2 基、溝跡 2 本 (柏城開闢)、陶・磁器、かわらけ、鐵製品 (火打金・釘)、板磚	中・近世	No.27
		第25地点	土坑 2基	中・近世	No.16
		第29地点	土坑11基、溝跡 1本、ビット群、板磚、陶・磁器、馬廻、古鏡など	中・近世	No.18
		第35地点	土坑15基 (脚土造土1基・雨解炉1基・地下式坑1基)、井戸跡1基、陶・磁器、土・鉄製品、陶・磁器、古鏡など	中・近世	No.20
		第44地点	溝跡 2本	中・近世	No.21
		第1地点	土坑 1基、溝跡 14本、掘立柱建物跡 4基、ビット群	中・近世	No.6
		第5地点	土坑 1基、陶・磁器小片	15c代	No.8
		第26地点	土坑 6基 (土坑墓2基)、掘立柱建物跡、人骨・古鏡など	17c代	No.17
		第27地点	埋下式坑 2基、土坑 2基、陶・磁器	14~15c	No.17
8	新 邸	第36地点	溝跡 2本、ビット群、陶・磁器小片	中・近世	No.18
		第37地点	土坑墓 1基、道溝遺構 1条、人骨・青磁盤・古鏡	中世	No.18
		第44地点	溝跡 2本	中・近世	No.21
10	田 子 山	第1地点	土坑 19基 (地下式坑1基)、井戸跡 1基、溝跡 2基	中・近世	No.3
		第3地点	地下式坑 1基、溝跡 2本、陶・磁器	中・近世	No.10
		第25地点	道溝外出土陶・磁器	中・近世	No.22
16	大 原	第1地点	溝跡 1本	近世	No.22
3	城 山	第35地点	かわらけ 2点	19~後半	No.20
10	田 子 山	第31地点	ローム探査遺構 2ヵ所	19~後半	『田子山富士』文化財第22集
15	市 場 塵	第49地点	土坑 1基	近・現代	No.20
		第3地点	かわらけ 2点	19c代	No.14

第1表 志木市の時代別にみた考古資料一覧 (3)

No.	報告書名	刊行年	シリーズ名	発刊者	執筆者
1	西原・大塚遺跡発掘調査報告	1975	志木市の文化財第4集	志木市教育委員会	井上國夫・高台静男 谷井彪・宮野和明
2	西原大塚遺跡第3地点 中野遺跡第2地点発掘調査報告書	1985	志木市遺跡調査会調査報告第1集	志木市遺跡調査会	佐々木保像・尾形則敏
3	新藤遺跡発掘調査報告書	1986	志木市遺跡調査会調査報告第2集	志木市遺跡調査会	佐々木・尾形
4	新藤遺跡第2地点 西原大塚遺跡第4地点発掘調査報告書	1987	志木市遺跡調査会調査報告第3集	志木市遺跡調査会	佐々木・尾形
5	城山遺跡発掘調査報告書	1988	志木市遺跡調査会調査報告第4集	志木市遺跡調査会	佐々木・尾形 山川健吉
6	中道遺跡発掘調査報告書	1988	志木市遺跡調査会調査報告第5集	志木市遺跡調査会	佐々木・尾形
7	城山道路長勝院地点発掘調査報告書	1987	志木市の文化財第11集	志木市教育委員会 志木市遺跡調査会 志木ロータリークラブ	佐々木
8	志木市遺跡群I	1989	志木市の文化財第13集	志木市教育委員会	佐々木・尾形
9	志木市遺跡群II	1990	志木市の文化財第14集	志木市教育委員会	佐々木・尾形
10	西原大塚遺跡第7地点 新藤遺跡第3地点 中野遺跡第8地点 城山遺跡第6地点発掘調査報告書	1991	志木市の文化財第15集	志木市教育委員会	佐々木・尾形
11	志木市遺跡群III	1991	志木市の文化財第16集	志木市教育委員会	佐々木・尾形
12	志木市遺跡群IV	1992	志木市の文化財第17集	志木市教育委員会	佐々木・尾形
13	中道遺跡第12地点 中道遺跡第13地点 田子山遺跡第4地点 田子山遺跡第5地点発掘調査報告書	1992	志木市の文化財第18集	志木市教育委員会	佐々木・尾形
14	志木市遺跡群V	1993	志木市の文化財第19集	志木市教育委員会	尾形
15	志木市遺跡群VI	1995	志木市の文化財第21集	志木市教育委員会	尾形
16	志木市遺跡群VII	1996	志木市の文化財第23集	志木市教育委員会	佐々木・尾形 深井憲子
17	城山遺跡第12地点 城山遺跡第13地点 西原大塚遺跡第14地点 中野遺跡第11地点 中野遺跡第16地点 市場裏遺跡第1地点 田子山遺跡第10地点 中道遺跡第21地点 田子山遺跡第13地点 西原大塚遺跡第21地点 市場裏遺跡第2地点 中道遺跡第26地点発掘調査報告書	1996	志木市の文化財第24集	志木市教育委員会	佐々木・尾形
18	志木市遺跡群VIII	1997	志木市の文化財第25集	志木市教育委員会	佐々木・尾形・深井
19	西原大塚の遺跡 西原特定土地区画整理事業に伴う発掘調査概報	1998		志木市遺跡調査会 西原特定土地区画整理組合	佐々木
20	志木市遺跡群9	1999	志木市の文化財第27集	志木市教育委員会	尾形・深井
21	志木市遺跡群10	2000	志木市の文化財第28集	志木市教育委員会	尾形・深井
22	埋蔵文化財調査報告書 1	2000	志木市の文化財第29集	志木市教育委員会	尾形・深井
23	西原大塚遺跡第45地点発掘調査報告書	2000	志木市遺跡調査会調査報告第6集	志木市遺跡調査会 小松フォーライフ 株式会社	佐々木・内野美津江 宮川幸佳・上田寛
24	志木市遺跡群11	2001	志木市の文化財第30集	志木市教育委員会	尾形・佐々木・内野
25	埋蔵文化財調査報告書 2	2001	志木市の文化財第31集	志木市教育委員会	尾形・深井
26	志木市遺跡群12	2002	志木市の文化財第32集	志木市教育委員会	尾形・佐々木・深井
27	埋蔵文化財調査報告書 3	2002	志木市の文化財第34集	志木市教育委員会	尾形・佐々木・深井
28	志木市遺跡群13	2003	志木市の文化財第35集	志木市教育委員会	尾形・深井

第2表 志木市の発掘調査報告書一覧

数える。また、田子山遺跡第24地点では、6世紀後半以降のものと考えられる4.1×4.7mのやや不整円形で2ヶ所にブリッジをもつ小型の円形周溝墓が1基確認されている。

奈良・平安時代の遺跡は、古墳時代後期以降に拡散した集落内で確認される傾向にあり、田子山遺跡は、この時代の代表とする遺跡として挙げることができる。第24地点では、住居跡の他、掘立柱建物遺構、溝跡、100基を越える土坑群が確認されている。遺物としては、土器・灰釉陶器の他、腰帶の一部である銅製の丸柄、鉄製の鋤鍤車・刀子などが出土している。

また、平安時代の城山遺跡128号住居跡からは、印面に「富」1文字が書かれた銅製の印章が出土したことにより注目される。この住居跡からはその他、猿投産の綠釉陶器の小破片1点、布目瓦の小破片2点などが出土地でいる。

中・近世では、柏城跡を有する城山遺跡と関根兵庫館跡が代表される遺跡である。特に、柏城跡内の数次にわたる発掘調査により、『館村旧記』にある「柏之城落城後の屋敷割の図」に相当する堀跡などが多数発見されている。また、城山遺跡第29地点の127号土坑から馬の骨が検出されている。この土坑からは、板碑と土師質土器の他、炭化種子（イネ・オムギ・コムギなど）も出土しており、特に、イネの塊状のものは「おにぎり」あるいは「ちまき」のようなものであるという分析結果が報告されている。さらに、第35地点では、鋳造関連の遺構も検出されている。130号土坑については鋳造遺構、134号土坑については溶解炉に該当し、遺物としては、大量の鉄滓（スラグ）、鋳型、三叉状の土製品、磁石などが出土している。

また、平成11～14年度にかけて実施された本地点の調査から、頭を北に向け横臥屈葬された人骨を出土した67号土坑が検出されている。その他、ピット列・土坑・溝跡などが検出されていることから、この一帯が『館村旧記』に記載されている「村中の墓場」関連に相当する施設ではないかと考えられる。

近代以降の遺跡では、19世紀以降の溝跡・地下室などが、城山遺跡を中心に検出されているが、田子山遺跡では、敷島神社境内に存在する富士塚の築造（明治2～5年）に関連するローム採掘遺構が検出されており、地域研究の重要な資料であると言える。

第2節 遺跡の概要

ここで、今回本書で報告する中野遺跡について概観することにする。

中野遺跡は、志木市柏町1丁目を中心とし、東武東上線志木駅の北方約1.2kmに位置している。遺跡は、柳瀬川流域右岸の台地上に立地しており、標高は北端で約9m、南端で約11mを測り、台地縁辺では際立った断崖もみられないままゆるやかに北側の低地に移行する。遺跡の現況は、宅地化が急速に進行している地域で、畠地は減少している。

次に、これまでに中野遺跡からどのような遺構・遺物が検出されたかを今までの発掘調査の成果から大まかに振り返ってみたい。そこで、第3表に中野遺跡における発掘調査及び確認調査の内容を示した。

これによると、中野遺跡における第1回目の発掘調査は、昭和59年の第2地点に始まる。その際には、弥生時代後期の住居跡2軒、古墳時代後期の住居跡1軒、平安時代の住居跡1軒が検出されている。

昭和62年の第6地点の調査では、中世以降と考えられる溝跡と縄文時代の可能性がある土坑1基が検出されている。



第2図 中野遺跡の調査地点 (1/3000)

平成16年3月31日現在

調査地点	面積 (m ²)	確認調査日	発掘調査期間	調査原因	遺構の概要	報告書№
第1地点	739.29	なし	昭和58年10月27日 ～11月2日	貸倉庫建設	検出されなかった	
第2地点	587.91	なし	昭和59年5月14日 ～5月8日	共同住宅建設	(弥生) 住居跡2軒 (古墳) 住居跡1軒 (平安) 住居跡1軒 (不明) 滝跡1本	№2
第3地点	687.09	なし	昭和61年 3月24日	駐車場建設	検出されなかった	
第4地点	1,775.00	なし	昭和62年 2月23日	市営住宅建設	検出されなかった	
第5地点	1,609.44	なし	昭和62年 7月23日	寺院庫裡建設	検出されなかった	
第6a地点	100.15	なし	昭和62年7月23日 ～8月6日	宅地造成	(縄文?) 土坑1基 (中世?日除か) 溝跡1本	№8
第6b地点	235.56	なし	昭和63年7月7日 ～7月9日	宅地造成	(古墳) 住居跡1軒	№10
第7地点	250.00	なし	昭和63年7月7日 ～7月9日	共同住宅建設	(近世か) 土坑1基	№10
第8地点	388.05	なし	昭和63年10月15日 ～10月21日	個人住宅建設	(弥生) 住居跡1軒	№9
第9地点	156.68	なし	平成元年 1月30日	共同住宅建設	検出されなかった	
第10地点	258.00	なし	平成2年4月23日 ～4月27日	福荷神社引家	(近世) 土坑1基	№17
第11地点	17.00	なし	平成2年5月9日 ～6月1日	個人住宅建設	(古墳) 住居跡1軒	№12
第12地点	138.39	なし	平成2年5月18日	共同住宅建設	検出されなかった	
第13地点	122.87	なし	平成2年 5月18日	共同住宅建設	検出されなかった	
第14地点	215.62	なし	平成2年 5月18日	共同住宅建設	検出されなかった	
第15地点	100.00	なし	平成2年 5月18日	共同住宅建設	検出されなかった	
第16地点	496.59	なし	平成2年8月23日 ～9月6日	共同住宅建設	(縄文) 置石1基 (古墳) 住居跡1軒 (平安) 住居跡1軒	№17
第17地点	118.84	なし	平成2年 10月18日	個人住宅建設	検出されなかった	
第18地点	171.44	なし	平成3年7月8日 ～7月18日	個人住宅建設	(縄文) 土坑1基 (古墳) 住居跡1軒	№14
第19地点	179.24	なし	平成3年 8月27日	共同住宅建設	検出されなかった	
第20地点	181.34	なし	平成3年 10月2日	個人住宅建設	検出されなかった	
第21地点	118.42	なし	平成3年 10月31日	事務所建設	検出されなかった	
第22地点	67.48	なし	平成3年 11月7日	個人住宅建設	検出されなかった	
第23地点	191.30	なし	平成3年 11月25日	個人住宅建設	検出されなかった (工事立会)	
第24地点	303.00	なし	平成3年 11月25日	宅地造成	検出されなかった	
第25地点	883.00	平成4年 2月12日	平成4年2月13日 ～7月20日	駐車場建設	(縄文) 住居跡1軒、土坑9基、砂穴5基 (弥生) 住居跡1軒、土坑1基 (古墳) 住居跡10軒 (平安) 住居跡2軒、土坑1基 (近世) 土坑15基	№25
第26地点	196.50	平成4年 5月15日	なし	共同住宅建設	検出されなかった	
第27地点	145.80	平成4年 7月6日	なし	個人住宅建設	検出されなかった	
第28地点	2,579.21	平成5年 1月13日	平成5年1月14日 ～6月16日	共同住宅建設	(旧石器) 石器集中分布 (縄文) 土坑6基、砂穴5基 (弥生) 住居跡4軒 (古墳～平安) 住居跡17軒 (中・近世) 土坑4基、井戸跡1基、溝跡1本	
第29地点	115.71	平成5年 6月11日	なし	宅地造成	検出されなかった	
第30地点	69.82	平成5年 7月21日	なし	個人住宅建設	検出されなかった	
第31地点	365.14	平成5年 8月4日	平成5年8月10日 ～8月19日	個人住宅建設	(古墳) 住居跡1軒	№15
第32地点	235.87	平成5年 11月8日	なし	共同住宅建設	検出されなかった	
第33地点	151.23	平成5年 11月26日	なし	共同住宅建設	検出されなかった	

第3表 中野遺跡調査一覧(1)

調査地点	面積 (m ²)	確認調査日	発掘調査期間	調査原因	遺構の概要	報告書№
第34地点	114.51	平成6年 3月24日		個人住宅建設	検出されなかった	
第35地点	98.27	平成6年 7月26日		個人住宅建設	検出されなかった	
第36地点	160.80	平成6年 9月22日		共同住宅建設	検出されなかった	
第37地点	286.59	平成7年 3月14日		共同住宅建設	検出されなかった	
第38地点	46.36	平成7年 4月20日		個人住宅建設	検出されなかった	
第39地点	173.05	平成7年 8月7日		倉庫建設	検出されなかった	
第40地点	1,903.18	平成7年 9月12日	平成7年9月18日 ～平成8年1月26日	共同住宅建設	(本文) 上坑2基、埋甕2基(弥生) 住居跡 4軒(古墳) 住居跡15軒(平安) 住居跡8軒、 溝跡1基(中・近世) 土坑1基	
第41地点	235.63	平成7年 10月26日	～11月13日	個人住宅建設	(古墳) 住居跡1軒 (平安) 住居跡1軒	№18
第42地点	1,283.51	平成7年 11月29日		住宅兼倉庫	検出されなかった	
第43地点	212.06	平成8年 5月30日	平成8年6月3日 ～6月7日	個人住宅建設	(平安) 住居跡1軒 (不明) 井戸跡1基	№20
第44地点	160.64	平成8年 5月23日		分譲住宅建設	検出されなかった	
第45地点	136.89	平成8年 8月21日		個人住宅建設	検出されなかった(工事立会)	
第46地点	68.31	平成8年 12月8日		個人住宅建設	検出されなかった(工事立会)	
第47地点	85.28	平成9年 12月8日		個人住宅建設	検出されなかった(工事立会)	
第48地点	73.70	平成10年 5月21日		個人住宅建設	検出されなかった(工事立会)	
第49地点	160.00	なし	平成11年5月10日 ～7月6日(第1工程)	志木支所 増設工事	(弥生) 住居跡1軒(平安) 住居跡1軒(中・ 近世) 段切状遺構、土坑墓1基、土坑5基、 戸門跡1軒	本報告
	490.00		平成12年2月23日 ～6月31日(第2工程)		(旧石器) 石器集中地点(本文) 住居跡1軒、 炉穴1基、包含層(弥生) 住居跡2軒(平安) 土坑5基(中・近世) 土坑3基、井戸跡3基	
	130.00		平成13年7月2日 ～26日(第3工程)		(本文) 土坑墓、包含層(弥生) 住居跡 1軒、(古墳) 住居跡1軒(中・近世) 井戸跡 1基	
	50.00		平成14年1月23日 ～2月13日(第4工程)		(本文) 土坑墓、包含層(弥生) 住居跡 1軒(古墳時代) 住居跡1軒、土坑1基(中・ 近世) 土坑3基	
	80.00		平成14年8月20日 ～9月4日(第5工程)		(本文) 土坑墓、包含層(弥生) 住居跡 2軒(古墳時代) 住居跡1軒、土坑1基(中・ 近世) 段切状遺構	
第50地点	87.75	平成11年 6月11日	平成11年6月14日 ～6月15日	個人住宅建設	(古墳) 住居跡1軒	№24
第51地点	87.75	平成11年 6月11日		個人住宅建設	検出されなかった	
第52地点	102.78	平成11年 4月14日		個人住宅建設	検出されなかった	
第53地点	87.00	平成12年 5月29日		道路造成工事	検出されなかった	
第54地点	212.10	平成12年 10月26日		共同住宅建設	盛土保存適用	
第55地点	60.19	平成13年 6月27日	平成13年6月28・29日	道路造成工事	(弥生) 住居跡1軒(中世) 土坑1基、溝跡 2本	
第56地点	605.25	平成13年 6月28日		宅地造成	盛土保存適用	
第57地点	494.07	平成13年 8月13日	平成13年8月20日 ～9月7日	不動堂建設	(近世～近代) 土坑1基、井戸跡1基、 道路状遺構2ヶ所	
第58地点	141.25	平成13年 10月11日		個人住宅建設	堆土保存適用	
第59地点	101.35	平成13年 11月2日		個人住宅建設	盛土保存適用	
第60地点	132.62	平成14年 4月23日		分譲住宅建設	検出されなかった	
第61地点	321.52	平成14年 10月16日		個人住宅建設	検出されなかった	
第62地点	108.11	平成15年 4月17日		個人住宅建設	盛土保存適用	
第63地点	204.64	平成16年 2月2日		個人住宅建設	盛土保存適用	

第3表 中野遺跡調査一覧 (2)

昭和63年には、第7・8・9地点の発掘調査が実施され、第7地点からは、古墳時代後期と思われる住居跡1軒、第8地点からは、近世以降の土坑1基、第9地点からは、弥生時代後期の住居跡1軒が検出されている。

平成2年には、第11地点から、近世以降の土坑1基、第12地点からは、古墳時代後期の住居跡1軒が検出されている。また、第16地点からは、縄文時代の集石1基、古墳時代後期の住居跡1軒、平安時代の住居跡3軒が検出されている。

平成3年には、第18地点の発掘調査が実施され、縄文時代の土坑1基、古墳時代後期の住居跡1軒が検出されている。特筆すべきは、住居跡の床面上から、完形品を含め鉄器が11点出土したことである。鉄器の形態は、長頸甕被脇抉片刃丸造柳葉式、長頸棘甕被脇抉片刃丸造柳葉式、長頸甕被脇抉片刃丸造長三角式などに分類されるもので、その主体は長頸甕被脇抉片刃丸造柳葉式である。

平成4年には、第25地点の調査が実施され、縄文時代早期後半の炉穴5基・土坑9基、中期後半の住居跡1軒、弥生時代後期の住居跡1軒・土坑1基、古墳時代後期の住居跡10軒、平安時代の住居跡2軒・土坑1基、近世の土坑15基が検出された。特に、古墳時代後期の19号住居跡は、一辺10mを越える大形住居跡であり、正確な正方形プラン、そして8本の柱穴・貯蔵穴の配置に至るまで計画的に作られており、中野遺跡の古墳時代後期の全体像を把握する上で大変貴重な資料となった。

また、平成5年には調査面積2000m²を超す市内では大規模調査と言える第28地点の調査が実施され、旧石器時代の石器集中分布地点、縄文時代早期末葉の炉穴5基・土坑6基、弥生時代後期後葉の住居跡4軒、古墳時代後期～平安時代の住居跡17軒、中・近世の土坑4基・井戸跡1基・溝跡1本が検出された。報告はまだあるが、平成13年に刊行された第25地点の北隣に位置するため、中野遺跡の面的な把握をする上で今後の報告書の刊行が期待される。

なお、平成5年度には、田子山遺跡でもほぼ同規模の第24地点が併行して実施され、西原地区特定区画整理事業に伴う発掘調査も継続的に開始された。さらに、平成6年には2000m²を超す田子山遺跡第31地点、平成7年には中野遺跡第40地点の調査が実施されるなど、志木市における平成5～7年は、本格的な発掘調査ラッシュと表現しても過言ではない。

以降、比較的大規模開発はおさまり、個人住宅建設を中心とする小規模開発に主体が移ることになった。平成8年度は、第43地点の調査が実施され、平安時代の住居跡1軒と時期不明の井戸跡1基が検出されるが、平成9・10年には、この地区での確認調査・発掘調査は実施されていない。

そして、平成11年には、本地点の発掘調査（全5工程）が開始され、この地区では初めて、人骨を伴う土坑墓やピット列などが検出された。これらの造構については、ロームを掘削して造成した平場面にこうした造構が存在することから、この一帯が『館村旧記』に記されている「村中の墓場」に相当する可能性があるのではないかと考えられる（詳細は本書の第4章4参照）。

平成13年には、第57地点の発掘調査が実施された。この調査は、遺跡の隣接地域であった宝幢寺の不動堂建設工事に伴うにあたり確認調査を実施した結果、近世の陶・磁器や広範囲に硬化した面が確認されたため、遺跡範囲を増補して発掘調査を実施したものである。これにより、宝幢寺関連と考えられる近世以降の土坑11基・井戸跡1基・道路状造構2ヶ所が検出された。特に、道路状造構は、宝幢寺の旧文殊堂に相当する位置に延びていることから、参道部分にあたるのではないかと推測される。

平成14年は、本地点の最終工程である第5工程が完了した（詳細は本書参照）。

平成15・16年は、中野遺跡において発掘調査は実施されていない。

以上の調査から、中野遺跡は、旧石器時代・縄文時代早～晚期・弥生時代後期・古墳時代前～後期・平安時代・中・近世の複合遺跡であることが判明してきている。中でも、古墳時代の中・後期に関しては、広範囲で検出される住居跡の分布状況や一辺10mを超す大形住居跡、8本・12本柱をもつ住居跡、そして、長頸篠被腸抉片刃丸造柳葉式の鉄鏃を出土した住居跡の存在などから考え、今後、志木市のみならず周辺の地域を含めた広域に亘る古墳時代の文化を比較検討する上で重要な役割を果たすものと考えられる。

最後に、本遺跡の特色を時代別にまとめると、以下のとおりである。

- 旧石器時代 第28地点・本地点から、石器集中地点がそれぞれ1ヶ所確認されている。
- 縄文時代 早期後葉の炉穴11基。
中期後葉の住居跡2軒。第25地点・本地点で1軒ずつ。
- 弥生時代 後期後葉の住居跡19軒。第25地点6号住居跡の床直から吉ヶ谷式土器出土。
- 古墳時代 中期から後期の集落としては、本遺跡の南西に近接する城山遺跡と今後比較対象となるほど重要である。第25・28・40地点はマンション建設に伴う比較的大規模調査があり、5世紀後葉から7世紀中葉にかけての住居跡が全体で約40軒検出されている。
- 奈良時代 現時点では遺構・遺物は検出されていない。
- 平安時代 9世紀前半から10世紀にかけての住居跡約20軒。
第40地点57号住居跡から灰釉耳皿の完形品が出土している。第43地点64号住居跡は、鉄滓を多く出土したことから、鍛冶関連の遺構と考えられる。
- 中・近世 本地点67号土坑から人骨が検出されている。この遺構を含め、地下式坑・溝状遺構・ピット列遺構は、中世の墓域である可能性がある。現時点では、『館村旧記』に記されている「村中の墓場」関連に相当する施設であるのではないかと考えられる。

註1 遺跡の存否及び範囲については、平成15年1月10日付の変更増補によって、大々的に見直され修正されている。その主な内容は、市場・氷川前遺跡の2遺跡の削除と中野・城山・中道・西原大塚・新郷・田子山・富士前・市場裏遺跡の8遺跡の一都範囲縮小である。その結果、本市の遺跡総数は、16遺跡から14遺跡に変更されることになった。

註2 縄文時代後期の住居跡については、平成14年度に実施された西原地区特定区画整理事業に伴う発掘調査によって、加曾利B式期の住居跡が1軒検出されている。

註3 『館村旧記』は、館村（現在の志木市柏町・幸町・館）の名主宮原仲右衛門仲恒が、享保12～14（1727～1729）年にかけて執筆したものである。

第2章 発掘調査の概要

第1節 調査に至る経過

平成11年3月、東京電力株式会社（以下、東京電力）から志木市教育委員会（以下、教育委員会）へ開発計画地内における埋蔵文化財の有無及び取り扱いについての照会があった。計画は、志木市柏町1丁目1503-1の一部、1504-4の一部（面積890m²）内の東京電力志木変電所の増設工事を行うというものである。

これに対し、教育委員会は当該開発予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である中野遺跡（コード11228-002）に該当するため、大旨下記のとおり回答した。

- ① 埋蔵文化財確認調査を実施して、その結果に基づき、当該開発予定地の埋蔵文化財の有無及び取り扱いについて回答する。
- ② 上記1の調査の結果、埋蔵文化財が確認された場合、埋蔵文化財の保存措置を講ずること。また、やむを得ず土地の現状を変更する場合は、記録保存のための発掘調査を実施する必要があること。
しかし、変電所の増設工事の内容は、主体電力を充電させながら、新しい変電装置を建設するという、いわば切り回しによる改造工事であったため、通常の建設工事と違い、敷地全域を一度更地の状態にし、その後発掘調査をすることは不可能であった。

そのため、教育委員会では、従来の発掘調査方式では対応できるものではないと考え、十分に事前協議を実施することにより、工事及び調査の円滑性を重視する必要があると判断した。

発掘調査までに至る経緯は、以下のとおりである。

第1回事前協議は、平成11年3月16日、志木変電所において、全事業の工程に関する現地説明及び視察を行った。主な内容は、変電所増設工事の全容とその工事の各工程の把握、そして、その工程に対応するための発掘調査の基本的な内容・手段などの説明を行った。

第2回事前協議は、4月9日、生涯学習課において、発掘調査計画書の提示とその説明を中心に協議が行われた。これにより、本地点の調査は、志木市遺跡調査会が調査主体となり、平成11～14年の4カ年（第1～5工程の5回）で発掘調査を実施することに決定した（第3・4図）。

第3回事前協議は、4月13日、志木市立志木第3小学校内整理室において、発掘調査に必要な書類の受理と相互確認を行った。

翌14日には、志木市役所入札室にて発掘協力員の補充を目的とした雇用説明会を実施し、その後整理作業状況の見学会を行った。

第4回事前協議は、4月21日、志木市立志木第3小学校内整理室において、前回の協議による発掘調査計画書の見直しと相互確認を行った。

その後、東京電力により、教育委員会に埋蔵文化財発掘届が提出され、遺跡調査会は正式に東京電力と委託契約を締結する。その後、遺跡調査会からも埋蔵文化財発掘調査届（第1工程分）が提出されたため、教育委員会は、これらの届出書をすみやかに埼玉県教育委員会経由で文化庁長官に提出した。なお、発掘調査に対する指示通知番号は、平成11年5月27日付け 教文第2-24号である。

第2節 各工程の調査方法と経過

(1) 第1工程の発掘調査（平成11年5月10日～7月6日）

発掘調査に当たり、平成11年4月27日、東京電力と第1工程の発掘調査着手に必要な書類の提出及び具体的な相互確認を行い、その後、今回重機による表土剥ぎ作業を依頼した大塚屋商店を含め現地視察を行った。

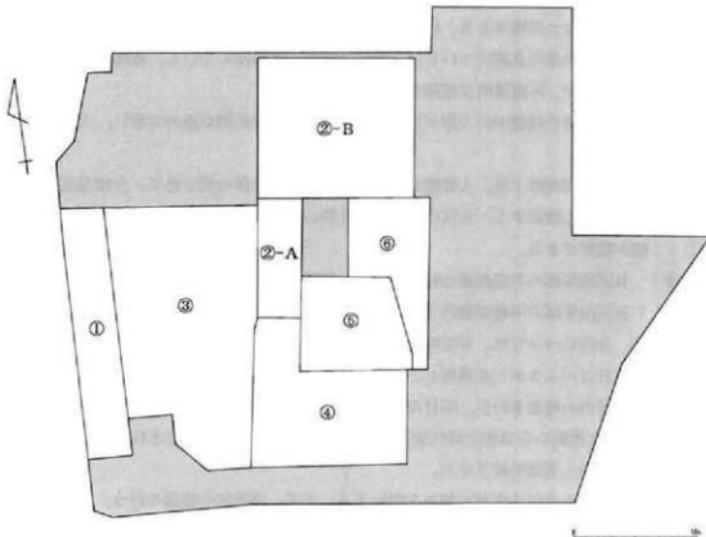
今回の第1工程の調査区は、工事予定図（第3図）の②区域に該当し、便宜上A・B区に区分した。B区については、A区終了後、まず南半部から調査を開始し、終了後折り返して、北半部の調査を行う予定とした。

また、工事予定図の①区域については、狭小な範囲での送電管工事であるため、事前協議により当初から発掘調査を行わず、工事立会いと取り扱うこととした。

発掘調査の経過は、以下のとおりである。

5月10日 簡易トイレ・プレハブの設置作業を終え、その後、バックホーとダンプを使用し、表土剥ぎ及び残土搬出作業を開始した。

表土剥ぎ及び残土搬出作業は、B区南半部から開始した。バックホーを使用し、ローム面まで直接掘り下げる予定であったが、盛土の厚さ約40cmを含めても地表面から110cmの深さに達してもローム面が確認できなかった。そのため、何らかの造構の覆土と考えるのが妥当であると判断し、B区南半部の表土剥ぎ作業を終了した。



第3図 変電所増設の工事予定図 (1/400)

- 11日 A区の表土剥ぎ及び残土搬出作業を開始する。併行して、人員導入によるB区南半部の発掘調査を開始する。B区内の調査については、全体にローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗黄褐色土を基調とする土層面で止まっていることから、遺構確認が非常に困難であるため、とりあえず東・南調査区域の境界部分にサブトレントを設定し、状況を細かく確認した上でその後全体に掘り下げる予定とした。その後西半部から64号土坑（64D）が検出され、半蔵を開始する。
- 12日 A区の表土剥ぎ及び残土搬出作業を終了する。A区内には、北側で住居跡と思われる遺構が確認され、重複している可能性がある。B区南半部については、64Dの完掘後、写真撮影・実測を終了する。B区内の遺物については、平板測量により全点ドットを落とし、取り上げることにした。
同日、①区域の工事立会いを行う。その結果、遺構・遺物は検出されなかった。
- 13日 前日に引き続き、B区南半部の掘り下げ及び遺物の平板測量を行う。新たに65Dを確認し、半蔵を開始する。B区については、依然全体像を把握するのは困難であった。しかし、地表面から150cm程というかなり深い位置からローム面が確認され、さらに土坑などの各遺構が検出され始めたことから、人為的に削平された平場部分に各遺構が掘り込まれているのではないかと想像することができた。
昨日から引き続き、①区域の工事立会いを行う。本日にて終了する。その結果、遺構・遺物は検出されなかった。
- 15日 B区の66Dの掘りを終了し、写真撮影を行う。B区南半部全域の確認面であるローム面の表面には無数の工具痕が観察されることから、このローム面は確認面ではなく、人為的に削平された平場である、いわゆる段切状遺構の基盤面ではないかと考えられた。
- 20～25日 B区南半部の北側については、溝状に細長く幾分窪んでいる。溝跡として遺構名は付けなかったが、区画溝的な機能をもつものであろう。
- 26日 B区67Dの精査中に人骨が出土した。人骨は遺存状態が極めて悪い。人骨出土の写真撮影を行う。
- 28日 67Dの実測終了後、人骨取り上げ。B区南半部全体の掘り終了。全体写真撮影終了後、平板測量を開始する。B区内の溝跡の北側は平場状に底面はフラットであり、多くの工具痕が観察できる。
- 31日 B区南半部の平板測量の続きをを行う。併行してA区の精査を開始する。
- 6月1日 B区南半部の平板測量終了後、再度平場部分の観察を行い、工具痕の細部写真撮影を行う。A区については、平安時代65号住居跡（65H）の精査を開始する。
- 2日 本日はバックホーを使用し、B区南半部の埋戻しとB区北半部の表土剥ぎ作業を行う。
- 3～9日 A区内の精査を行う。65Hを切り、69Dが検出された。また南西隅から3号井戸跡（3W）、北西隅からは弥生時代後期の13号住居跡（13Y）が検出されたため、掘り終了後、写真撮影・実測を終了する。
- 10日 本日からB区北半部の調査を開始する。まず、調査区の整備を行う。
- 11日 B区北半部の精査を開始する。
- 14～24日 B区北半部の掘り下げ。出土遺物は、平板測量により全点ドットを落とし、取り上げる

ことにした。遺物番号は本日までNo.115である。

- 29日 B区南半部の平場部分とほぼ同レベルでやはり平場部分が確認できた。平場面にはピットが確認され、6本柱による2間1間の掘立柱建物遺構になる可能性がある。A区は基本層序の掘り下げ開始。
- 7月1日 B区北半部は掃除を兼ね細部の遺構確認を行う。B区南半部の平場面には多くの工具痕が観察される。工具痕は東西方向に歛状に延びていることから、平場整地の作業状況が把握できる。
- 2日 B区北半部は全体写真撮影を終了し、平板測量を開始する。A区の基本層序は立川ローム第VII層まで掘り完了。
- 5日 B区北半部の精査完了。A区の基本層序は立川ローム第X層まで掘り下げ、写真撮影・実測を終了し、すべての調査を完了する。午後からは、器材片付け作業を開始する。
- 6日 器材搬出作業とA区の人力による埋戻し作業を行う。B区北半部は、埋戻しなし。

(2) 第2工程の発掘調査(平成12年2月21日～5月31日)

発掘調査に当たり、平成12年1月26日、東京電力から第2工程の事業計画の変更の説明を受け、その後現地視察を行う。さらに、2月16日、第2工程の発掘調査着手に必要な書類の提出及び具体的な相互確認を行い、その後現地視察を行った。

2月16日、埋蔵文化財発掘調査届(第2工程分)を教育委員会に提出する。教育委員会は、これらの届出書をすみやかに埼玉県教育委員会経由で文化庁長官に提出した。なお、発掘調査に対する指示通知番号は、平成12年2月29日付け教文第2-150号である。

第2工程の調査区は、工事予定図の③区域に該当する。今回の調査は、当初計画しなかった基礎の撤去作業について、契約の一部を変更することにより、遺跡調査会が行うことになった。コンクリートによる基礎部分は、総数30基近く存在し、規模についても2×2m以上で深さ1mにも及ぶものも存在することから、その作業は困難を余儀なくされた。

基礎の撤去作業は、2月21日から3月8日まで行われた。主な作業内容は、ブレーカでコンクリート部分を粉砕し、その粉々になったコンクリート片をバックホーによりダンプに積載し、搬出作業を行うというものであった。同時に表土剥ぎ及び残土搬出作業を行う。

- 3月13日 人員導入による発掘調査を開始した。まず、調査区域の整備と細部の遺構確認作業を行い、午後から調査区北西隅の搅乱抜き作業を先行し行うこととした。71号土坑(71D)については、地下式坑の主体部の天井部が陥落したものであった。
- 14日 71Dの精査を一時中断し、弥生時代14号住居跡(14Y)の精査を開始する。本住居跡は炭化物粒子・炭化材を出土することから、焼失住居と考えられる。
- 15日～
4月4日 14Yの精査・写真撮影・実測を終了する。新たに土坑(72・73D)が検出されたため、精査・写真撮影・実測を行う。71D精査再開、掘り終了後写真撮影・実測を終了する。
- 4月6日 調査区南西隅の精査に移行する。15Yを確認、精査開始する。先行して周辺の搅乱抜きを行う。
- 7～18日 15Yの写真撮影・実測を終了する。4Wは11号炉穴(11F P)を切る。
- 19日 調査区全域のローム上層に縄文時代の遺物包含層が発達している。時期は、出土土器か

ら縄文時代中期後葉から後期前葉に比定される。精査開始。調査区南西隅に縄文時代の住居跡（2J）か。

- 25日 バックホーとダンプにより残土搬出作業を行う。併行して、遺物包含層の精査。
26日～
5月7日 田子山遺跡第69地点の発掘調査のため、本地点の調査を中断する。
8日 午後から調査を再開する。遺物包含層の精査。
9～16日 遺物包含層・11F P・4W・5Wの精査を行う。
17～23日 旧石器時代の精査と基本層序の掘り下げと写真撮影・実測を行う。（G-4）・（H-4）・
5）・（I-4・5）グリッドから開始する。全体での遺物の取り上げは、58点であった。
23日の午後から器材片付け及び搬出作業を行う。
24～31日 24日にプレハブ搬出作業を終了。その後、バックホーとダンプによる残土搬入及び埋戻
し作業を終了する。

（3）第3工程の発掘調査（平成13年7月2日～26日）

発掘調査に当たり、平成13年6月12日、東京電力から第3工程の事業計画の説明を受け、その後現地視察を行う。さらに、6月25日、志木変電所にて第3工程の発掘調査着手に必要な書類の提出及び具体的な相互確認を行った。

6月28日、埋蔵文化財発掘調査届（第3工程分）を教育委員会に提出する。教育委員会は、これらの届出書をすみやかに埼玉県教育委員会経由で文化庁長官に提出した。

第3工程の調査区は、工事予定図の④区域に該当し、発掘調査の経過は、以下のとおりである。

- 7月2日 バックホーとダンプを使用し、表土剥ぎ及び残土搬出作業を開始する。
3日 表土剥ぎ及び残土搬出作業を終了する。
9日 人員導入による発掘調査を開始する。午前中、調査区域の整備と細部の遺構確認作業を行いう。午後からは、縄文時代遺物包含層の精査を開始する。出土遺物は、平板測量により全点ドットを落とし、取り上げることにした。
10・11日 北西隅から66日を検出した。出土土器から古墳時代後期（7世紀代）の住居跡と考えられる。掘り終了後、写真撮影・実測を終了する。
13～17日 遺物包含層の精査を行う。出土遺物は450点を越える。
18～22日 遺物包含層の精査に併行し、縄文時代79～82号土坑（79～82D）の精査を行う。6Wの精査・写真撮影を終了する。
23日 79～82Dの精査・写真撮影・実測を終了する。6Wの実測を終了する。17Yを新たに検出したため、精査し、写真撮影・実測を終了する。以上により、調査を完了する。
25・26日 埋戻し作業を完了する。

（4）第4工程の発掘調査（平成14年1月23日～2月13日）

発掘調査に当たり、平成13年12月18日、東京電力から第4工程の事業計画の説明を受け、その後現地視察を行う。さらに、平成14年1月15日、志木変電所にて第4工程の発掘調査着手に必要な書類の提出及び具体的な相互確認を行った。

1月17日、埋蔵文化財発掘調査届（第4工程分）を教育委員会に提出する。教育委員会は、これらの

届出書をすみやかに埼玉県教育委員会経由で文化庁長官に提出した。なお、発掘調査に対する指示通知番号は、平成14年2月1日付け 教文第2-111号である。

第4工程の調査区は、工事予定図の⑤区域に該当し、発掘調査の経過は、以下のとおりである。

1月23日 バックホーとダンプを使用し、表土剥ぎ及び残土搬出作業を開始する。

24日 人員導入による発掘調査を開始する。まず、調査区域の整備と細部の造構確認作業を行う。その後、18Y・66H・縄文時代遺物包含層の精査を開始する。66Hはカマドが検出され、その周囲からは土器が多く出土している。縄文時代遺物包含層の出土遺物は、平板測量により全ドットを落とし、随時取り上げることにした。

25~29日 18Yは掘りを終了し、造構の実測を終了する。66Hは遺物出土状態の写真撮影を終了し、実測を行い、その後遺物を取り上げる。

30~31日 18Yは造構の掘り方精査を終了する。66Hは遺物出土状態の実測終了後、遺物取り上げ完了、その後カマド精査を開始する。新たに94~97号土坑(94~97D)を検出する。94~96Dは中近世、97Dは縄文時代中期後葉に比定される。縄文時代遺物包含層の精査を再開する。

2月1日～4日 遺物包含層の精査に併行し、66Hのカマド精査を行う。97Dの精査を開始する。その後写真撮影・実測を終了する。基本層序の掘り下げ開始。

5・6日 遺物包含層の精査に併行し、66Hのカマド精査を終了する。縄文時代中期の土坑98・99Dの精査終了。

7日 66Hの掘り方精査終了。100Dはカマドに切られる。掘りを終了させ、写真・実測を終了する。基本層序の実測終了。

8日 遺物包含層の精査を完了する。その後、器材の片付けを行い、午後には器材搬出作業を行う。

12・13日 埋戻し作業を完了する。

(5) 第5工程の発掘調査(平成14年8月20日～9月4日)

発掘調査に当たり、平成14年7月16日、東京電力の組織見直しによる担当者の変更のための顔合わせ及び第5工程の事業計画の説明を受ける。7月30日、志木変電所にて第5工程の発掘調査着手に必要な書類の提出及び具体的な相互確認を行った。

8月16日、埋蔵文化財発掘調査届(第5工程分)を教育委員会に提出する。教育委員会は、これら届出書をすみやかに埼玉県教育委員会経由で文化庁長官に提出した。なお、発掘調査に対する指示通知番号は、平成14年8月26日付け 教文第2-52号である。

第5工程の調査区は、工事予定図の⑥区域に該当し、発掘調査の経過は、以下のとおりである。

8月20日 バックホーとダンプを使用し、表土剥ぎ及び残土搬出作業を開始する。

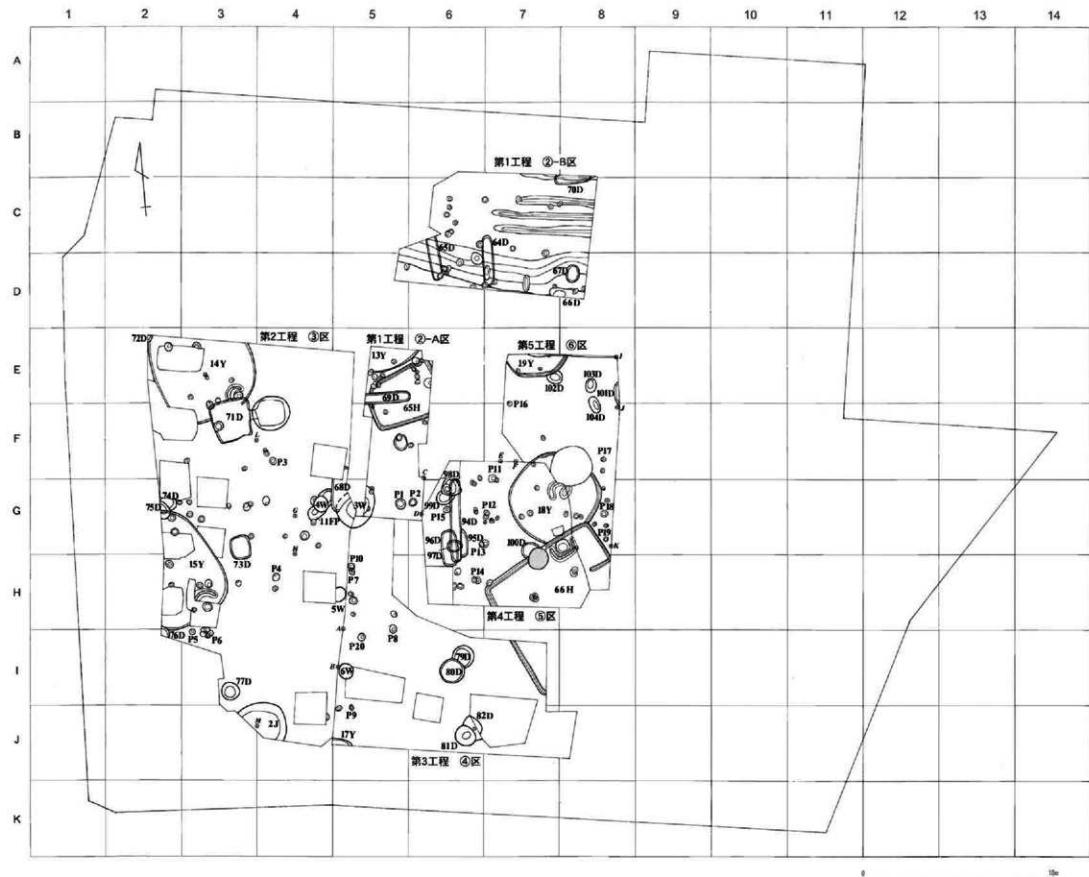
21日 人員導入による発掘調査を開始する。まず、調査区域の整備と細部の造構確認作業を行う。午後から、18・19Y・66H・古墳時代の土坑(101D)の精査を開始する。18Yは第4・5工程、66Hは第3～5工程で分割調査になってしまった。

22・23日 18・19Y・66Hの精査を行う。66Hは遺物出土状態の写真撮影終了後、実測を開始する。101Dの実測を終了する。縄文時代遺物包含層の精査を開始する。出土遺物は、平板測量

- により全点ドットを落とし、取り上げることにした。
- 26日 66Hの遺物出土状態の実測終了。縄文時代遺物包含層の精査を行う。
- 28~30日 遺物包含層の精査に併行し、18Y・66Hの遺構写真撮影・実測終了。縄文時代の土坑(103・104D)の精査開始。写真撮影・実測終了。
- 9月2日 遺物包含層の精査終了。その後、調査区東端を基本層序面とし、立川ローム第IV層まで掘り下げる。
- 3日 基本層序の精査終了後、実測・写真撮影を完了。午後からは、器材搬出作業を行う。
- 4日 埋め戻し作業を完了する。

工程	調査面積(m ²)	調査期間	検出された主な遺構	検出された主な遺物	
第1工程	140.00	平成11年5月10日 ~7月6日	弥生時代後期 平安時代 中・近世	住居跡 1軒(13Y) 住居跡 1軒(65H) 段切伏造構(B区) 土坑 6基(64・67・69・70D) 井戸跡 1基(3W)	土器 土器器・須恵器 陶磁器・かわらけ・鉄製品・石製品 人骨・陶磁器・かわらけ・鉄製品・石製品 かわらけ
第2工程	490.00	平成12年2月21日 ~8月31日	旧石器時代 縄文時代早期 縄文時代中期 縄文時代 弥生時代後期 平安時代 中・近世	石器集中地點 1ヶ所 か穴 1基(11P-P) 住居跡 1軒(2J) 遺物包含層 全域 住居跡 2軒(14・15Y) 土坑 5基(73~77D) 土坑 3基(68・71・72D) 井戸跡 2基(3・6W)	石器・剣片・石核 土器小片 土器・石器 土器・石器多數 土器 土器・須恵器 陶器・かわらけ・鉄製品・編織 陶磁器・土器
第3工程	130.00	平成13年7月2日 ~26日	縄文時代中期 縄文時代 弥生時代後期 古墳時代後期 中・近世	土坑 4基(79~82D) 遺物包含層 全域 住居跡 1軒(17Y) 住居跡 1軒(66H) 井戸跡 2基(3・6W)	土器・石器 土器・石器多數 土器 土器 土器 陶器・はうろく・かわらけ
第4工程	50.00	平成14年1月23日 ~2月13日	縄文時代 弥生時代後期 古墳時代後期 中・近世	土坑 3基(97~99D) 遺物包含層 全域 住居跡 1軒(18Y) 住居跡 1軒(66H) 土坑 1基(101D) 土坑 3基(94~96D)	土器 土器・石器多數 土器 土器 なし 陶磁器小破片
第5工程	80.00	平成14年8月20日 ~9月4日	縄文時代 弥生時代後期 古墳時代後期 中・近世	土坑 3基(102~104D) 遺物包含層 全域 住居跡 2軒(18・19Y) 住居跡 1軒(66H) 土坑 1基(101D) 段切伏造構一部	土器・石器多數 土器 土器 須恵器小破片 なし
合計	890.00				

第4表 各工程の調査概要



第4図 造構分布図 (1/200)

第3章 検出された遺構と遺物

本地点における調査では、旧石器時代の立川ローム第IV層下部で石器集中地点1ヶ所、縄文時代の早期後葉の炉穴1基、中期後葉の住居跡1軒・土坑10基、遺物包含層、弥生時代後期後葉の住居跡6軒、古墳時代後期の住居跡1軒・土坑2基、平安時代の住居跡1軒・土坑5基、中近世の段切状遺構・井戸跡4基・土坑12基などの遺構が調査区全面に亘って検出され、同時にこれらの遺構に伴い土器・石器・陶磁器等の遺物が多く出土した。

第1節 旧石器時代

(1) 概要 (第5~10図)

今回の旧石器時代の調査は、第2工程で実施した。調査は、縄文時代の遺物包含層の精査終了後、まず、(G-4)・(H-4・5)・(I-4・5)グリッドから精査を開始した。同時に(I-5)グリッドの西端面を基本層面(A-Bセクション)として設定し、立川ローム第X層までの深掘りを行った。その結果、今回最終的に調査を実施した箇所は、(F-3)・(G-3・4)・(H-3~5)・(I-4・5)グリッドの範囲で、時間の制約上すべてV層までの調査で終了した。

石器の分布は、(G-3)グリッドのほぼ4m範囲から集中している状況と考えられることから、石器集中地点1ヶ所として理解できるものである。遺物を層序的に見ても立川ローム層IV層上部~下部にかけて上下幅の変動がいくらか見られるが、文化層としてはIV層下部の1枚としてよいであろう。今回の調査で検出された石器等の総数は58点である。なお、遺構外出土遺物として、旧石器時代の石器・剥片・石核8点を取り扱っているため、実質的な旧石器の石器等の出土総点数は66点である。

(2) 基本層序 (第6図)

中野遺跡は、武藏野台地北端の柳瀬川右岸の標高約8~11mの台地上に位置する。今回の調査において、基本層序を把握するために深掘りを行った位置は、第1工程では(G-6)グリッドのC-Dセクション、第2工程では(I-5)グリッドのA-Bセクションと(G-4)グリッドのG-Hセクション、第4工程では(F-7)グリッドのE-Fセクションである。

以下、各層についての説明をすることにする。

第I層 盛土及び表土

調査区は変電所建設の際、構内全体が盛土による整地が行われている。a層は盛土層、b層は表土層、c層は弥生時代以降の遺構及び擾乱である。

第II層 漸移層・縄文時代遺物包含層

a~e層の5層に分層される。a層はローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む黒褐色土層、b層はローム粒子を僅かに含む暗茶褐色土層、c層はローム粒子を多く含む明茶褐色土層、d層はローム粒子を多く含む暗茶褐色土層、e層はローム粒子・ローム小ブロック・赤褐色スコリア・炭化物粒子を僅かに含む暗茶褐色土層である。

土層の色調は、a→b→c→d層というように上層→下層の方向で漸次ローム粒子が多

く、明色に変化している傾向である。

第Ⅲ層 黄褐色軟質ローム層（ソフトローム層）

第Ⅳ層 黄褐色硬質ローム層（ハードローム層）

本層下部が今回の文化層検出層準。

第Ⅴ層 暗黄褐色ローム層（第1黒色帶）

第Ⅵ層 黄褐色土層（A T包含層準）

第Ⅶ層 暗黄褐色ローム層（第2黒色帶上部）

第Ⅷ層 黄褐色ローム層

第IX層中からブロック状に散在する。通常、第VII層と第IX層の境にブロック状に散在するが、検出できない場合が多い。

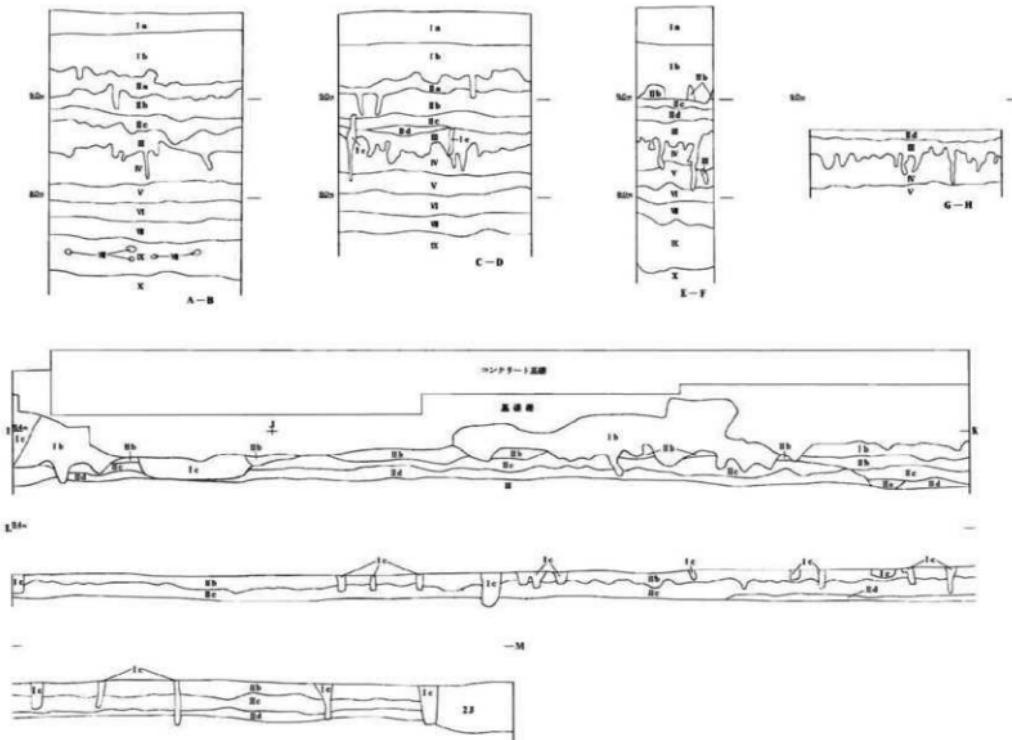
第IX層 暗黄褐色ローム層（第2黒色帶下半部）

本層中から第VII層がブロック状に散在する。

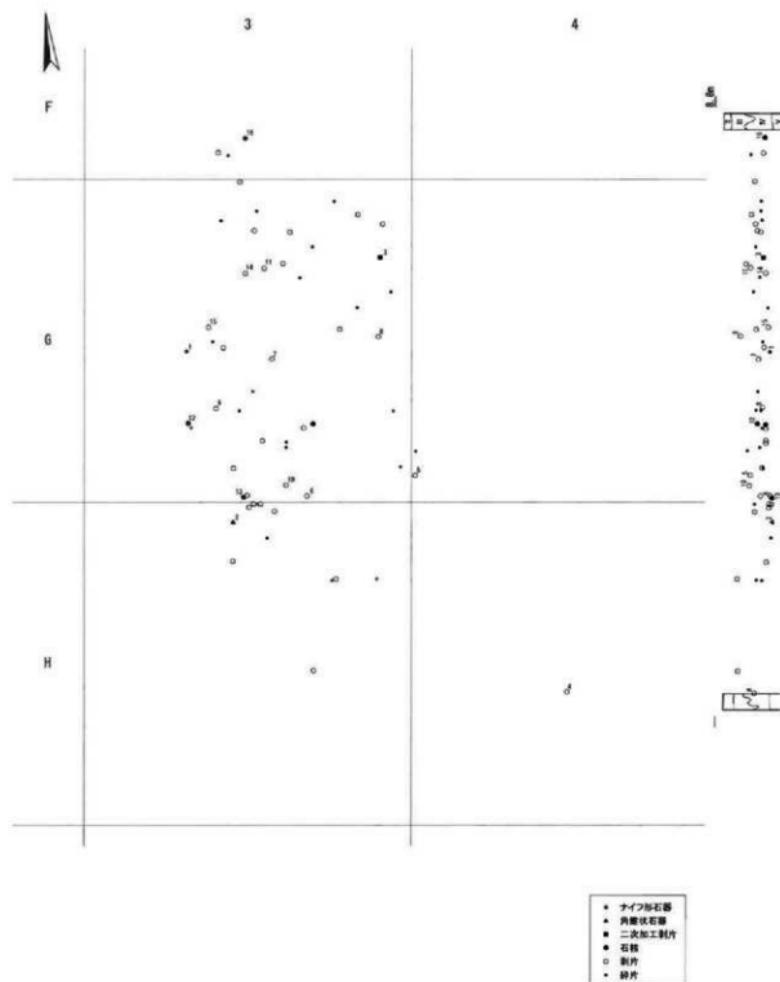
第X層 黄褐色ローム層



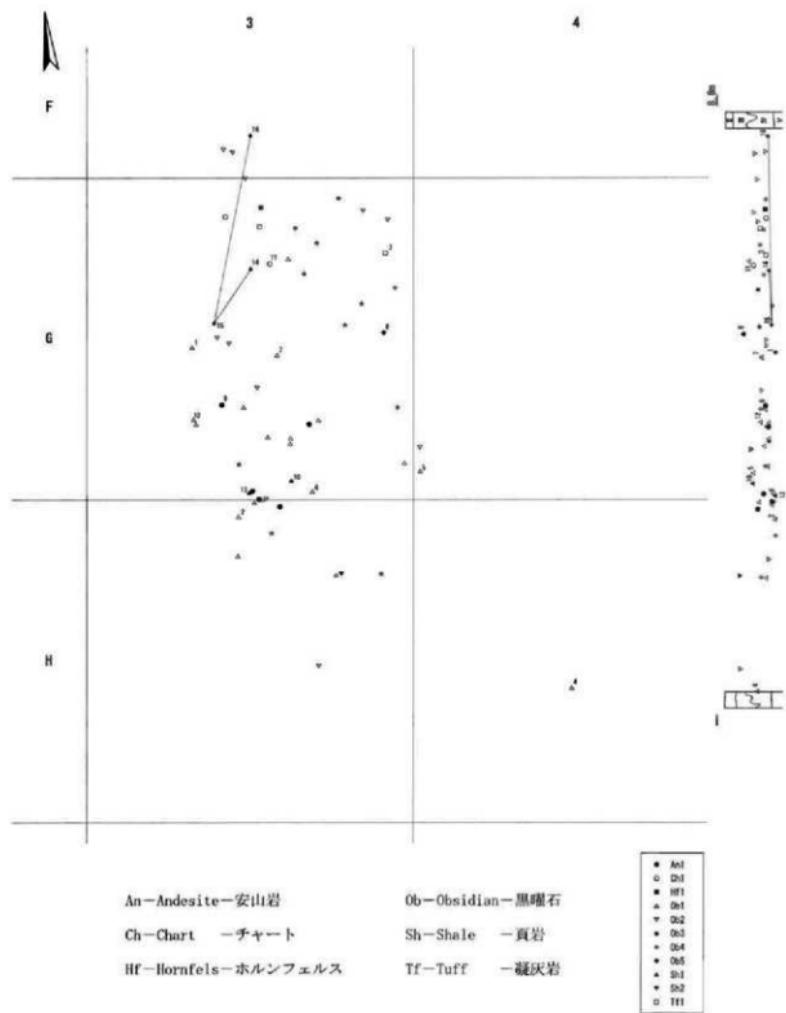
第5図 旧石器時代の遺物分布図 (1/200)



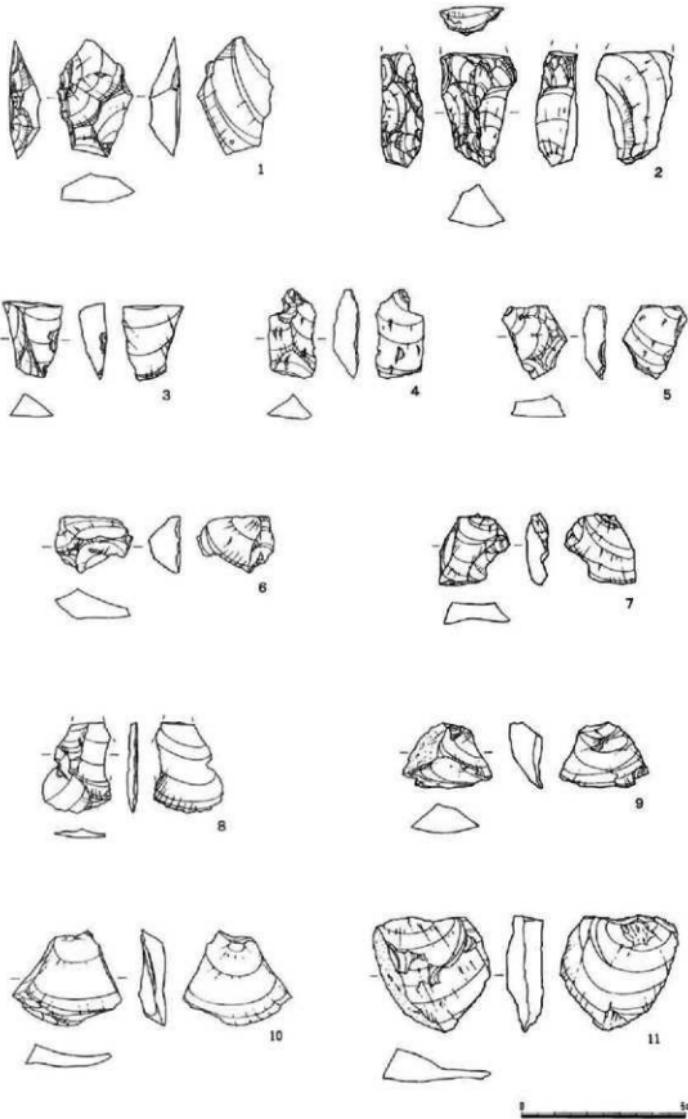
第6図 基本層序・縄文時代遺物包含層土層図(1/50)



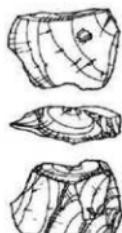
第7図 器種別分布図 (1/60)



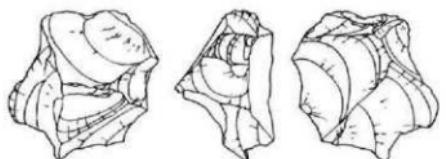
第8図 母岩別分布図 (1/60)



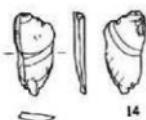
第9図 旧石器時代の遺物1 (2/3)



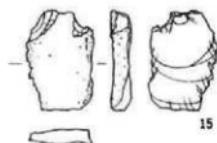
12



13



14



15



16



17

(14+15+16 接合図)



第10図 旧石器時代の遺物 2 (2/3)

(3) 出土遺物 (第9・10図、第5表)

1は一部縁加工のナイフ形石器である。横長剥片を素材とし、左側縁に急角度剥離によって背部を形成している。黒曜石製である。

2は角錐状石器である。横長剥片を素材とし、先端を欠損している。加工は主要剥離面側と背面側の両方向より施されている。黒曜石製である。

3は凝灰岩製の二次加工剥片である。素材は縦長剥片であり、上部は欠損している。右側縁に加工が見受けられる。

4~11・14~15は剥片である。4は上部左を欠損している。背面構成から打面転移が窺える。5は左側縁と下部を欠損している。6は比較的厚みのある横長剥片であるが、左側縁を欠損している。7は打面と左側辺を欠損している。背面構成から打面転移が窺える。黒曜石製である。8は薄身の縦長剥片であり、上部を欠損している。9は安山岩製の横長剥片である。左側辺の原縫面を残置しており、平坦打面である。10は右側縁を欠損している。打面は平坦打面である。11は左側辺に広く原縫面を残置している。打面は残置しており、切子打面である。チャート製である。14は左側縁を欠損している。15の剥片と接合する。15は背面に広く原縫面を残置しており、剥片剥離作業の初期の剥片である。16の石核および14の剥片と接合する。

12~13・16は石核である。12は黒曜石製の石核である。素材剥片の主要剥離面を打面とし横長の小形剥片を剥取しており、作業面は一面である。素材剥片の打面も残置している。13は頁岩製であり、打面転移が見受けられる。作業面から不定形な剥片を剥取していくことが窺える。10の剥片と同一母岩と思われる。16の作業面は一面のみで全体に原縫面が残置しており、数枚の剥片のみ剥取している。

17は14~15・16の接合資料である。剥片剥離作業は、実測図正面の左方向から打面を作出し、剥片(15)→剥片(14)→打面調整→○→○→○→石核(16)であると思われる。

標番号	器種名	石材	母岩No.	刃部加工	整形加工	素材技術	素材形態	遺存状態	長さ	幅	厚さ	重量	備考
第9図1	ナイフ形石器	黒曜石	Ob1	なし	HD	不明	横長剥片	完形	37.07	23.23	9.88	5.7	
第9図2	角錐状石器	黒曜石	Ob1	なし	SD	不明	横長剥片	上部欠	35.22	23.84	13.28	8.7	
第9図3	二次加工のある剥片	凝灰岩	Tf1	なし	HD	不明	縦長剥片	上部欠	23.58	18.15	8.65	3.0	
第9図4	剥片	黒曜石	Ob1	なし	なし	不明	縦長剥片	左上部欠	27.69	14.54	7.69	2.3	
第9図5	剥片	黒曜石	Ob1	なし	なし	HI	縦長剥片	左側縁・下部欠	23.12	19.67	6.31	2.3	
第9図6	剥片	黒曜石	Ob1	なし	なし	不明	横長剥片	右側縁欠	17.83	23.68	9.91	3.0	
第9図7	剥片	黒曜石	Ob1	なし	なし	不明	剥片	上部欠	22.22	20.89	6.84	2.5	
第9図8	剥片	黒曜石	Ob5	なし	なし	不明	縦長剥片	上部欠	28.33	21.10	3.57	1.5	
第9図9	剥片	安山岩	An1	なし	なし	HD	横長剥片	完形	21.12	27.45	10.53	4.1	
第9図10	剥片	頁岩	Sh1	なし	なし	HD	縦長剥片	右側縁欠	28.69	32.21	7.73	4.7	
第9図11	剥片	チャート	Ch1	なし	なし	不明	剥片	完形	36.79	33.45	12.34	11.0	
第10図12	石核	黒曜石	Ob1	通用外	HI	不明	剥片	完形	12.03	34.28	24.56	8.6	
第10図13	石核	頁岩	Sh1	通用外	通用外	HD	通用外	完形	35.39	43.94	31.06	41.5	
第10図14	剥片	黒曜石	Ob3	なし	なし	不明	縦長剥片	左側縁欠	25.70	13.11	3.27	0.8	
第10図15	剥片	黒曜石	Ob3	なし	なし	HI	縦長剥片	完形	30.87	20.80	6.12	3.9	
第10図16	石核	黒曜石	Ob3	通用外	通用外	HI	通用外	完形	26.26	44.23	26.14	28.7	接合

HD:Hard hammer Direct flaking SD:Soft hammer Direct flaking

HI:Hard hammer Indirect flaking

(単位:mm,g)

第5表 旧石器時代の石器一覧

第2節 繩文時代

(1) 概要

繩文時代の遺構については、調査区南西端に住居跡1軒（2J）・土坑10基（79～82・97～99・102～104D）・炉穴1基（11FP）・ピット4本（P17・18・19・20）が検出されている（第11図）。また、後世の段切状遺構によって削平されている調査区北側を除き、調査区の南側を中心として繩文時代の遺物包含層の堆積があり、多くの土器・石器が出土している。

(2) 住居跡

2号住居跡（第12図）

【位置】（J-3・4）グリッド。

【住居構造】住居の南西側は調査区域外である。（平面形）楕円形か。（規模）不明×2.80m。（壁高）確認面から最深部で43cmを測り、断面は皿状を呈する。（壁溝）確認できなかった。（床面）全体に軟弱で硬化面、貼床は確認できなかった。（炉）確認できなかった。（柱穴）確認できなかった。（覆土）3層に分層され、ローム粒子・炭化物粒子を含む暗茶褐色土を基調とする（土層図4～6層）。

【遺物】上器小破片数点、黒曜石の小破片が出土した。黒曜石の小破片は実測しなかった。

【時期】繩文時代中期と思われる。

【所見】本遺構は、住居跡として扱ったが、多くの部分が調査区外にあると思われ、詳細は不明であり大型の土坑やいわゆる小豎穴状遺構の可能性もある。また、遺物については特定の型式の遺物が安定して出土するということが無く、詳細な時期を特定するには至らなかった。

2号住居跡出土遺物（第12図1～5）

1・2は中期前葉の阿玉台式土器である。1は波状口縁の頂点から縫位に隆帯を貼付し、指頭にて圧痕を施している。色調は暗褐色を呈し、胎土には金雲母・砂粒を含む。2は口縁直下に竹管による結節沈線文が施される。色調は褐色を呈し、胎土には金雲母・砂粒を含む。

3・4は中期後葉加曾利E III～IV式の土器である。3は口縁部に幅狭の無文部を太沈線で区画し、地文にR Lの単節斜縫文を施す。口縁直下は横位に1段、その下からは縫位に施文している。色調は赤褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。4は半截竹管によって縫位に条線が施されている。色調は黒褐色を呈し、胎土には褐色粒子・砂粒を含む。

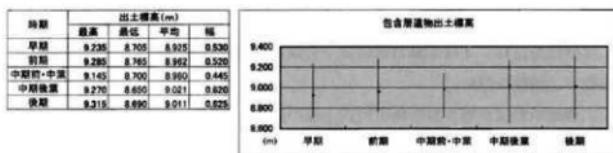
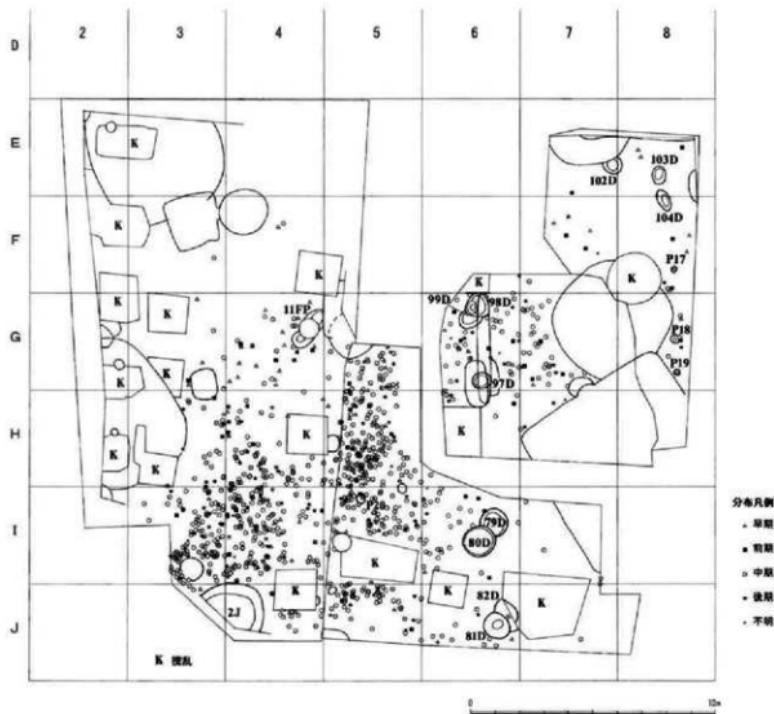
5は土鍤である。連続爪形文が施された阿玉台式土器の破片を加工している。胎土には金雲母・砂粒を含む。重さは29.2gを測る。

(3) 炉穴

11号炉穴（第13図）

【位置】（G-4）グリッド。

【構造】中世の4W・68D・ピットに切られる。（平面形）不整形。（規模）185×80cm。（長軸方位）N-42°-E。（深さ）52cm前後を測る。炉床は厚さ5cm程度が焼けて赤化していた。（覆土）ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物粒子を含む暗茶褐色土を基調とする。



第11図 繩文時代の遺構及び包含層出土遺物分布図(1/200)

【遺物】土器の小破片が出土した。

【時期】縄文時代早期後葉。

11号炉穴出土遺物（第13図1）

条痕文系土器で、色調は褐色を呈し、胎土には褐色粒子・繊維を含む。

（4）土坑

79号土坑（第14図）

【位置】（I - 6）グリッド。

【構造】80Dに切られる。（平面形）ほぼ円形。（規模）直径約115cm。（深さ）確認面から17cmを測る。坑底は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。（覆土）ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子を含む暗茶褐色土を基調とする。

【遺物】土器片が出土した。

【時期】縄文時代中期後葉。

79号土坑出土遺物（第15図1～14、第6表）

1は加曾利E III式前後の脚台部である。現器高4cm・推定底径7.8cm。表面、底面ともに丁寧に磨かれているが虫食い状の剥落が著しい。

2は勝坂式土器である。隆帯を半截竹管で縁取った区画内に爪形文を充填している。

3～13は加曾利E式土器である。3～6は口縁部でいずれも最上位の縄文は横位に施されている。7は縄文のみ有する胴部片。8～10は懸垂文を持つ土器であるが、8・9は磨消による懸垂文、10は沈線間を充填縄文によって懸垂文を形作っている。11・12は胴上部の破片で太沈線で曲線が描かれる。

14は加曾利E式と思われるが詳細な時期は不明である。胎土には石英もしくはガラス質と思われる微細な粒子の混入が顯著である。

80号土坑（第14図）

【位置】（I - 6）グリッド。

【構造】79Dを切る。（平面形）ほぼ円形。（規模）直径約130cm。（深さ）確認面から35cmを測る。坑底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。（覆土）ローム粒子、明橙色粒子、炭化物粒子、炭化材を含む暗茶褐色土を基調とする。

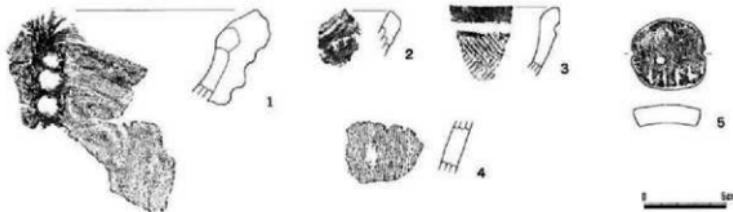
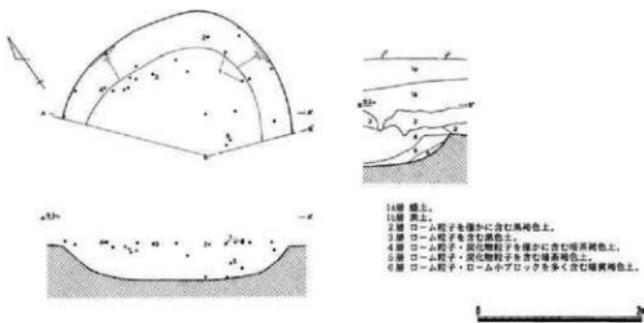
【遺物】縄文時代中期後葉を中心とした土器片と石器が出土した。

【時期】縄文時代中期後葉。

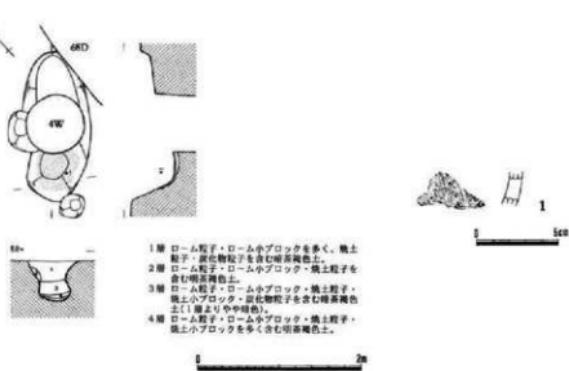
80号土坑出土遺物（第15図15～27、第16図28～44、第6・7表）

15は中期前葉の阿玉台式土器の口縁部破片で、胎土に金雲母の混入が顯著である。

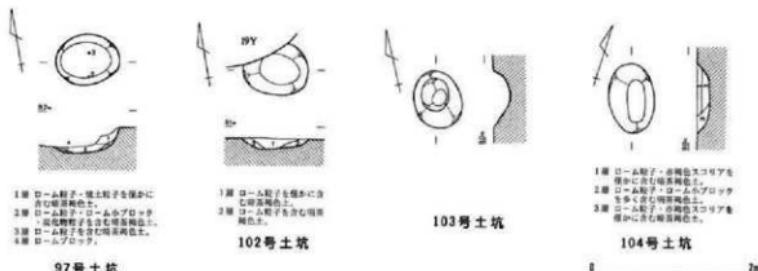
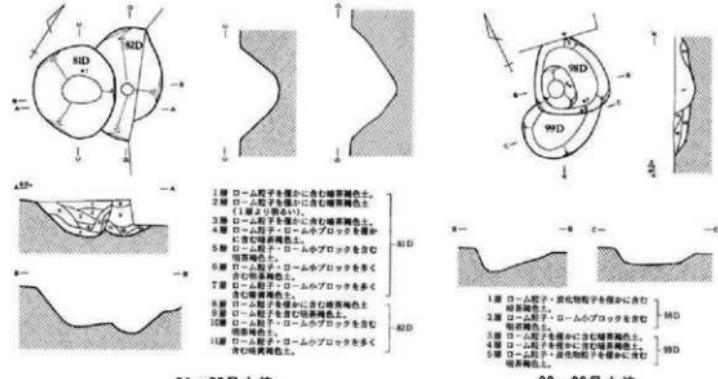
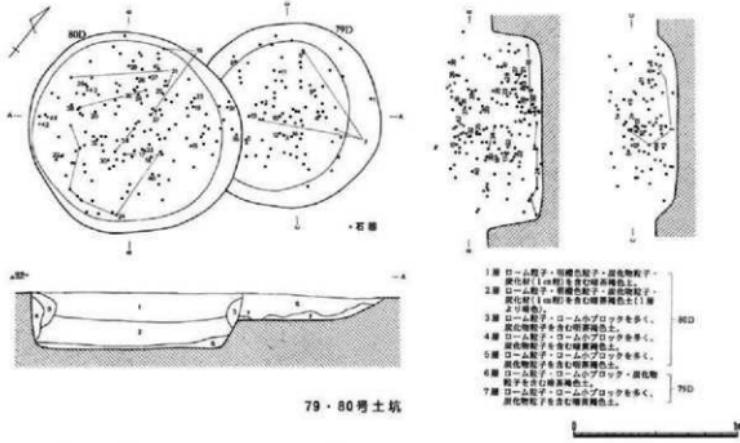
16～23は中期後葉の加曾利E式のうち懸垂文を主とする土器である。23は充填縄文であるがそれ以外は磨消縄文によって懸垂文が形作られている。16・17は胎土の白色粒子が顯著である。24～27は条縫文を地文とする土器である。いずれも縦位条縫文である。28～32は微隆起線文を持つ土器である。28は破片の下端に貼り付けた隆帯が剥離したと思われる痕跡が認められる。33は沈線区画内磨消によって描出された曲線文を持つ土器である。34は意図して彩色したものとは思われないが内面に赤色塗料が付着している。35は底部直上の無文部の破片で、無文部は粗いヘラ削り調整が施される。36～38は縄文部の破



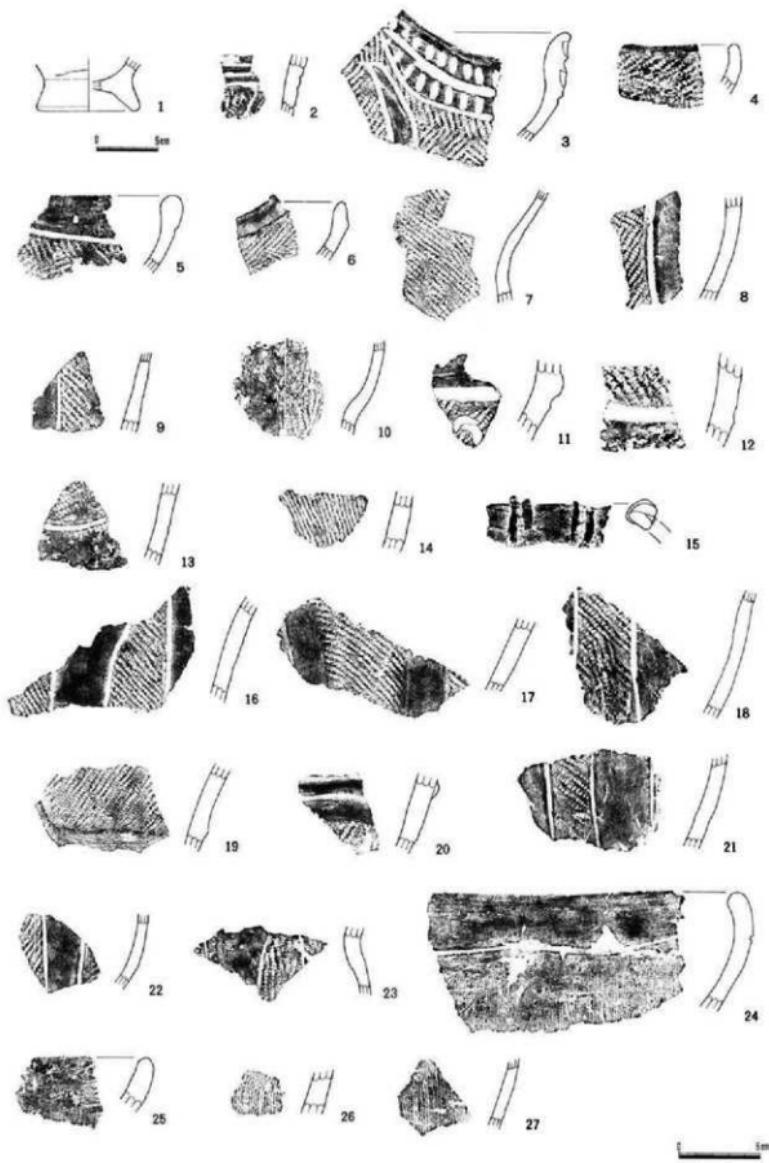
第12図 2号住居跡・出土遺物 (1/60・1/3)



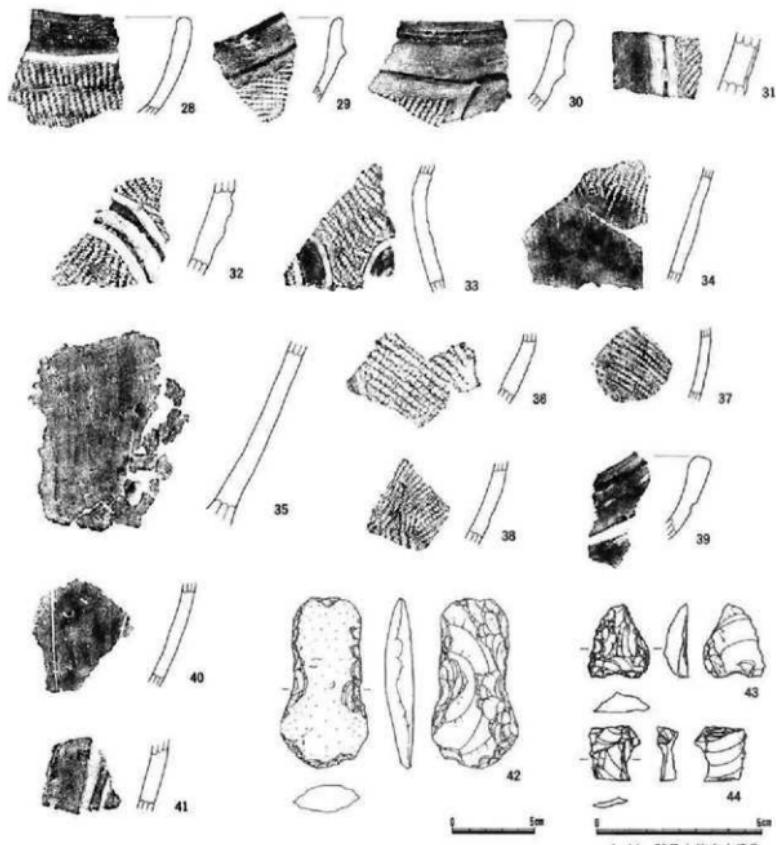
第13図 11号炉穴・出土遺物 (1/60・1/3)



第14図 土坑 (1/30・1/60)



第16圖 79•80號土坑出土遺物1 (1/4•1/3)



第16図 79・80号土坑出土遺物2 (1/3・2/3)

片で、37については外周部が磨滅しており、土製円盤の可能性も考えられる。

39は後期前葉の称名寺式土器の口縁部で、内外面に僅かな赤色塗料の付着が見られる。

40・41は後期前葉の堀之内式土器の破片と思われる。40は表裏ともに僅かではあるが赤色塗料の付着が見られる。

42は分銅形の打製石斧である。横長剥片を素材とし、背面には広く原礫面を、裏面には素材の主要剥離面を広く残置しており、大きな成形は行っていない。花崗岩製である。43は石錐の未製品である。背面左側縁と基部に調整を施している。裏面には調整は見受けられない。44は剥片である。右側縁を欠損している。

辨認番号	遺構	部位	特徴		色調	胎土	分類	その他
			地文	装飾				
第15回1	79D	脚台			明褐色	砂粒	加曾利E III前後	
第15回2	79D	脚	縦文RL	隕帶、爪形文	褐色	砂粒	勝坂	
第15回3	79D	口縁	縦文RL	底状口縁部直下に横位沈線及び列点。磨消による曲線文	暗褐色	砂粒	加曾利E IV	
第15回4	79D	口縁	縦文LR		灰褐色	砂粒	加曾利E III~IV	
第15回5	79D	口縁	縦文RL	横位沈線による口縁部無文帯、「△」状態垂文、ごく緩やかな波状口縁	暗褐色	砂粒・角閃石	加曾利E IV	
第15回6	79D	口縁	縦文LR	口縁部直下に激隆起線、波状口縁	暗褐色		加曾利E IV	
第15回7	79D	脚	縦文RL		暗褐色		加曾利E III~IV	
第15回8	79D	脚	縦文RL	磨消垂文	明褐色	砂粒	加曾利E III~IV	
第15回9	79D	脚	縦文RL	磨消垂文	暗褐色	砂粒	加曾利E III~IV	
第15回10	79D	脚	縦文LR	縦位細沈線区画間縦文充填	灰褐色		加曾利E III~IV	
第15回11	79D	脚	縦文RL	沈線、隕帶	明褐色	褐色粒子・砂粒	加曾利E III	
第15回12	79D	脚	縦文RL	沈線、隕帶	明褐色		加曾利E II~III	
第15回13	79D	脚	縦文RL	沈線による曲線文	赤褐色	砂粒	加曾利E III~IV	
第15回14	79D	脚	縦文L		赤褐色	砂粒・石英	加曾利E ?	
第15回15	80D	口縁		口縁部に直する粘土種貼付、波状口縁	暗褐色	金雲母	阿玉台	
第15回16	80D	脚	縦文LR	磨消垂文	暗褐色	白色粒子・砂粒	加曾利E II~III	
第15回17	80D	脚	縦文LR	磨消垂文	暗褐色	白色粒子・砂粒	加曾利E II~III	
第15回18	80D	脚	縦文LR	磨消垂文	明褐色		加曾利E II~III	
第15回19	80D	脚	縦文RL	激隆起線文	暗褐色	砂粒	加曾利E II~III	
第15回20	80D	脚	縦文RL	隕帶、沈線	暗褐色	砂粒	加曾利E II~III	
第15回21	80D	脚	縦文LR	磨消垂文	褐色		加曾利E III~IV	
第15回22	80D	脚	縦文RL	磨消垂文	褐色		加曾利E III~IV	
第15回23	80D	脚	縦文RL	沈線による垂垂文、沈線間縦文充填	褐色		加曾利E III~IV	
第15回24	80D	口縁	縦位条線文	横位沈線による口縁部無文帯	暗褐色	細繩・砂粒	加曾利E III	
第15回25	80D	口縁	縦位条線文		褐色	砂粒	加曾利E III~IV	
第15回26	80D	脚	縦位行条線文		暗褐色	白色粒子・砂粒	加曾利E III~IV	
第15回27	80D	脚	縦位条線文		褐色		加曾利E III~IV	
第16回28	80D	口縁	縦文RL	横位沈線による口縁部無文帯、波状口縁	褐色		加曾利E III~IV	隕帶貼り付け痕
第16回29	80D	口縁	縦文RL	激隆起線文による口縁部無文帯、波状口縁	黑色	白色粒子・砂粒	加曾利E IV	
第16回30	80D	口縁	縦文RL	激隆起線文による口縁部無文帯、激隆起線による「口」状文様、波状口縁	暗褐色	砂粒	加曾利E IV	
第16回31	80D	脚	縦文RL	激隆起線による垂垂文	褐色	砂粒	加曾利E IV	
第16回32	80D	脚	縦文RL	2本の激隆起線による曲線文	暗褐色	砂粒	加曾利E IV	
第16回33	80D	脚	縦文RL	磨消による曲線文	明褐色	砂粒	加曾利E IV	
第16回34	80D	脚	縦文RL		明褐色		加曾利E III~IV	内面に赤色塗料付着
第16回35	80D	脚			黑褐色	砂粒	加曾利E III~IV	外側へ削り
第16回36	80D	脚	縦文LR	沈線	赤褐色	砂粒	加曾利E IV	
第16回37	80D	脚	縦文RL		明褐色	砂粒	加曾利E	土製円盤の可能性有り
第16回38	80D	脚	縦文RL		明褐色	砂粒	加曾利E	
第16回39	80D	口縁	無紋	口縁直下に沈線、波状口縁	暗褐色	砂粒	称名寺	赤色塗料付着
第16回40	80D	脚	無紋	沈線	黑褐色	角閃石・砂粒	福之内	赤色塗料付着
第16回41	80D	脚	無紋	沈線	黑褐色	砂粒	理之内	

第6表 79・80号土坑出土土器一覧

81号土坑（第14図）

- 【位置】(J-6) グリッド。
- 【構造】82Dを切る。(平面形) 楕円形。(規模) 115×100cm。(長軸方位) N-32°-W。(深さ) 50cm 前後を測る。(覆土) ローム粒子を含む暗茶褐色土を基調とする。
- 【遺物】土器片が出土した。
- 【時期】縄文時代中期後葉。
- 81号土坑出土遺物（第17図1）**
- 加曾利E IV式と思われる土器片である。ごく口縁に近く、横位の微隆起線下に縦位の蛇行条線文を施している。色調は暗褐色を呈し、胎土には微細な白色粒子を含む。

82号土坑（第14図）

- 【位置】(J-6) グリッド。
- 【構造】81Dに切られ、東側を搅乱に切られる。(平面形) 楕円形か。(規模) 不明×140cm。(長軸方位) N-31°-W。(深さ) 55cm前後を測る。(覆土) ローム粒子を含む明茶褐色土を基調とする。
- 【遺物】出土しなかった。
- 【時期】覆土から縄文時代中期と思われる。

97号土坑（第14図）

- 【位置】(G-6) グリッド。
- 【構造】(平面形) 楕円形。(規模) 78cm×63cm。(長軸方位) N-82°-W。(深さ) 33cm前後を測る。(覆土) ローム粒子を含む暗茶褐色土を基調とする。
- 【遺物】土器片が出土した。
- 【時期】縄文時代中期後葉。

97号土坑出土遺物（第17図2・3）

2は加曾利E IV式土器の把手直下部破片である。把手は欠損している。沈線区画内にL Rの縄文が施文される。色調は暗褐色を呈し、胎土には白色粒子・砂粒を含む。3は加曾利E式と思われる脇部片でL Rの縄文が施される。色調は暗褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。

98号土坑（第14図）

- 【位置】(G-6) グリッド。
- 【構造】99Dを切り、北側を搅乱に切られる。(平面形) 不整形。(規模) 不明×90cm。(長軸方位) N-15°-E。(深さ) 30cm前後を測る。(覆土) ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む暗茶褐色土を基調とする。
- 【遺物】土器片及び石器が出土した。
- 【時期】縄文時代中期後葉。

98号土坑出土遺物（第17図4～7、第7表）

4は加曾利E IV式の土器片である。R Lの縄文地に微隆起線文が施される。明褐色を呈し、胎土には黒色粒子を含む。5は加曾利E IV式の土器片である。L Rの縄文地に微隆起線による曲線文が施される。

色調は赤褐色を呈し、胎土には細縫を混入する。6は加曾利E II式と思われる土器片である。L Rの縄文地に磨消懸垂文を施している。破片上端には口縁部文様帶の隆帯がみとめられる。色調は明褐色を呈し、胎土には砂礫、白色粒子を含む。

7は打製石斧である。扁平な小型の礫を素材としている。原礫面を広く残置しており刃部にのみ調整を施している。粘板岩製である。

99号土坑（第14図）

【位置】（G - 6）グリッド。

【構造】98Dに切られる。（平面形）楕円形。（規模）不明×75cm。（長軸方位）N - 70° - E。（深さ）20cm前後を測る。（覆土）ローム粒子を僅かに含む暗茶褐色土を基調とする。

【遺物】出土しなかった。

【時期】覆土から縄文時代と思われる。

102号土坑（第14図）

【位置】（E - 7・8）グリッド。

【構造】19Yに切られる。（平面形）楕円形。（規模）80×65cm。（長軸方位）N - 74° - W。（深さ）15cm前後を測る。（覆土）ローム粒子を僅かに含む暗茶褐色土を基調とする。

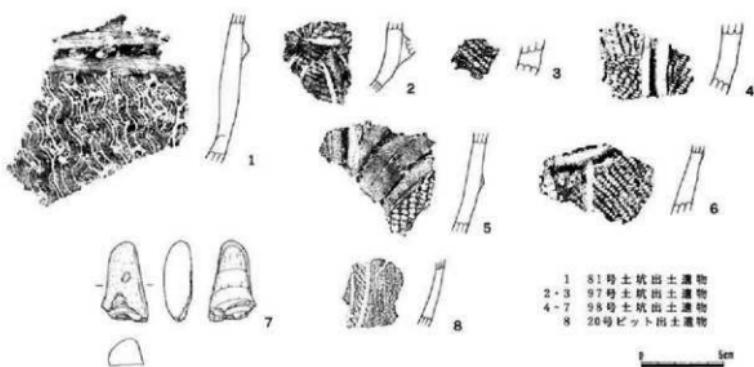
【遺物】出土しなかった。

【時期】覆土から縄文時代と思われる。

103号土坑（第14図）

【位置】（E - 8）グリッド。

【構造】（平面形）不整形。（規模）73×58cm。（長軸方位）N - S。（深さ）20cm前後を測る。（覆土）ローム粒子を含む暗茶褐色土。



第17図 81・97・98号土坑・20号ピット出土遺物 (1/3)

標印番号	造構	器種名	形態	石材	刃部加工	整形加工	成形加工	素材技術	素材形態	遺存状態	長さ	幅	厚さ	重量	備考
第168842	80D	打製石斧	分離	花崗岩	HD	HD	なし	不明	横長削片	完形	105.79	52.70	17.05	107.4	
第168843	80D	石鏟	平基	チャート	SP	不明	なし	不明	剥片	完形	22.56	18.72	7.18	2.5	未製品
第168844	80D	剥片		碧璫石	なし	なし	なし	不明	不明	右側縁欠	17.44	15.88	5.88	0.8	
第17087	98D	打製石斧	椎	粘板岩	HD	HD	なし	なし	椎	完形	51.25	28.84	17.89	29.8	

SP:Soft hammer Pressure flaking

(単位:mm, g)

第7表 土坑出土石器一覧

〔遺物〕出土しなかった。

〔時期〕覆土から縄文時代と思われる。

104号土坑（第14図）

〔位置〕(E・F-8) グリッド。

〔構造〕(平面形) 楕円形。(規模) 85×56cm。(長軸方位) N-17°-W。(深さ) 15cm前後を測る。(覆土) ローム粒子・赤褐色スコリアを僅かに含む暗茶褐色土を基調とする。

〔遺物〕出土しなかった。

〔時期〕覆土から縄文時代と思われる。

(5) ピット（第11図）

検出された4本のピットは覆土から縄文時代と思われる。遺物が出土したのは20号ピットのみでその他のピットは時期を推し量するものが無く、詳細な時期は不明である。

17号ピット

〔位置〕(F-8) グリッド。

〔構造〕(平面形) 円形。(規模) 直径約25cm。(深さ) 40.5cm。

〔遺物〕出土しなかった。

18号ピット

〔位置〕(G-8) グリッド。

〔構造〕(平面形) 円形。(規模) 直径約35cm。(深さ) 24cm。

〔遺物〕出土しなかった。

19号ピット

〔位置〕(G-8) グリッド。

〔構造〕(平面形) 円形。(規模) 直径約25cm。(深さ) 20cm。

〔遺物〕出土しなかった。

20号ピット

〔位置〕(I-5) グリッド。

〔構造〕(平面形) 円形。(規模) 直径約40cm。(深さ) 28.5cm。

〔遺物〕土器小片が1点出土した。

〔時期〕 繩文時代後期前葉。

20号ピット出土遺物（第17図8）

称名寺式土器と思われる。沈線で区画された帯繩文（L R）を有する。色調は暗褐色を呈し、胎土には砂粒・角閃石を含む。

（6）遺物包含層（第6・18～30図）

本調査地点においては、調査区の広範囲にわたって縄文時代の遺物包含層の堆積が確認され、中期後葉の加曾利E式土器を中心とした遺物が多数出土した。しかしながら調査区北側のB～Dグリッドについては段切状遺構に切られており、遺物包含層に相当する土層（土層図中II a層～II e層）が確認されず、遺物も検出されなかつたため、以下はE～Jグリッドについて記述する。E～Jグリッドについてはほぼ全域にわたり遺物包含層が発達・堆積していた。包含層上部は削平されており本来の厚さは不明、遺存状態の最も良好な部分で厚さ約70cmを測るが、位置によって堆積状態及び遺存状態が異なり、II a層～II e層にわたる全ての層が確認できる部分は無かった。

（i）遺物包含層出土の縄文土器（第26～29図、第8表）

遺物包含層から出土した遺物は1,136点、うち縄文土器（出土位置を記録できたもの）は971点であった。時期的には、中期後葉（加曾利E式）を中心にして早期～後期にわたる遺物が出土したが、これらの出土土器の大半が小型の破片であり、型式の特定をするのが困難な状況であった。そこで、便宜的に大きく早期・前期・中期・後期・時期不明の5群に分類し、さらに各時期において細分した。なお、出土点数が多く時期による文様の要素が漸移的である加曾利E式から堀之内式にかけての土器については幅をもたせて分類した。また、条線文のみを有する土器片などは後期の所産の可能性もあるが、小破片での判別が困難なため、便宜上加曾利E式に含めた。

第I群 縄文時代早期の土器（第26図1～11）

1類 貝殻条痕文系の土器（第26図1～5）

1～5はいずれも貝殻条痕文を有し、胎土には繊維を含む胴部小破片である。5は他よりも細かい条痕であることから、小型の貝殻が使用されたものと思われる。

2類 打越式及び下吉井式土器（第26図6～11）

6～10は打越式で同一個体である可能性がある。6が口縁部で他は胴上部の破片である。口唇部には貝殻腹縁圧痕による斜状の刻みを有し、口縁外面には左傾した縦位条痕文を上端から2cmほど施文する。またその下部に貝殻腹縁文による横位線状文及び連続山形文を施文する。器厚は5～8mm程で胎土には白色針状物質と角閃石の混入が顕著である。

11は下吉井式に比定される土器で、約7mm幅の浅沈線を横走させる。器厚約13mm、胎土には白色針状物質を顕著に混入する。

第II群 縄文時代前期の土器（第26図12～20）

1類 花積下層式土器（第26図12～14）

12は破片上部に撚糸圧痕を有し、その直下に棒状工具による刺突文、刻みを持つ降葉を貼付する。さらに下部には単節羽状繩文を有する。13・14は貝殻背圧痕を持つ。

2類 開山式および黒浜式土器（第26図15～18）

15～18は黒浜式に比定される土器で、18は横位に多重の沈線文を有し、他は単節繩文または単節羽状繩文を有する。いずれも胎土には纖維を混入する。

3類 諸磯式土器（第26図19・20）

19はL Rの繩文地に半截竹管を用いた平行沈線による同心円文が施文される。諸磯b式に比定される。20は半截竹管3本を1単位として結節沈線文が施される。施文は、左上から右下に向かい斜位に行われるが、その際レイアウトの目処にしたと思われる細沈線が文様左端に見てとれる。底部に沿って平行に横走する文様にレイアウト線は見られない。胎土には片岩の破片を顯著に混入する。諸磯c式に比定される。

4類 前期と思われるが型式不明の土器

図版19-2は表面が剥離しているため、詳細は不明で拓本による図示は行わない。剥離面にイネ科植物の葉の基部付近の痕跡が認められる土器である。色調は明褐色を呈し、胎土には纖維を含む。残存している部分の葉の大きさは長さ15mm・幅7mmである。

第三群 繩文時代中期の土器（第26～28図21～74）

1類 五領ヶ台式土器（第26図21）

21は中期前葉五領ヶ台式に比定される土器で、縦位の結節文をもつ胴部片である。

2類 阿玉台式土器（第26図22～26）

22～24は隆帯に沿って連続した爪形文を施した土器片で、22は口縁部、23・24は胴部片である。いずれも胎土に雲母を混入するが、22については僅かに混入する程度である。25は横位の結節文を有する胴部片である。胎土には砂粒の混入が顯著である。

3類 勝坂式土器（第26図26～29）

いずれも胴部片である。26は隆帯と刺突文によって文様を構成する。27・28は隆帯とその脇に半截竹管による平行沈線で区画し、その区画線に沿って連続した爪形文を充填する。29は横位に浅沈線による鋸歯状文を有する。26・29の胎土には砂粒の混入が顯著である。

4類 曾利式土器（第26図30）

竹管による縦位条線を有する口縁部破片である。曾利式に比定される土器片はこの1点のみであった。

5類 加曾利E式土器（第26図31～34、第27図35～56、第28図57～74）

加曾利E式についての5種に細分した。

1種 加曾利E I～II式土器（第26図31・32）

主としてE I式に比定される土器片。口縁部文様帶を隆帯で区画し、頭部無文帶を持つ土器及び地文に撚糸文を持つ土器。胴部文様帶に隆帯による懸垂文を持つものを含む。

31・32は撚糸文を有する胴部片で、横位に隆帯を2本巡らせ、撚糸文を縦位施文する。

2種 加曾利E II～III式土器（第26図33～34、第27図35～41）

主としてE II式に比定される土器片。磨消懸垂文を持つもの。E III式のうち口縁部文様帶を持つものを含む。

33は口縁部文様帶の破片で、隆帯による区画がされている。34は口縁部文様帶の破片で、梢円文と思われる区画内には縦位沈線が充填され、胴部にはR Lの繩文を縦に施す。35・36も隆帯によって文様帶

描出（区画）がされる土器片で、35はR Lの縄文が横位に施文され、36は区画内無文。37～40は縦位縄文と磨消懸垂文を持つ胴部片で、37・38は表面の劣化が目立つ。41は波状口縁の波頂部直下の隆帯に円形刺突を持つ。

3種 加曾利E III～IV式土器（第27図43・46～56、第28図57～74）

微隆起線や沈線により文様が描かれるもの。（E I～II式に比定されるものは除く）。磨消縄文による渦状文・曲線文を有する土器を含む。また、条線文を有する土器のうち口縁部無文帯を有する土器を含む。

43は口唇部を欠損しているが口縁部無文帯を有し、胴部に縦位蛇行条線の地文をもつ。

46は口縁部に約4cm幅の無文部を持ち、下部には沈線文と列点文が施文される。47～56は微隆起線による曲線文によって文様が構成される土器である。うち52・55は区画に磨消部を持つ。53は縄文地に微隆起線による懸垂文を持つ。

57～61は微隆起線によって口縁部無文帯を区画する土器片である。56は微隆起線区画による「匚」字状の文様、57は微隆起線区画による懸垂文を持つ平坦口縁の破片である。58～61は波状口縁で、61が沈線区画による渦状文を有する。他は胴部に縄文の地文のみが施文される。62・63は微隆起線区画による懸垂文を有する胴部片である。

64～69は沈線によって口縁部無文帯を区画する土器片である。64～66は胴部は地文のみ、67は沈線による曲線文、68は沈線区画による渦状文、69はごく浅い沈線によって文様が区画される。

70～73は「△」状、74は「U」状の懸垂文を有すると思われる胴部片である。

4種 条線文の土器（第27図42・44・45）

条線文を有する破片。43のように口縁部に無文帯を区画し加曾利E III～IV式に比定されるものは除く。いずれも胴部片である。42は半截竹管によるものと思われる2本1単位の平行沈線を縦位施文している。44・45は直線状の条線のみを有する破片である。

5種 加曾利E式土器

加曾利E式と思われるもののうち縄文部のみ、もしくは無文部のみの破片。図版では扱わない。

6類 中期の所産と思われるが型式不明の土器

図版では扱わない。

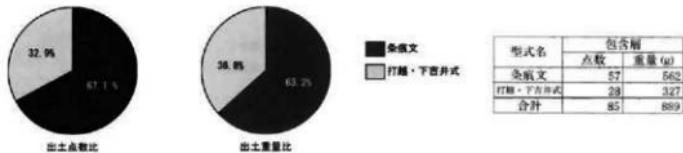
第IV群 縄文時代後期の土器（第28・29図75～95）

1類 称名寺I式土器（第28図75～77、第29図78～83）

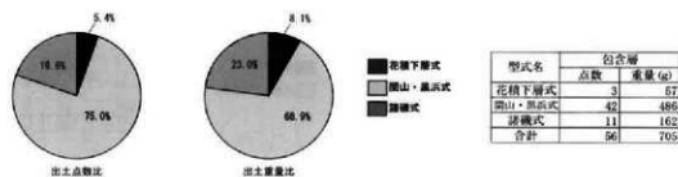
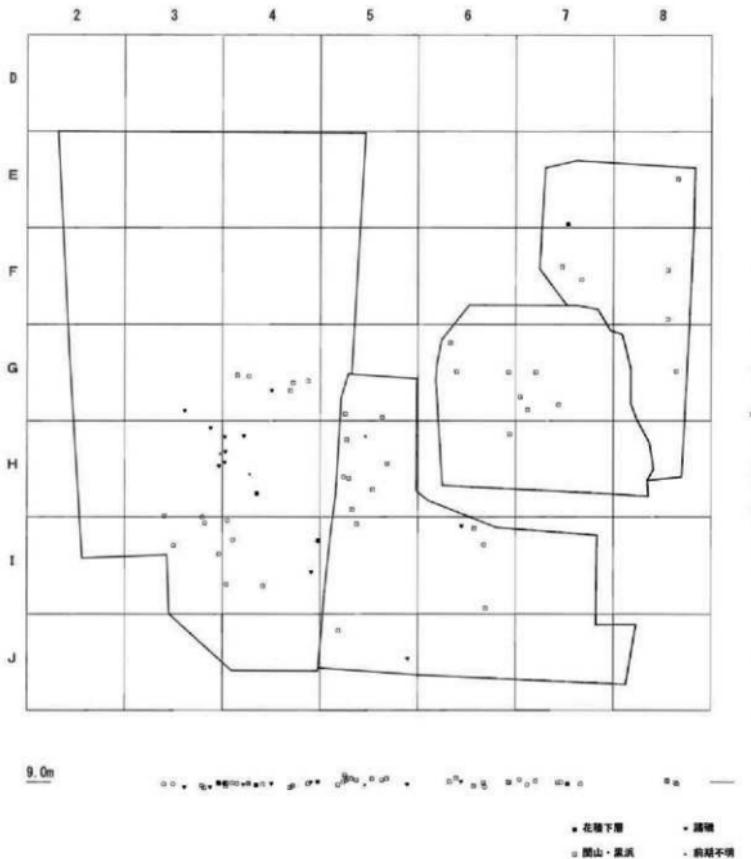
75～77は把手である。75は楕円状で長径約75mm・短径約55mm、長軸方向に並列して径15mm内外の孔を持つ。縁辺は沈線で縁取られる。76は上面に開口する筒状で、口縁部には沈線を巡らせる。外面は縦椭円の隆帯を貼付し、その上に沈線を施す。77は蔽手状を成し縁辺には沈線を巡らす。78～83は沈線間に縄文が充填された胴部片である。

2類 称名寺II式～壙之内式土器（第29図84～95）

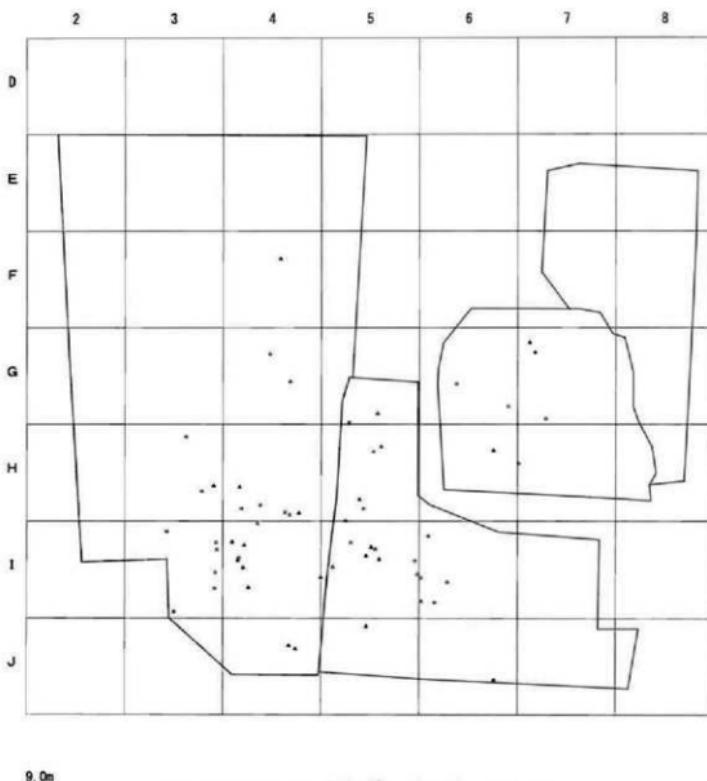
84～93はいずれも平行沈線による文様描出を基本とする土器片である。84は波状口縁部破片で、波状口縁頂部には渦状の小型把手を有する。88は口縁部に沈線を巡らせる。86・89は沈線間に列点を充填し、88はL Rの縄文を充填する。93は胴上部の大型破片で、沈線による渦状文と垂下する曲線により文様構成される。94・95は粗製土器である。



第18図 包含層早期土器分布図(1/200)

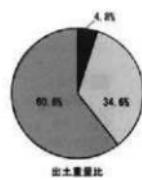
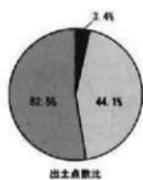


第19圖 包含層前期土器分布図 (1/200)



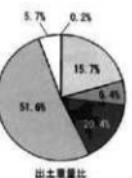
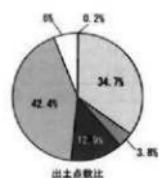
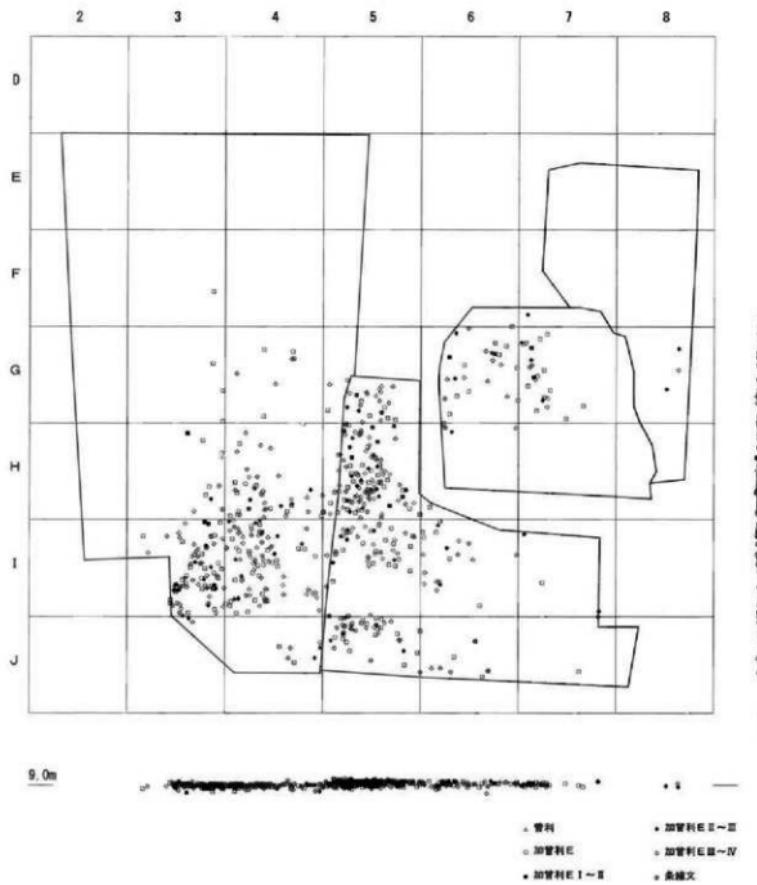
9.0m

- 五頭ヶ台式
- 鋤板式
- △ 阿玉台式



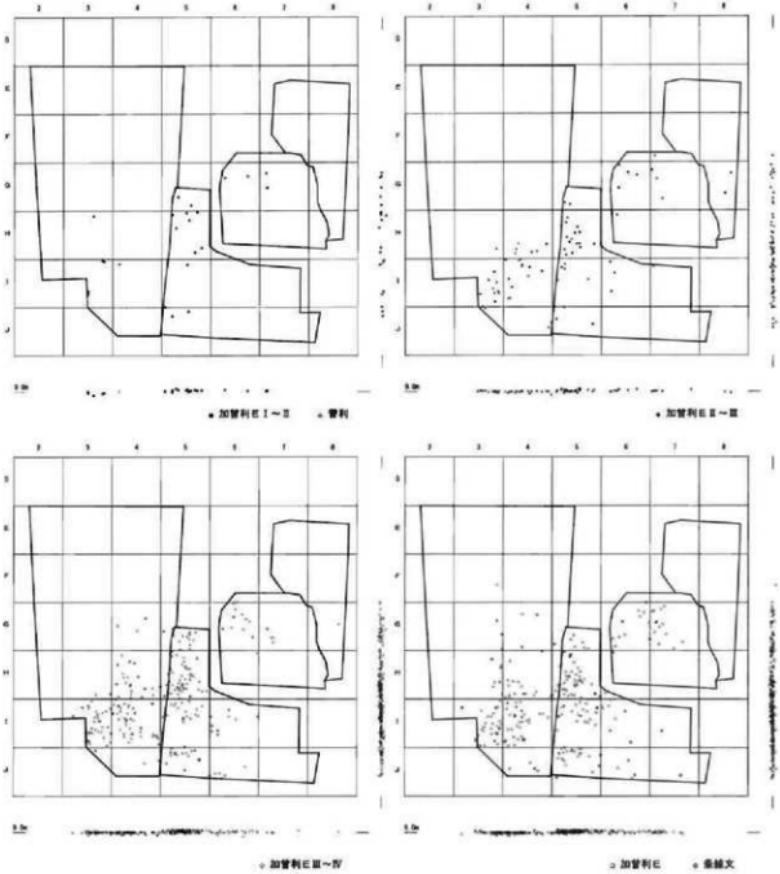
型式名	包含層	
	点数	重量(g)
五頭ヶ台式	2	51
阿玉台式	26	364
鋤板式	31	637
合計	59	1052

第20図 包含層中期前・中葉土器分布図 (1/200)

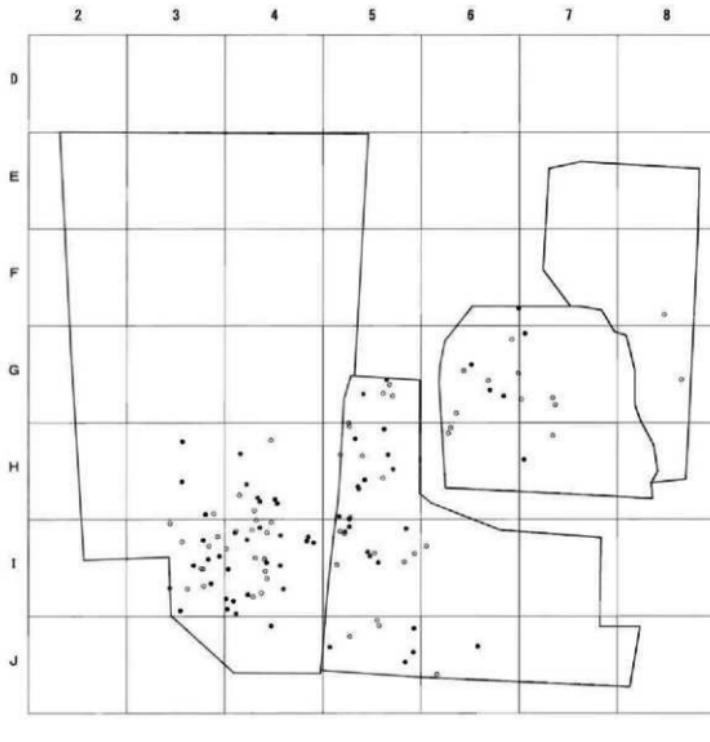


型式名	包含層	
	点数	重量(g)
素利式	11	23
加曾利式	202	2584
E I ~ II	22	804
E II ~ III	75	1992
E III ~ IV	247	6530
条纹	35	722
合計	582	12655

第21図 后Kofun中期後蔵土器分布図1 (1/200)

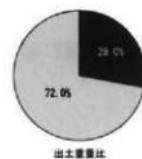


第22図 包含層中期後葉土器分布図 2 (1/400)

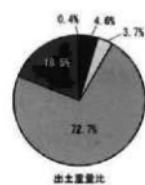
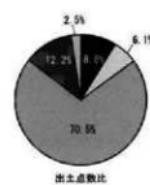
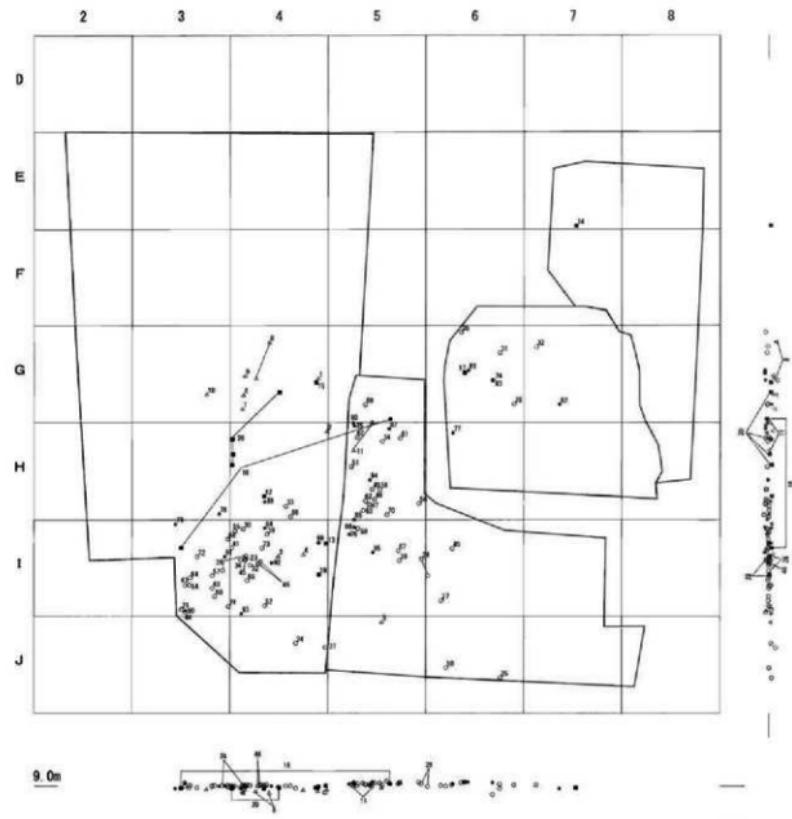


9.0m

○ 製名寺I
● 製名寺II・III之内

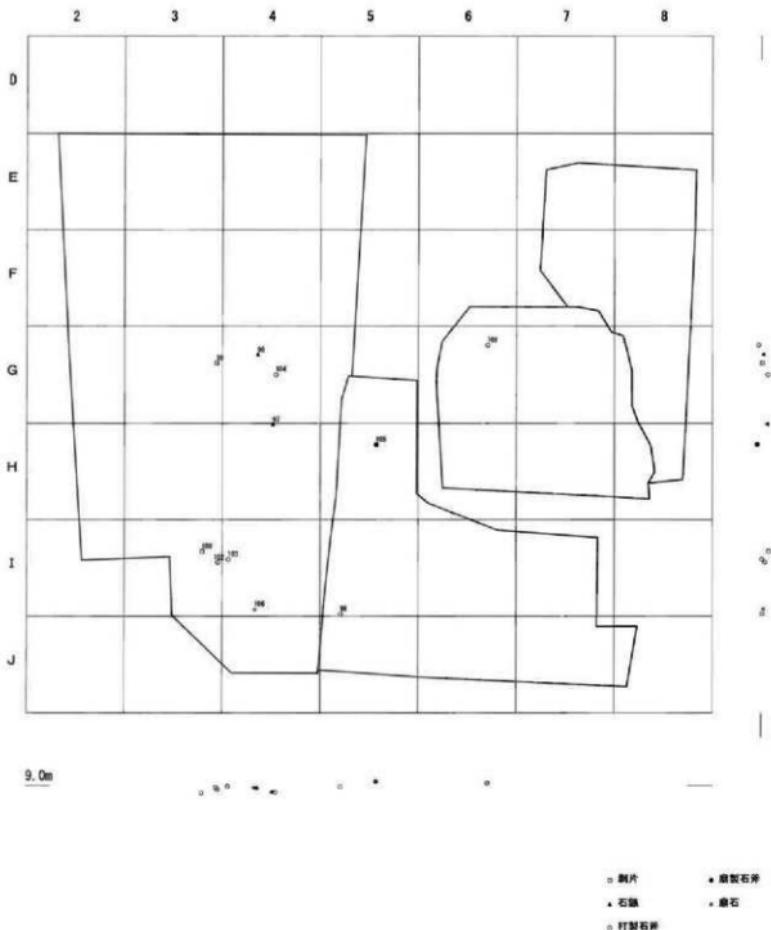


第23図 包含層後期土器分布図(1/200)



时期	包内层	
	点数	重量 (g)
早期	85	889
中期	59	728
后期	685	14140
不明	24	3606
合计	971	19445

第24図 包含層土器分布図(園版掲載分)(1/200)



第25図 包含層石器分布図 (1/200)

第V群 繩文時代の土器のうち時期不明のもの

図版では扱わない。

(ii) 遺物包含層出土の繩文時代の石器（第30図96～106、第9表）

96・97は石鏃である。96は薄身で丁寧に調整を施している。凹基である。97も凹基であり、裏面に素材剥片の主要剥離面を広く残置している。調整は丁寧である。

98～100は剥片である。98は小型の剥片であり、背面構成から打面転移が認められる。99は広く原礫面を残置している。

101～104は打製石斧である。101は刃部を欠損しているが、分銅形と推定される。右側縁には原礫面が見受けられる。ホルンフェルス製である。102は撥形である。背面上には広く原礫面を、裏面には素材の主要剥離面を広く残置しており、大きな成形は行っていない。右側縁から刃部にかけて、使用によると思われる敲打痕が見受けられる。砂岩製である。103は撥形である。表面は原礫面であり、調整は行われていない。裏面は両縁と刃部のみ調整を施している。粘板岩製である。104は原礫面を広く残置している。右側縁は節理面である。玄武岩製である。

105はホルンフェルス製の磨製石斧である。成形過程の敲打痕が右側縁に見受けられ、丁寧に研磨されているが、左側縁から裏面にかけて風化が激しい。刃部は欠損している。

106は花崗岩製の磨石である。表裏面は使用により磨耗が見受けられる。また下部には敲打痕が観察される。上部を欠損している。

(iii) 出土の状況（第18～24図）

遺物包含層より出土した土器片の時期別の内訳を点数・重量で示すと早期85点（8.8%）・889 g（4.6%）、前期59点（6.1%）・728 g（3.7%）、中期685点（70.5%）・14,140 g（72.7%）、後期118点（12.2%）・3,606 g（18.5%）、時期不明24点（2.5%）82 g（0.4%）で中期の出土量が突出していた。中でも加曾利E式が581点（59.9%）・12,632 g（65.0%）と繩文土器全体の半数以上を占める。後期の重量比が高いのは第29図93の個体が1,653 gと大型破片であることによる。

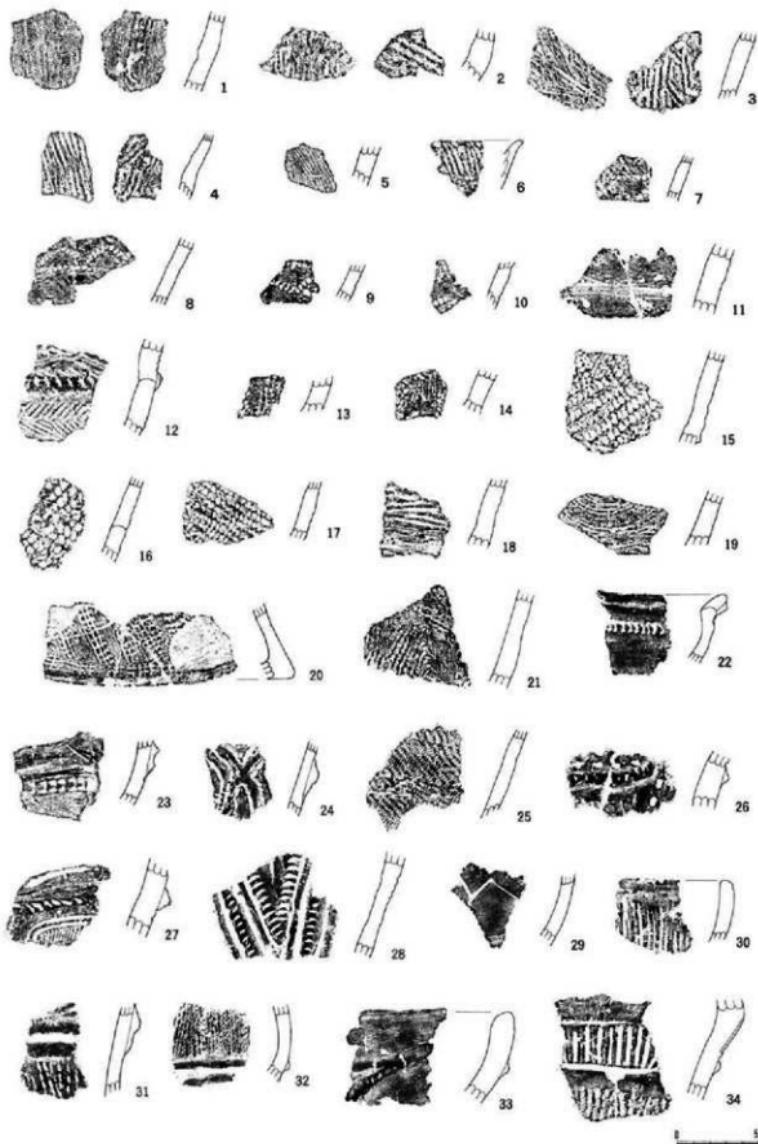
平面分布の状況を見ると、全般としては調査区の南西側に遺物が集中し、やや北東方向に偏って分布の広がりを見せてている。

調査区内西側の14Y・15Yの他、大型設備基礎による搅乱、東側の18Y・19Y・66H等は現地形での分布には大きな影響は見受けられないが、南側の2J、(I-5)グリッドや(I-J-4)グリッドの大型設備基礎の搅乱については大きく遺物分布域を削り取っている。

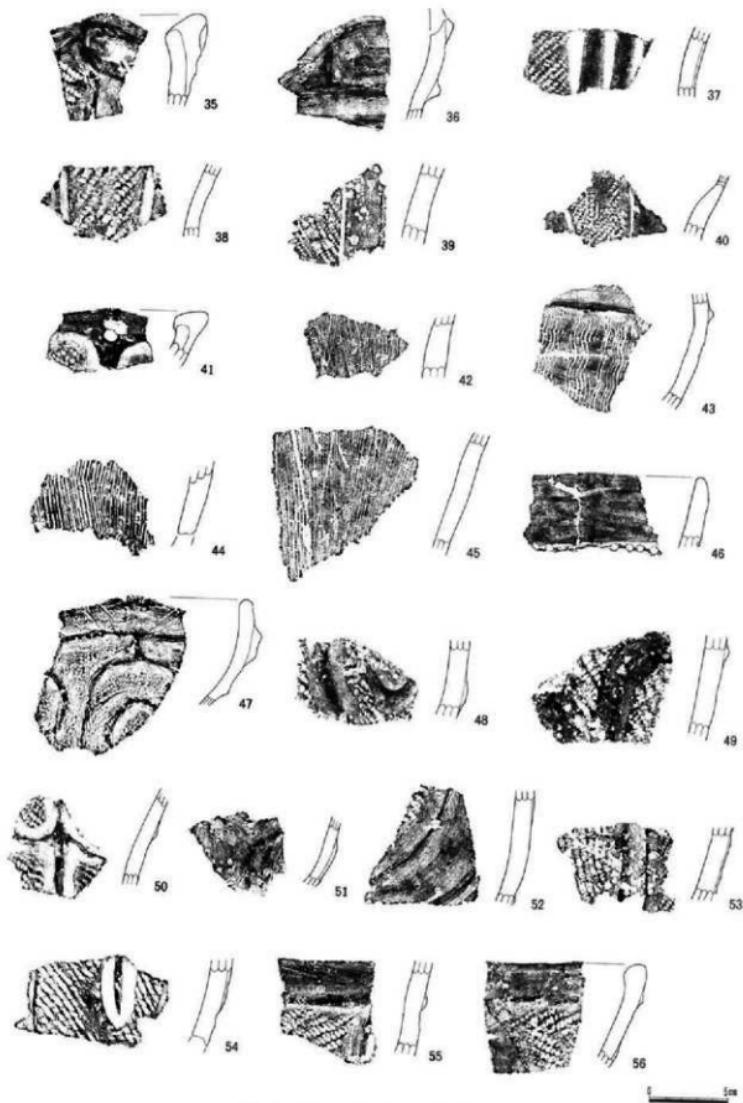
時期別に見ると、早期・前期の遺物については、概ね遺物は散在しており、特別な分布の集中は見受けられない。その中で打越式が(G-4)グリッド付近に分布するのは同一個体の破片の拡散によるものと思われる。

中期前葉の五頭ヶ台式については個体数が極端に少ないため分布の詳細は不明である。また中期中葉の阿玉台式・勝坂式についてはおそらく(I-4・5)グリッド周辺が分布の中心と思われるものの大型設備の基礎によって大きく搅乱されている。

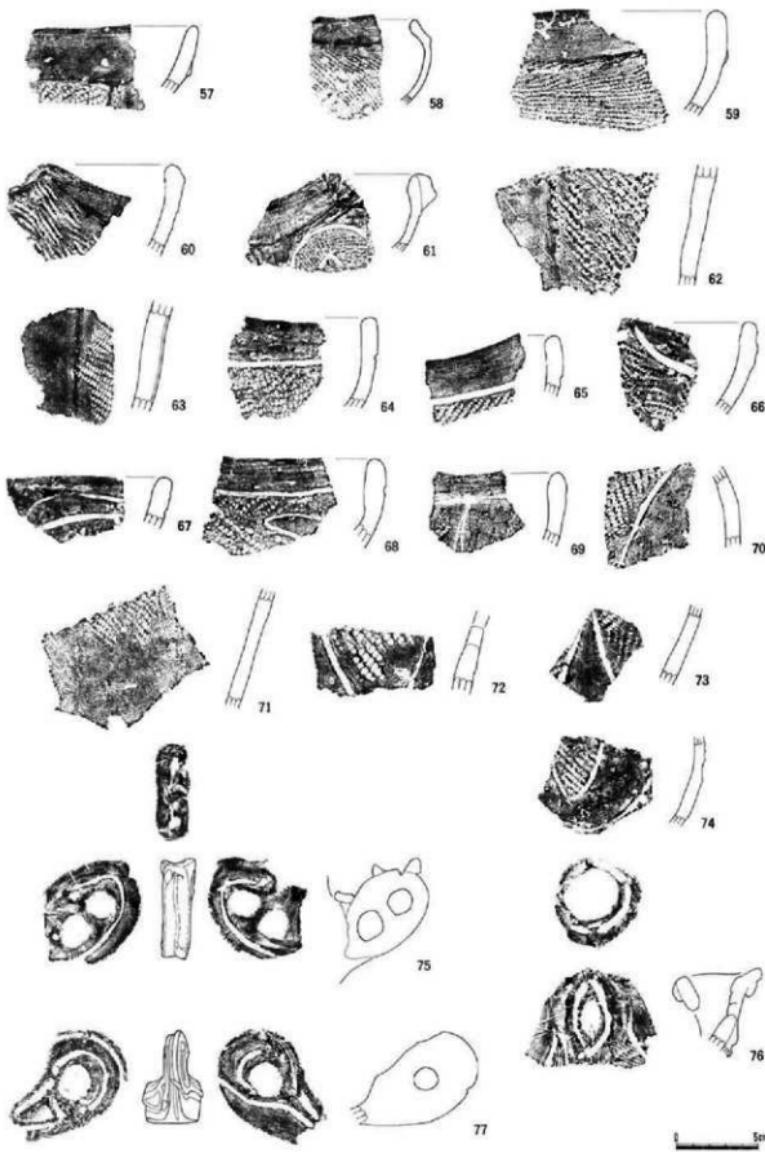
中期後葉の曾利式は出土個体数が1点のため分布の詳細は不明である。同じく中期後葉の加曾利E式は(I-3・4)グリッドから(H-5)・(G-6)グリッド方向の概ね南西-北東に軸を持つ分布を



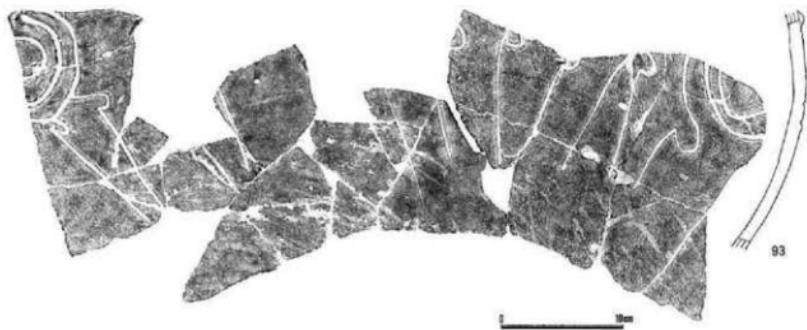
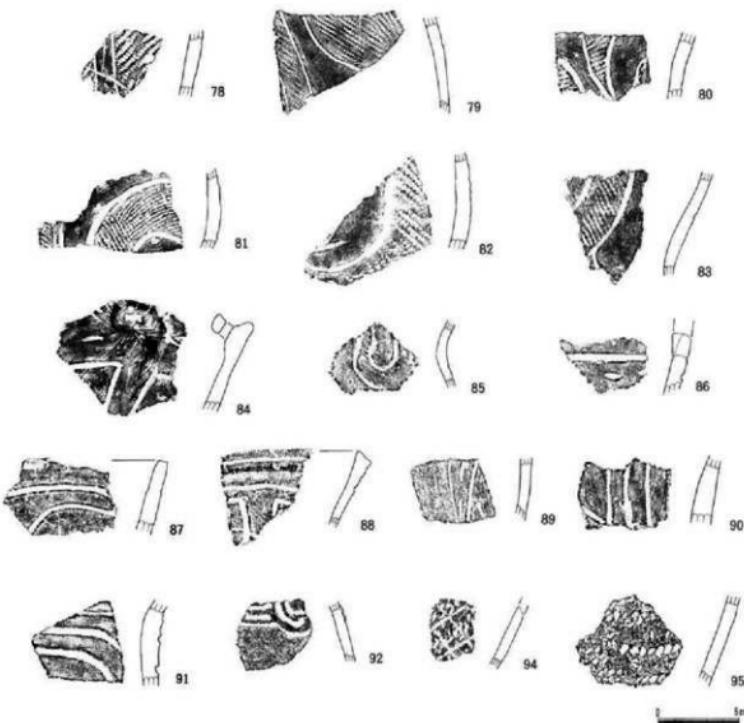
第26図 包含層出土遺物 1 (1/3)



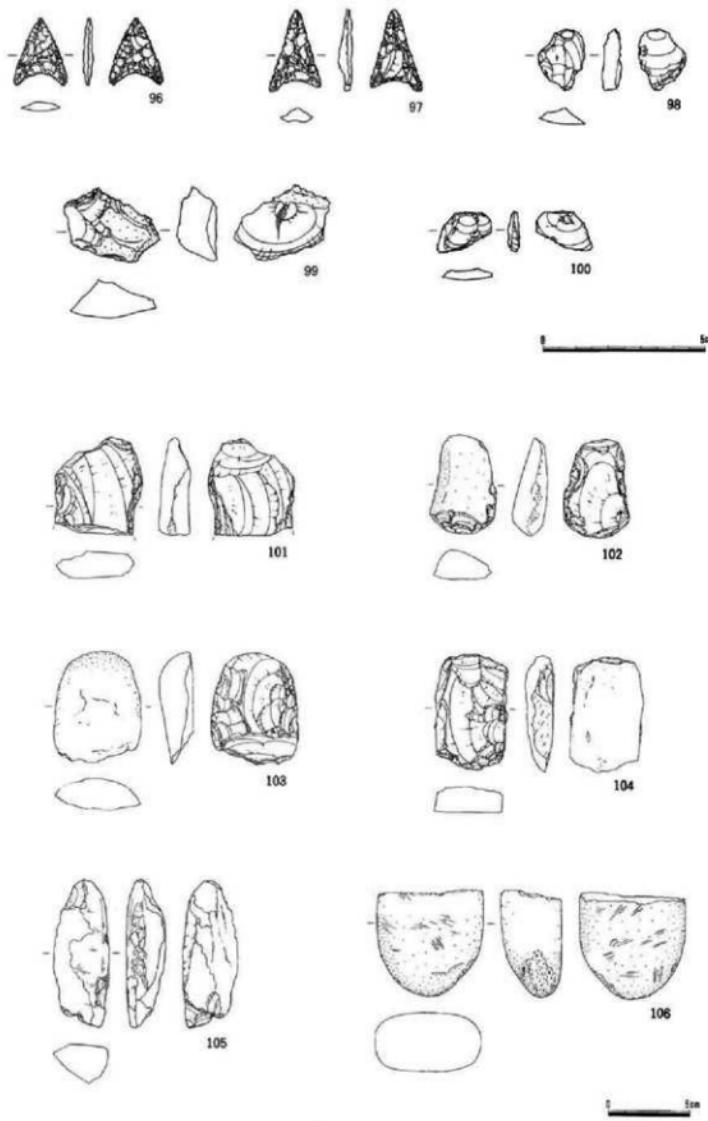
第27图 包含层出土遗物2 (1/3)



第28圖 包含層出土遺物 3 (1/3)



第29図 包含層出土遺物 4 (1/3・1/4)



第30圖 包含層出土遺物 5 (2/3 • 1/3)

辨認番号	部位	特徴		色調	胎土	分類	その他
		地文	装飾				
第2681	胴	貝殻条痕文		明褐色	織維・白色粒子	条痕文系	
第2682	胴	貝殻条痕文		赤褐色	織維・白色粒子・角閃石	条痕文系	
第2683	胴	貝殻条痕文		褐色	織維		
第2684	胴	貝殻条痕文		明褐色	織維・白色粒子	条痕文系	
第2685	胴	貝殻条痕文		灰褐色	織維・白色粒子	条痕文系	
第2686	口縁	貝殻条痕文	貝殻腹縫による連続山形文、口唇部に貝殻腹縫による刺み	暗褐色	織維・白色針状物質・角閃石	打越	
第2687	胴	貝殻条痕文	貝殻腹縫による連続山形文	稍褐色	織維・白色針状物質・角閃石	打越	同一個体か?
第2688	胴		貝殻腹縫による連続山形文、最下端は横位	赤褐色	織維・白色針状物質・角閃石	打越	
第2689	胴		貝殻腹縫による連続山形文	暗褐色	織維・白色針状物質・角閃石	打越	
第2690	胴		貝殻腹縫による連続山形文	暗褐色	織維・白色針状物質・角閃石	打越	
第2691	胴		幅広の横位沈線	赤褐色	織維・白色針状物質・角閃石	下吉井	
第2692	胴	單層羽状繩文	横糸压痕 陰带上に棒状工具による刺み、刺突	明褐色	織維・白色粒子	花楳下刷	
第2693	胴	貝殻背圧痕文		赤褐色	織維・白色粒子	花楳下刷	
第2694	胴	貝殻背圧痕文		赤褐色	白色粒子	花楳下刷	
第2695	胴	單層羽状繩文		明褐色	織維・白色粒子	黒浜	
第2696	胴	單層羽状繩文		赤褐色	織維	黒浜	
第2697	胴	繩文R L		明褐色	織維・褐色粒子	風浪	
第2698	胴	竹管による平行沈線		褐色	織維	黒浜	
第2699	胴	繩文L R	半截竹管による同心円文	明褐色	褐色粒子・砂粒	諸葛b	
第2700	胴		半截竹管3本1単位による結節沈線文	褐色	片岩・織羅・砂粒	諸葛c	左上から右下に施文され、文様左端部にレイアウト線が見られる
第2691	胴	纏文L R、纏位結節文		赤褐色	雲母・砂粒	五頭ヶ台	
第2692	口縁		隆帯、爪形文	暗褐色	雲母・砂粒	阿玉台	
第2693	胴		隆帯、爪形文	明褐色	雲母・織羅・砂粒	阿玉台	
第2694	胴		X状に隆起貼付、爪形文	暗褐色	雲母・砂粒	阿玉台	
第2695	胴	纏文R L、纏位結節文		暗褐色	片岩・織羅・石英	阿玉台	
第2696	胴		隆帶上に刺み、鉢実文	赤褐色		勝坂	
第2697	胴		隆帶上に刺み、爪形文、竹管による沈線	明褐色	砂粒	勝坂	
第2698	胴		隆帶上に刺み、爪形文、竹管による沈線	赤褐色		勝坂	
第2699	胴		隆帶上に刺み、爪形文、竹管による沈線	赤褐色	雲母・砂粒	勝坂	
第2700	口縁	竹管による条線		褐色	褐色粒子・砂粒	曾利	
第2701	胴	纏文R	隆帯	明褐色	角閃石・砂粒	加曾利E I ~ II	
第2702	胴	纏文L	隆帯	褐色		加曾利E I ~ II	口継部文様帯
第2703	口縁		隆帯	暗褐色	砂粒	加曾利E II	
第2704	胴	纏文R L	隆帯、沈線による区画内に纏位の沈線	褐色	砂粒	加曾利E II	
第2705	口縁	纏文L R	隆帯、波状口縁	褐色	砂粒	加曾利E II ~ III	
第2706	胴		隆帯	赤褐色	砂粒	加曾利E II	
第2707	胴	纏文R L	磨消溝文	明褐色	砂粒	加曾利E II ~ III	
第2708	胴	纏文R L	磨消溝曲文	明褐色	砂粒	加曾利E II ~ III	
第2709	胴	纏文L R	磨消溝直文	明褐色	砂粒	加曾利E II ~ III	
第2710	胴	纏文R L	磨消溝直文	明褐色	砂粒	加曾利E II ~ III	
第2711	口縁	纏文L R	抹帯、円形鉗突文、波状口縁	暗褐色		加曾利E III	
第2712	胴	竹管による沈線		明褐色		加曾利E II	
第2713	胴	竹管による沈線	隆帯	黒褐色	砂粒	加曾利E III ~ IV	

第8表 包含層出土の繩文土器一覧（1）

辨認番号	部位	特徴		色調	胎土	分類	その他の
		地文	装飾				
第27844	胴	竹管による条線		褐色	褐色粒子	加賀利E III~IV	
第27845	胴	竹管による条線		黒褐色	褐色粒子・砂粒	加賀利E III~IV	
第27846	口縁		円形刺突文(列点)	褐色	褐色粒子・砂粒	加賀利E III	
第27847	口縁	織文R L	微隆起線による曲線文(尚状文か)、波状口縁	暗褐色	砂粒	加賀利E IV	
第27848	胴	織文R L	微隆起線による曲線文(尚状文か)	褐色		加賀利E III~IV	
第27849	胴	織文L R	微隆起線による曲線文	褐色	褐色粒子・砂粒	加賀利E III~IV	
第27850	胴	織文R L	交差した微隆起線文	黒褐色	砂粒	加賀利E III	
第27851	胴	織文R L	微隆起線による曲線文	暗褐色	砂粒	加賀利E III~IV	
第27852	胴	織文L R	微隆起線による曲線文	灰褐色	褐色粒子・白色粒子	加賀利E IV	
第27853	胴	織文R L	微隆起線による垂垂文	赤褐色	砂粒	加賀利E III	
第27854	胴	織文L R	微隆起線・沈線	明褐色		加賀利E III~IV	
第27855	胴	織文R L	微隆起線による曲線文	明褐色		加賀利E IV	
第27856	口縁	織文L R	口縁部無文帯、微隆起線文	明褐色	砂粒	加賀利E IV	
第27857	口縁	織文L R	口縁部無文帯、微隆起線文	褐色	褐色粒子・砂粒	加賀利E IV	
第27858	口縁	織文L R	口縁部無文帯、微隆起線文	褐色	砂粒	加賀利E IV	
第27859	口縁	織文L R	口縁部無文帯、微隆起線文	褐色	金剛目・砂粒	加賀利E IV	
第27860	口縁	無地L	口縁部無文帯、微隆起線文、波状口縁	高褐色	細胞・砂粒	加賀利E IV	
第27861	口縁	織文L R	口縁部無文帯、微隆起線・苦禪文、波状口縁	黒褐色		加賀利E IV	
第27862	胴	織文L R	沈線・微隆起線	明褐色	砂粒	加賀利E IV	
第27863	胴	織文R L	微隆起線	黒褐色	砂粒	加賀利E IV	
第27864	口縁	織文L R	口縁部無文帯、沈線	褐色	砂粒	加賀利E IV	
第27865	口縁	織文L R	口縁部無文帯、沈線、波状口縁	灰褐色	褐色粒子・砂粒	加賀利E IV	
第27866	口縁	織文L R	口縁部無文帯、沈線、波状口縁	赤褐色	砂粒	加賀利E IV	
第27867	口縁	織文L R	口縁部無文帯、沈線	赤褐色	砂粒	加賀利E IV	
第27868	口縁	織文L R	口縁部無文帯、沈線、波状口縁消による曲線文	明褐色	砂粒	加賀利E IV	
第27869	口縁	織文R L	浅緋による磨消整意義	黒褐色	角閃石・砂粒	加賀利E III~IV	
第27870	胴	織文L R	沈線	赤褐色	細胞・砂粒	加賀利E III~IV	
第27871	胴	織文R L	沈線区画による垂垂文	黒褐色	砂粒	加賀利E III~IV	
第27872	胴	織文R L	沈線区画による垂垂文	褐色	砂粒	加賀利E IV	
第27873	胴	織文R L	沈線間に織文を充填	褐色	砂粒	加賀利E IV	
第27874	胴	織文L R	沈線間に織文を充填、「U」状文	褐色	細胞・砂粒	加賀利E IV	
第27875	把手	織文R L	沈線・刺突	暗褐色	砂粒	称名寺 I	
第27876	把手	織文R L	沈線	明褐色	褐色粒子・砂粒	称名寺 I	
第27877	把手	沈線、刺突		暗褐色	砂粒	称名寺 I	
第27878	胴	織文R L	沈線間に織文を充填	明褐色	砂粒	称名寺 I	
第27879	胴	織文R L	沈線間に織文を充填	黒褐色		称名寺 I	
第27880	胴	織文L R	沈線割り消し	暗褐色	砂粒	称名寺 I	
第27881	胴	織文L R	沈線間に織文を充填	暗褐色	砂粒	称名寺 I	
第27882	胴	織文L R	沈線間に織文を充填	褐色		称名寺 I	
第27883	胴	織文L R	沈線間に織文を充填	明褐色	砂粒	称名寺 I	
第27884	口縁		沈線による曲線文	黒褐色		称名寺 II	
第27885	胴		沈線による曲線文	褐色	砂粒	称名寺 II	
第27886	胴		沈線間に点文を充填	赤褐色	角閃石・砂粒	称名寺 II~堀之内I	
第27887	胴		沈線による曲線文	灰褐色		称名寺 II~堀之内I	
第27888	口縁	織文L R	沈線間に織文を充填	褐色	砂粒	堀之内 2	
第27889	胴		沈線間に点文を充填	褐色	砂粒	堀之内 I	
第27890	胴		沈線による曲線文	赤褐色	砂粒	堀之内 I	
第27891	胴		沈線による曲線文	赤褐色		堀之内 I	
第27892	胴		沈線・除帶	黒褐色	角閃石・砂粒	堀之内 I	
第27893	胴		沈線・刺突	暗褐色	角閃石・砂粒	堀之内 I	
第27894	胴	格子状沈線		黒褐色	角閃石	粗製土器 原体条・堀之内 原体条・堀之内 原体条・堀之内	
第27895	胴	織文L R		赤褐色	角閃石・砂粒	粗製土器 堀之内	

第8表 包含層出土の織文土器一覧（2）

辨認番号	器種名	形態	石材	刃部加工	鑿形加工	成形加工	素材技術	素材形態	遺存状態	長さ	幅	厚さ	重量
第308296	石鏃	四基	チャート	SP	SP	なし	不明	剥片	完形	21.13	16.13	2.49	0.5
第308297	石鏃	四基	チャート	SP	SP	なし	不明	剥片	完形	24.79	15.82	4.05	0.9
第308298	剥片		黒曜石	なし	なし	なし	HII	縦長剥片	完形	19.05	14.06	6.92	1.0
第308299	剥片		黒曜石	なし	なし	なし	HD	横長剥片	完形	24.73	27.82	16.95	6.0
第308300	剥片		黒曜石	なし	なし	なし	SD	横長剥片	完形	11.84	17.09	3.69	0.6
第308301	打製石斧	分岐	ホルンフェルス	HD	HD	HD	不明	横長剥片	刃部欠	60.84	53.24	19.44	74.7
第308302	打製石斧	無	砂岩	HD	HD	なし	HD	横長剥片	完形	62.53	46.43	20.87	63.5
第308303	打製石斧	無	粘板岩	HD	HD	なし	不明	横長剥片	完形	69.98	53.92	21.39	109.4
第308304	打製石斧	無	玄武岩	HD	HD	なし	不明	横長剥片	完形	73.34	44.79	17.59	82.4
第308305	磨製石斧		ホルンフェルス	不明	研磨	敲打	不明	不明	風化著しい	92.80	34.10	24.28	81.7
第308306	磨石		花崗岩	通用外	通用外	通用外	通用外	扁平塊	上部欠	68.96	65.41	38.12	253.8

(単位:mm g)

第9表 包含層出土の石器一覧

している。中でも古い段階の加曾利E I～II式はやや北よりの分布を見せ、新段階であるE III～IV式の分布は調査区南部に集中域を持つ。

後期前葉の称名寺I式は加曾利E III～IV式の分布とほぼ同様を呈するがこちらは集中部を持たず概ね散在する。また称名寺II式～堀之内式についても加曾利E III～IV式と同様の分布範囲に集中部を持たず散在していた。

石器については点数も少なく散在しており特徴的な出土傾向は見られなかった。

遺物の垂直分布は土層図中II b層を中心にII a層～II d層にわたり各時期の遺物が混在した状態で出土している。この攪拌された状況は各時期の遺物の出土標高（早期8.705～9.235m、前期8.765～9.285m、中期前・中葉8.700～9.145m、中期後葉8.650～9.270m、後期8.690～9.315m）から伺うことができる。

そのなかでも僅かではあるが時間を遡る程平均出土標高は低く（深く）なる傾向が見られた。中期後葉と後期は平均出土標高が逆転しているが共伴時期を持つ加曾利E III～IV式、称名寺I式の出土量が多いためであろう。出土標高の幅は出土量の多い中期後葉～後期が広いが、その他では自然活動の影響を受ける時間が長い古段階に向かう程広くなる傾向が見られた。

これらの遺物の分布は調査区内のⅢ層上面がごくゆるやかに窪んでいるところに形成された遺物包含層が削平されずに残ったもので、本来は本調査区全体に包含層が存在し遺物が分布していたと思われる。

第3節 弥生時代

(1) 概要

弥生時代の遺構については、13～15・17～19Y（16Yは第55地点で使用）とした後期の住居跡6軒が検出された（第4図）。その他として、ピット1本（P 1）が該当する可能性がある。

住居跡の分布をみると、調査区全体に散在する状況で、該期住居間での重複はみられない。14・15Yは一部が調査区域外であるため、全体像を把握するのは困難であるが、住居形態・規模・長軸方位等の類似点をもつ。

(2) 住居跡

13号住居跡（第31図）

【位置】(E - 5・6) グリッド。

【住居構造】ほとんどが調査区域外にあるため、詳細は不明である。(平面形) 不明。(規模) 不明。(壁高) 15~19cmを測り、壁は急斜に立ち上がる。(壁溝) 検出されなかった。(床面) 確認できた範囲では、壁際を除いてよく硬化している。貼床は4~16cmの厚さで施されているが、壁際と中央部は薄くなっている。(柱穴) 入口ピットと思われる深さ14cmのものが、1本検出された。(覆土) 2層に分層される。

【遺物】壺形土器の小破片が僅かに出土した。

【時期】弥生時代後期末葉。

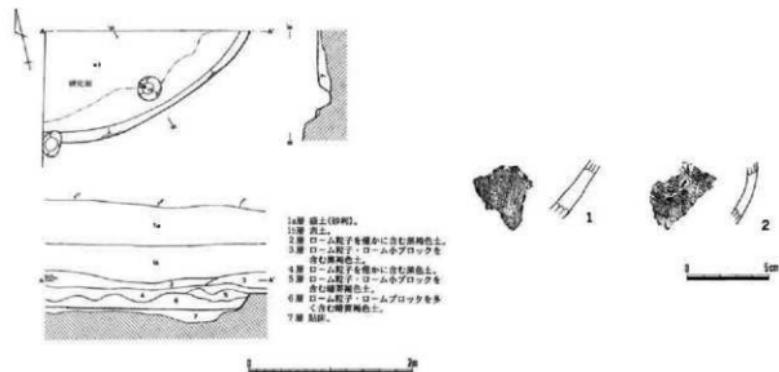
13号住居跡出土遺物（第31図1・2）

1・2は壺形土器の胴部小破片である。1は黄褐色を呈し、内外面に目の細かいハケ目調整が施される。2は黒色を呈し、内面はヘラナデ、外面はハケ目調整が施される。

14号住居跡（第32図）

【位置】(E - F - 2・3) グリッド。

【住居構造】住居の北側は調査区域外にあると思われる。71・72Dに切られ、さらに攪乱により壊されている。(平面形) 圓丸長方形か。(規模) 不明×5.30m。(壁高) 43~47cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。(壁溝) 検出されなかった。(床面) 住居中央を除いてよく硬化している。貼床は2~24cmの厚さで施されていたが、壁際はほぼ直床で、住居の内側が厚くなっている。住居中央の床面上から10cm程の厚さで、白色粘土が検出された。(炉) 地床炉が2カ所確認された。〔炉A〕住居中央より北側に位置し、南側の一部は攪乱により壊されている。平面形は梢円形で、規模は不明×40cm・深さ2cmを測る。炉床はよく焼けて赤化している。〔炉B〕入口ピットの西側に位置し、平面形は梢円形で、規模は50×38cm・深さ4cmを測る。炉床は良く焼けて赤化している。(柱穴) 主柱穴と思われる深さ59~64cmのも



第31図 13号住居跡・出土遺物 (1/60・1/3)

の3本と、入口ピットと思われる深さ31cmのもの1本が検出された。(貯蔵穴) 南東コーナー付近に位置し、平面形は楕円形で、規模は46×39cm・深さ20cmを測る。北側に幅40cm・高さ3cm程の凸堤が巡らされている。(覆土) 16層に分層される。貯蔵穴右側の南東コーナーから、2~3cmの厚さで、祭壇状造構と思われる赤色砂利層が検出された。

【遺物】壺・高环・甕形土器の破片が出土した。

【時期】弥生時代後期末葉。

【所見】炭化材が多く検出されていることから、焼失住居と思われる。

14号住居跡出土遺物(第33図)

1は甕形土器の胸部小破片である。文様はL Rの単節斜繩文の下端に2条の自繩結節文がまわる。文様下は赤彩後、ヘラ磨き調整が施される。内面はヘラナデが施される。

2・3は高环形土器あるいは鉢形土器の口縁部小破片である。2は3段の単節斜繩文により羽状繩文が施され、その上に円形赤彩文がまわる。内面は剥離している。3は口縁部外面に粘土帶を1段貼り付けることにより複合口縁を呈する。複合部にはL Rの単節斜繩文が横位に施され、下端部には刻みがまわる。外面文様部を除き全面赤彩である。

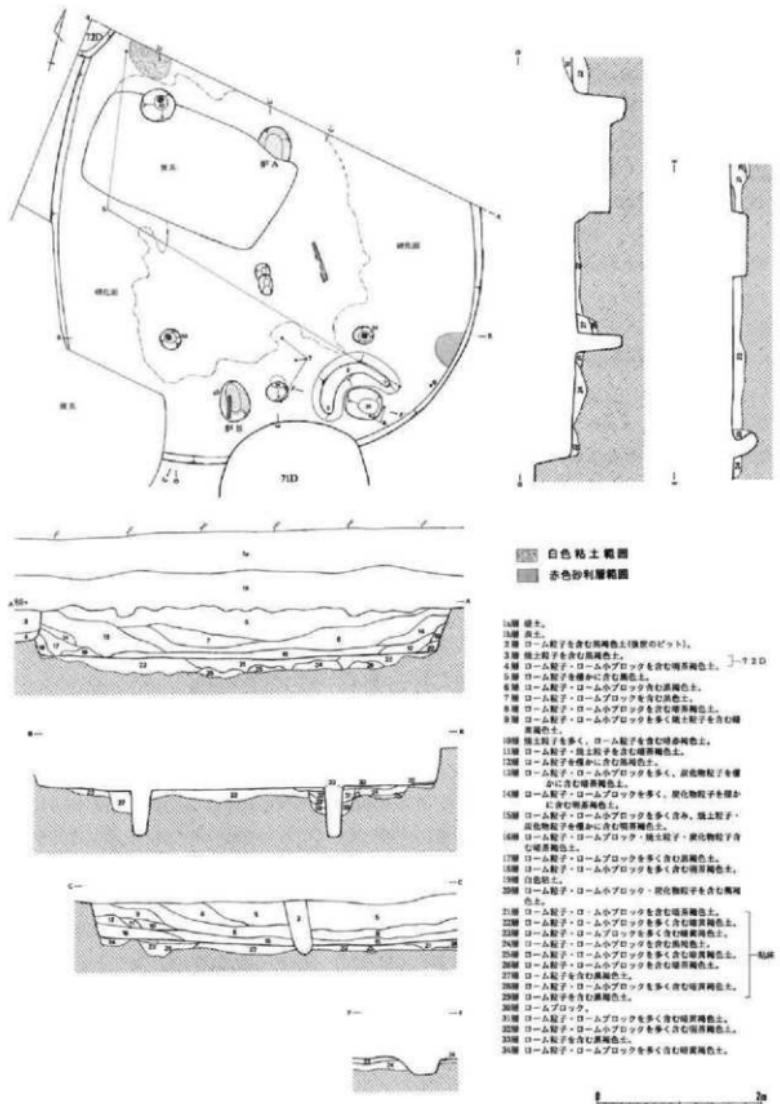
4は高环形土器の坏部破片である。坏部底部には稜をもち、口縁部は内湾気味に立ち上がる。内外面赤彩後ヘラ磨き調整が施される。貯蔵穴内及びその周辺からの出土である。

5~7は甕形土器である。5・6は口縁部から胸部上半にかけて、7は台付甕の胸部下半から脚部にかけての破片で、前者はハケ甕、後者はナデ甕の類である。5は頸部から口縁部にかけて大きく緩やかに外反し、内面頸部には輪積痕が残る。口唇端部はハケ目工具により平坦に面取りされ、その後、下端には刻みがまわる。色調は黒褐色を基調とし、胎土には黄褐色粒子・砂粒を含む。6は口縁部が「く」字状を呈し、口唇部には刻みが施されない。色調は黒色を呈し、胎土には黄褐色粒子・橙色粒子を多く含む。口縁部内面及び外面はハケ目調整、内面胸部はヘラナデが施される。7は全面を粗いナデにより調整が施される。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子を僅かに含む。

15号住居跡(第34図)

【位置】(G・H-2・3) グリッド。

【住居構造】住居の西側は調査区域外であり、さらに攪乱により壊されている。75・76Dに切られる。(平面形) 楕円形か。(規模) 不明。(壁高) 遺存状態の良いところで60cm前後を測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。(壁溝) 検出されなかった。(床面) 全体的に硬化しているが、入口部から炉跡付近にかけて特に硬化している。貼床は2~25cmの厚さで施されており、住居中央は薄く、壁際が厚くなっている。(炉) 住居中央よりやや北に偏って位置し、平面形は楕円形を呈する。規模は44×38cm・深さ5cm程の掘り込みを持つ地床炉である。炉床は焼けて赤化している。(柱穴) 主柱穴は4本であると思われるが、そのうちの2本と入口ピット1本が検出された。(貯蔵穴) 2ヶ所で確認された。(貯蔵穴A) 攪乱により上部5cm程を壊されている。東コーナー付近に位置し、平面形は隅丸方形で、規模48×38cm・深さ28cmを測る。覆土はローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子・炭化材を含む黒褐色土を基調とする。北側に幅40cm・高さ5~8cmの弓状の凸堤が巡らされている。(貯蔵穴B) 北コーナーに位置し、平面形は隅丸方形で、規模は40×38cm・深さ19cmを測る。覆土はローム粒子・ローム小ブロックを含む黒褐色土を基調とする。覆土などから判断して、一応貯蔵穴として扱った。(覆土) 上層がローム粒子を含む黒褐色



第32図 14号住居跡・72号土坑 (1/60)

土、下層がローム粒子・炭化物粒子を含む明茶褐色土を基調とする。貯藏穴右側の床面上から10cm程の厚さで、祭壇状遺構と思われる赤色砂利層が検出された。

【遺物】壺・高杯・壺形土器の破片が出土した。

【時期】弥生時代後期末葉。

【所見】床面上より炭化材が多く検出されていることから、焼失住居と思われる。

15号住居跡出土遺物（第35図1～11）

壺形土器（4・5・7・8）

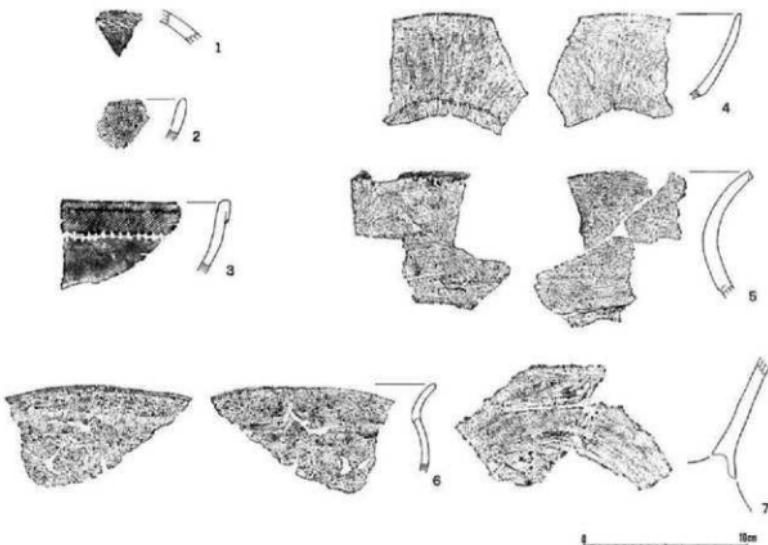
4は粘土挿み込み技法の複合口縁を呈する口縁部小破片である。複合部外面には2段の単節斜縞文による羽状縞文が施される。破片最下端にもR Lの単節斜縞文が観察される。内面は赤彩が施される。色調は黄褐色を基調とし、胎土には白色粒子・砂粒・小石を含む。

5は頸部に2段の文様帯をもつ土器である。文様は自繩結節文が単節斜縞文の上下を区画するもので、結節文は4条である。外面無文部には赤彩が施される。胎土には黄褐色粒子・砂粒を含む。

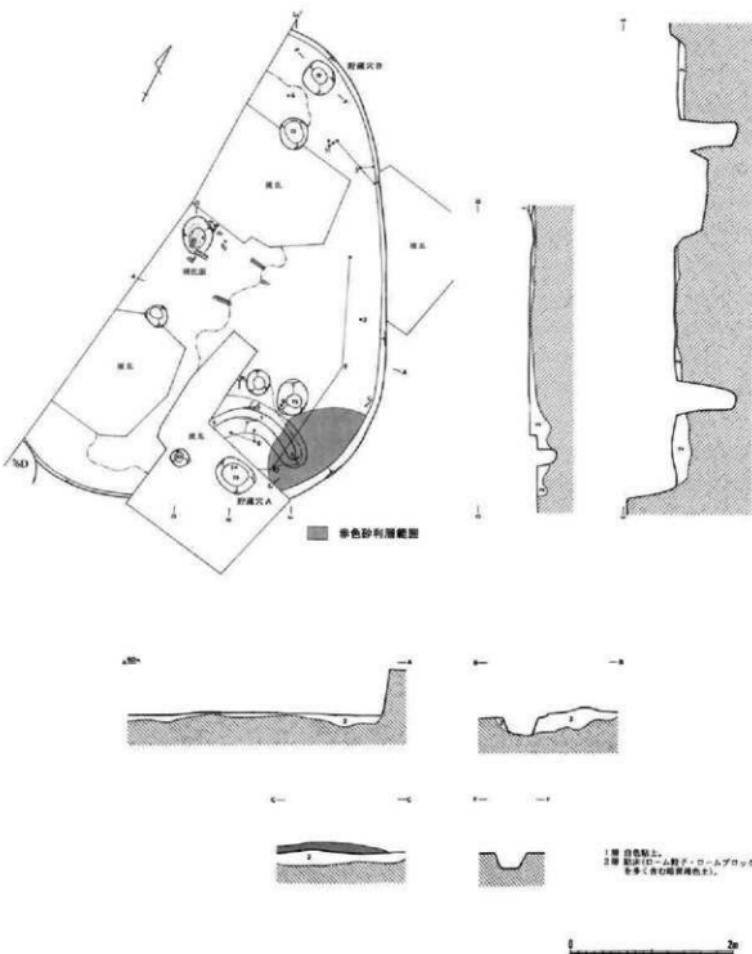
7・8は外面が赤彩される土器である。7は胸部上半の小破片で、無文土器であろう。胎土には黄褐色粒子・砂粒を含み、内面はヘラナデ、外面はハケ目調整が施される。8は胸部中位から下半にかけての破片で、胎土には茶褐色粒子・砂粒を含む。内面はヘラナデ、外面はハケ目調整後、胸部下半を中心へラ磨き調整が施される。

高杯形土器（6）

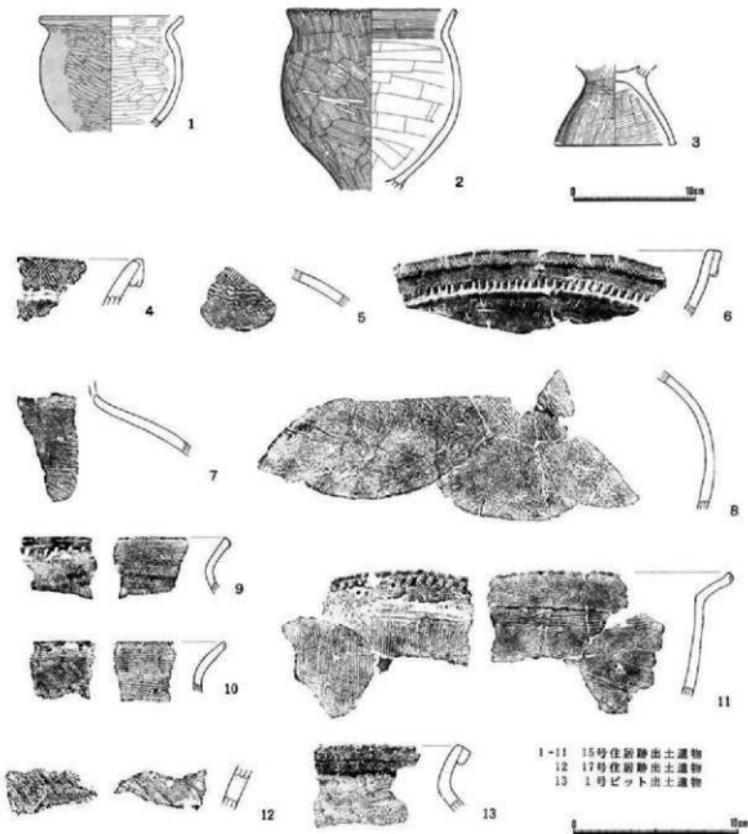
鉢形土器である可能性もある。口縁部は外面に粘土帯を1段貼り付けることにより複合口縁を呈して



第33図 14号住居跡出土遺物（1/3）



第34図 15号住居跡 (1/60)



第35図 15・17号住居跡・1号ピット出土遺物 (1/4・1/3)

いる。複合部は下端部にハケ状工具により刻みがまわり、その後Rの無節斜縞文が横位に施される。口唇端部にはやや燃りの太いLの無節斜縞文が施される。また、複合部下の体部途中にはR Lの単節斜縞文がヘラ磨き調整に消されているが、部分的に観察される。赤彩はかなり剥落しているが、文様部を除き施されている可能性がある。文様部以外ヘラ磨き調整が施される。貯蔵穴Aの凸堤からの出土である。

変形土器 (1~3・9~11)

1は現器高9.5cm・推定口径11.8cm。口縁部は「く」字状を呈し、胴部中位に膨らみをもつ。遺存状態が悪いが、外面には赤彩を認めることができる。内面には赤彩表示をしていないが、部分的にうっすらと赤彩の痕跡があるため、内外面赤彩が施されている可能性がある。胎土には茶褐色粒子・砂粒を僅かに含む。内外面はヘラ磨き調整が施されるが、口縁部にはハケ目調整が残る。貯蔵穴A内からの出土

で、口縁部から胴部下半にかけて1/3程遺存する。赤彩土器であることから、小型台付鉢の類であろう。

2は脚部を欠損する小型台付甕である。現器高15.0cm・口径13.8cm。口縁部は「く」字状を呈し、最大径は胴部中位にもつ。口唇端部はハケ状工具により平坦に面取りされ、その後下端に刻みをまわしている。色調は全体に煤けており、黒褐色を呈する。胎土には黄褐色粒子・砂粒を僅かに含む。内面は口縁部がハケ目調整、以下ヘラナデが施される。外面は全面にハケ目調整が施されるが、胴部には僅かに光沢をもつてラ磨き痕が残る。住居北コーナー付近の床面上からの出土で、口縁部から胴部下半にかけて4/5程遺存する。

3は台付甕の脚台部である。現器高6.8cm・底径9.8cm。底部にかけて「ハ」字状に開く。色調は全体に煤けており、暗茶褐色～黒色を呈している。胎土には黄褐色粒子を含む。内外面はハケ目調整が施されるが、内面は目が粗いハケ目である。住居東壁近くの床面上からの出土である。

9・10はハケ甕の口縁部小破片である。9は色調が黒褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子を含む。10は色調が黄褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子を多く含む。

11はハケ甕の口縁部から胴部中位にかけての破片である。口縁部が大きく外反する。色調は黒褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子・砂粒を含む。内面口縁部及び外面はハケ目調整、内面は以下ヘラナデが施される。

17号住居跡（第4図）

【位置】(J-4・5) グリッド。

【住居構造】ほとんどが調査区域外のため、詳細は不明である。

【遺物】變形土器の破片が1点出土した。

【時期】弥生時代後期末葉。

17号住居跡出土遺物（第35図12）

ハケ甕の胴部小破片である。色調は暗橙色を呈し、胎土には黄褐色粒子・砂粒・小石を僅かに含む。内外面ハケ目調整が施されるが、内面にはその後僅かにヘラ磨き調整が施される。

18号住居跡（第36図）

【位置】(F・G-7・8) グリッド。

【住居構造】南端を66Hに切られ、北端を大きく搅乱により壊されている。第4工程で西半分、第5工程で東半分を調査した。(平面形)隅丸方形。(規模)4.60×4.50m。(壁高)6~19cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。(壁溝)住居東側で確認できた。上幅12~16cm・下幅4~6cm・深さ4~7cmを測る。(床面)全体的に軟弱ではあるが、所々に硬化面があり、炉の付近は良く硬化していた。貼床は2~8cmの厚さで施されている。(炉)住居中央よりやや北東に偏って位置し、平面形は梢円形を呈する。規模は84×48cm、深さ8cmの掘り込みを持つ地床炉である。炉床は焼けて赤化している。(柱穴)本住居に伴うものは検出されなかった。(覆土)上層がローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む黒色土、下層がローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む黒褐色土を基調とする。住居南西の壁際の覆土には、焼土が多く含まれていた。

【遺物】壺・變形土器の破片が僅かに出土した。

【時期】弥生時代後期末葉。

【所見】覆土中より焼土、炭化物粒子が検出されていることから、焼失住居の可能性がある。

18号住居跡出土遺物（第36図1～3）

1は壺形土器の口縁部から頸部にかけての破片である。現器高6.2cm、推定口径11.2cm。頸部から口縁部にかけて緩やかに外反する。色調は黒褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子・砂粒を含む。調整は遺存状態が悪く図示できなかったが、内面は口縁部がハケ目調整後へラ磨き、外面はヘラナデが施されているものと思われる。

2は台付壺形土器の脚部である。現器高9.6cm、推定底径10.9cm。底部にかけて直線的に開く。色調は暗黃褐色を基調とし、胎土には黄褐色粒子・砂粒を含む。内外面はヘラナデが施される。カマド左横の床面上からの出土で、遺存度は4／5程度である。

3はハケ甕の胴部小破片である。色調は黒褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子・砂粒を含む。内面はヘラナデ後へラ磨き調整、外面はハケ目調整が施される。

19号住居跡（第37図）

【位置】(E-7・8) グリッド。

【住居構造】住居北側は調査区域外にあると思われ、その北側は段切状造構によって切られているものと考えられる。(平面形)不明。(規模)不明。(壁高)13～18cmを測り、壁は急斜に立ち上がる。(壁溝)調査できた範囲では住居南東側に確認できた。上幅12～15cm・下幅3～5cm・深さ3～10cmを測る。(床面)壁際を除いて良好硬化している。貼床は4～8cmの厚さで施されていた。(柱穴)本住居に伴うものは検出されなかった。(覆土)ローム粒子を僅かに含む黒褐色土を基調とする。

【遺物】壺形土器の口縁部破片が1点出土した。

【時期】弥生時代後期末葉。

19号住居跡出土遺物（第37図1）

1は壺形土器の口縁部から頸部にかけての破片である。口縁部は幅広の複合口縁を呈し、複合部には2段の単節斜縫文による羽状縫文を施し、その上に5本の棒状貼付文が付されている。内面及び外面頸部は赤彩される。胎土には黄褐色粒子・暗橙色粒子・砂粒を含む。外面複合部を除きヘラ磨き調整が施されるが、外面頸部には顯著にハケ目痕が残る。住居南西コーナーの床面上からの出土である。

(3) ピット

1号ピット（第4図）

【位置】(G-5) グリッド。

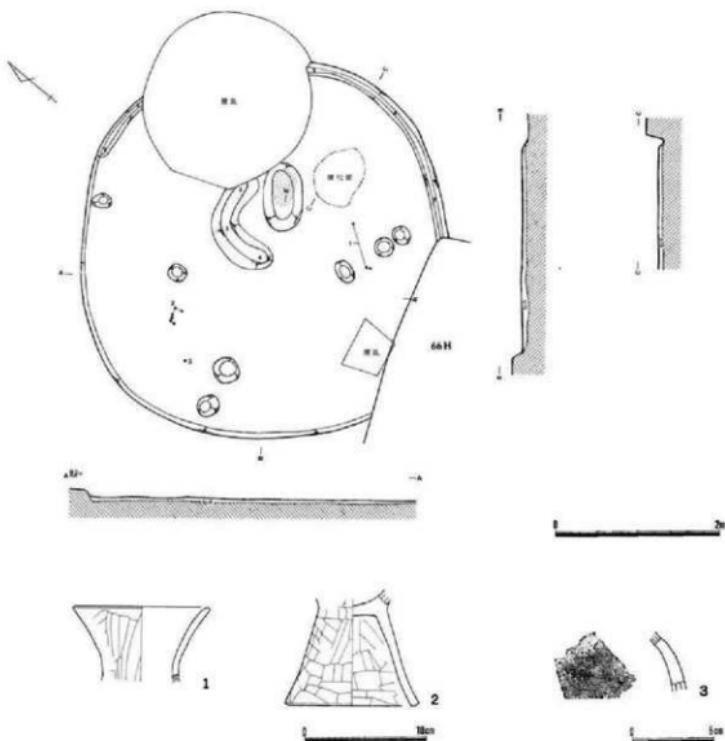
【構造】(平面形)円形。(規模)52×48cm。(深さ)46cm。(覆土)ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む黒色土を基調とする。

【遺物】壺形土器の破片が出土した。

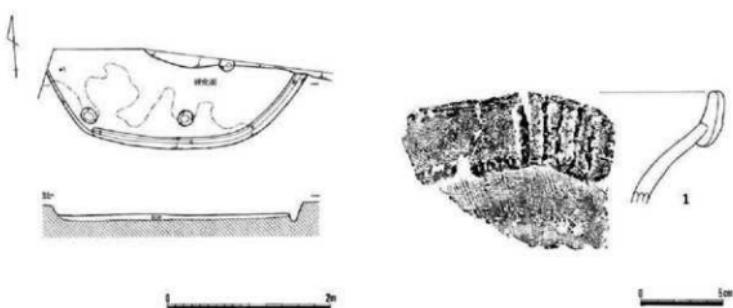
【時期】弥生時代後期末葉。

1号ピット出土遺物（第35図13）

広口壺形土器の口縁部破片である。口縁部は複合口縁を呈し、内外面赤彩が施される。胎土には白色砂粒を多く含む。外面ハケ目調整後、ヘラ磨き調整が施される。



第36図 18号住居跡・出土遺物 (1/60・1/4・1/3)



第37図 19号住居跡・出土遺物 (1/60・1/3)

第4節 古墳時代

(1) 概要

古墳時代の遺構については、後期の住居跡1軒(66H)が検出されたが、その他として、土坑2基(100・101D)・ピット3本(P5・7・11)が該当する可能性がある(第4図)。

66Hは、第3・4・5工程で分割した形で調査が行われ、南半部については調査区域外である。北壁中央にカマドを有し、その右横に凸堤をもつ貯蔵穴が配置されている。時期は、出土遺物から7世紀中葉に位置付けられるものと考えられる。

(2) 住居跡

66号住居跡(第38~40図)

【位置】(G~I-7・8)グリッド。

【住居構造】住居の南側は調査区域外である。100Dを切る。(平面形)正方形か。(規模)不明×6.68m。(壁高)28~40cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。(壁溝)確認できた範囲では全周する。上幅11~28cm・下幅6~12cm・深さ9~28cmを測る。東壁に間仕切りと思われる長さ116cm・上幅16~20cm・下幅9~12cm・深さ14~17cmの溝が検出された。(床面)全体的に軟弱であるが、カマド前面及び貯蔵穴凸堤付近にやや硬化した面が確認出来た。貼床は壁溝際が厚く20cm、その他は3~10cmの厚さで施されている。(カマド)北壁のはば中央に位置する。主軸方位はN-29°-W、長さ112cm・幅96cm・壁への掘り込み27cmを測る。袖部はロームを馬蹄形状に残し、その上に暗灰褐色混和粘土を被覆して天井部と袖部を構築していたと思われる。両袖部の内壁は、被熱によりよく焼けており、広い範囲で赤化した部分が確認された。煙道部は73°の勾配で立ち上がっている。カマドの中央付近から、甕が2個体(15・18)並んで出土していることから、掛け口が2カ所あったと考えられる。(柱穴)主柱穴は4本と思われるが、2本のみの検出である。(貯蔵穴)カマド右側の北壁に位置し、平面形は長方形を呈する。規模は72×65cm・深さ57cmを測る。覆土は上層がローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む黒褐色土、下層がローム粒子・ローム小ブロックを含む暗黄褐色土を基調とする。周囲には高さ4~10cmの「コ」字状の凸堤が巡っている。(覆土)16層に分層される。北東コーナー床面より白色粘土が2cm程の厚さで検出された。

【遺物】カマドの両側と住居の北東側床面から多くの土器が出土した。住居内の広範囲に破片が散している土器も数点あった。

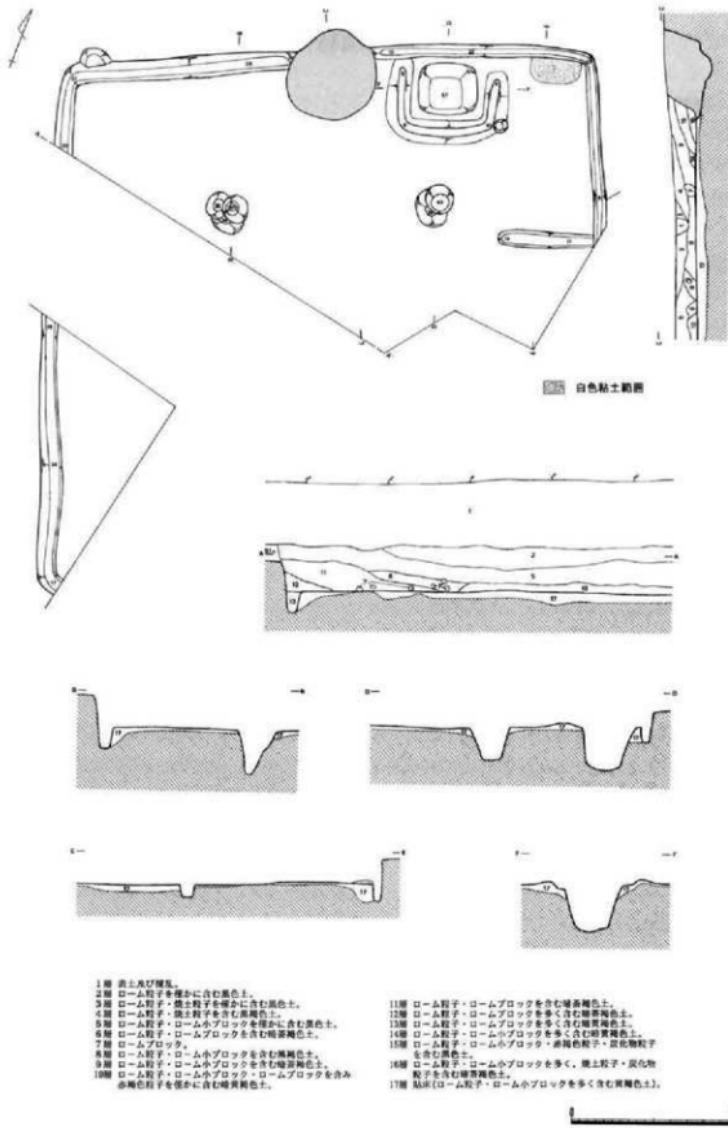
【時期】古墳時代後期(7世紀中葉)。

66号住居跡出土遺物(第41・42図)

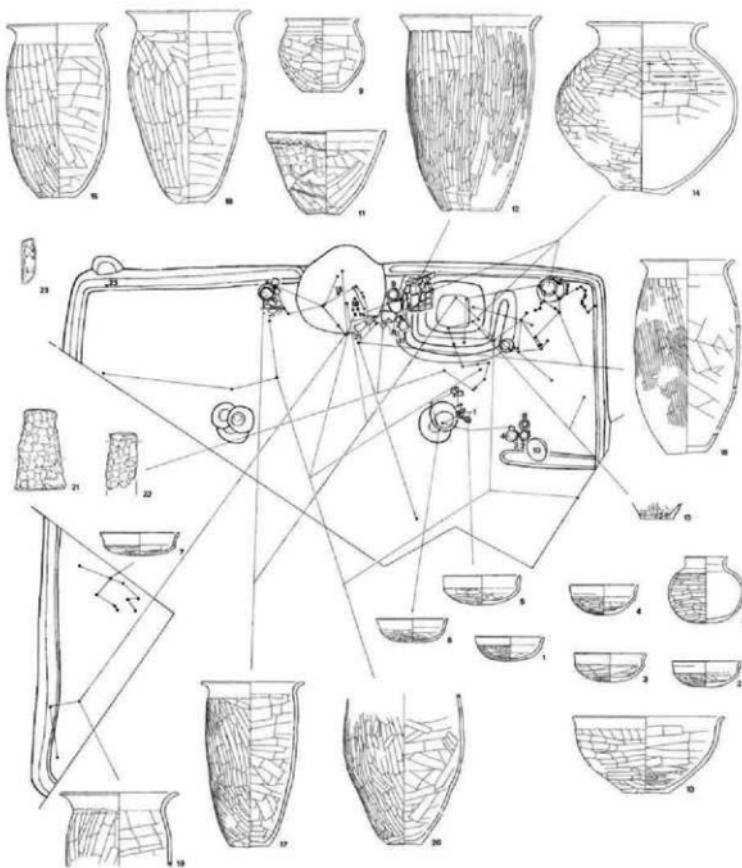
土師器壺形土器(1~7)

1~7は器面の全体が黒くうっすらと煤けていることから、黑色系土器の可能性がある。

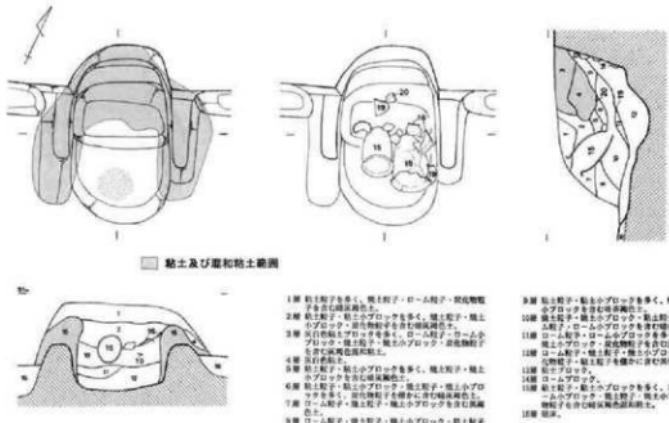
1は器高4.6cm・口径12.9cm。底部と口縁部との境に段を有し、口縁部は外傾する。色調は暗黄褐色を基調とし、胎土には黄褐色粒子・茶褐色粒子・金雲母・砂粒を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後幅5mm程のヘラナデが施される。北東コーナー柱穴近くの床面上から出土で、遺存度4/5強である。



第38図 66号住居跡 (1/60)



第39圖 66號住居跡遺物出土狀態 (1/60・1/9)



第40図 66号住居跡カマド (1/30)

2は器高5.0cm・口径12.8cm。底部と口縁部との境に弱い段を有し、口縁部は直立する。色調は全体暗黄褐色を基調とし、胎土には黄褐色粒子・茶褐色粒子・砂粒を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面は底部を中心にヘラ削り後ヘラナデが施される。外面口縁部直下には指紋が残り、無調整部分が観察される。東壁間仕切り溝近くの床面上からの出土で、ほぼ完形品である。

3は器高5.5cm・口径13.4cm。底部と口縁部との境に段を有し、口縁部は直立気味に外反する。色調は暗茶褐色を基調とし、胎土には黄褐色粒子・茶褐色粒子・砂粒を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面は粗くヘラ削りが施される。外面口縁部直下には指紋が残り、無調整部分が観察される。東壁間仕切り溝近くの床面上から4の土器と重なって出土した(3が下)。完形品である。

4は器高5.6cm・口径12.8cm。底部と口縁部との境に段を有し、口縁部は直立氣味に外傾する。色調は暗黄褐色を基調とし、胎土には黄褐色粒子・茶褐色粒子・砂粒を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面は粗いヘラ削りが施される。外面口縁部直下には指紋が残り、無調整部分が観察される。東壁間仕切り溝近くの床面上から3の土器と重なって出土した(4が上)。完形品である。

5は器高5.6cm・口径14.4cm。底部と口縁部との境に段を有し、口縁部は直立する。色調は全体に暗茶褐色を基調とし、胎土には黄褐色粒子・茶褐色粒子・砂粒を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削りが施される。北東コーナー柱穴内及びその近くの床面上から散在的に出土し、遺存度は2/3程である。

6は器高4.4cm・口径13.3cm。底部と口縁部との境に稜を有し、口縁部は外傾する。色調は暗茶褐色を基調とし、胎土には黄褐色粒子・茶褐色粒子・砂粒を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面は底部を中心にヘラ削りが施され、その後幅5mm程のヘラナデが施される。北東コーナー柱穴近くの覆土中及び床面上から散在的に出土し、ほぼ完形品である。

7は器高4.3cm・口径14.8cm。底部と口縁部との境に明瞭な段を有し、口縁部は外反する。色調は暗

茶褐色を基調とし、胎土には黄褐色粒子・茶褐色粒子・砂粒を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削りが施される。住居西壁近くの床面上からの出土で、遺存度は3/4程である。

土師器鉢形土器（10）

器高14.5cm・口径28.2cm・底径8.6cm。大型の浅鉢である。平底の底部から立ち上がり、体部上半にやや膨らみをもち、口縁部は外反する。色調は内面は暗茶褐色、外面は黒色を基調とするが、全体に煤けていることから、黒色系土器の可能性がある。胎土には黄褐色粒子・茶褐色粒子・砂粒を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削りが施される。東壁間仕切り溝縁の床面上からの出土で完形品である。

土師器壺形土器（11～13）

11は器高15.8cm・口径22.4cm・底径6.2cm。底部は筒抜け式。口縁部から底部にかけて逆三角形状にすぼまる器形である。口縁部は幅2cm前後の複合口縁を呈している。全体に厚ぼったく、重量感がある。色調は全体に煤け、黒褐色を基調とし、胎土には黄褐色粒子・茶褐色粒子・砂粒を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面は胴部中位以下をヘラナデが施される。口縁部及び胴部上半には成形痕である指頭による押捺痕が観察される。カマド右横の床面上からの出土で、ほぼ完形品である。

12は器高37.4cm・口径26.3cm・底径10.3cm。底部は筒抜け式。大型の長胴タイプのもので、胴部中位にやや膨らみをもち、口縁部は外反する。口縁部は「く」字状に屈曲し、幾分複合口縁の名残りを有している感がある。色調は暗橙色を基調とし、胎土には黄褐色粒子・茶褐色粒子・砂粒・小石を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ後、縱方向に幅1cm前後の細長いナデ（磨き的）が施される。外面はヘラ削り後、全体に縱方向にヘラナデを施し、さらにその後内面同様に幅1cm前後の細長いナデ（磨き的）が施される。カマド右横の貯蔵穴縁からの出土で、ほぼ完形品である。

13は現器高3.1cm・推定底径6.0cm。底部は多孔式。穿孔は径5mmで外側から開けられている。色調は暗黃褐色を呈し、胎土には茶褐色粒子・砂粒を含む。内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後、縱方向に細長いナデ（磨き的）が施されている。貯蔵穴縁から26cm浮いた覆土中及び東壁近くの床面上から6cm浮いた覆土中からの出土で、両者は接合できなかったが、同一個体であろう。

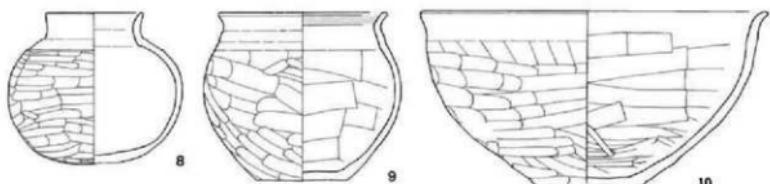
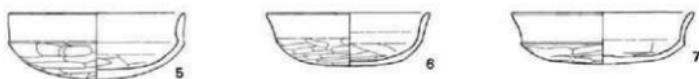
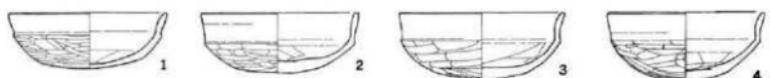
土師器壺形土器（8・9・14～20）

8・9・14は丸壺で、15～20は長壺である。

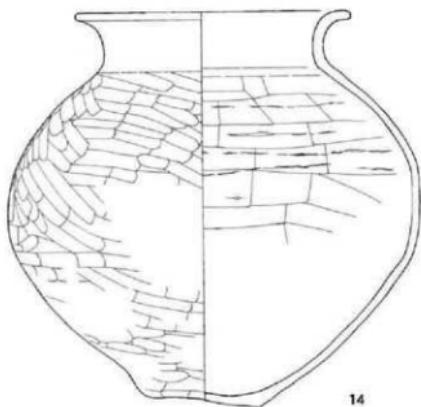
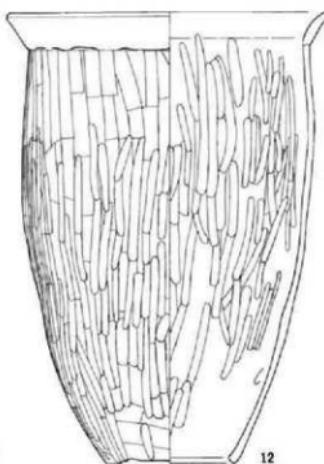
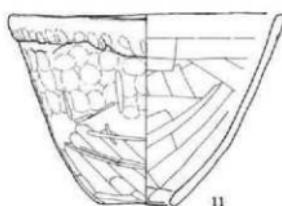
8は器高12.5cm・口径7.9cm。ここでは一応、壺形土器で取り扱ったが、直口壺であろうか。球形の胴部と直立する短い口縁部を呈することが特徴である。底部は丸底氣味である。色調は明橙色を基調とし、胎土には茶褐色粒子・砂粒・小石を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後ヘラナデが施される。東壁間仕切り溝近くの床面上からの出土で、遺存度は4/5程である。

9は器高13.9cm・口径13.8cm・底径7.4cm。胴部中位に最大径をもち、口縁部は外反する。色調は全体に煤け、黒色を基調とし、胎土には黄褐色粒子・茶褐色粒子・砂粒を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデが施される。外面はヘラ削り後粗くヘラナデが施され、ヘラナデ痕は光沢をもつ。また口縁部内面には幅1cm前後の磨耗した範囲がまわる（スクリーントーン部分）。カマド右横の床面上からの出土で、遺存度は4/5程である。

14は器高32.8cm・口径22.5cm・底径9.3cm。大型品である。胴部中位に最大径をもち、口縁部は直立後大きく外反する。色調は上半部が全体に黒斑により暗茶褐色を呈しているが、下半部は明橙色を基調としている。胎土には黄褐色粒子・茶褐色粒子・砂粒を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナ

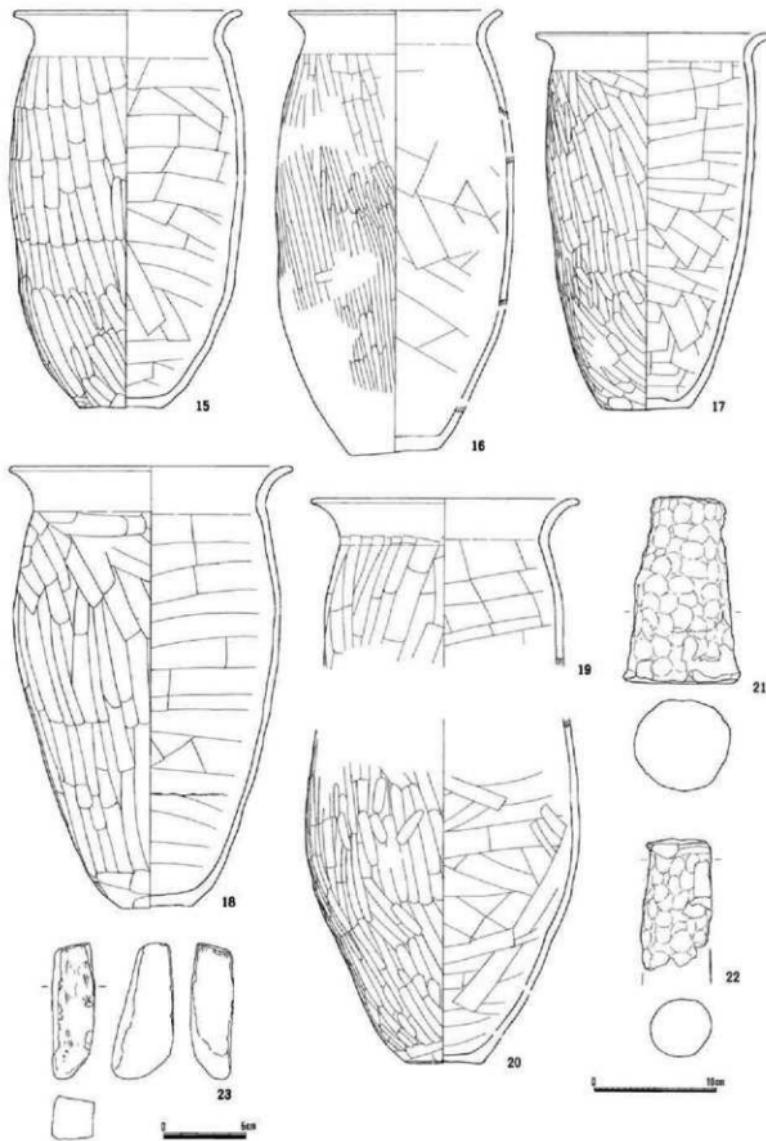


スクリーチングトーン切妻瓦残



1 mm

第41図 66号住居跡出土遺物 1 (1/4)



第42圖 66號住居跡出土遺物 2 (1/4 • 1/3)

デが施される。外面はヘラ削りされるが、胴部上半を中心にヘラナデ（スリップか）が施される。住居北東コーナーの粘土上から上半部が出土（図版9-8）し、その他は貯蔵穴内及びその近くのほぼ床面上からの出土である。遺存度は1/2程である。

15は器高33.1cm・口径18.6cm・底径6.7cm。長胴タイプで、胴部中位に最大径をもち、口縁部は大きく外反する。色調は全体に煤け、黒褐色を基調とするが、口縁部付近は暗黄褐色を呈している。胎土には黄褐色粒子・茶褐色粒子・砂粒を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデが施される。外面はヘラ削り後全体に縦方向にヘラナデ（スリップか）が施されるが、胴部下半はその後幅1cm前後のナデ（磨き的）が施され光沢をもつ。カマドの掛け口に18の土器と横並びに設置された状態で出土したと考えられる。完形品である。

16は器高37.1cm・推定口径17.4cm・底径7.4cm。長胴タイプで、胴部中位に最大径をもち、口縁部は大きく外反する。色調は暗茶褐色を基調とするが、全体に煤けている。胎土には黄褐色粒子・茶褐色粒子・砂粒を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデが施される。外面はヘラ削り後全体に縦方向のヘラナデ（スリップか）が施されるが、胴部中位以下はその後幅5mm前後のナデ（磨き的）が施され光沢をもつ。住居北東コーナーやカマド内、貯蔵穴内など広く散在して出土し、遺存度は1/2程である。

17は器高31.9cm・口径19.2cm・底径7.1cm。口縁部に最大径をもつタイプで、口縁部は大きく外反し、胴部は膨らみが弱く直線的である。器厚はやや厚く重量感がある。色調は全体に煤けており、黒褐色を呈している。胎土には黄褐色粒子・金雲母・砂粒を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデが施される。外面はヘラ削り後全体にヘラナデ（スリップか）が施され、その後幅1cm前後の粗いナデ（磨き的）が施され光沢をもつ。カマド左横の床面上を中心にまとまって出土したが、注目すべきは、倒置した口縁部から胴部中位までの破片の中に胴部中位以下の破片が、接合向きを逆さまに入れ子状態で出土（図版8-7参照）したことである。これは人為的廃棄を示しているものと考えられる。遺存度は4/5強である。

18は器高36.8cm・口径23.2cm・底径5.8cm。口縁部に最大径をもつタイプであるが、17の土器に比べ、胴部上半の膨らみが強い。色調は全体に煤けており、暗茶褐色を呈している。胎土には黄褐色粒子・砂粒を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後全体にヘラナデ（スリップか）が施される。カマドの掛け口に15の土器と横並びに設置された状態で出土したと考えられる。遺存度は4/5強である。

19は現器高14.0cm・推定口径22.0cm。口縁部に最大径をもつタイプで、口縁部は大きく外反する。色調は全体に暗黄褐色を基調とする。胎土には黄褐色粒子・茶褐色粒子・金雲母・砂粒を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削りが施される。住居南西コーナーからカマド内まで広く散在して出土している。口縁部から胴部中位にかけて2/3程遺存する。

20は現器高28.6cm・底径6.2cm。長胴タイプで、胴部中位に膨らみをもつ土器である。色調は全体に煤けており、暗茶褐色を呈している。胎土には黄褐色粒子・茶褐色粒子・金雲母・砂粒・小石を含む。内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後全体にヘラナデ（スリップか）が施され、その後幅1cm前後の粗いナデ（磨き的）が施され光沢をもつ。北壁及びカマドを中心に広く散在して出土している。胴部中位以下を4/5程遺存する。

土製品（21・22）

いずれも支脚で、表面には全面的に指紋及び指頭押捺痕が観察できる。これによって、工具等を使用

せずに直接手によって成形されたことが理解できる。

21は完形品である。高さ15.6cm・上端径5.6cm・下端径9.6cm・重さ918g。断面は円形を基本とし、色調は暗茶褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子を僅かに含むが、砂粒をほとんど含まない。カマド前面の床面上からの出土で、完形品である。

22は現存高10.6cm・上端径5.6cm。断面は円形で、色調は黄褐色を呈し、胎土には暗茶褐色粒子・砂粒を僅かに含む。貯蔵穴付近の床面上から散在的に出土し、下端部を欠損する。

石製品 (23)

砥石である。長さ8.7cm・幅2.6cm・厚さ3.3cm・重さ104.3g。使用面は2面確認できるが、さほど磨耗していないため、使用頻度が低いものと考えられる。石質は砂岩である。住居北西コーナーの床面上から10cm程浮いた覆土中からの出土で完形品である。

(3) 土坑

100号土坑 (第43図)

【位置】(G・H-7) グリッド。

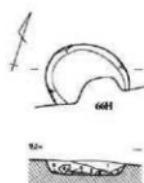
【構造】66Hに切られる。(平面形) 楕円形か。(規模) 不明。(深さ) 16cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は急斜に立ち上がる。(覆土) 6層に分層される。

【遺物】出土しなかった。

【時期】覆土から観察して古墳時代で取り扱ったが詳細不明である。

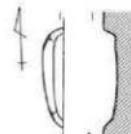
101号土坑 (第43図)

【位置】(E・F-8) グリッド。



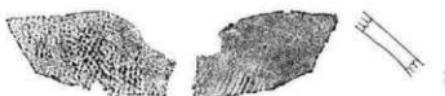
100号土坑

- 1 砂岩片 - 胎土粒子 - 覆土小ブロック
- 2 ローム小ブロック - 覆土小ブロック
- 3 砂岩片 - ローム小ブロック
- 4 砂岩片 - 胎土粒子 - 覆土小ブロック
- 5 砂岩片 - 胎土粒子 - 覆土小ブロック
- 6 砂岩片 - 胎土粒子 - 覆土小ブロック
- 7 砂岩片 - 背景



101号土坑

1m



1

1m

第43図 100・101号土坑・101号土坑出土遺物 (1/60・1/3)

〔構造〕 東側は調査区域外のため詳細は不明である。(平面形) 檜円形か。(規模) 不明。(深さ) 確認できた範囲では約18cmを測り、壁は急斜に立ち上がる。(覆土) ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子を僅かに含む黒褐色土を基調とする。

〔遺物〕 須恵器甕の小破片が1点出土した。

〔時期〕 古墳時代(5世紀代か)。

101号土坑出土遺物(第43図1)

須恵器甕形土器の胴部小破片である。色調は灰色を呈し、胎土には白色砂粒(長石)を含む。外面には格子目叩き、内面には当て道具痕が残る。

(4) ピット

5号ピット(第4図)

〔位置〕 (I-3) グリッド。

〔構造〕 (平面形) 開丸方形。(規模) 30×27cm。(深さ) 63cm。

〔遺物〕 土師器壺(黒色有段壺)の小破片が1点出土したが図示できなかった。

〔時期〕 古墳時代後期(7世紀前半)。

7号ピット(第4図)

〔位置〕 (H-5) グリッド。

〔構造〕 (平面形) 檜円形か。(規模) 不明×28cm。(深さ) 38cm。

〔遺物〕 土師器壺・甕の小破片が1点ずつ出土したが図示できなかった。

〔時期〕 古墳時代後期(7世紀代)。

11号ピット(第4図)

〔位置〕 (G-7) グリッド。

〔構造〕 (平面形) 開丸長方形。(規模) 40×32cm。(深さ) 44cm。

〔遺物〕 土師器甕の小破片が1点出土したが図示できなかった。

〔時期〕 古墳時代後期(7世紀代)。

第5節 平安時代

(1) 概要

平安時代の遺構については、住居跡1軒(65H)が検出されたが、その他として、土坑5基(73~77D)・ピット8本(P2~4・6・8~10・12・14)が該当する可能性がある。

65Hについては、長方形を呈する小型住居である。安定した粘土は検出されなかつたが、東壁付近の覆土中から焼土・粘土が比較的に多く検出されたことから、カマド付設の住居跡と想定できる。

土坑は、調査区南西隅の(G~I-2・3)グリッドから比較的まとまって検出されている。特に77Dについては、当初、覆土中に多量に含まれる焼土・炭化物粒子や土器が多く出土することから、住居跡のカマドと認識して精査したが、円形状の単独形態を呈することから、火葬墓である可能性がある。

ピットは、建物跡として捉えられるような規則的な配列は認められなかった。P 2 から須恵器環のはば一個体分が出土している。

(2) 住居跡

65号住居跡（第44図）

【位置】(E・F-5・6) グリッド。

【住居構造】南東コーナーは調査区域外にあると思われる。69Dに切られる。(平面形)長方形。(規模)3.80×2.85m。(壁高)残りの良いところで、5~9cmを測り、壁は急斜に立ち上がる。(壁溝)確認できた範囲では全周する。上幅12~16cm・下幅3~6cm・深さ3~10cmを測る。(床面)全体的に軟弱であるが、住居東側に一部硬化面を確認できた。(カマド)明確には確認できなかったが、東壁の近くから多くの焼土・粘土が検出され、さらにその付近の床面が硬化していることから、東壁にカマドが付設されている可能性がある。(柱穴)検出されたピットは後世のものと思われる。(覆土)4層に分層される(4~7層)。

【遺物】須恵器環・皿と土師器甕が出土した。

【時期】平安時代(9世紀中葉から後葉)。

65号住居跡出土遺物（第44図1~6）

須恵器環・皿形土器（第44図1~3）

1は環形土器。現器高3.2cm・推定口径13.0cm。色調は暗灰白色を基調とし、胎土には白色針状物質が多く、小石を僅かに含む。貼床下からの出土で、口縁部から体部下半にかけて1/5程遺存する。

2は皿形土器。現器高3.3cm・推定口径15.8cm・推定底径6.8cm。色調は暗黄褐色を基調とし、胎土には砂粒を含む。底部は周辺へラ削り調整が施される。住居南西コーナー付近の床面上からの出土で、遺存度は1/4程である。

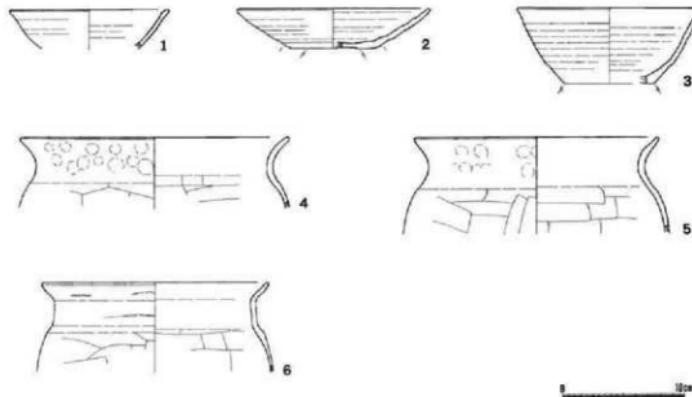
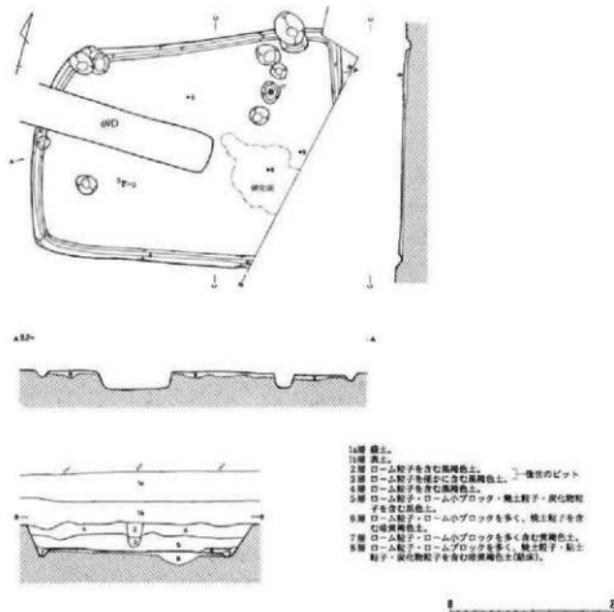
3は環形土器。器高6.3cm・推定口径15.0cm・推定底径7.2cm。色調は暗灰褐色を基調とし、胎土には白色砂粒を含む。底部には回転糸切り痕を残す。住居南西コーナー付近の床面上からの出土で、遺存度は1/5程である。

土師器甕形土器（4~6）

4は現器高5.9cm・口径21.9cm。最大径は胴部にもち、口縁部は外反するが、幾分「コ」字状を呈する。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削りが施される。口縁部途中には横ナデに消されているが、指頭押捺痕が僅かに観察される。東壁付近の床面上からの出土で、口縁部から胴部上半にかけて1/5程遺存する。

5は現器高8.0cm・推定口径19.9cm。最大径は口縁部にもち、口縁部は外反する。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削りが施される。東壁付近の床面上からの出土で、口縁部から胴部上半にかけて1/5程遺存する。

6は現器高7.4cm・推定口径18.6cm。口縁部は「コ」字状を呈する。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削りが施される。北壁付近の床面上からの出土で、口縁部から胴部上半にかけて1/5程遺存する。



第44図 65号住居跡・出土遺物 (1/60・1/4)

(3) 土坑

73号土坑（第45図）

【位置】(G・H-3) グリッド。

【構造】(平面形)長方形。(規模)1.22×1.04m。(長軸方位)N-S。(深さ)確認面から63cmを測る。坑底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。坑底面と側面に10cm幅の工具痕を残す。(覆土)ローム粒子・ローム小ブロックを含む黒褐色土を基調とする。

【遺物】須恵器壺・土師器壺の小破片が20点程出土したが、図示できるものはなかった。

【時期】平安時代（9世紀後半）。

74号土坑（第45図）

【位置】(G-2) グリッド。

【構造】75Dに切られ、さらに北側は搅乱により壊されているため、詳細は不明である。(平面形)楕円形か。(規模)不明。(深さ)確認できた部分で24cmを測り、坑底はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。(覆土)ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗茶褐色土を基調とする。

【遺物】74・75Dの遺物として須恵器壺・土師器壺の小破片が数点出土したが、図示できるものはなかった。

【時期】平安時代。

75号土坑（第45図）

【位置】(G-2) グリッド。

【構造】15Yと74Dを切る。西側は調査区域外である。(平面形)楕円形か。(規模)不明。(深さ)確認面から32cmを測る。坑底は平坦で、壁は急斜に立ち上がる。(覆土)3層に分層される。

【遺物】74・75Dの遺物として、須恵器壺・土師器壺の小破片が数点出土したが、図示できるものはなかった。

【時期】平安時代。

76号土坑（第45図）

【位置】(I-2) グリッド。

【構造】15Yを切るが、ほとんどが調査区域外のため詳細は不明である。(深さ)確認面から20cmを測る。坑底は平坦で、壁は急斜に立ち上がる。(覆土)ローム粒子・ローム小ブロックを含む黒褐色土を基調とする。

【遺物】出土しなかった。

【時期】覆土の観察から平安時代とした。

77号土坑（第45図）

【位置】(I-3) グリッド。

【構造】当初は、覆土中に粘土・焼土が多く、さらに土器片も比較的まとまって出土していたことから、調査区域外にある住居跡のカマドと想定して調査を始めた土坑である。(平面形)楕円形。(規模)

98×90cm。(長軸方位) N-70°-W。(深さ) 確認面から20~25cmを測る。坑底は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。坑底に良く焼けて赤化した部分が確認された。(覆土) 4層に分層される。

〔遺物〕 覆土上層から土器が散在的に出土した。特に、武藏型甕とする土師器甕を中心に多く出土し、2の土器は口縁部から胴部下半まで復原することができた。

〔時期〕 平安時代(9世紀後半)。

〔所見〕 坑底までが被熱により赤化していることから、火葬墓の可能性があると考えられる。しかし、遺物出土状態を見ると土器はすべて上層部からの出土であり、廃絶時の遺物と判断できるため、実態は定かではない。

77号土坑出土遺物(第46図1~3)

1は須恵器環形土器の底部破片である。現器高2.3cm・推定底径7.3cm。色調は暗灰褐色を呈し、胎土には白色砂粒を含む。底部には回転糸切り痕を残す。

2は土師器甕形土器である。現器高13.9cm・推定口径20.0cm。口縁部は大きく外反し、「コ」字状を呈する。色調は暗茶褐色を基調とし、胎土には白色粒子・砂粒を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削りが施される。口縁部から胴部下半にかけて1/3程遺存する。

3は甕形土器の底部破片である。現器高3.0cm・推定底径3.8cm。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。内面はヘラナデ、外面はヘラ削りが施される。

(4) ピット

2号ピット(第4図)

〔位置〕 (G-6) グリッド。

〔構造〕 (平面形) 円形。(規模) 直径約40cm。(深さ) 38cm。(覆土) ローム粒子・ローム小ブロックを含む黒褐色土を基調とする。

〔遺物〕 須恵器壺の底部小破片が1点出土したが、図示できなかった。

〔時期〕 平安時代(9世紀後半)。

3号ピット(第4図)

〔位置〕 (F-4) グリッド。

〔構造〕 (平面形) 圓丸方形。(規模) 35×30cm。(深さ) 29cm。(覆土) 焼土・炭化物粒子を多く含む黒褐色土を基調とする。

〔遺物〕 出土しなかった。

〔時期〕 遺物が出土しなかったが、覆土の観察から平安時代とした。

〔所見〕 覆土中から焼土・炭化物粒子が多く出土していることから、他のピットとは異例である。

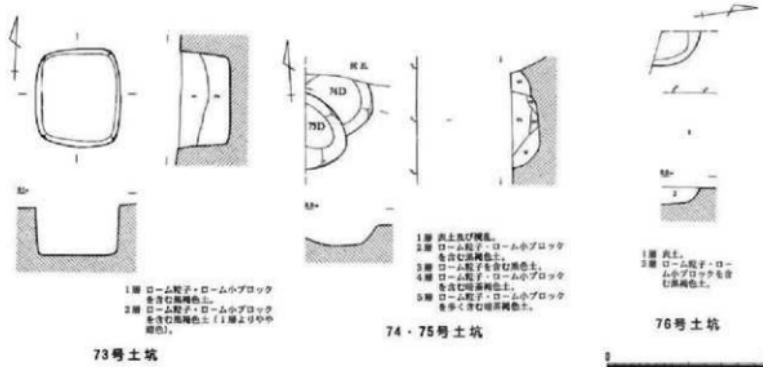
4号ピット(第4図)

〔位置〕 (H-4) グリッド。

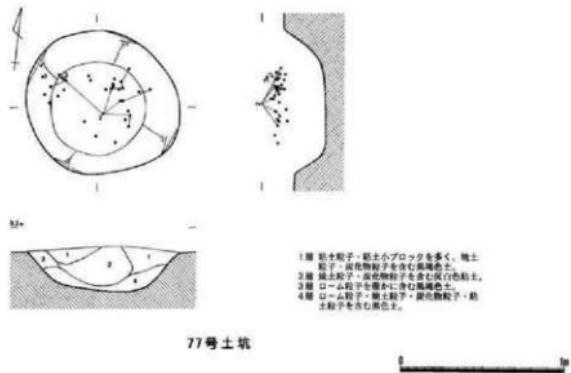
〔構造〕 (平面形) 橢円形。(規模) 42×32cm。(深さ) 72cm。

〔遺物〕 須恵器甕の頸部小破片が1点出土したが、図示できなかった。

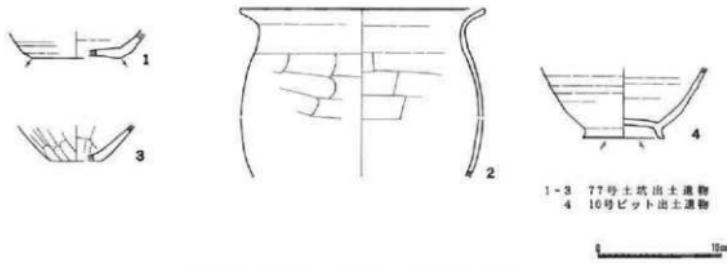
〔時期〕 平安時代。



73号土坑



第45図 土坑 (1/60・1/30)



第46図 77号土坑・10号ピット出土遺物 (1/4)

6号ピット（第4図）

【位置】（I-3）グリッド。

【構造】（平面形）4本のピットが重複しているものである。（規模）70×52cm。（深さ）45~54cm。

【遺物】須恵器壺・高台付塊の底部小破片が僅かに出土したが、図示できなかった。

【時期】平安時代（9世紀後半）。

8号ピット（第4図）

【位置】（H-I-5）グリッド。

【構造】（平面形）隅丸方形。（規模）42×38cm。（深さ）50cm。

【遺物】須恵器壺の口縁部小破片1点と武藏型壺の胴部小破片1点が出土したが、図示できなかった。

【時期】平安時代（9世紀後半）。

9号ピット（第4図）

【位置】（J-5）グリッド。

【構造】（平面形）楕円形。（規模）32×26cm。（深さ）24cm。

【遺物】須恵器壺の底部小破片が1点出土したが、図示できなかった。

【時期】平安時代（9世紀代）。

10号ピット（第4図）

【位置】（H-5）グリッド。

【構造】（平面形）楕円形。（規模）不明×38cm。（深さ）18cm。

【遺物】須恵器高台付塊が1点出土した。

【時期】平安時代（9世紀後半）。

10号ピット出土遺物（第46図4）

須恵器高台付塊である。現器高5.9cm・底径6.6cm。ロクロ回転は右回転である。色調は濃灰色を呈し、胎土には白色砂粒・小石を含む。体部上半から底部にかけて1/2程遺存する。

12号ピット（第4図）

【位置】（G-7）グリッド。

【構造】（平面形）長方形。（規模）30×24cm。（深さ）34cm。

【遺物】武藏型壺の頸部小破片が1点出土したが、図示できなかった。

【時期】平安時代（9世紀代）。

14号ピット（第4図）

【位置】（H-6）グリッド。

【構造】（平面形）長方形。（規模）32×25cm。（深さ）36cm。

【遺物】武藏型壺の頸部小破片が1点出土したが、図示できなかった。

【時期】平安時代（9世紀代）。

第6節 中・近世

(1) 概要

中・近世の遺構については、土坑12基（64～72・94～96D）・井戸跡4基（3～6W）・ピット3本（P13・15・16）が検出されたが、調査区北側の（C・D-5～8）グリッドを中心に検出された一連の遺構については、大きく1つの段切状あるいは平場状に整地された遺構内での関連遺構と考えられる。

この遺構については、今のところ推測の域を出ないが、頭を北に向けて横臥屈葬された人骨を出土した土坑墓（67D）やピット列・溝跡などが検出されていることから、この一帯が『館村旧記』に記載されている「村中の墓場」に相当する施設ではないかと考えている。ここでは、この一連の遺構についてを段切状遺構と取り扱い説明することにする。

(2) 段切状遺構（第47図）

段切状遺構については、第1工程（第3・4図②-B区）の調査の際にその存在が明らかになった。本遺構の範囲は、狭小な面積での調査であるため、詳細不明であるが、（C・D-5～8）グリッドより北側に中心部が展開するものと想定することができる。第5工程の際に（E-7・8）グリッドで溝状に19Yを切る掘り込みは、この遺構の南限にあたる可能性がある。

本遺構の構造についても詳細は不明であるという前提で説明すると、概して表土層を通常の深度以上掘り下げてもローム面が確認できなかったため、異常なまで深い掘り込みをもつ遺構であると言ふことができる。実際、ローム面までの深さは地表面から約1.7mに達していた。第1工程A区のローム面までの深さが約80cm（第44図の65HのB-B'セクション参照）であることを考えれば、必然的にこの区域内のロームは人工的に削平されているものと理解できる。さらにこの区域内からは、土坑5基（64～67・70D）が確認され、その内の67Dでは人骨が検出された。なお、細かく遺構名を付けていないが、ピット列（掘立柱建物跡か）・溝跡・土坑等の遺構が存在することが判明した。

最下面是平場状に整地されているものと考えられる。そのローム整地面を細かく観察すると、無数の工具痕が観察でき、東西方向に延びる4本の歛状のものや66Dの掘り方の側面や底面にも同様の痕跡を顕著に観察することができた（図版13・14参照）。おそらくこうした工具痕を残す面については、機能面とは考えらないため、掘り方面と捉えるのが妥当であろう。しかし、土層の変化を注意して精査を進めたが、明確に版築面や硬化面を把握することはできなかった。

以下の5基の土坑（64～67・70D）については、段切状遺構内の関連遺構として説明することにする。

64号土坑（第48図）

【位置】（C・D-7）グリッド。

【構造】段切状遺構の覆土中より確認された。（平面形）長方形。（規模）2.58×0.52m。（長軸方位）N-5°-E。（深さ）24～28cmを測る。坑底は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がる。（覆土）ローム粒子を含み、炭化物粒子を僅かに含む暗茶褐色土を基調とする。

【遺物】図示できなかったが、かわらけ小破片が2点出土した。

【時期】中・近世。

65号土坑（第46図）

【位置】（C・D-6）グリッド。

【構造】段切状遺構の覆土中より確認された。北側は調査区域外である。（平面形）長方形。（規模）不明×50cm。（長軸方位）N-S。（深さ）16～26cmを測り北側が深くなっている。坑底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。（覆土）ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子を僅かに含む黒褐色土を基調とする。

【遺物】出土しなかった。

【時期】中・近世。

66号土坑（第47図）

【位置】（D-7・8）グリッド。

【構造】南側と東側は調査区域外であるため詳細は不明である。（平面形）長方形か。（規模）不明。（長軸方位）E-Wか。（深さ）10～20cmを測る。坑底には工具痕が多数見られた。（覆土）ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む黒褐色土を基調とする。

【遺物】磁石1点が出土した。

【時期】中・近世。

66号土坑出土遺物（第52図1）

磁石である。上・下面以外の4面が使用面である。よく使われており、各使用面は曲線的に磨耗している。長さ6.5cm・4.6cm・厚さ3.0cm・重さ94.5g。石質は凝灰岩である。

67号土坑（第47図）

【位置】（D-8）グリッド。

【構造】土坑墓である。人骨は頭を北に、顔を西に向けて埋葬されていた。（平面形）隅丸長方形。（規模）85×65cm。（長軸方位）N-S。（深さ）35cmを測る。坑底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。（覆土）3層に分層される。

【遺物】人骨のみで他は出土しなかった。人骨の分析は123頁参照。

【時期】中・近世。

70号土坑（第48図）

【位置】（B・C-7・8）グリッド。

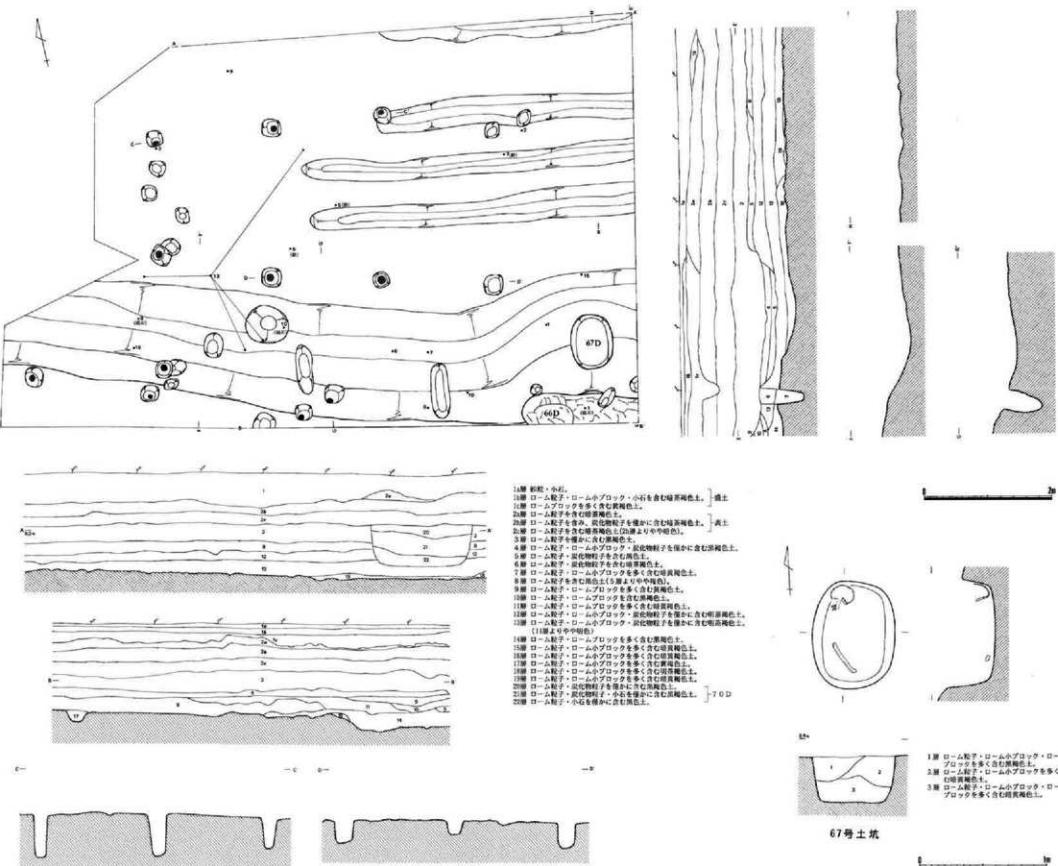
【構造】段切状遺構の覆土中より確認された。北側は調査区域外である。（平面形）長方形。（規模）不明×1.86m。（長軸方位）E-W。（深さ）土層図（第47図A-A'セクション）では64cmの深さを確認できる。坑底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。（覆土）3層に分層される。

【遺物】出土しなかった。

【時期】中・近世。

段切状遺構出土遺物（第51図1、第52図5～10、図版22-4-1～17、第10表）

前述した土坑以外の特定しなかった遺構から出土した遺物については、すべて段切状遺構出土遺物と



第47図 段切状遺構・66・67号土坑 (1/60, 1/30)

して取り扱うことにする。本遺構から出土した遺物は、陶磁器の小破片を中心で実測できないものばかりであったため報告しない予定でしたが、できるだけ本遺構の時代観を把握するためにも敢えて写真図版で掲載することにした。

本遺構から出土した遺物は、陶磁器・土器小片17点、鉄製品3点、土製品1点、石製品2点である。

陶磁器・土器（第51図1、図版22-4-1~17、第10表）

17の髪油壺が17世紀末～18世紀中頃に比定される以外はすべて中世の所産のものである。

鉄製品（第52図5~7）

5は刀子の茎部と思われる。長さ4.6cm・幅1.4cm・厚さ0.5cm・重さ7.0g。

6は鐵鎌の鎌身部破片と思われる。断面の中央に鋭利に稜をもつことから鎬造のものであろう。長さ2.3cm・幅1.1cm・厚さ0.25cm・重さ1.1g。

7は釘である。長さ3.6cm・幅0.6cm・厚さ0.4cm・重さ1.6g。

土製品（第52図8）

用途不明品である。長さ2.6cm・幅1.7cm・厚さ1.1cm・重さ4.6g。断面半円状でかまぼこ状を呈する。

石製品（第52図9・10）

いずれも砾石である。よく使用されている。9は長さ10.2cm・幅2.3cm・厚さ2.5cm・重さ60.3gで石質は凝灰岩である。10は長さ5.8cm・幅2.9cm・厚さ2.5cm・重さ62.5gで石質は砂岩である。

（3）土坑

ここからは、段切状遺構外の遺構について説明する。

68号土坑（第48図）

【位置】（F・G-4・5）グリッド。

【構造】3Wと攪乱に切られ、さらに東側は調査区域外であるため、詳細は不明である。（平面形）長方形か。（規模）不明×2.40m。（長軸方位）N-15°-E。（深さ）42~48cmを測る。坑底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。（覆土）6層に分層される。

【遺物】陶磁器などの小破片が出土した。

【時期】中世。

68号土坑出土遺物（図版23-1~4、第10表）

瀬戸美濃系の陶器2点、常滑系の陶器1点、かわらけ1点が出土した。

69号土坑（第48図）

【位置】（E-5・6）グリッド。

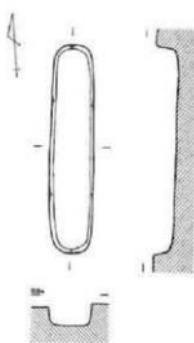
【構造】65Hを切る。西側は調査区域外である。（平面形）長方形。（規模）不明×50cm。（長軸方位）E-W。（深さ）20cm前後を測る。坑底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。（覆土）3層に分層される。

【遺物】刀子1点が出土したが、65Hから出土した可能性もある。

【時期】中・近世。

69号土坑出土遺物（第52図2）

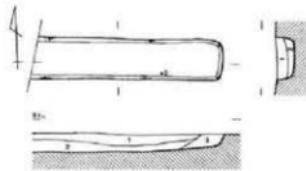
刀子である。長さ8.3cm・幅1.2cm・厚さ0.5cm・重さ11.0g。切先と茎部は欠損する。



64号土坑

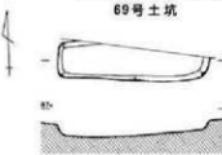


65号土坑

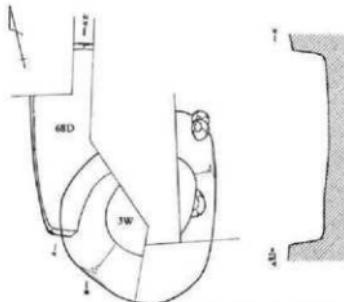


- 1層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む灰褐色土。
2層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む灰褐色土。(1層より細粒)。
3層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む灰褐色土。

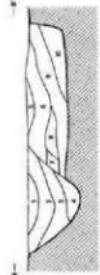
69号土坑



70号土坑

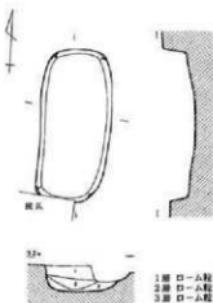


68号土坑・3号井戸跡



- 1層 水潤な粒子・ローム粒子を含む
黒色土。
2層 水潤な粒子・ローム粒子を含む
黒褐色土。
3層 粒子を僅かに含む黒褐色土。
4層 ローム粒子・ローム小ブロック
を含む暗褐色土。
5層 ローム粒子・ローム小ブロック
を含む暗褐色土。
6層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む
暗褐色土。

94・95号土坑



96号土坑

第48図 土坑・3号井戸跡 (1/60)

71号土坑（第49図）

〔位置〕(E・F-3・4) グリッド。

〔構造〕地下式坑である。主体部天井は崩落していた。14Yを切る。(長軸方位) E-W。(入口堅坑部) 開口部は1.98×1.80mの楕円形、底面は1.44×1.40mの隅丸方形を呈する。確認面からの深さは東側が1.46mで、主体部に向かって5°程の角度で緩やかに下がっている。主体部への連絡口は、高さ70cm・幅50cm・長さ約70cmを測る。(主体部) 平面形は2.30×1.90mの長方形を呈し、主軸に対して横長の形態をとる。底面はほぼ平坦で、壁は垂直に立ち上がる。天井部までの高さは1m前後と思われる。西壁(奥壁)の中央付近に一辺44cm・深さ12cmの隅丸方形の凹みがあり、下層(2層)は炭化物の堆積層であった。さらに、堅坑部の南西側坑底上と主体部の南側坑底上からも、炭化物の堆積層が広範囲に検出された。壁面には10cm幅の工具痕がはっきり残っており、上部は横方向、下部は縦方向で境には棱がでていた。

〔遺物〕堅坑部の上層より貝殻と獣骨片が出土し、坑底上からは、陶器・土器が出土している。寛永通宝は崩落した天井部の上部からの出土である。

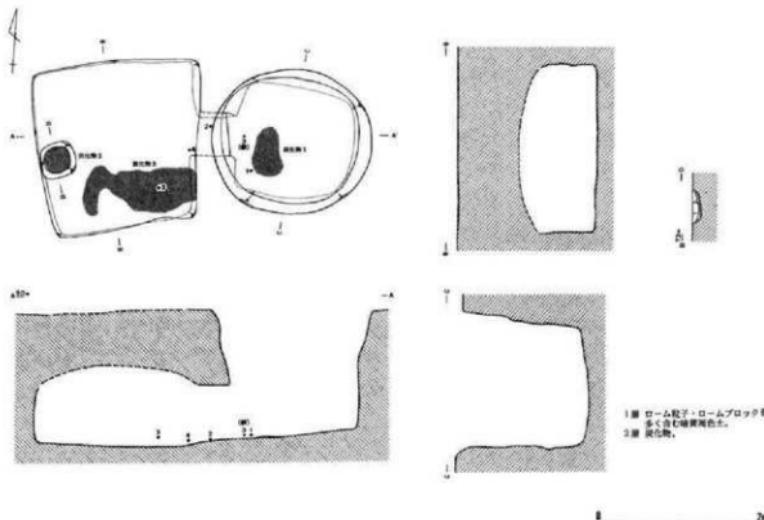
〔時期〕中世末(16世紀前後か)。

71号土坑出土遺物 (第51図1・2、第52図3・4・11、図版23-3-1~8、第10表)

第51図1・2、図版23-3-1~7は陶器・土器で、瀬戸美濃系の水滴・小皿・天目塊、かわらけ、はうろくである。

図版23-3-8は板碑。長さ11.3cm・幅6.0cm・厚さ1.4cm。枠線内は磨り痕が認められ平滑である。

第52図3・4は鉄製品である。3は用途不明品で、上方部と思われる部分は丸く曲線形で、下方にかけて直線形を呈する。上面部は比較的丸味をもち、下面部は平らで中央付近は僅かに窪みをもつ。長



第49図 71号土坑 (1/60)

さ6.2cm・幅2.8cm・重さ53.0g。4は中心付近に穿孔をもつ円盤である。穿孔は中心をずれているが、紡錘車であろうか。外径4.4cm・穿孔径0.6cm・厚さ0.7cm・重さ30.8g。

第52図11は銅鏡である。鏡貨名は寛永通宝。外径2.4cm・方孔一辺0.5cm・重さ2.5g。

72号土坑（第32図）

〔位置〕（E-2）グリッド。

〔構造〕14Yを切る。大部分が調査区域外のため詳細不明である。（覆土）2層に分層される。

〔遺物〕ほうろくの小破片1点が出土している。

〔時期〕中世。

72号土坑出土遺物（図版23-4、第10表）

ほうろくの底部小破片である。

94号土坑（第48図）

〔位置〕（G-H-6）グリッド。

〔構造〕95～97・98・99Dを切る。（平面形）長方形。（規模）4.83×0.50m。（長軸方位）N-8°-E。（深さ）20cm前後を測る。坑底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。（覆土）4層に分層される。

〔遺物〕陶磁器の小破片が僅かに出土したが、図示できなかった。

〔時期〕中・近世。

95号土坑（第48図）

〔位置〕（G-H-6）グリッド。

〔構造〕94Dに切られるため、詳細は不明である。（平面形）梢円形か。（深さ）10cmを測る。壁は北側は緩やかに、南側は急斜に立ち上がる。（覆土）ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗茶褐色土を基調とする。

〔遺物〕陶磁器小破片が僅かに出土したが、図示できなかった。

〔時期〕中・近世。

96号土坑（第48図）

〔位置〕（G-H-6）グリッド。

〔構造〕94Dに切られ、97Dを切る。南側の一部は攪乱により破壊されている。（平面形）長方形。（規模）1.90×0.86m。（長軸方位）N-S。（深さ）30～40cmを測る。坑底は比較的平坦であるが、中央付近がやや深くなっている。壁はほぼ垂直に立ち上がる。（覆土）3層に分層される。

〔遺物〕出土しなかった。

〔時期〕中・近世。

（4）井戸跡

3号井戸跡（第48図）

〔位置〕（G-5）グリッド。

【構造】第1～3工程の3回にわたって調査を実施した。中心部が調査域外になる。68Dを切る。平面形は不整な楕円形で、 2.34×1.94 mを測る。確認面から60cm程しか掘り下げられなかったが、更に深くなると思われることから井戸跡と判断した。(覆土)上層はローム粒子・ローム小ブロックを含む明茶褐色土、下層はローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む黒褐色土を基調とする。

【遺物】かわらけの小破片1点と用途不明の土製品1点を出土した。

【時期】中世。

3号井戸跡出土遺物(図版23-5、第10表)

1はかわらけの底部小破片である。

2は用途不明の土製品である。筒状を呈し、内面には顯著に輪積痕が残る。

4号井戸跡(第50図)

【位置】(G-4)グリッド。

【構造】11F Pを切る。平面形は円形を呈し、規模は直径80cmを測る。壁はほぼ垂直に垂下する。深さ1.3m程の所で危険防止のため調査を断念した。

【遺物】陶磁器・土器の小破片が数点出土した。

【時期】中世。

4号井戸跡出土遺物(第51図1、図版24-1、第10表)

2は中国青磁碗の可能性がある。

5号井戸跡(第50図)

【位置】(H-5)グリッド。

【構造】西側は攪乱により壊されている。平面形は直径70cm程の円形を呈すると思われる。壁はほぼ垂直に垂下する。深さ70cm程の所で調査を断念した。

【遺物】出土しなかった。

【時期】中・近世。

6号井戸跡(第50図)

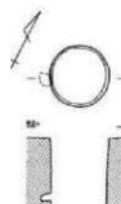
【位置】(I-5)グリッド。



4号井戸跡



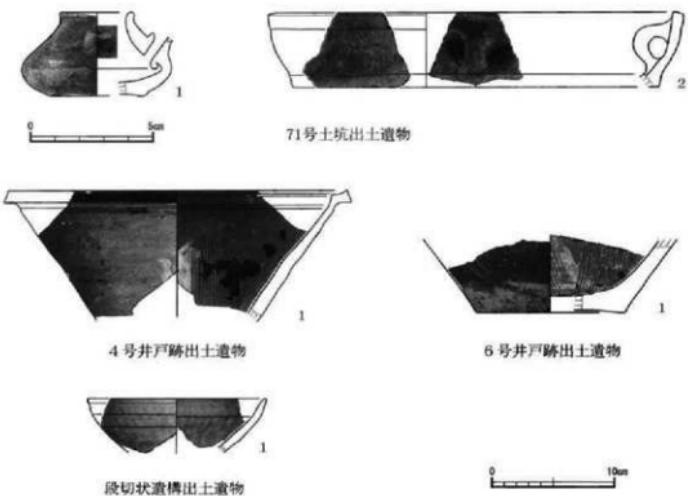
5号井戸跡



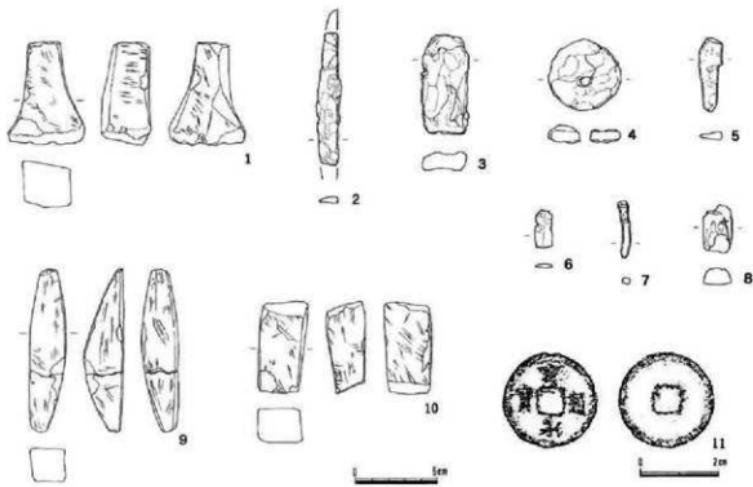
6号井戸跡



第50図 4～6号井戸跡 (1/60)



第51図 出土遺物 1 (1/2・1/4)



第52図 出土遺物 2 (1/3・4/5)

擇図・図版番号	遺構名	遺物	種類	時代	产地	特記事項
第51図1	段切状遺構	天目碗	陶器	中世	瀬戸美濃	口縁部～体部下半、観器高4.5cm・推定口径14.5cm、外面部を除き灰褐色、胎土色調は黄褐色
図版22-4-2	段切状遺構	碌軸皿	陶器	中世末	瀬戸美濃	口縁部、内外面に煤付着
図版22-4-3	段切状遺構	山茶碗系?	土器	中世		口縁部、色調は灰褐色
図版22-4-4	段切状遺構	山茶碗系片口鉢	土器	中世		体部、色調は灰白色
図版22-4-5	段切状遺構	かわらけ	土器	中世		底部に回転糸切り痕
図版22-4-6	段切状遺構	南伊勢系土鍋	土器	中世(末より前)	伊勢?	同一個体、器底は極めて薄く0.25cm、胎土の色調は暗赤褐色を呈調、外面部はベタ削り肌が顯著で煤付着、断面サンドイッチ状の焼き織あり
図版22-4-7	段切状遺構	南伊勢系土鍋	土器	中世(末より前)	伊勢?	同上
図版22-4-8	段切状遺構	擂钵	陶器	中世末	瀬戸美濃	体部、色調は暗赤褐色、胎土には小石(石英)を多く含む
図版22-4-9	段切状遺構	片口鉢	陶器	中世(末より前)	常滑	口縁部、色調は橙色、口縁端部は短めに外反し丸い
図版22-4-10	段切状遺構	片口鉢	陶器	中世(末より前)	常滑	口縁部、色調は橙色、口縁端部は平坦に面取りされるが、中央に僅かな突みもつ
図版22-4-11	段切状遺構	鉢?	陶器	中世	常滑	体部、内外面に鉄粒
図版22-4-12	段切状遺構	瓶?	土器	中世	在地	口縁部、色調は暗赤褐色、胎土には白色小石(長石か)を多く含む
図版22-4-13	段切状遺構	壺か甕	土器	中世		体部、色調は灰白色
図版22-4-14	段切状遺構	鉢系続	土器	中世	瀬戸美濃	口縁部、内外面に鉄粒
図版22-4-15	段切状遺構	壺?	土器	中世		同一個体か、瓦質、胎土には白色小石(長石)を多く含む
図版22-4-16	段切状遺構	壺?	土器	中世		同上
図版22-4-17	段切状遺構	矮油壺	磁器	17世紀～18世紀	肥前	体部、色絵
図版23-1-1	68号土坑	天目碗	陶器	中世	瀬戸美濃	体部、長石釉
図版23-1-2	68号土坑	小皿	陶器	中世	瀬戸美濃	体部、鼠志野釉
図版23-1-3	68号土坑	かわらけ	土器	中世		色調は橙色
図版23-1-4	68号土坑	鉢類	陶器	中世	常滑	内外面に鉄粒
第51図1	71号土坑	水滴	陶器	中世(16世)	瀬戸美濃?	器高3.4cm・口径3.0cm・底径3.9cm、体部上半～中位に始輪、底部に輪余切り痕、達奇度は1/2程。
第51図2	71号土坑	はうろく	土器	中世		器高6.3cm・口径5.4cm・底径3.0cm・内耳あり、体部上半は横ナデ、下半は押捺痕
図版23-3-3	71号土坑	小皿	陶器	中世	瀬戸美濃	口縁部、内外面に灰釉
図版23-3-4	71号土坑	天目碗	陶器	中世	瀬戸美濃	体部～近郊台地の一部、内外面底部を除き鉄釉
図版23-3-5	71号土坑	山茶碗系	土器	中世末		体部、色調は淡茶褐色
図版23-3-6	71号土坑	かわらけ	土器	中世(1580年頃)		口縁部、色調は橙色
図版23-3-7	71号土坑	はうろく	土器	中世		底部、色調は内外面黒褐色
図版23-4	72号土坑	はうろく	土器	中世末～近世初		底部、色調は灰白色
図版23-5-1	3号井戸跡	かわらけ	土器	中世末		色調は橙色、底部に回転余切り痕
第51図1	4号井戸跡	擂钵	陶器	中世	瀬戸美濃?	口縁部～体部中位、観器高10.4cm・推定口径28.3cm、内外面に鉄粒、標目は幅3cm・12本で一單位
図版24-1-2	4号井戸跡	青磁碗	磁器	中世	中国?	口縁部小片
図版24-1-3	4号井戸跡	(三足)香炉?	陶器	16世末	瀬戸美濃	底部、内面に煤付着
図版24-1-4	4号井戸跡	擂钵	陶器	16世末	瀬戸美濃	内外面に鉄粒、標目は幅2.0cm・10本程で一單位
図版24-1-5	4号井戸跡	甕	土器	16世(やや古い)		底部、色調は灰白色
第51図1	6号井戸跡	擂钵	陶器	中世	瀬戸美濃	観器高6.4cm・推定底径12.2cm・内外面に鉄粒、底面に回転余切り痕、標目は幅3.4cm・12本位か
図版24-2-2	6号井戸跡	はうろく	土器	中世末～近世初		底面、断面サンドイッチ状の焼き織

第10表 遺構出土の陶磁器・土器一覧

〔構造〕東側は搅乱により壊されている。平面形は直径75cm程の円形を呈する。壁はほぼ垂直に垂下し、足掛け穴と思われる掘り込みが1ヶ所検出された。深さ85cm程のところで調査を断念した。

〔遺物〕土器2点が出土した。

〔時期〕中・近世。

6号井戸跡出土遺物（第51図1、図版24-2）

第51図1は瀬戸美濃系の擂鉢、図版24-2-2はほうろくである。

（5）ピット

13号ピット（第4図）

〔位置〕（G-7）グリッド。

〔構造〕（平面形）隅丸長方形。（規模）32×17cm。（深さ）53cm。

〔遺物〕瀬戸・美濃系の陶器小破片1点が出土したが、図示できなかった。

〔時期〕中・近世。

15号ピット（第4図）

〔位置〕（G-6）グリッド。

〔構造〕（平面形）楕円形。（規模）38×18cm。（深さ）47cm。

〔遺物〕ほうろくの小破片1点が出土したが、図示できなかった。

〔時期〕中・近世。

16号ピット（第4図）

〔位置〕（F-7）グリッド。

〔構造〕（平面形）楕円形。（規模）32×25cm。（深さ）20cm。

〔遺物〕かわらけの小破片1点が出土したが、図示できなかった。

〔時期〕中・近世。

第7節 遺構外出土遺物

今回の調査は、変電所設置後の改良工事に伴うため、大規模なコンクリートの基礎が調査区全域に配置されており、著しい破壊を受けている状況であった。ここでは、こうした搅乱内や明らかに他時期の遺構からの混入品などの遺物を前節までの出土遺物と区別し、遺構外出土遺物として扱うこととする。

遺構外出土遺物は、旧石器時代、縄文時代（早・前・中・後期）、弥生時代後期、古墳時代後期、奈良・平安、中・近世の時期に比定されるものであり、以下のように第1～6群に分類した。

第1群 旧石器時代の石器（第53図1～8、第11表）

1は一側刃基部加工のナイフ形石器である。縦長剥片を素材とし、調整加工はすべて主要剥離面側より行われている。打面は残置している。頁岩製である。

2はチャート製の搔器である。比較的厚みのある小形の剥片を素材とし、下部に調整により刃部を作

出している。

3～7は剥片である。3は小型の横長剥片であり、打面は原礫面である。4は縦長剥片であり、打面は原礫面である。頭部調整が見受けられる。5の打面は原礫面である。6は下部を欠損している。7は頭部調整が見受けられる。左側縁を欠損している。3・4・7は黒曜石、5・6はチャート製である。

8はホルンフェルス製の石核である。作業面は2面であり、打面転移が見受けられる。最終作業面は原礫面を打面としている。

第2群 繩文時代の遺物（第56～59図1～116、第53～55図9～36、第60図、第12・13表）

繩文時代の遺構外から出土した遺物のうち、遺物包含層出土遺物については第2節で取り扱っているので本項ではそれらを除き、他時代の遺構・攪乱・表土中等から出土した繩文時代の遺物について取り扱う。

1類 繩文時代の土器（第56～59図1～116、第60図、第12表）

遺構外から出土した繩文土器破片の点数は、1,987点を数え、重量は25,683gを計る。そのうち型式もしくは詳細な時期を特定することのできた土器片は、1,072点・18,806gであった。内訳は早期136点（12.7%）・809g（4.3%）、前期96点（9.0%）・930g（4.9%）、中期前・中葉65点（6.1%）・823g（4.4%）、中期後葉593点（55.3%）・13,336g（70.9%）、後期182点（17.0%）・2,908g（15.5%）であった。

1～4は早期後葉の条痕文系土器である。1～3が胴部で、4が底部。文様はいずれも貝殻条痕文のみである。

5～12は前期前葉の土器である。5～7は花積下層式土器でいずれも貝殻背圧痕文を持つ。胎土・文様から6・7は同一個体と思われる。5はより大型の貝殻を用いて施文している。7は底部破片であるが、底面にも貝殻背圧痕文が施されている。

8～12は黒浜式に比定される土器である。8は波状口縁頂上部で半截竹管による沈線文を持つ。9～11は単節の羽状繩文部の破片、12は単節R L繩文部の破片である。

13～30は中期前葉から中葉の土器である。13～15は五領ヶ台式土器と思われる。13はR Lの繩文地に横位の結節文が施される。14・15は同一個体と思われ、沈線間に円形の刺突文を持つ。

16～22は阿玉台式土器である。16～18は口縁部破片である。16は波状口縁で、口縁部隆帯脇に浅い結節沈線文を持ち、胎土に金雲母・白色粒子・細礫を混入する。17は輪積痕を複合口縁状に残している。胎土には金雲母・細礫を混入する。18は平行沈線文が施され、口唇部には刻みを有する。

19～22は胴部破片でいずれも金雲母を混入するが、22についてはごく微量の混入である。文様は19が爪形文、20は隆帯を貼付した脇に結節沈線を、21は鋸歯状の沈線、22は結節沈線が施される。

23～30は勝坂式に比定される土器で、破片はいずれも胴部片である。文様はいずれも連続爪形文が主体であるが、23・30は繩文を持つ。25は隆帯頂部にR Lの繩文、側面に連続爪形文が施される。

31～85は中期後葉の土器である。31は曾利式土器の口縁部破片で、斜行した沈線文が施される。

32は加曾利E II式と思われる土器の口縁部片で、口唇部直下に半截竹管による3本の横位沈線が施される。下位の2本が先に施文され、中位の線をガイドラインとして重複させて上位の線が施文されている。その下には先端を斜めに切断した棒状工具あるいは竹管により左上から右下に向かい連続刺突文が施される。

33～36は加曾利E II～III式の口縁部文様帶部の破片である。いずれも隆帯と繩文で文様が構成されて

いる。33は複節R L Rの縄文をもつ。

37~39は加曾利E II ~ III式の磨消垂文を持つ胴部片である。

40は連弧文系の土器片である。R Lの縄文地に連弧文が描かれる。

41~47は加曾利E III ~ IV式に比定される条線文の土器片である。46は7本、47は8本で1単位の蛇行・垂下する条線文が施される。

48~57は加曾利E III ~ IV式に比定される土器のうち隆帯もしくは微隆起線によって文様描出されるものである。56のみ無節Lの縄文、その他は単節縄文をもつ。

58~61は加曾利E IV式に比定される土器のうち口縁部に微隆起線により狭幅の無文帶を区画する土器片である。59は波状口縁頂部の突起である。60・61は沈線による「△」状文様（あるいは「W」状文様）をもつ。62・63は前記60・61と同様加曾利E IV式の「△」状文様（「W」状文様）を持つ胴部片である。

64~76は加曾利E III ~ IV式に比定される土器のうち文様の区画が全て沈線によって描出されるものである。66を除き64~71は口縁部に無文帶を持つ。64は沈線間磨消による「△」状文様を有する。65~67は沈線間磨消による曲線文を有する。71は内外面共に赤彩されている。72は籠状工具による浅い沈線の懸垂文を持ち、表面には籠削り痕を残す。73~74は「V」状文様、75は「U」・「△」状と思われる文様をもつ。76は沈線による懸垂文を有する。

77~81は加曾利E III ~ IV式の土器のうち口縁付近に刺突文を持つ土器である。77のみ微隆起線と刺突の組み合わせで文様が構成され、78~81は沈線と刺突によって文様構成される。80・81は沈線上に円形刺突が施される。

82~96は後期前葉の称名寺I式に比定される土器である。いずれも沈線によって区画された縄文部と無文部によって構成される文様を持つ。87~89は無節縄文が施され、87・89は同一個体と思われる。その他は単節縄文である。

97~111は後期前葉の称名寺II式~堀之内1式に比定される土器である。文様は無文地に沈線による描出を基本とし、97~99・101・105は沈線間に列点を充填する。106~108は沈線端部に刺突を施す。

112・113は堀之内2式に比定される土器である。112は内面口縁直下に沈線を巡らせ、113は口唇部上面に沈線を巡らせ、端部に刺突を施している。

114は後期の粗製土器で、先端の鋭利な工具で極めて細い沈線が継に施される。

115は網代痕を持つ底部片で、称名寺式~堀之内式と思われるが詳細は不明である。

116は加曾利E IVあるいは称名寺式と思われる土器底部である。現器高 5.7cm・底径 7cm。縦位に1~2mm幅の磨きが施される。

2類 縄文時代の石器（第53~55図9~36、第13表）

9~14は石鐵である。9は凹基であり、抉りは深めである。10は平基である。小形ではあるが比較的厚みがある。11は比較的大形であり、凹基で抉りは深めである。薄身で丁寧に調整を施している。12は未製品である。粗く形を整えた後、裏面側から細かな調整を施し始めたことが窺える。13は基部を欠損している。調整は粗い。14は未製品である。背面に広く原礫面を残置している。10~13はチャート製、9・14は黒曜石製である。

15~24は剥片である。15は縦長剥片であり、打面を残置している。16は背面構成から打面転移が認められる。打面を残置しており、平坦打面である。17は打面を残置しており、平坦打面である。18は上部を欠損している。背面に原礫面を残置している。19は右側縁を欠損している。背面に原礫面を広く残置

している。20はヒンジ・フラクチャーをおこしている。背面構成から打面転移が認められる。21は上部を欠損している。右側縁に原礫面を残置している。22は比較的大型の剥片である。23は左側縁を欠損している。24は背面に原礫面を残置している。14・15・18～20・22・24は黒曜石製、16・17は安山岩製、21は凝灰岩製、23はチャート製である。

25は黒曜石製の使用痕のある剥片である。右側縁に微細剥離痕が見受けられる。上部は欠損している。26・27は二次加工のある剥片である。26は横長剥片を素材とし、素材の打点付近と末端部に二次加工を施している。黒曜石製である。27は粘板岩製であり端部に抉り状の加工を施している。

28はチャート製の石核である。原礫面を広く残置しており、作業面は一面のみである。

29～31は打製石斧である。29は分銅形である。左右側縁の抉り部には使用によるものであろうか、つぶれが見受けられる。ホルンフェルス製である。30は基部を欠損しているが分銅形と推定される。表面に原礫面が残置している。閃錫岩製である。31は短冊形で、器体厚がある。ホルンフェルス製である。

32～35は敲石である。32は左側縁から上部を欠損している。右側縁から下部にかけて敲打痕が観察される。砂岩製である。33は下部を欠損している。両側縁と上部に敲打痕が見受けられる。表裏面には磨耗が観察される。蛇紋岩製である。34は小型の球状礫である。敲打痕が観察される。砂岩製である。35は棒状礫であり、右側縁から下部にかけて欠損している。左側縁と裏面に敲打痕が観察される。片岩製である。

36は花崗岩製の石皿である。全体形状の把握は困難である。表面に凹みが一つ見受けられる。表裏面に使用による磨耗が観察される。

第3群 弥生時代末葉～古墳時代前葉の土器（第59図117）

壺形土器のミニチュア土器である。現器高2.6cm・底径4.0cm。色調は黒褐色を呈し、胎土には白色粒子・小石を含む。内外面へラ磨き調整が施される。脚台部のみ遺存する。

第4群 平安時代の遺物（第59図118）

須恵器壺形土器である。器高3.4cm・推定口径12.5cm・底径6.3cm。色調は灰褐色を呈し、胎土には白色砂粒・小石を含む。遺存度は1/2程で、時期は9世紀中葉であろう。

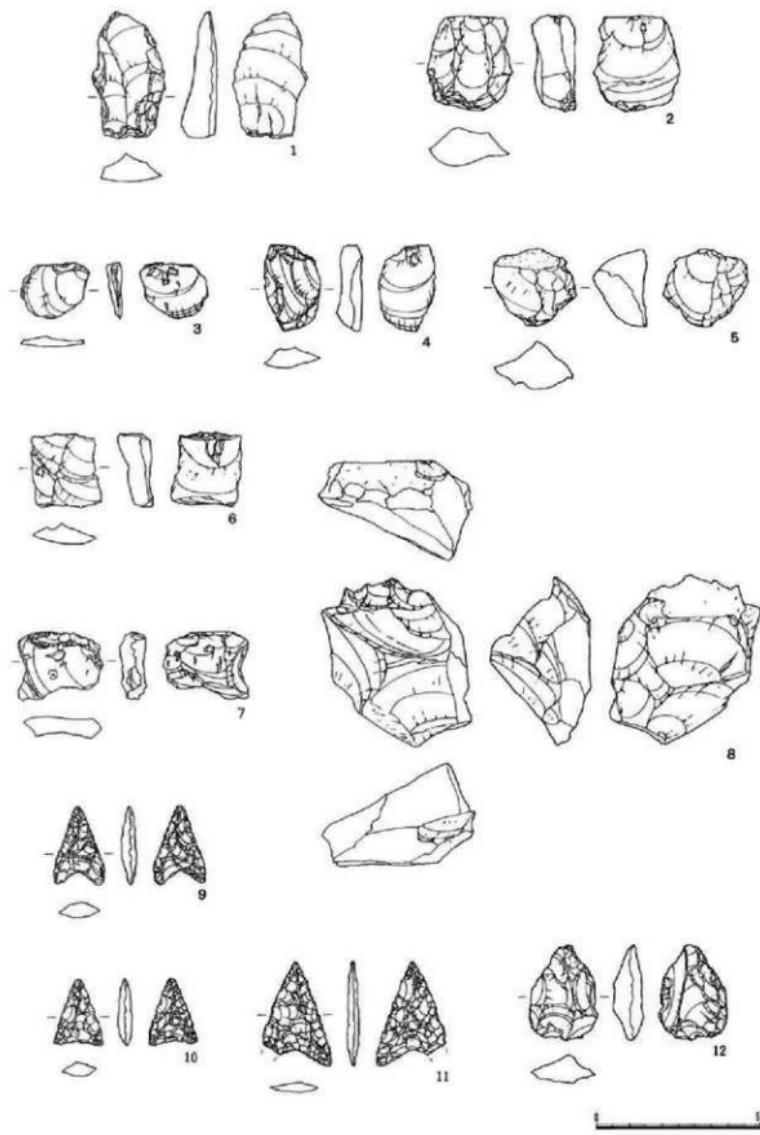
第5群 中・近世の遺物（図版28-1～24、第14表）

1～12は小型皿・碗等の陶器、13・14は土器、15・16は大形鉢などの陶器、18～21は磁器である。

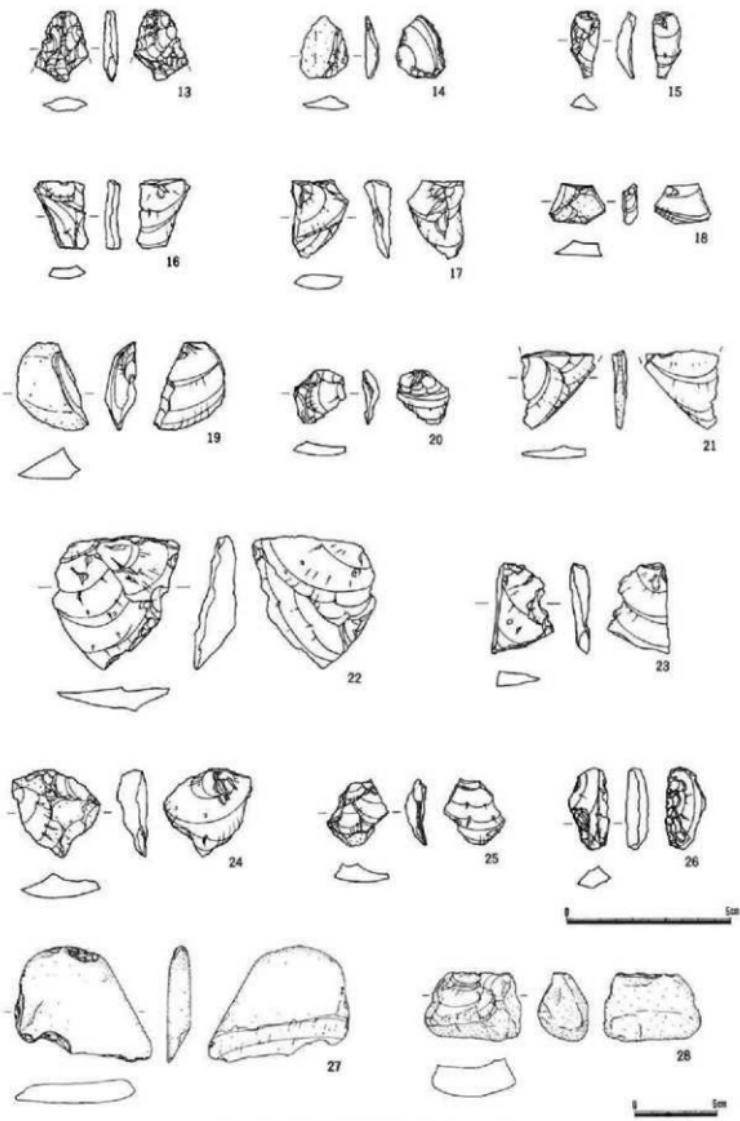
22は平瓦の小破片である。色調は橙色を呈する。15・16世紀の所産のものか。

23は石製鏡である。長さ2.4cm・幅5.3cm・厚さ1.0cm。表面は黒色を呈する。

24は泥面子である。大黒天。長さ3.1cm・幅2.3cm・厚さ1.0cm・重さ4.8g。完形品である。



第53图 遗构外出土石器1 (2/3)



第54図 遺構外出土石器 2 (2/3 • 1/3)



29



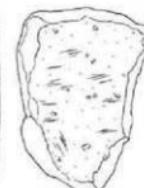
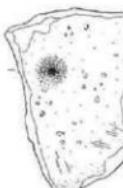
30



32



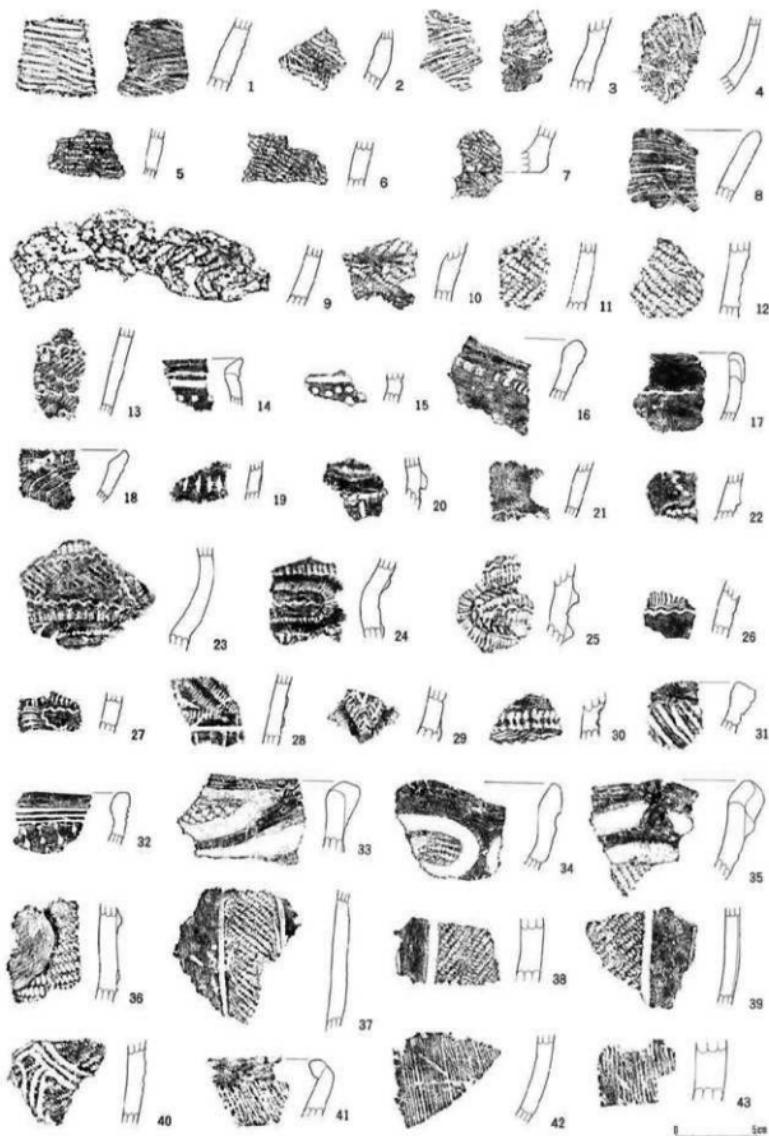
34



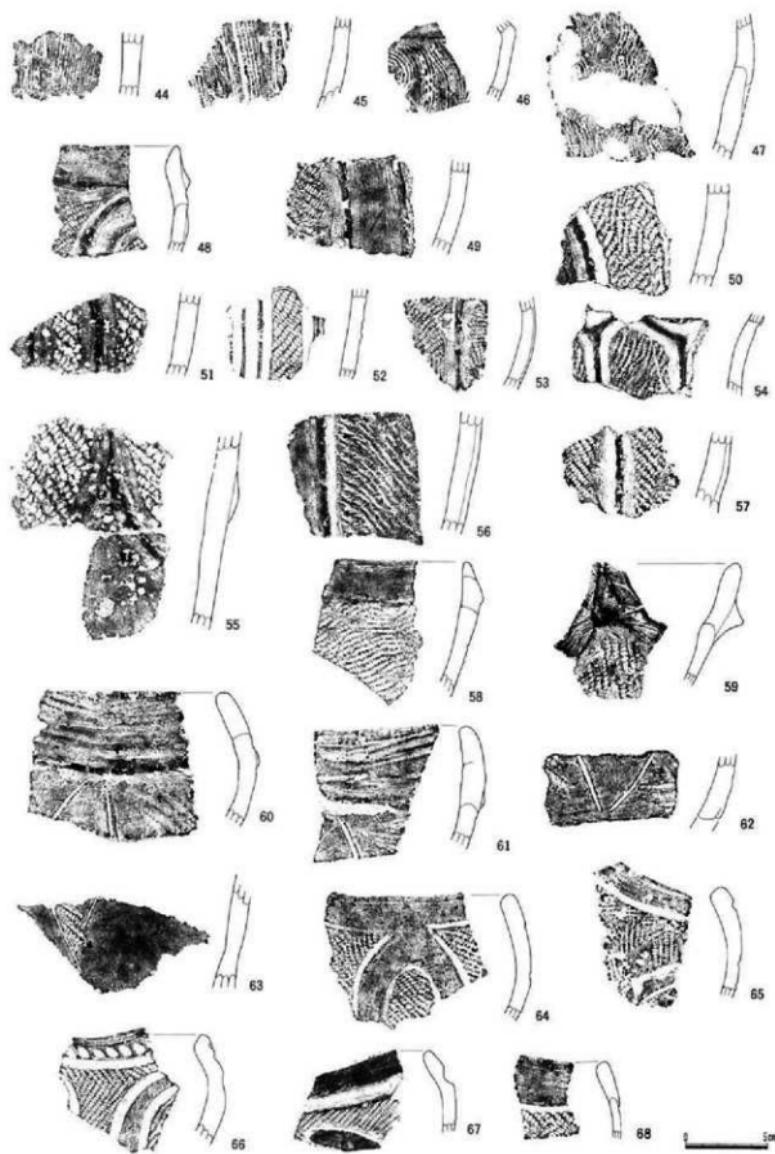
36



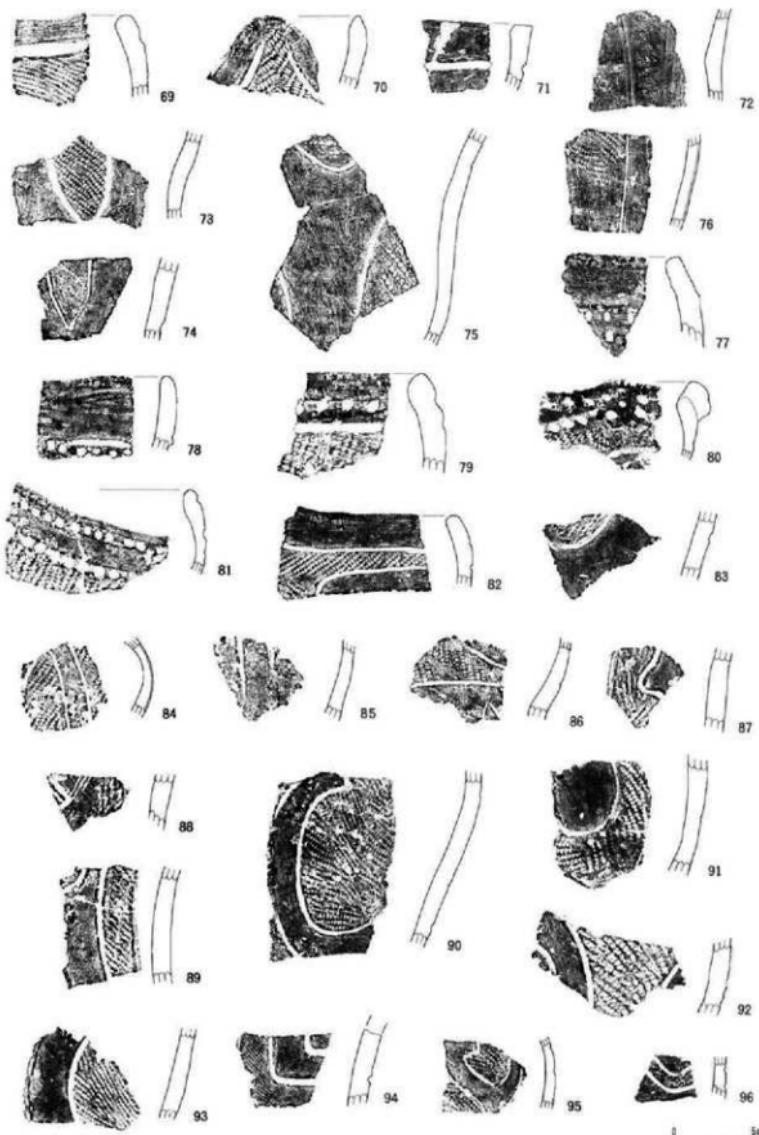
第55図 遺構外出土石器 3 (1/3)



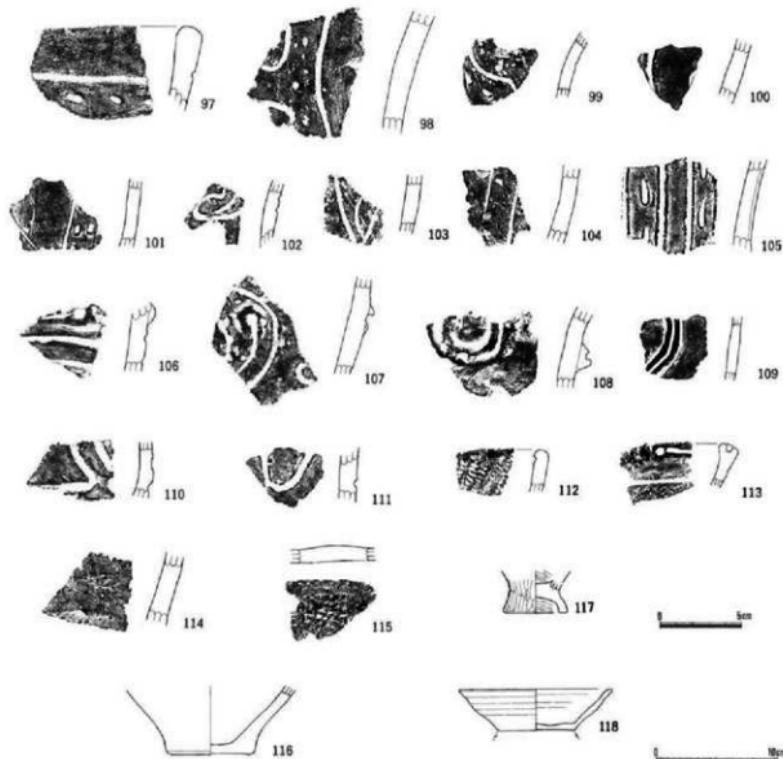
第56図 遺構外出土遺物1 (1/3)



第57図 造構外出土遺物 2 (1/3)



第58図 遺構外出土遺物 3 (1/3)



第59図 遺構外出土遺物 4 (1/3・1/4)

標図番号	器種名	石材	母岩No.	刃部加工	整形加工	素材技術	素材形態	遺存状態	長さ	幅	厚さ	重量
第53図1	ナイフ形石器	頁岩	Sh3	なし	HIP/刃溝し	III	縦長剥片	完形	39.35	22.44	10.81	6.7
第53図2	搔器	チャート	Ch2	HD	なし	HD	縦長剥片	完形	30.07	25.58	13.82	11.2
第53図3	剥片	黒曜石	Ob7	なし	なし	II	横長剥片	完形	17.20	19.79	4.35	1.2
第53図4	剥片	黒曜石	Ob6	なし	なし	HD	横長剥片	完形	26.48	17.61	8.34	2.9
第53図5	剥片	チャート	Ch4	なし	なし	HD	横長剥片	完形	23.51	26.18	17.22	7.8
第53図6	剥片	チャート	Ch3	なし	なし	SD	縦長剥片	下部欠	23.21	21.36	9.79	4.0
第53図7	剥片	黒曜石	Ob8	なし	なし	HD	横長剥片	左側縁欠	20.99	26.45	8.09	3.8
第53図8	石核	ホルンフェルス	Hf2	通用外	通用外	HD	通用外	完形	32.78	47.79	47.68	54.6

HP:Hard hammer Pressure flaking

(単位:mm g)

第11表 遺構外出土の旧石器時代石器一覧

辨認番号	部位	特徴		色調	分類	胎土	その他・出土遺物等
		地文	装飾				
第56回1	胴	貝殻条痕文		赤褐色	条痕文系	織維・白色粒子	66H
第56回2	胴	貝殻条痕文		赤褐色	条痕文系	織維・白色粒子	66H
第56回3	胴	貝殻条痕文		暗褐色	条痕文系	織維・白色粒子	18Y
第56回4	底	貝殻条痕文		褐色	条痕文系	織維	
第56回5	胴	貝殻背疣痕文		赤褐色	花積下層	織維	
第56回6	胴	貝殻背疣痕文		赤褐色	花積下層	織維・白色粒子・細粒	7と同一個体
第56回7	底	貝殻背疣痕文		赤褐色	花積下層	織維・白色粒子	6と同一個体
第56回8	口縁	半截竹管による沈韓文		暗褐色	黒浜	織維・白色粒子	14Y
第56回9	胴	單節羽状彫文		赤褐色	黒浜	織維	66H
第56回10	胴	單節羽状彫文		灰褐色	黒浜	織維	65H
第56回11	胴	單節羽状彫文		明褐色	黒浜	織維・白色粒子	
第56回12	胴	纏文R L		赤褐色	黒浜	織維・白色粒子	
第56回13	胴	纏文R L	横位結節文	暗褐色	五箇ヶ台	石英・雲母・砂粒	
第56回14	口縁	沈線、円形刺突文		灰褐色	五箇ヶ台	砂粒	15と同一個体
第56回15	胴	沈線、円形刺突文		明褐色	五箇ヶ台	砂粒	14と同一個体
第56回16	口縁	隆帶脇に粘着沈線		暗褐色	阿玉台	金雲母・白色粒子・細粒	66H
第56回17	口縁	複合口縁状の輪積型		暗褐色	阿玉台	金雲母・織維	18Y
第56回18	口縁	平行沈線、口唇部刻み		暗褐色	阿玉台	金雲母・砂粒	66H
第56回19	胴	爪形文		褐色	阿玉台	金雲母・砂粒	15Y
第56回20	胴	隆帶脇に粘着沈線		褐色	阿玉台	金雲母・白色粒子	66H
第56回21	胴	巻曲状文		赤褐色	阿玉台	金雲母・白色粒子	
第56回22	胴	粘着沈線文及び隆帶上に粘着沈線文		赤褐色	阿玉台	金雲母・砂粒	
第56回23	胴	纏文L R	連続爪彫文、銅衛状文、隆帶	明褐色	勝坂	砂粒	66H
第56回24	胴	隆帶脇に連続爪形文		明褐色	勝坂	砂粒	66H
第56回25	胴	連続爪彫文、銅衛状文、隆帶上にR L 繩文		褐色	勝坂	織維・砂粒	
第56回26	肩	連続爪彫文、銅衛状文		褐色	勝坂	角閃石・砂粒	
第56回27	胴	連続爪彫文、銅衛状文		赤褐色	勝坂	砂粒	66H
第56回28	肩	隆帶脇に連続爪形文		明褐色	勝坂	砂粒	66H
第56回29	胴	隆帶脇に連続爪形文		褐色	勝坂	砂粒	P4
第56回30	肩	纏文L	連続爪彫文	明褐色	勝坂	砂粒	(H-6)グリッド
第56回31	口縁	沈線文		暗褐色	曾利	砂粒	15Y
第56回32	口縁	連続刺突文	半截竹管による口縁に平行した3本の沈線	暗褐色	加曾利E II	砂粒	
第56回33	口縁	纏文L R	隆帶	赤褐色	加曾利E II	白色粒子・砂粒	66H
第56回34	口縁	纏文R L	波状口縁、隆帶	褐色	加曾利E III	白色粒子・砂粒	
第56回35	口縁	纏文L R	把手、隆帶	灰褐色	加曾利E III	白色粒子・細粒・砂粒	
第56回36	胴	纏文R L	隆帶	暗褐色	加曾利E II～III	褐色粒子・白色粒子	15Y
第56回37	胴	纏文L R	磨消懸垂文	褐色	加曾利E II～III	砂粒	66H
第56回38	胴	纏文R L	磨消懸垂文	褐色	加曾利E II～III	白色粒子	
第56回39	胴	纏文R L	磨消懸垂文	褐色	加曾利E II～III		66H

第12表 遺構外出土の纏文土器一覧（1）

縄文番号	部位	特徴		色調	分類	胎土	その他・出土遺構等
		地文	装飾				
第56840	胴	縄文RL	連弧文	赤褐色	連弧文	細繩・砂粒	13Y
第56841	口縁	竹管による条線文		褐色	加賀利E III	白色粒子	66H
第56842	胴	条線文		明褐色	加賀利E III~IV	砂粒	66日
第56843	胴	竹管による条線文		赤褐色	加賀利E III~IV	角閃石・砂粒	66日
第56844	胴	条線文		褐色	加賀利E III~IV	白色粒子・褐色粒子・砂粒	
第56845	胴	条線文		明褐色	加賀利E III~IV	砂粒	P9
第56846	胴	蛇行条線文		黒褐色	加賀利E III~IV	砂粒	
第56847	胴	蛇行条線文		明褐色	加賀利E III~IV	砂粒	
第57848	口縁	縄文RL	口縁部無文帯・灘底起線区 酒による曲線文	褐色	加賀利E III~IV	褐色粒子・砂粒	
第57849	胴	縄文LR	微隆起線と暗消による曲線文 〔U〕状文か	黒褐色	加賀利E IV	白色粒子・砂粒	66H
第57850	胴	縄文RL	微隆起線・沈底による曲線文	暗褐色	加賀利E IV	褐色粒子・砂粒	94D
第57851	胴	縄文RL	微隆起線による曲線文	赤褐色	加賀利E IV	白色粒子・褐色粒子・砂粒	
第57852	胴	縄文RL	微隆起線・沈底による曲線文	暗褐色	加賀利E III~IV	褐色粒子・砂粒	
第57853	胴	縄文RL	微隆起線	赤褐色	加賀利E III~IV	砂粒・黄褐色粒子	3W
第57854	胴	縄文RL	隆苔による豊垂文	褐色	加賀利E III	白色粒子・砂粒	66H
第57855	胴	縄文RL	微隆起線	赤褐色	加賀利E III~IV	白色粒子・褐色粒子・角閃石・砂粒	
第57856	胴	縄文L	微隆起線	明褐色	加賀利E III~IV	角閃石・砂粒	
第57857	胴	縄文LR	微隆起線	褐色	加賀利E III~IV	砂粒	65H
第57858	口縁	縄文LR	微隆起線・口縁部無文帯	暗褐色	加賀利E IV	白色粒子・褐色粒子	
第57859	口縁	縄文RL	口縁部突起・口縁部無文帯	赤褐色	加賀利E IV	砂粒	
第57860	口縁	縄文R	微隆起線・沈底による「八」状文・口縁部無文帯	明褐色	加賀利E IV	砂粒	
第57861	口縁	縄文RL	微隆起線・沈底による「八」状文・口縁部無文帯	明褐色	加賀利E IV	砂粒	62と同一個体
第57862	胴	縄文RL	沈底による「V」状文	明褐色	加賀利E IV	砂粒	61と同一個体
第57863	胴	縄文RL	沈底による「V」状文	黒褐色	加賀利E IV	白色粒子・褐色粒子	
第57864	口縁	縄文LR	暗消による「V」状文・口縁部無文帯	黒褐色	加賀利E IV	白色粒子・褐色粒子	
第57865	口縁	縄文RL	沈底暗消による曲線文・波状口縁	暗褐色	加賀利E IV	褐色粒子	
第57866	口縁	縄文RL	沈底暗消による曲線文・刺突文・波状口縁	黒褐色	加賀利E III~IV	褐色粒子・角閃石・細繩	14Y
第57867	口縁	縄文LR	沈底暗消による曲線文・波状口縁	黒褐色	加賀利E IV	砂粒	
第57868	口縁	縄文RL	波状口縁・口縁部無文帯	暗褐色	加賀利E IV	黃褐色粒子	65H
第57869	口縁	縄文RL	波状口縁・口縁部無文帯・内側赤彩	褐色	加賀利E IV	白色粒子・砂粒	
第57870	口縁	縄文RL	波状口縁・口縁部無文帯	暗褐色	加賀利E IV	白色粒子・砂粒	77D
第57871	口縁		口縁部無文帯・赤彩	赤褐色	加賀利E IV	白色粒子・砂粒	
第57872	胴		鉗工具による2本の浅沈 螺旋文	黒褐色	加賀利E III	砂粒・角閃石	14Y
第57873	胴	縄文LR	沈底による「U」状文	褐色	加賀利E III~IV	砂粒	14Y
第57874	胴	縄文LR	沈底による「V」状文	灰褐色	加賀利E III~IV	黃褐色粒子	66H
第57875	胴	縄文LR	沈底による「U」・「V」状文	褐色	加賀利E IV	黃褐色粒子	
第57876	胴	縄文LR	沈底による豊垂文	赤褐色	加賀利E III~IV	砂粒	
第57877	口縁		刺突文・微隆起線・口縁部無文帯	褐色	加賀利E III~IV	白色粒子・砂粒	

第12表 遺構外出土の縄文土器一覧（2）

標図番号	部位	特徴		色調	分類	胎土	その他・出土遺構等
		地文	装飾				
第58図78	口縁		沈線、円形刺突文、口縁部 縦文帯	明褐色	加曾利E III	褐色粒子・黄褐色粒子	15Y
第58図79	口縁	縦文 R L	沈線、円形刺突文、口縁部 縦文帯	明褐色	加曾利E III~IV	白色粒子・褐色粒子	
第58図80	口縁	縦文 R L	沈線、円形刺突文、波状口 縁筋部に瘤状の小突起	暗褐色	加曾利E III~IV	砂粒	
第58図81	口縁	縦文 R L	沈線、円形刺突文、内外面 赤彩	褐色	加曾利E IV	砂粒	4W
第58図82	口縁	縦文 L R	帶縞文	明褐色	称名寺 I	褐色粒子・砂粒	14Y
第58図83	胴	縦文 R L	沈線	褐色	称名寺 I	細繩・砂粒	65H
第58図84	胴	縦文 R L	沈線による曲線文	暗褐色	称名寺 I	角閃石・砂粒	
第58図85	胴	縦文 R L	沈線による垂筆文	赤褐色	称名寺 I	褐色粒子・黄褐色粒子・砂 粒	
第58図86	胴	縦文 L R	沈線	明褐色	称名寺 I	砂粒	19Y
第58図87	胴	縦文 L	沈線	赤褐色	称名寺 I	角閃石・白色粒子・砂粒	65H 88と同一個体
第58図88	胴	縦文し	沈線	赤褐色	称名寺 I	角閃石・白色粒子・砂粒	65H 87と同一個体
第58図89	胴	縦文し	沈線	明褐色	称名寺 I	角閃石・白色粒子・砂粒	65H、18Y
第58図90	胴	縦文 R L	沈線による曲線文 (J字文)	褐色	称名寺 I	砂粒	
第58図91	胴	縦文 L R	帶縞文	暗褐色	称名寺 I	白色粒子・砂粒	
第58図92	胴	縦文 L R	沈線による曲線文	黒褐色	称名寺 I	褐色粒子・砂粒	
第58図93	胴	縦文 L R	沈線による曲線文	暗褐色	称名寺 I	砂粒	18Y
第58図94	胴	縦文 L R	帶縞文	黒褐色	称名寺 I	角閃石・砂粒	96D
第58図95	胴	縦文 L R	沈線による曲線文 (J字文)、 赤彩	赤褐色	称名寺 I	褐色粒子・砂粒	
第58図96	胴	縦文 L R	帶縞文	暗褐色	称名寺 I	砂粒	
第59図87	口縁		沈線区画内に列点充填	暗褐色	称名寺 II	角閃石・白色粒子・砂粒	
第59図88	胴		沈線区画内に列点充填	暗褐色	称名寺 II	砂粒	66H
第59図89	胴		沈線区画内に列点充填	赤褐色	称名寺 II	砂粒	
第59図90	胴		沈線区画内に列点充填	黒褐色	称名寺 II	角閃石・砂粒	
第59図91	胴		沈線区画内に列点充填	黒色	称名寺 II~縦之内 I	砂粒	66H
第59図92	胴		沈線による曲線文	明褐色	称名寺 II~縦之内 I	砂粒	18Y
第59図93	胴		沈線による曲線文	明褐色	称名寺 II~縦之内 I	砂粒	
第59図94	胴		沈線文	明褐色	称名寺 II~縦之内 I	角閃石・砂粒	
第59図95	胴		沈線区画内に列点充填	明褐色	縦之内 I	角閃石・砂粒	14Y
第59図96	胴		沈線による曲線文、刺突	褐色	縦之内 I	角閃石・砂粒	
第59図97	胴		沈線による曲線文、刺突	赤褐色	縦之内 I	角閃石・砂粒	
第59図98	胴		隆帶上沈線、刺突	黒褐色	縦之内 I	砂粒	
第59図99	胴		隆帶、沈線	黒色	縦之内 I	砂粒	
第59図100	胴		沈線による曲線文	褐色	縦之内 I	褐色粒子・砂粒	
第59図101	胴		沈線による曲線文	暗褐色	縦之内 I	砂粒	
第59図102	胴		沈線による曲線文	明褐色	縦之内 I	砂粒	18Y
第59図103	胴		沈線による曲線文	明褐色	縦之内 I	砂粒	
第59図104	胴		沈線文	明褐色	縦之内 I~縦之内 I	角閃石・砂粒	
第59図105	胴		沈線区画内に列点充填	明褐色	縦之内 I	角閃石・砂粒	
第59図106	胴		沈線による曲線文、刺突	褐色	縦之内 I	角閃石・砂粒	
第59図107	胴		沈線による曲線文、刺突	赤褐色	縦之内 I	角閃石・砂粒	
第59図108	胴		隆帶上沈線、刺突	黒褐色	縦之内 I	砂粒	
第59図109	胴		隆帶、沈線	黒色	縦之内 I	砂粒	
第59図110	胴		沈線による曲線文	褐色	縦之内 I	褐色粒子・砂粒	
第59図111	胴		沈線による曲線文	暗褐色	縦之内 I	砂粒	
第59図112	口縁	縦文 L R	口縁直下内面に沈線	赤褐色	縦之内 2	砂粒	
第59図113	口縁	縦文 L R	沈線、口辺に沈線と刺突	明褐色	縦之内 2	砂粒	
第59図114	胴	聚位細縫		褐色	粗製土器	褐色粒子・砂粒	
第59図115	底			褐色	称名寺 II~縦之内 I	砂粒	網代痕
第59図116	底			褐色	加曾利 E IV~称名寺	白色粒子・砂粒	

第12表 遺構外出土の縦文土器一覧 (3)

総合番号	器種名	形態	石材	刃部加工	彫形加工	成形加工	素材技術	素材形態	遺存状態	長さ	幅	厚さ	重積	備考
第53回9	石刀	四基	黒曜石	SP	SP	なし	不明	潤片	完形	23.92	15.38	4.59	1.1	
第53回10	石刀	半基	チャート	SP	SP	なし	不明	潤片	完形	20.78	14.46	4.85	1.0	
第53回11	石刀	四基	チャート	SP	SP	なし	不明	潤片	左側縁欠	32.37	20.68	3.97	1.6	
第53回12	石刀	半基	チャート	SP	不明	なし	不明	潤片	完形	29.25	20.52	8.68	4.2	未製品
第54回13	石刀	不明	チャート	SP	不明	なし	不明	潤片	脚部欠	21.54	16.38	4.29	1.4	
第54回14	石刀	半基	黒曜石	SP	不明	なし	不明	潤片	完形	19.16	14.67	4.14	0.9	未製品
第54回15	潤片		黒曜石	なし	なし	なし	HI	縦長潤片	完形	20.43	8.49	6.95	0.6	
第54回16	潤片		安山岩	なし	なし	なし	HD	縦長潤片	完形	21.11	15.08	4.47	1.2	
第54回17	潤片		安山岩	なし	なし	なし	HD	縦長潤片	完形	24.07	17.49	8.09	2.5	
第54回18	潤片		黒曜石	なし	なし	なし	不明	不明	上部、右側 縁欠	12.07	16.78	4.81	0.9	
第54回19	潤片		黒曜石	なし	なし	なし	不明	不明	右側縁欠	27.69	21.69	9.52	3.6	
第54回20	潤片		黒曜石	なし	なし	なし	HD	縦長潤片	完形	16.27	15.48	7.10	1.0	
第54回21	潤片		凝灰岩	なし	なし	なし	不明	岐坂潤片	上部欠	34.29	22.85	4.89	1.9	
第54回22	潤片		黒曜石	なし	なし	なし	不明	横長潤片	完形	41.74	39.37	11.68	11.5	
第54回23	潤片		チャート	なし	なし	なし	不明	不明	左側縁欠	26.53	19.18	6.22	2.4	
第54回24	潤片		黒曜石	なし	なし	なし	HD	横長潤片	完形	26.91	26.62	9.32	4.3	
第54回25	使用前のあ る潤片		黒曜石	なし	なし	なし	不明	縦長潤片	上部欠	20.71	18.15	6.06	1.5	
第54回26	次加工のあ る潤片		黒曜石	SP	なし	なし	不明	横長潤片	完形	24.89	12.01	6.69	1.5	
第54回27	次加工のあ る潤片		粘板岩	HD	なし	なし	偏平潤	完形	73.10	69.61	13.93	112.0		
第54回28	石核		チャート	なし	なし	なし	HD	通用外	完形	37.99	59.27	34.43	97.5	
第55回29	打製石斧	分離	ホルンブッシュ	HD	HD	HD	不明	横長潤片	完形	81.94	54.94	18.18	88.3	
第55回30	打製石斧	分離	閃綠岩	HD	HD	HD	不明	横長潤片	基部欠	86.37	63.95	20.41	117.4	
第55回31	打製石斧	短離	ホルンブッシュ	HD	HD	HD	不明	横長潤片	完形	132.84	44.99	26.99	185.4	
第55回32	敲石		砂岩	通用外	通用外	通用外	通用外	難	上部欠	104.33	57.30	36.92	324.6	
第55回33	敲石		蛇紋岩	通用外	通用外	通用外	通用外	難	下部欠	98.61	42.83	35.45	230.4	
第55回34	敲石		砂岩	通用外	通用外	通用外	通用外	難	完形	41.03	34.32	27.49	49.8	
第55回35	敲石		片岩	通用外	通用外	通用外	偏平潤	右側縁、下 部欠	134.04	40.52	25.55	150.9		
第55回36	石核		花崗岩	通用外	通用外	通用外	偏平潤	断片	115.40	82.35	46.03	734.9		

第13表 遺構外出土の繩文時代石器一覧

(単位: mm, g)

國版番号	遺物	種類	時代	産地	特記事項	出土位置
国版28-1	碗	陶器	中世	志戸呂古から山 潟戸美濃系	口縁部、色調は暗紅褐色、須恵質	15Y
国版28-2	皿	陶器	16c末～17c初	瀬戸美濃	口縁部、内側に線粒	②区
国版28-3	天目碗	陶器	中世末	瀬戸美濃	口縁部～体部下半、外側面に鉄粒	(P-7)グリッド
国版28-4	天目碗	陶器	17c～後	瀬戸美濃	体部、外側底を除き鉄粒	②-A区
国版28-5	皿	陶器	中世末	瀬戸美濃	口縁部～体部下半、底部を除き鉄粒	(P-7)グリッド
国版28-6	香炉	陶器	17c～後	瀬戸美濃	底部、外側面に鉄粒	②-A区
国版28-7	香炉?	陶器	中世	瀬戸美濃	体部、外側面に鉄粒	15Y
国版28-8	器物不明	陶器	中世	瀬戸美濃	体部、外側面に鉄粒、胎土の色調は灰色	②区
国版28-9	中皿	陶器	17c～18c中	肥前系京焼	体部、内外面に施釉	③区
国版28-10	中碗	陶器	17c～18c中	肥前系唐津	体部、内外面に施釉、胎土の色調は暗茶褐色	③区
国版28-11	中瓶	陶器	江戸初期	瀬戸美濃	体部、内外面に灰釉	(J-4)グリッド
国版28-12	土瓶	陶器	19c	京信楽系	体部、外側文様あり、胎土の色調は暗灰褐色	③区
国版28-13	かわらけ	土器	中世末～近世		口縁部、色調は褐色	③区
国版28-14	はうろく	土器	中世		体部、外側面黒色を呈するが、胎土の色調は灰白色	19Y
国版28-15	鉢類	陶器	15～16c	常滑	体部、外側面に鉄粒、胎土の色調は暗褐色	②-A区
国版28-16	鉢?	陶器	江戸?	常滑?	体部、全体の色調は暗茶褐色	③区
国版28-17	振子	陶器	中世末～近世初	信楽	体部、振子は輪状・7本で一單位	(E-5)グリッド
国版28-18	碗	磁器	17c末～18c	肥前系	口縁部、外側に文様あり	(J-4)グリッド
国版28-19	中碗	磁器	17c末～18c中	肥前系波佐見	口縁部、外側に草花文の染付あり	(H-4)グリッド
国版28-20	蓋	磁器	18c～19c	肥前系	口縁部、外側に文様あり	③区
国版28-21	蓋	磁器	19c	瀬戸美濃系	口縁部、外側に文様あり	③区

第14表 遺構外出土の陶磁器・土器一覧

第4章 まとめ

中野遺跡は、今までの発掘調査から、旧石器時代、縄文時代早～晚期、弥生時代後期、古墳時代前～後期、平安時代、中・近世の複合遺跡として判明している。

そして、今回の中野遺跡第49地点の調査では、旧石器時代の石器集中地点1ヶ所、縄文時代早期の炉穴1基、縄文時代中期の住居跡1軒・土坑10基、弥生時代後期の住居跡6軒、古墳時代後期の住居跡1軒・土坑2基、平安時代の住居跡1軒・土坑5基、中・近世の段切状造構1ヶ所・井戸跡4基・土坑12基など数多くの遺構が検出され、同時に遺物が出土した。また、調査区全域には、縄文時代中期後葉～後期前葉を中心とした遺物包含層の堆積が見られ、多くの土器・石器を出土した。

ここでは、以下のいくつかの点についてをまとめるにすることにする。

1. 縄文時代遺構外出土土器について

縄文時代の遺構外から出土した遺物（土器）については、本文中大きく縄文遺物包含層出土のもの（以下、包含層）と他時代の遺構、攪乱及び表土中から出土したもの（以下、遺構外）に分けて記したが、ここでは包含層出土土器と遺構外出土土器両者をまとめて述べる。

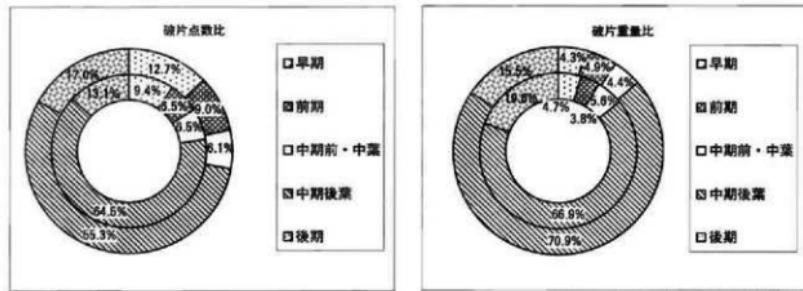
第60図に包含層と遺構外出土の詳細な時期が特定できた土器について点数比・重量比をグラフとして示した。

このように時期的に見ると遺構外でも包含層同様縄文時代早期から後期の土器が出土しており、各時期別の出土比率についても遺物包含層同様に中期後葉の加曾利E式が過半数を占めていた。加曾利E式以外では加曾利E式と共に伴用をもつ名寺式や遺構（炉穴）の存在する早期条痕文系の土器片が比較的多く見られた。早期については微小な破片のため図版化していないが包含層中では見られなかった撲糸文系の土器片も1点出土した。中期後葉や後期の土器片が比較的大型の破片であることにより点数比と重量比では各時期間の比に差があるが、点数、重量ともに出土比の傾向は包含層と遺構外同様であることから後世他時代の遺構、攪乱が包含層を切り、埋没する際その覆土に縄文包含層遺物を混入したものであり、本来は現在より広範囲に包含層が形成されていたと考えられる。

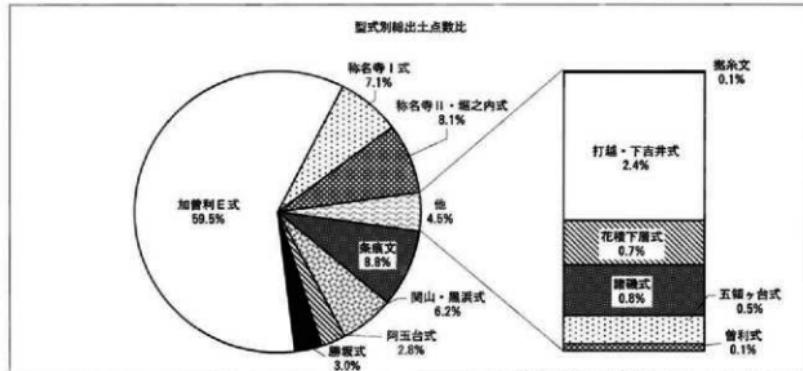
中野遺跡では今までに早期の炉穴11基、中期の住居跡2軒、中期後葉を中心とした土坑50基等の遺構が検出されているが、包含層が確認報告されているのは本報告の第49地点を除くと第43地点（尾形・深井 1999）のみである（第2図参照）。第43地点においても包含層では今回同様、中期後葉から後期前葉を主として、早期後葉から後期前葉にかけての時期の土器が出土していたが、後期前葉の名寺式・堀之内式の出土割合が多かった。また、第25地点では包含層の確認はされなかったが遺構外で縄文早期から晩期にかけての土器片が出土している。しかしながら、遺構の検出件数は少なくこれらの遺構外出土遺物は削平された包含層に由来する遺物と思われる。これらのことから本調査区南～西方向への包含層の展開が予想される。また、遺物出土量が他の時期を圧倒して多いにも拘わらず、中期後葉から後期前葉にかけての遺構（特に住居跡）が少ないが、これだけの量の遺物が遺構に伴わないとは考えにくく包含層の展開とともに検出される可能性も高いと考えられ今後の調査が注目される。

本地点では注目される土器が数点出土しているが、まずあげられるのは早期末葉の打越式および下吉井式に比定される土器片である。市域では今回が初めての出土であることから、中期後葉の条痕文系土

時期	分類	破片点数			破片重量(g)		
		包含層	遺構外	計	包含層	遺構外	計
早期	縄文	0	1	1	0	4	4
	条狀文	57	85	142	173	562	889
	打越・下吉井式	28	19	47	327	139	496
	早中期	85	106	221	889	809	1,698
前期	花柄・横式	3	11	14	57	115	172
	關山・黒浜式	42	56	98	122	486	772
	縦波式	11	5	16	162	43	205
	前期型式不明	3	0	3	23	0	23
前・中期	前中期	59	96	155	728	930	1,658
	五輪・合式	2	7	9	51	54	105
	阿玉台式	26	59	85	55	364	335
	輪波式	31	29	60	637	434	1,071
中期	前・中期	59	65	124	1,052	823	1,875
	曾利式	1	1	2	23	15	38
	加曾利E式	302	294	496	2,584	3,874	6,458
	加曾利D I ~ II	22	20	42	804	658	1,462
後期	加曾利D III ~ IV	75	51	126	1,992	1,282	3,274
	加曾利E III ~ IV	247	184	431	6,530	6,589	13,119
	条狀文	35	43	78	722	918	1,640
	後中期	582	593	1,175	12,855	13,394	25,991
後期	中期型式不明	44	496	540	433	2,598	3,031
	中期計	685	1,154	1,839	14,140	16,757	30,897
	中期後期~後期	—	344	344	—	4,087	4,087
	名寺I式	57	83	140	1,008	1,576	2,654
後期	名寺II・縦之内式	61	99	160	2,598	1,232	3,830
	後期計	118	162	300	3,606	2,908	6,514
	時期・型式不明	24	75	99	82	192	274
	合計	971	1,987	3,958	19,445	25,583	45,128



グラフの内円は包含層、外円は遺構外を示す



グラフは時期・型式の特定出来たものについての割合を示す

第60図 縄文時代の包含層・遺構外出土土器の割合

器に後続する時期の土器様相について知る足がかりとなる資料として注目される。

もう一点は表面の剥離が著しく型式は不明であるが前期の織維土器と思われる土器片である。(図版19-2) 一般に織維土器では焼成の段階で混和材の織維は燃焼・焼失し、土器中に微細な空洞として痕跡が残る程度であるが、本資料の剥離面にはイネ科植物の葉脈の痕跡が観察できる。葉の基部周辺表面の痕であるが葉舌等の痕跡は観察できず種の特定には至らなかった。また、混和材として使用する織維としては大型の葉片であり主材であったとは考えにくいが、織維材料の一端を垣間見ることのできるものとして興味深い資料である。

2. 弥生時代後期末葉～古墳時代前期初頭の土器について

弥生時代の造構としては、住居跡6軒(13~15・17~19Y)とピット1本が検出されている。しかし、今回出土した土器については、良好な資料に乏しかったため、積極的に細かく時代設定を行うことはしなかった。本報告での時期の特定は、おそらく古墳時代前期初頭に入るものが多く存在するが、すべて弥生時代後期末葉～古墳時代前期初頭と扱うこととした。

ここでは、特徴ある土器について簡単に触れることにしたい。

まず、東海系の特徴を有する土器としては、14号住居跡の環部底部に稜を有する高杯(第33図4)が挙げられる。この土器は、内外面赤彩されるが、元屋敷型式(貴 1991)の特徴を備えているものと思われる。また、廻間編年(赤塚 1990)では、「杯部に稜をもつ有稜高杯。中・小型品」である「高杯C」として分類されるものであろう。7期以降では環部が浅くなるため、おおよそ6期の器形に類似するもので、廻間II式期に比定される。

また、今回は東京湾沿岸系の特徴を有する土器が比較的多く出土しているものと思われる。例として挙げるならば、14・15号住居跡の口縁部外面に粘土を貼付け、複合口縁を作出する鉢あるいは高杯(第33図3・第35図6)、14号住居跡の口縁部外面に羽状繩文が施された鉢あるいは高杯(第33図2)、14・18号住居跡のナデ壺(第33図7・第36図2)、15号住居跡の粘土挟み込み技法の口縁部を呈する壺(第35図4)、自繩結節文が施文される壺(第33図1、第35図5)、1号ピットの広口壺(第35図13)などである。

以上、出土土器の特徴から見ると、大まかに東京湾沿岸系の土器が、東海系の土器より目立った存在を示しているものと考えられる。しかし、当地での弥生時代後期～古墳時代前期における土器変化は、東京湾沿岸系の土器をベースに「東海地方東部の影響がある段階→東海系西部が主体となる段階→畿内系の土器群に統一されていく段階」というようにいくつかの大きな画期を経て、最終段階として畿内系土器様式に収束するという認識で捉えているところである。つまり、従来通りで考えれば、廻間II式期の高杯が共存する段階であれば、かなりの比重で東海系西部の土器が主体となるものであろう。

これについては、上尾市稻荷台遺跡の報告中、書上元博氏は、「畿内の布留式土器群を豊富に持つ集落が営まれる一方、ほぼ時を同じくして本遺跡のようにそうした土器が明確でなく、古い要素の目立つ集落が存在していたと考えられることは極めて興味深いことである」(書上 1994)に共通したものと考えられる。

このように東京湾沿岸系の特徴を有する土器が、今回古墳時代に入るまで色濃く残ることは、当地ではかなりこうした地域との深い結び付きがあったものと考えざるを得ないであろう。弥生時代後期～古墳時代初頭における土器変化は、上記したように最終段階として畿内系土器様式に収束することは広域

での認識としては理解できるものであるが、その前段階における各地でのビンボイント的な様相は、本来一言で説明できるほど単純ではないのである。今回出土した壺形土器は、大方が東海系を初源とするハケ壺であり、東京湾沿岸系の輪積壺ではないという現象についてもおそらく当地では、ハケ壺自体が東京湾沿岸系の土器の影響を受ける前にすでにもう伝統的な煮沸具として定着しているものであったのであろう。煮沸用として使用する壺は、鉢・高杯・壺などの供献・貯蔵用の装飾性の強い土器と違い、日常生活では欠くことのできない必需品として、在地性の強い土器が使用されていたものと推測される。

つまり、集落に見られる土器様相の較差については、弥生時代後期という社会が、小地域文化圏として存在したという要因に終始するが、その小地域の末端に枝分かれするような村単位というさらに小地域圏での伝統性が深く関与し、外来文化の受容の仕方がそれぞれの遺跡での土器様相に反映してくるものと考えた方が自然であろう。

また、遺構外であるが、壺形土器の脚台部のミニチュア土器（第59図117）1点が出土している。この土器は、現器高2.6cm・底径4.0cmで、脚は若干短めで、やや内湾気味の器形である。器面の仕上げは、内外面でいねいにヘラ磨き調整が施され、比較的に精緻な作りのものである。

この壺形土器のミニチュア土器については、北本市櫻戸遺跡の報告中（吉見 2000）で、大宮台地周辺から出土した6点の資料が紹介されている。そのうちの脚台部が幾分内湾する器形のものは、上尾市尾山台遺跡出土の5、嵐山町蟹沢遺跡出土の6の2点に類似するものであろう。吉見 昭氏によると、こうした壺形土器のミニチュア土器は県内でも出土例が少ないということから、その特殊性について問題を提起している。特に、今後の課題としているが、櫻戸遺跡出土の大きく重に作られた土器について、「機能優先の台付壺に祭祀的な意味をもたせるにあたって、もとの形を故意に崩して作った」と何らかの意図があったのではないかと指摘している。

3. 古墳時代66号住居跡出土土器について

古墳時代後期の66号住居跡から出土した土器（第41・42図）については、すべて土師器で、器種としては壺・鉢・瓶・壺形土器に分類することができる。ここでは、主要土器である壺・瓶・壺形土器について簡単に触れることにより、時代観を把握することにしたい。

壺形土器は、7点の実測可能な土器が出土している。本文中ではこれら7点の土器は、全面が黒く煤けていることから、黒色系土器の可能性があると指摘している。これらの土器は、志木市周辺では、7世紀以降に主体をもつ無彩系土器の胎土・調整に類似することから、在地系黒色系土器に相当するものと考えられる。それぞれの口径は、1-12.9cm、2-12.8cm、3-13.4cm、4-12.8cm、5-14.4cm、6-13.3cm、7-14.8cmを測り、7世紀の古様相が13cm前後を基本として、中葉には12・11cm前後、後葉には11・10cmというように7世紀中葉以降、小型化の傾向にある中では依然その傾向を示していないものと言える。壺形土器については、その特徴から7世紀前葉の範囲で捉えられるものである。

瓶形土器は、底部が筒抜け式の小型品（11）と大型品（12・13）が出土している。小型品については、大型品同様に、7世紀以降普遍的に存在することが判明している（尾形 2001）。しかし、7世紀以降の小型品については、言わば大型品の小型版で、口縁部は単純口縁を基本とするものである。本例のような口縁部が複合口縁を呈し、口縁部から底部にかけて、大きく逆三角形状にすぼまる小型品については、弥生時代からの伝統的なタイプで、大型品出現以前から存在するものである。このタイプについては、市内では6世紀中葉までは確認されているが、7世紀以降、市内ではまだ確認されていない。本来

このタイプには必ずハケ目調整が使用されているが、本例ではヘラ削り・ヘラナデの調整が使用されている。のことから、本例は、古様相である形態のみが7世紀以降にも引き継がれ、成形・調整面では新しい技法が取り入れられて製作されたものと理解できる。

大型品についても小型品同様やはり口縁部が複合口縁を呈するタイプである。しかし、複合部の作りは、小型品のものに比べ、粘土帯の盛り上がりが弱く、輪積み痕を残す程度である。おそらくこの形骸化した特徴は、複合口縁の最終形態と考えられる。このタイプの壺形土器については、志木市では今まで城山遺跡第1地点3号住居跡（佐々木・尾形 1988）と中野遺跡第25地点19号住居跡（尾形・深井 2001）で出土している。いずれも7世紀前葉に比定される。

また、多孔式（13）のタイプは、本市では「概して大型壺の口縁部が複合口縁から単純口縁へと定型化し、甕の変化に応じた変化を大型壺が繰広げる段階に出現」すると分析されている（尾形 1991）。こう理解すると、本例の壺（11・12）の口縁部はまだ単純口縁へと定型化が見られないことから、この多孔式のものの出現は、從来より早い時期であるものであろう。

甕形土器については、長甕（15～20）と丸甕の小型品（8・9）・大型品（14）に区分できる。まず、長甕は、今回の出土土器の中で一番問題を提示するものである。それは、最大径の位置にある。器形全体が確認される土器のうち、15・16は胴部中位に最大径をもつが、17・18は口縁部に最大径をもつ。從来の編年観では、前述した壺・壺形土器の特徴に伴う甕形土器は、前者の15・16のような胴部中位に最大径をもつタイプであれば問題はない。しかし、後者の口縁部に最大径をもつタイプについては、7世紀後半以降に主体があるものであり、その初現は7世紀中葉であろう。

丸甕については、小型品の8が小型甕として扱っているが、直口壺の類であろう。大型品の14は、最大径が胴部中位であることから、長甕の15・16に同時期として違和感がない。7世紀前葉の特徴である。

以上、66号住居跡出土土器について、器種毎にその特徴を見ていくと、從来の編年観とは若干様相を異にするものであろう。

まず、壺形土器は、口径13cm前後を基準とすることから、まだ法量の小型化が見られないと、7世紀前葉の範疇で捉えられるものである。

壺形土器は、12・13の土器の特徴から、7世紀前葉に比定できる。多孔式のタイプの出現は、從来から7世紀前葉と考えられていたが、複合口縁を呈する土器との共併例が多く、若干様相が異なるものである。

甕形土器は、長甕が前述したように最大径の位置に2タイプあることがわかった。前者は胴部中位に後者は口縁部に最大径をもつ。そして、後者については、從来7世紀後葉以降を主体とするタイプのものであることから、その初現期のものと考え、7世紀中葉に位置付けるしかないであろう。

以上から総合すると、本住居跡出土の土器は、壺・壺形土器から7世紀前葉に、甕形土器から7世紀中葉に比定されるものであるが、この時間差を住居の存続期間として捉えるならば、本住居跡は、7世紀前葉から中葉にかけて機能していたと考えることが可能である。さらに、本住居に生活していた住人から見れば、他器種の特徴がまだ7世紀前葉を備えている段階に近隣の村々を含めた中でもいち早く入手した新製品が、この口縁部に最大径をもつ長甕であったものであろう。

4. 段切状造構の時期と行光寺との関連について

本地点においては、段切状造構とした平場面から土坑・ピット列等の一連の造構が検出され、そのう

ち67号土坑からは人骨が出土した。時期については、陶磁器等の出土遺物から、比較的近世に下るほどの新しい遺物は少なく、15~16世紀代の中世と所産とするものが安定して出土していることから、この遺構についても遺物の年代とほぼ同時期と考えてよいものであろう。

のことから、これらの一連の遺構は、中世の墓域あるいは寺院関連の遺構であるものと想定し、これに関する文献資料を当たることにした。その結果、資料1の『館村旧記』の一部に興味深い記述を見出すことができた。

それは「行光寺」と呼ばれる館村の菩提寺に関する記事である。この資料によると、宝幢寺の寺の門外の西の方面的畠地は、村中の墓場であり、そこには地蔵堂があった。そして行光寺は館村の菩提寺であり、宿の佐藤五左衛門の屋敷は行光寺の寺地であり、その後寺は潰れて天正年中(1573~1579年)に祐円和尚が地蔵堂と題して今の宝幢寺を開基したという。

それでは実際、行光寺の位置をどう理解するかである。宝幢寺の西の方面的畠地は墓場であり、地蔵堂があったらしいが、行光寺とこの一連の墓場・地蔵堂とは同一のものなのであろうか。当初、行光寺が潰れて、祐円和尚がわざわざ地蔵堂を題として、宝幢寺を新寺に開基し、地蔵堂の本尊を宝幢寺の本尊としていることからも地蔵堂と行光寺が同時に機能が停止し、その結果地蔵堂の本尊を宝幢寺の本尊としたのではないか。つまり、行光寺と総称されるような敷地の一部に地蔵堂が存在していたものと理解していた。しかし、記述には宿の佐藤五左衛門の屋敷が行光寺の寺地であったということから、この行光寺の位置が特定できることになる。『郷土の地名』(志木市 1988)を参照すると、この「宿」は小字名で、上宿・中宿・下宿という地名が残っていることから、現在の柏町三丁目に該当するものと考えられる。また、屋号としても、柏町三丁目・宮原詳一家が「宿」と呼ばれていたとある。そこで、『館村旧記』の「柏之城落城後の屋敷割の図」を参照し、佐藤姓を調べてみると、柏城の東門のすぐ西側に

慈王山地蔵院宝幢寺之事

(又地王山とも書けり時の住僧の心に任せて如レ
斯古は地王山と書て有レ之)

一、山城国醒蘭三宝院末寺

新義真三宗宝幢寺

(中略) 右宝幢寺の寺地は元来大石四郎殿の屋敷跡にて芝地也。時に今この寺の門外の西の方の畠は、前々より村中の墓場にして、此所に地蔵堂あり。且つ昔館村の菩提寺は、行光寺とて宿の佐藤五左衛門が屋敷は、彼の行光寺の寺地なりしが中比此の寺潰て、後天正年中に至り、祐円和尚右の地蔵堂を題として、今の宝幢寺を新寺に開基す。即ち右地蔵堂の本尊を宝幢寺の本尊とす。長三尺二寸也。依レ之隣号を地蔵院と号せり。彼の祐円始めは水子村大応寺の住僧たり。天正十一年四月中旬、長勝院に來り住す。先づ宝幢寺を開基し、次に大和田村普光明寺を開基し、四ヶ寺兼常し開山の僧なり。然るに、宝幢寺の本尊地蔵を田島村普善寺の本尊とし、又水子村大応寺の本尊地蔵を宝幢寺の本尊とす。長五尺斗なり。是は人王六十八代後一条院の御宇の比、增長の作なりといへり。并て打鳴しも大応寺より持來れり、故に今の宝幢寺本尊の腹襤に水子村の者の施主附けの帳面あり。打鳴しの銘にも水子村の施主付け有レ之也。彼の祐円は四ヶ寺兼常なるが故に、如レ斯本尊を心の儘にす。祐円和尚終に慶長元年十月廿一日、長勝院において入寂す。年九十九才也。石碑は則ち長勝院に有レ之也。

『館村旧記』より

四軒ほど佐藤姓をもつ屋敷が存在したことが確認できた。おそらくかつてはこの付近に行光寺と呼ばれる館村の菩提寺があったものと想像されよう。

筆者は、前述したように、今回の調査により検出された段切状造構や一連の造構について、短絡的に行光寺の一部であろうと考えた時期があり、すでに報告書等で説明してしまった経緯がある。しかし、この行光寺については、宝幢寺の門外の西の方面にあった墓場そして地蔵堂を含めた墓全域として直接的に理解するには根拠がないものところで敢えて訂正したいものと考える。実際、柏町三丁目として取り扱われる行光寺が、現在の柏町一丁目の宝幢寺の西方までという広大な敷地すべてを保有したとは考えづらいものである。例え、「寺」そのものの考え方方が、墓場や一連の建物（地蔵堂など）を含めた墓全域を示したとしてもあまりにも広大すぎるであろう。

現在の柏町三丁目付近にあった館村の菩提寺である行光寺は、宝幢寺の西方にある墓場・地蔵堂とは位置関係では直接的に同じ敷地とするには難しいところである。しかし、こうした墓場や地蔵堂を含めすべてを機能させるためには、行光寺が深く関わっていたとするのが自然ではないだろうか。「村中の墓場」という記述からも館村の菩提寺である行光寺が関与していない筈がないからである。

よって、今回検出された段切状造構や一連の造構は、行光寺関連という直接的な名称は適当ではなく、現時点では、宝幢寺の西方の墓場に関連する造構というだけに留めることが最良であるかもしれない。そのため、確信的には一步後退した結果となってしまったが、このように今回の発掘調査により、郷土に遺る貴重な文献と実践的に比較検討が行えることは、何よりも生きた歴史を追究することに繋がったものと評価できるものであろう。今後も発掘調査による貴重な発見により、一つ一つというゆっくりとしたペースではあるが、新たなる歴史の解明がなされていくことに期待される。

【註】

- (1) 在地系黒色系土器の名称については、筆者が使用したもので、7世紀以降に土師器の主体となる無彩系の环・瓶・壺形土器の始土・調整に類似し、明らかに6世紀代に見られる黒色系土器とは違うものとして説明している(尾形 2002)。
- (2)『館村旧記』の著者等については、本報告書の13ページ参照。この資料は、志木市において平成8年3月25日付けで市指定文化財に指定されている。種別：有形文化財、種類：古文書・書籍・典籍、所在地：柏町3丁目3番28号、所有者：宮原詳一。

【引用・参考文献】

- 赤塚次郎 1990『廻間遺跡』財団法人愛知県埋蔵文化財センター
- 石井寛 1992『称名寺式土器の分類と変遷』『調査研究集録』第9回 財団法人横浜市ふるさと歴史財团
- 尾形則敏 1991『第3節 まとめ』『西原大塚遺跡第7地点 新発見第3地点 中野遺跡第7地点 城山遺跡第6地点発掘調査報告書』志木市の文化財第15集 志木市教育委員会
- 2001『志木市における古墳時代の土師器の編年(2) - 5世紀から7世紀の瓶・壺形土器の変遷-』『あらかわ』第4号 あらかわ考古談話会
- 2002『武藏野台地北西部における古墳時代の地域性-集落を中心とする5世紀から7世紀の土器様相-』『あらかわ』第5号 あらかわ考古談話会
- 尾形則敏・深井恵子 1999『志木市遺跡群9』志木市の文化財第27集 志木市教育委員会
- 2001『埋蔵文化財調査報告書2』志木市の文化財第31集 志木市教育委員会
- 書上元博 1994『Ⅷ. 発掘調査の成果と課題 2. 稲荷台遺跡出土の古墳時代初頭土器群の位置付け』『稲荷台遺跡』埼玉県埋

藏文化財調査事業団報告書第139集 財團法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
河野重義・大野邦彦・鹿取涉・江口邦泰 1997『八ヶ谷戸遺跡第二次調査』一陽和病院内における調査－ 医療法人社団一陽
会陽和病院・八ヶ谷戸遺跡調査会
佐々木保俊・尾形則敏 1988『城山遺跡発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第5集 志木市遺跡調査会
志木市 1988『郷土の地名』志木市史調査報告書
賀 元洋 1991『欠山・元屋敷様式の高環の分類(二)』『三河考古』第4号
吉見 昭 2000『櫛戸遺跡』北本市櫛戸遺跡調査会発掘調査報告書 北本市櫛戸遺跡調査会

[付 編]

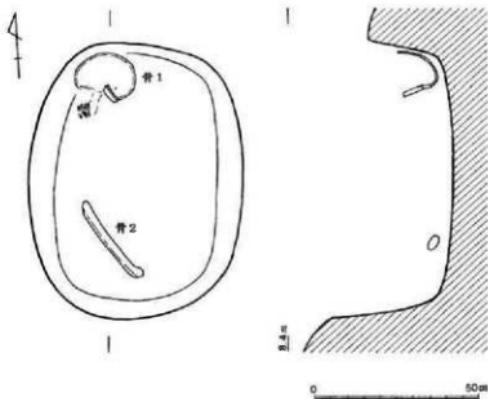
自然 科 学 分 析

I. 67号土坑・71号土坑出土の人骨・獸骨

西本豊弘、(国立歴史民俗博物館)

中野遺跡第49地点67号土坑にはヒトが埋葬されていた。この人骨は出土層位から中世のものと推測された。出土状態は、第61図に示したように、骨の残存状態は悪く、頭部と四肢の一部が認められただけである。そのうち取り上げられた試料は頭部の一部のみであり、歯と鼓室部（耳の部分）を確認した。歯の内容は右上顎の第1小臼歯、左上顎の大臼歯・第1・2小白歯・第1大臼歯、左下顎の第2小白歯、右下顎の第1・2小白歯・第1大臼歯と上顎切歯2個であった。いずれも歯冠部のエナメル質のみであり、象牙質とセメント質は消滅していた。歯冠部分の磨耗がほとんど見られないことから、15歳から18歳程度の青年と推測され、歯が小さいことから女性の可能性が高い（図版29・30）。

また、71号土坑の堅坑部分よりウマあるいはウシの四肢骨の破片と思われる保存状態の悪い骨片も検出されている（図版30）。



第61図 67号土坑人骨出土状態 (1/15)

II. 71号土坑出土の灰試料

鈴木 茂 (マレオ・ラボ)

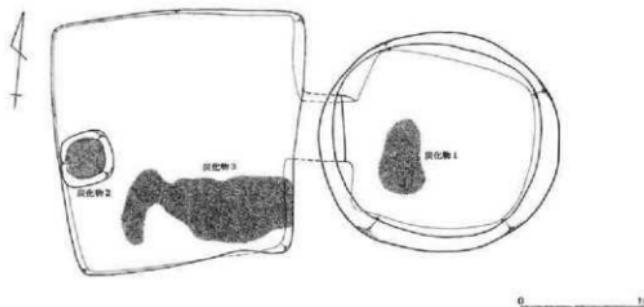
イネ科植物は別名珪酸植物ともいわれ根より大量の珪酸分を吸収し葉や茎の細胞内に沈積させることが知られている。こうして形成されたものを植物珪酸体（機動細胞珪酸体や単細胞珪酸体など）といい、機動細胞珪酸体については藤原（1976）や藤原・佐々木（1978）など、イネを中心としたイネ科植物の形態分類の研究が進められている。こうしたことから、得られた灰試料についてその植物珪酸体（機動細胞珪酸体）の検出を図り、その形態を観察することによって母植物（イネ科植物）についてある程度検討ができると考える。

中野遺跡第49地点において行われた発掘調査で、中世と考えられている地下式坑（71D）より炭化物を多く含む土層が3地点（炭化物1～3）において認められた（第62図）。これらのうち炭化物2および3には灰とみられる白～灰白色物が多く観察され、この一部について植物珪酸体分析を行い、観察される機動細胞珪酸体の形態から採取された植物遺体について検討した。

なお、採取された植物遺体の一部について実体顕微鏡下で観察した結果、イネの穎の破片が数点認められた。また、炭化物1については炭化材樹種同定が、炭化物2においては炭化種子同定が行われている。

1. 分析方法

採取された灰？試料について、現生植物の標本作製と同様の方法を用いて植物珪酸体の検出を図った。すなわち、乾燥させた試料を管瓶にとり、電気炉を用いて完全に灰化するのであるが、灰化する行程は藤原（1976）にはほぼしたがって行った。その行程は、はじめ毎分 5°C の割合で温度を上げ、 100°C において15分ほどその温度を保ち、その後毎分 2°C の割合で 550°C まで温度を上げ、5時間その温度を保持して、試料の灰化を行う。灰化した試料についてその一部を取り出し、グリセリンを浸液としてプレパラートを作製し、検鏡した。



第62図 71号土坑炭化物出土状態 (1/40)

2. 観察結果

2試料ともほぼ同様の植物珪酸体、すなわち連なった状態の単細胞珪酸体や単体あるいは連なった状態の機動細胞珪酸体が観察された。そのうち単細胞珪酸体には縦方向に並ぶものと、横方向に配列するものの2種類が認められた。以下に観察された珪酸体の記載を示す。

1つは断面形態が木槌あるいは鳥が翼を広げ滑空している時のような形状をしている機動細胞珪酸体（図版31-5-a）で、裏面部はやや窪んでる。大きさは、縦長が40~50μm、横長が40μm前後である。側面（5-b）および裏面形態（5-d）は長方形で、側長は10~25μmほどである。表面形態は細長い棒状（5-c）である。以上のような形態からこの機動細胞珪酸体についてはシバ属と判断される。

また、胸の中央部分が大きく凹み、先端部分の中央もやや窪んで単細胞珪酸体が蝶の行列のように縦方向に連なった状態（図版31-8）のものも観察される（キビ族型）。しかしながらこれだけでは母植物について述べることはできないが、上記したシバ属にも同様の単細胞珪酸体が形成されることから、この単細胞珪酸体列もシバ属に由来するものと推察される。

断面形態がイチョウの葉形（図版31-1-a、2-a）をしている機動細胞珪酸体も若干観察される。この珪酸体の側面部分に突起が、表面部分に窪みが、また裏面部分には浅い亀甲状紋様が一部認められる。大きさは、縦長が40~50μm、横長が30~40μmである。側面形態は長方形（1-b、2-b）で、側長は40~50μmで、側面には1本の稜線がみられる。表面形態はやや細長い棒状を呈し、中央部分は溝状に浅くくぼんでいる。また、側面の稜線部分ではくさび形に突出する。裏面形態は長方形をしており、一面に浅く小さな亀甲状紋様が認められる。以上のような形態からこの機動細胞珪酸体についてはイネと判断される。

また、胸の中央部分が大きく凹み、先端部分の中央も窪んで、口をとがらせたような形態をしている単細胞珪酸体が、先のキビ族型と異なり横方向に連なって観察される（図版31-4）。こうした配列はイネ、マコモ、ヨシなどに特徴的にみられるものである（イネ型）。さらに鳥のくちばし状の突起を持つ珪酸体（図版31-3）も認められ、これはイネモミに形成される珪酸体と判断される。

その他、鼓のような形態をした単細胞珪酸体が多く連なっている珪酸体も認められる。これはタケ・ササ型の単細胞珪酸体と考えられるが、さらに細かな分類は現時点ではできない。

以上のような結果・考察から、炭化物2、3に含まれる灰の主体はシバ属（シバ、オニシバなど）と考えられ、その他、イネの稻葉・穎殻、タケ・ササ類なども若干含まれていると判断される。

引用文献

- 藤原宏志 1976 「プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）－数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法－」『考古学と自然科学』9: 15~29 p
- 藤原宏志・佐々木 彰 1978 「プラント・オパール分析法の基礎的研究（2）－イネ（Oryza）属植物における機動細胞珪酸体の形状－」『考古学と自然科学』11: 9~20 p
- 北村四郎・村田 誠・小山鐵夫 1964 『原色日本植物図鑑 草本編（III）』保育社 465 p

III. 71号土坑出土の炭化種実

新山雅広（パレオ・ラボ）

1. はじめに

ここでは、中世と考えられている71号土坑（71D）の覆土より出土した炭化種実を検討し、当時の栽培・利用状況の推定を試みた。

2. 試料

試料は、中世と考えられている71Dの覆土（炭化物2）である（第62図）。炭化種実は、覆土約2ℓを0.25mmおよび3mm目の篩を用いて水洗篩い分けを行い採集した。

3. 結果および考察

出土した炭化種実の一覧を第15表に示した。出土したのは、草本のみ12分類群であり、イネ炭化胚乳、ヒエ近似種炭化穎果・胚乳、エノコログサ属炭化穎果、キビ近似種炭化胚乳、カヤツリグサ属炭化果実、イボクサ炭化種子、コナギ炭化種子、ポンクトタデ炭化果実、スペリヒュ炭化種子、ササゲ属炭化種子、カタバミ属炭化種子、メナモミ炭化果実である。イネは非常に多産し、ヒエ近似種、キビ近似種、コナギも比較的多産した。

出土したもののうち、イネ、ヒエ近似種、キビ近似種、ササゲ属は栽培植物と考えられる。エノコログサ属、スペリヒュ、カタバミ属、メナモミは、畠地ないし路傍のようなやや乾いた所に生育する雑草

和名	学名	部位	個数
イネ	<i>Oryza sativa</i> Linn.	炭化胚乳	921 (124)
ヒエ近似種	<i>Echinochloa cf. crus-galli</i> P. Beauvois var. <i>fumentacea</i> Trin.	炭化穎果 炭化胚乳	3 82
エノコログサ属	<i>Setaria</i>	炭化穎果	2
キビ近似種	<i>Panicum cf. miliaceum</i> Linn.	炭化胚乳	27
カヤツリグサ属	<i>Cyperus</i>	炭化果実	1
イボクサ	<i>Aneilema keisak</i> Hassk.	炭化種子	1
コナギ	<i>Monochoria vaginalis</i> (Brum. fil.) Presl	炭化種子	12
ポンクトタデ	<i>Polygonum pubescens</i> Blume	炭化果実	1
スペリヒュ	<i>Portulaca oleracea</i> Linn.	炭化種子	1
ササゲ属	<i>Vigna</i>	炭化種子	(2)
カタバミ属	<i>Oxalis</i>	炭化種子	1
メナモミ	<i>Siegesbeckia pubescens</i> (Makino) Makino	炭化果実	2

個数の()内は半分ないし破片の数を示す

第15表 出土した炭化種実

である。イゴクサ、コナギ、ポンクトクタデは低湿地の雑草であり、コナギは現在の水田において普通にみられるいわゆる水田雑草である。コナギが出土するような覆土であることから、この覆土には水田土壤が混じっている可能性が考えられる。

4. 主な炭化種実の形態記載（図版32）

ヒエ近似種 *Echinochloa cf. crus-galli* P.Beauv. var. *fumentacea* Trin. 炭化穎果、炭化胚乳

胚乳はやや扁平で胚の長さは果長の約2/3、臍はうちわ形。胚乳は長さ約0.9~2.2mm、幅約0.6~1.7mmで長さ約1.2~1.5mm、幅1mm内外のものが多い。長さ、幅、厚さともにばらつきが割りと大きい。イヌビエが混じっている可能性もあるのでヒエ近似種とした。

キビ近似種 *Panicum cf. miliaceum* Linn. 炭化胚乳

胚乳は先端がやや尖り氣味で胚部分の長さは果長の約1/2、臍はうちわ型。長さ約1.2~2.0mm、幅約0.7~1.3mmで長さ約1.5mm以上、幅約1.0~1.1mmのものが多い。ヒエ近似種よりはばらつきが小さいが、手持ちの現生標本と比較すると、幅がやや狭くてスマートであり、キビ近似種とした。

ササゲ属 *Vigne* 炭化種子

半割が2点出土したが、うち2点は幼根と初生葉がかろうじて残っている。状態が悪く、微妙ではあるが、幼根がゆるやかに立ち上がり、子葉内面に占める比率は小さいようなので、おそらく吉崎（1992）によるアズキの仲間と思われる。

参考文献

- 埼玉県志木市教育委員会 1999『志木市遺跡群9』志木市の文化財第27集 126 p
吉崎昌一 1992「古代雑穀の検出」『考古学ジャーナル』No.356』

IV. 71号土坑出土の炭化材の樹種同定

植田弥生（パレオ・ラボ）

1. はじめに

中野遺跡第49地点から検出された、地下式坑（71D）の堅坑部の炭化物1（第62図）より検出された炭化材の樹種同定結果を報告する。この地下式坑は、中世の可能性が高い造構である。

2. 炭化材樹種同定の方法

まず、採取された土から炭化材を取り出した。約20破片の炭化材が含まれていた。小破片がほとんどで、最大で1cm弱程度である。先ず、炭化材の横断面（木口）を実体顕微鏡で観察したところ、すべて同一タイプのようであった。次に、複数破片を無作為に抽出し、走査電子顕微鏡で3方向の破断面（横断面・接線断面・放射断面）を拡大し、材構造を観察して同定を決定した。

走査電子顕微鏡用の試料は、3断面をそれぞれ直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡（日本電子製 JSM-T100型）で観察と写真撮影を行った。

3. 結果

走査電子顕微鏡で材構造を観察した炭化材はすべて、以下に記載する特徴が見られクマツヅラ科のクサギ *Clerodendron trichotomum* Thunb. と同定された。クサギは、北海道以南の温帯から亜熱帯に分布する高さ2~3mに達する小高木の落葉広葉樹である。山野の陽光地に普通に見られ、葉や枝を折ると臭気がすることからクサギの名が由来している。葉・小枝・根は煎じてリューマチや高血圧などの薬用に利用され、果実は草木染め（浅黄色）染料に使用されるそうである。当造構の出土状況からは、單に周辺に生育していた木が燃えて土坑内に入ったのか、利用目的で土坑に入っていた材が炭化したもののかどうかは不明である。

以下に同定の根拠とした材構造の観察結果を記す。

クサギ *Clerodendron trichotomum* Thunb. クマツヅラ科 図版33-1a-1d

年輪の始めにやや肥厚した中型の管孔が雖然と配列し、徐々に径を減じながら分布数も減少し、年輪後半は非常に小型の管孔が単独または2数個が複合して分布している環孔材である。周囲状柔組織が顯著である。道管の壁孔は交互状、孔口が横に伸びて流紋になる部分も見られ、穿孔は單一である。放射組織は同性に近い異性、主に5細胞幅の紡錘形である。

V. 71号土坑出土の貝類遺体

樋泉岳二（早稲田大学）

分析試料は中世の可能性のある地下式坑（71D）の堅穴部覆土上層から検出された小規模な貝ブロックである。この貝ブロックは全量が土ごと採取され、そのままの状態で筆者のもとに届けられた。

貝殻の多くはかろうじて原形をとどめているが、劣化がひどく、触ると簡単に崩れてしまう状態であった。このため水洗するのを避け、土塊を慎重に割りながら、現れた貝殻を調べた。

試料中に含まれる貝は、観察できた範囲ではすべてイシガイ科Unionidaeと思われる（図版34）。殻はやや厚く、殻頂下に強い歯をもつ。内面は鈍い真珠光沢を放つ。標本の破損が著しく、全体形を観察できるものはないが、比較的保存のよい標本について見る限り、殻形は長卵形で、殻頂は前方に大きく偏り、後方に向けて徐々に細まって後端はやや尖る。殻表は滑らかだが、殻頂部付近にかすかに細かなさざ波状の彫刻が見られるものがある。以上の特徴から、これらの標本はイシガイ *Unio douglasiae* に同定される可能性が高い。イシガイは日本各地の淡水清流の砂礫底に棲む。採集試料中に他の淡水生貝類（カワニナ・タニシ類など）は見出せなかった。関東地方では淡水生種のみから成る貝層はこれまで確認されておらず（しばしば「主淡貝塚」などと呼ばれているのは、汽水性のヤマトシジミを主とする貝塚のことである）、年代的に新しいとはいえ、興味深い資料といえる。

VI. 66号住居跡から出土した炭化種実

新山雅広（パレオ・ラボ）

1. 試料と方法

炭化種実の検討は、66号住居跡の出土土器内の覆土中から出土した合計7試料について行った。試料の時代は、古墳時代後期の7世紀中葉である。各試料は、No.1が炭化物を主体とした乾燥試料であり、プラスチックケースに保存されていた。また、No.2・3は、堆積物試料であり、水洗洗浄を行った後、残渣を回収した。これら試料について、実体顕微鏡下で炭化種実の採取・同定・計数を行った。

2. 出土した炭化種実

各試料から出土した炭化種実の一覧を第16表に示した。同定されたのは、草本のみ4分類群であり、イネ、アワ、タデ属、シロザ近似種であった。また、その他に虫えいも得られた。以下に、各試料の炭化種実の記載を示す。

No.1（第41図14の丸壺内覆土）：イネ炭化穎の破片（基部）が1個体、アワ炭化胚乳が1個体であった。なお、イネ穎、ムクノキ核が含まれていたが、いずれも未炭化で新鮮な状態であり、現代のものの混入と考えられる。

No.2（第42図18の長壺内覆土）：アワ炭化胚乳が1個体、タデ属炭化種子の破片が1個体、虫えいが

分類群・部位\試料		No.1	No.2	No.3
		第41図14 丸甕内覆土	第42図18 長甕内覆土	第41図9 小型丸甕内覆土
イネ	炭化穎	(1)	—	—
アワ	炭化胚乳	1	1	—
タデ属	炭化種子	—	(1)	—
シロザ近似種	炭化種子	—	—	(1)
虫えい		—	1	(1)

数字は個数、() 内は半分ないし破片の数を示す

第16表 出土炭化種実一覧

1個体であった。

No.3 (第41図9の小型丸甕内覆土)：シロザ近似種炭化種子の破片が1個体、虫えいの破片が1個体であった。

3. 考察

検討した結果、No.1～3の3試料に含まれていたのは、イネ、アワ、タデ属、シロザ近似種、虫えい(虫こぶ)であり、No.1からイネとアワ、No.2からアワが出土した。イネ・アワは、栽培植物であり、7世紀前に当遺跡で利用されていたと考えられる。タデ属、シロザ近似種は、利用されていた可能性もあるが、イネやアワなどの作物に付隨するなどして住居内に混入したとも考えられる。

4. 形態記載(図版34)

イネ *Oryza sativa* Linn. 炭化穎

出土したのは、穎の基部である。状態はあまり良好ではない。

アワ *Setaria italica* Beauv. 炭化胚乳

長さ・幅共に1.1mm前後。胚部分の長さは果実長の2/3程度。胚は幅が狭く細長い橢円形。No.1のものは、状態があまり良好ではなく、胚や鱗は確認し辛い。

タデ属 *Polygonum* 炭化種実

1/2程度の破片である。二面の卵形で長さ1.3mm、幅1.0mm程度。

シロザ近似種 *Chenopodium cf. album* Linn. 炭化種子

1/2程度の破片である。1本の筋が中央付近まで入るのが確認できる。

虫えい

昆虫が植物体(葉など)に産卵寄生した結果、異常発育した部分である。円盤状で上下中央部は渦巻。

図 版



1. 第1工程 表土剥ぎ風景 (②-A区)



2. 第1工程 調査風景 (②-A区)



3. 第1工程 表土剥ぎ風景 (②-B区南半)



4. 第1工程 調査風景 (②-B区南半)



5. 第1工程 表土剥ぎ風景 (②-B区北半)



6. 第1工程 調査風景 (②-B区北半)



7. 第2工程 調査区近景 (③区)



8. 第2工程 基礎撤去作業風景



1. 第2工程 表土剥ぎ風景（③区）



2. 第2工程 調査風景（③区）



3. 第3工程 表土剥ぎ風景（④区）



4. 第3工程 調査風景（④区）



5. 第4工程 表土剥ぎ風景（⑤区）



6. 第4工程 調査風景（⑤区）



7. 第5工程 表土剥ぎ風景（⑥区）



8. 第5工程 調査風景（⑥区）



1. 旧石器時代遺物出土状態



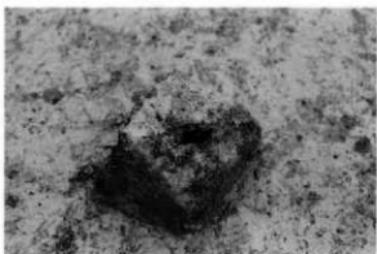
2. 旧石器時代遺物出土状態



3. 旧石器時代遺物出土状態



4. 旧石器時代遺物出土状態



5. 石器（No. 4）出土状態



6. 石器（No.11）出土状態



7. 基本土層A-B



8. 基本土層G-H



1. 2号住居跡



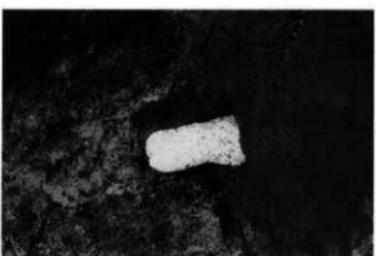
2. 11号炉穴



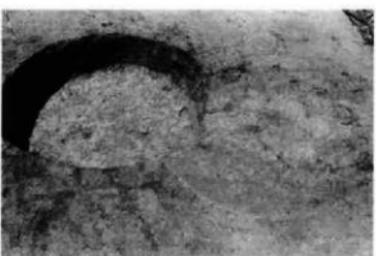
3. 79·80号土坑調查風景



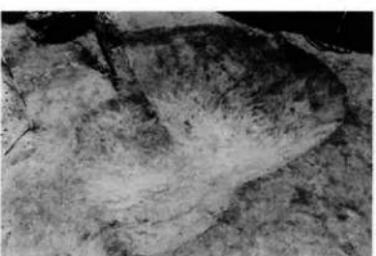
4. 79·80号土坑遺物出土状態



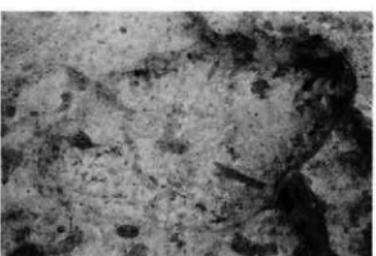
5. 80号土坑石器出土状态



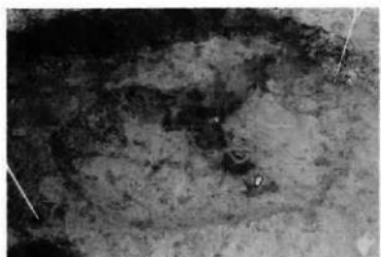
6. 79·80号土坑



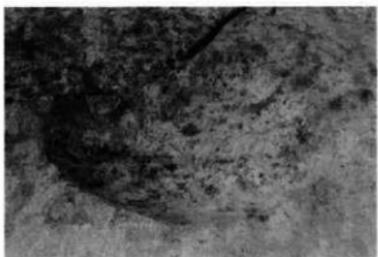
7. 81·82号土坑



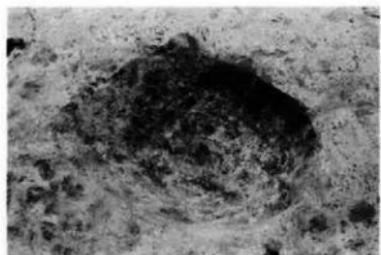
8. 97号土坑



1. 98・99号土坑



2. 102号土坑



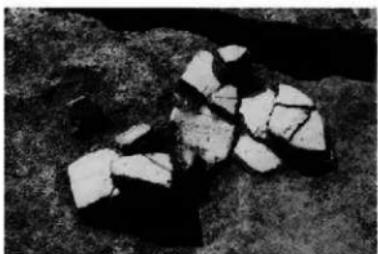
3. 103号土坑



4. 104号土坑



5. 包含層調査風景



6. 包含層遺物出土状態



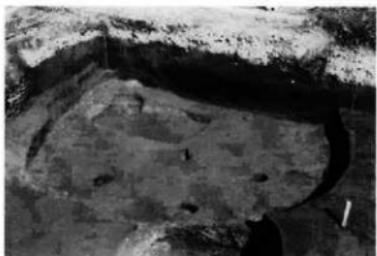
7. 13号住居跡



8. 13号住居跡掘り方



1. 14号住跡調査風景



2. 14号住跡



3. 15号住跡遺物出土状態



4. 15号住跡遺物出土状態



5. 15号住跡遺物出土状態



6. 15号住跡貯藏穴遺物出土状態



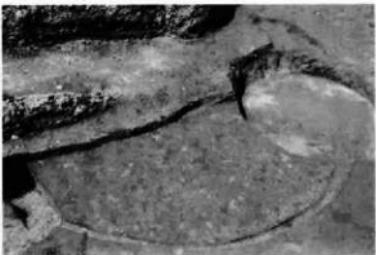
7. 15号住跡



8. 15号住跡貯藏穴



1. 18号住居跡（⑤区）



2. 18号住居跡（⑥区）



3. 19号住居跡調査風景



4. 19号住居跡遺物出土状態



5. 19号住居跡遺物出土状態



6. 19号住居跡



7. 100号土坑



8. 101号土坑



1. 66号住居跡遺物出土状態（④区）



2. 66号住居跡遺物出土状態（④区）



3. 66号住居跡遺物出土状態（⑤区）



4. 66号住居跡遺物出土状態（⑤区）



5. 66号住居跡遺物出土状態（⑤区）



6. 66号住居跡遺物出土状態（⑤区）



7. 66号住居跡遺物出土状態（⑤区）



8. 66号住居跡遺物出土状態（⑤区）



1. 66号住居跡カマド遺物出土状態



2. 66号住居跡カマド遺物出土状態



3. 66号住居跡カマド遺物出土状態



4. 66号住居跡カマド



5. 66号住居跡貯蔵穴



6. 66号住居跡遺物出土状態（⑥区）



7. 66号住居跡遺物出土状態（⑥区）



8. 66号住居跡遺物出土状態（⑥区）



1. 65号住居跡遺物出土状態



2. 65号住居跡遺物出土状態



3. 65号住居跡遺物出土状態



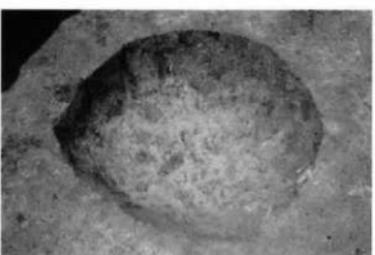
4. 65号住居跡



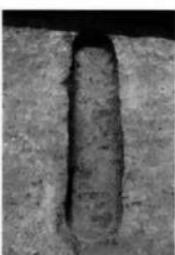
5. 73号土坑



6. 74・75号土坑



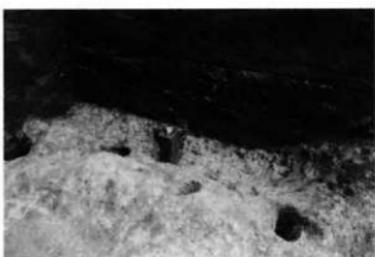
7. 77号土坑



8. 64号土坑



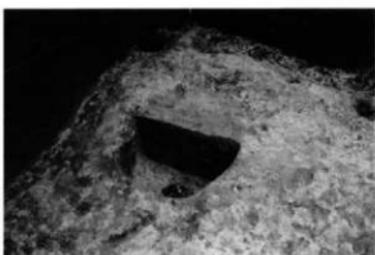
9. 65号土坑



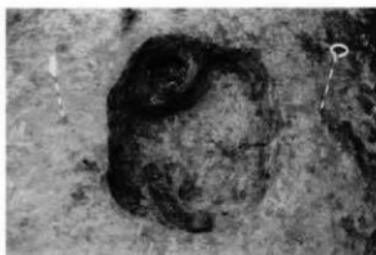
1. 66号土坑



2. 66号土坑遗物出土状态



3. 67号土坑



4. 67号土坑人骨出土状态



5. 70号土坑



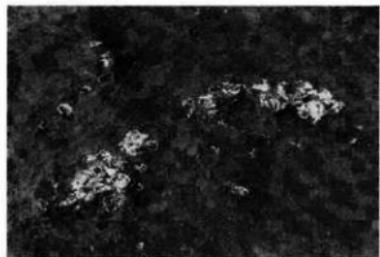
6. 68号土坑·3号井戸跡



7. 69号土坑



8. 94~96号土坑



1. 71号土坑貝出土状態



2. 71号土坑（地下式坑）



3. 71号土坑堅坑部



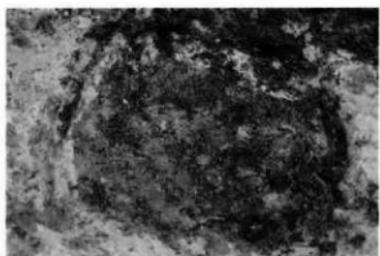
4. 71号土坑主体部



5. 71号土坑連絡口（堅坑部から）



6. 71号土坑連絡口（主体部から）



7. 71号土坑 炭化物 2



8. 71号土坑主体部工具痕



1. 段切状遺構北半（西から）



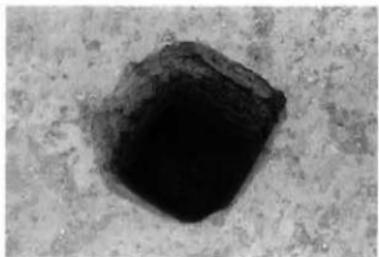
2. 段切状遺構南半（西から）



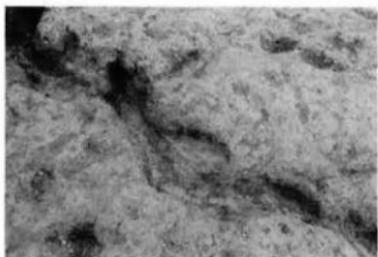
3. 段切状遺構北半



4. 段切状遺構北半



5. 段切状遺構北半（柱穴）



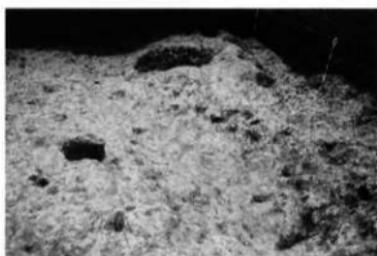
6. 段切状遺構北半（工具痕）



1. 段切状遺構南半（西から）



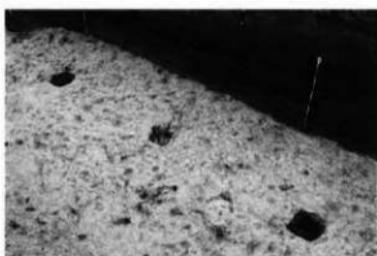
2. 段切状遺構南半（東から）



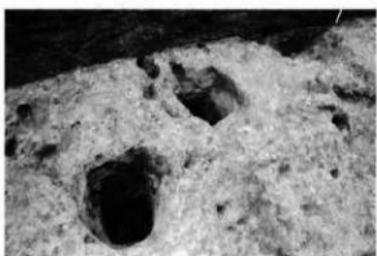
3. 段切状遺構南半



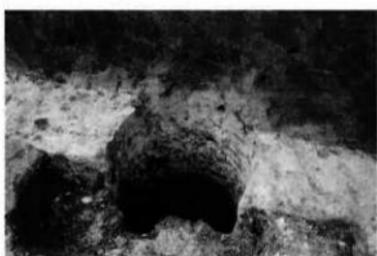
4. 段切状遺構南半



5. 段切状遺構南半（柱穴）



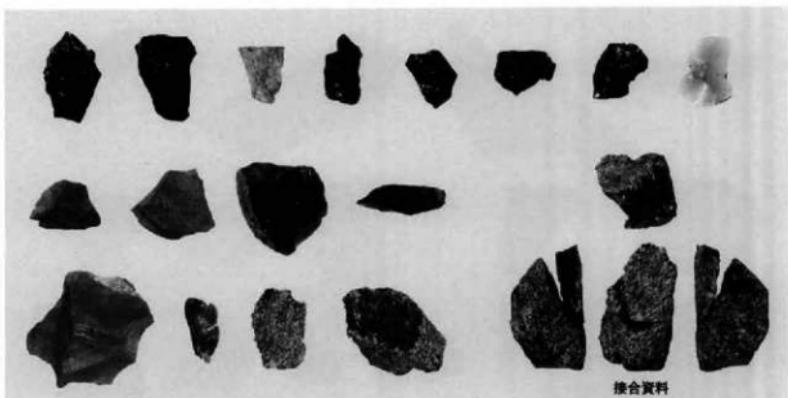
6. 段切状遺構南半（柱穴）



7. 5号井戸跡



8. 6号井戸跡



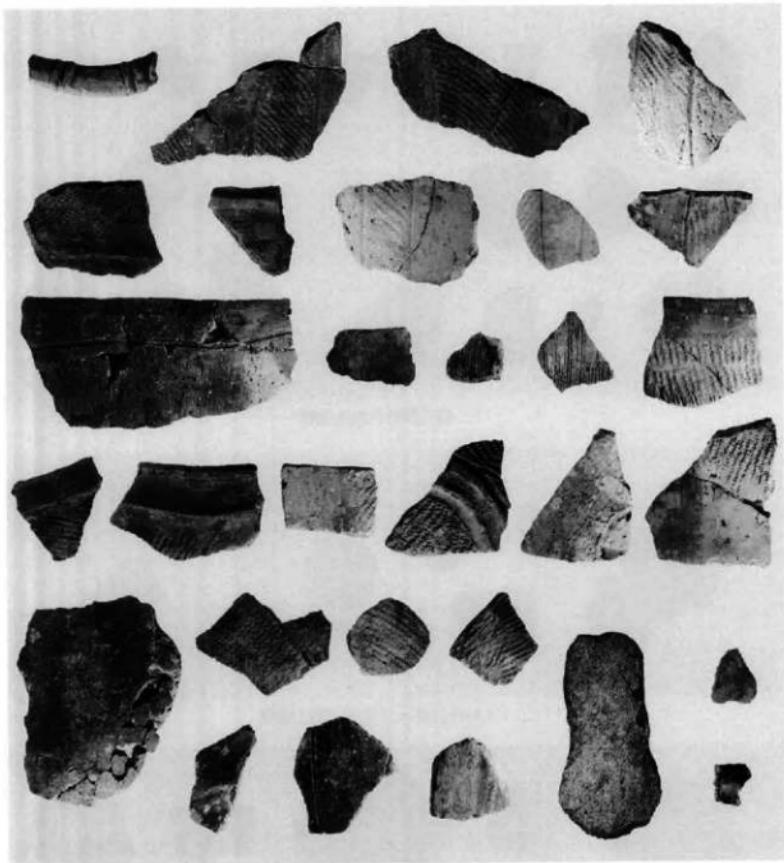
1. 旧石器時代出土遺物



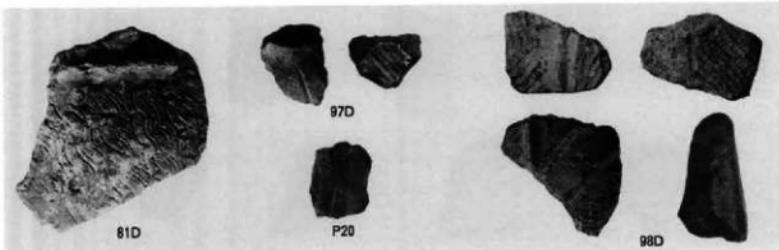
2. 2号住居跡・11号炉穴出土遺物



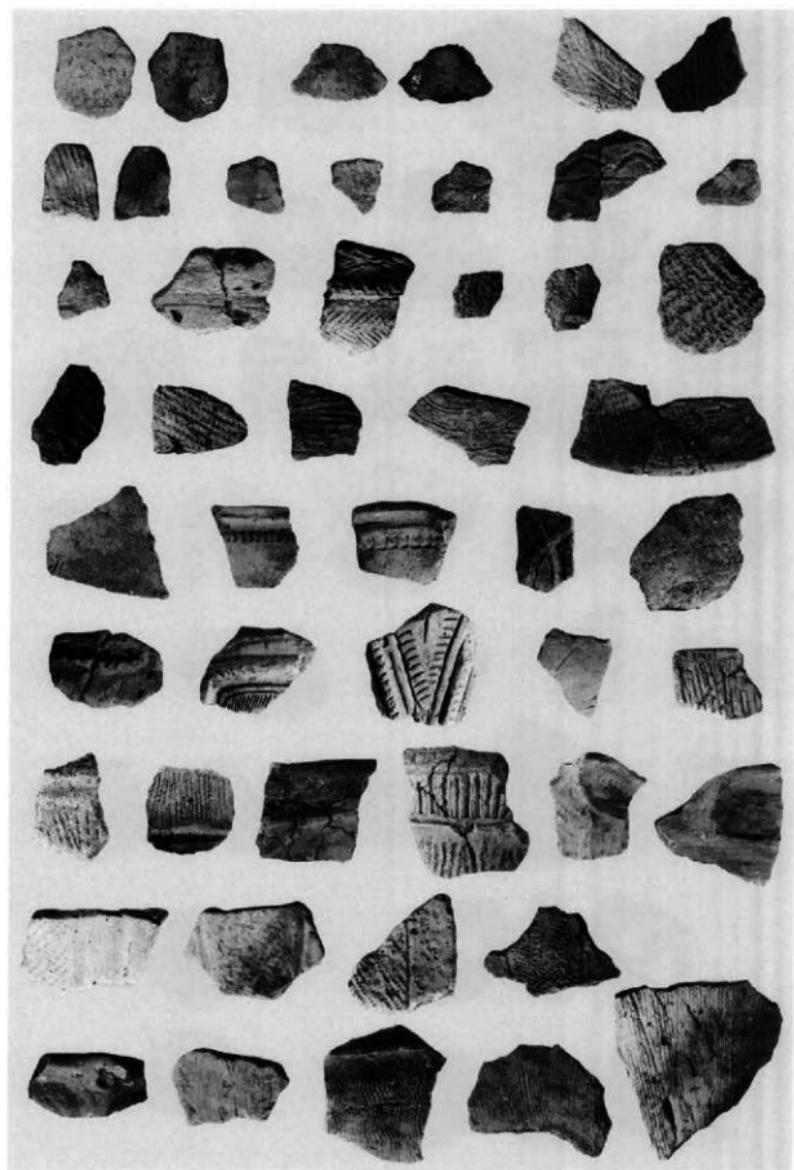
3. 79号土坑出土遺物



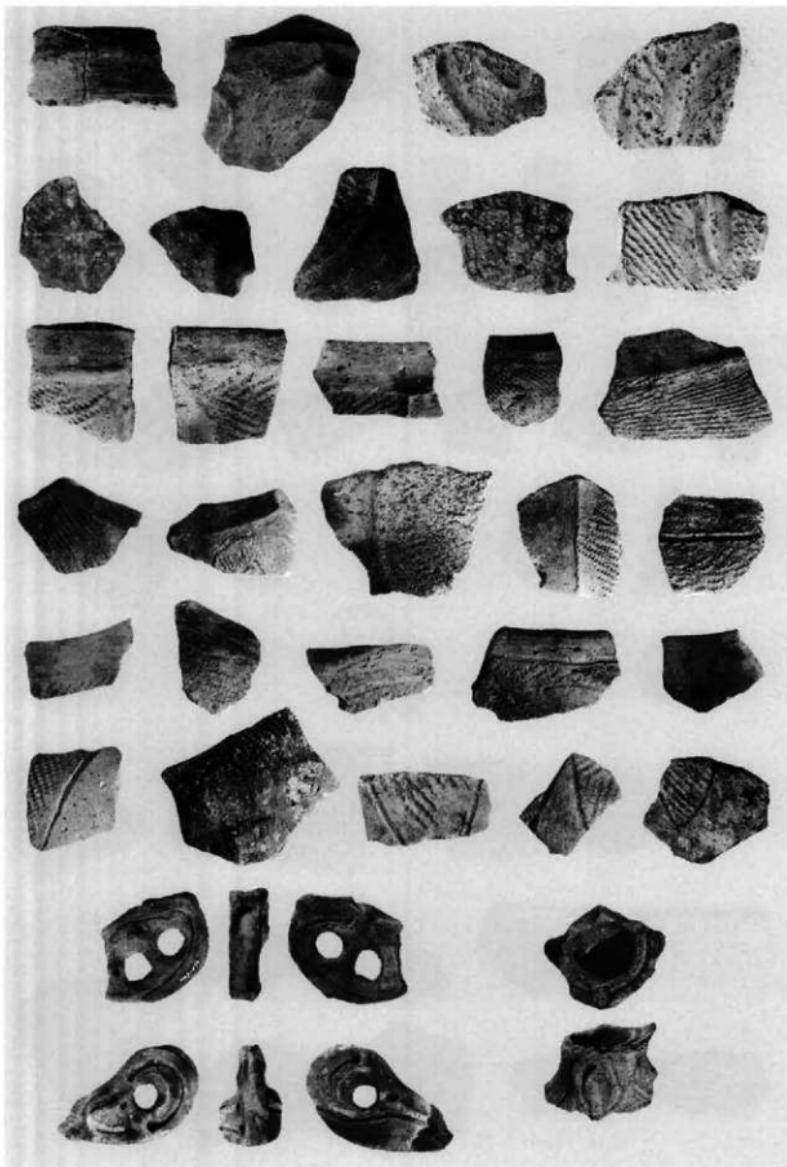
1. 80号土坑出土遺物



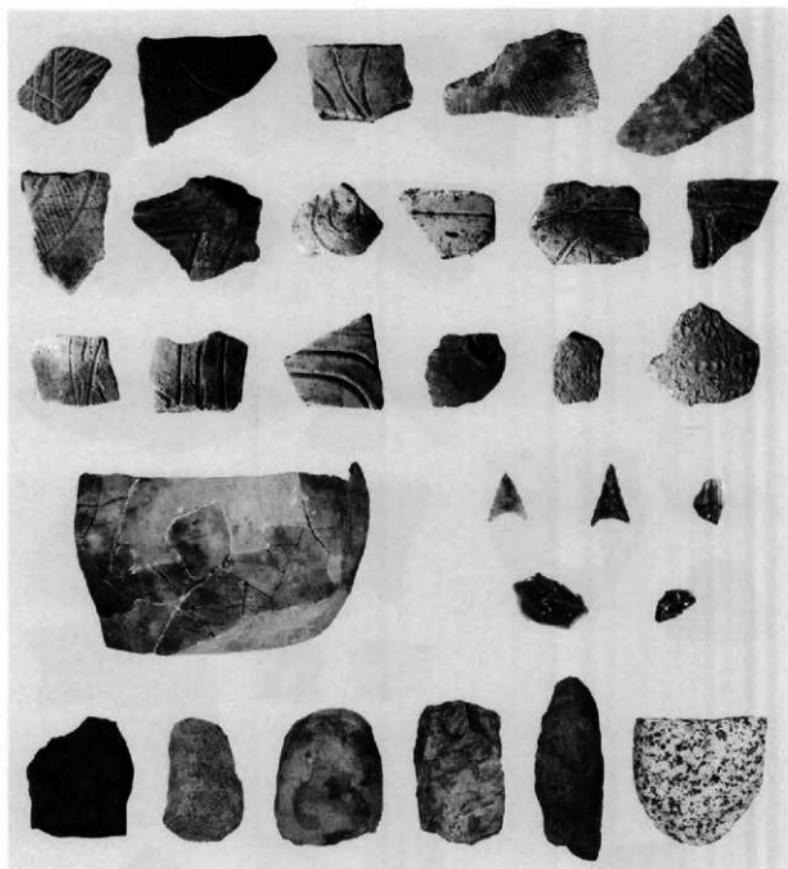
2. 81・97・98号土坑・20号ピット出土遺物



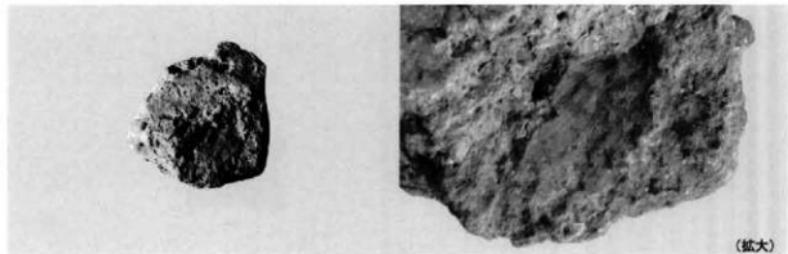
包含層出土遺物



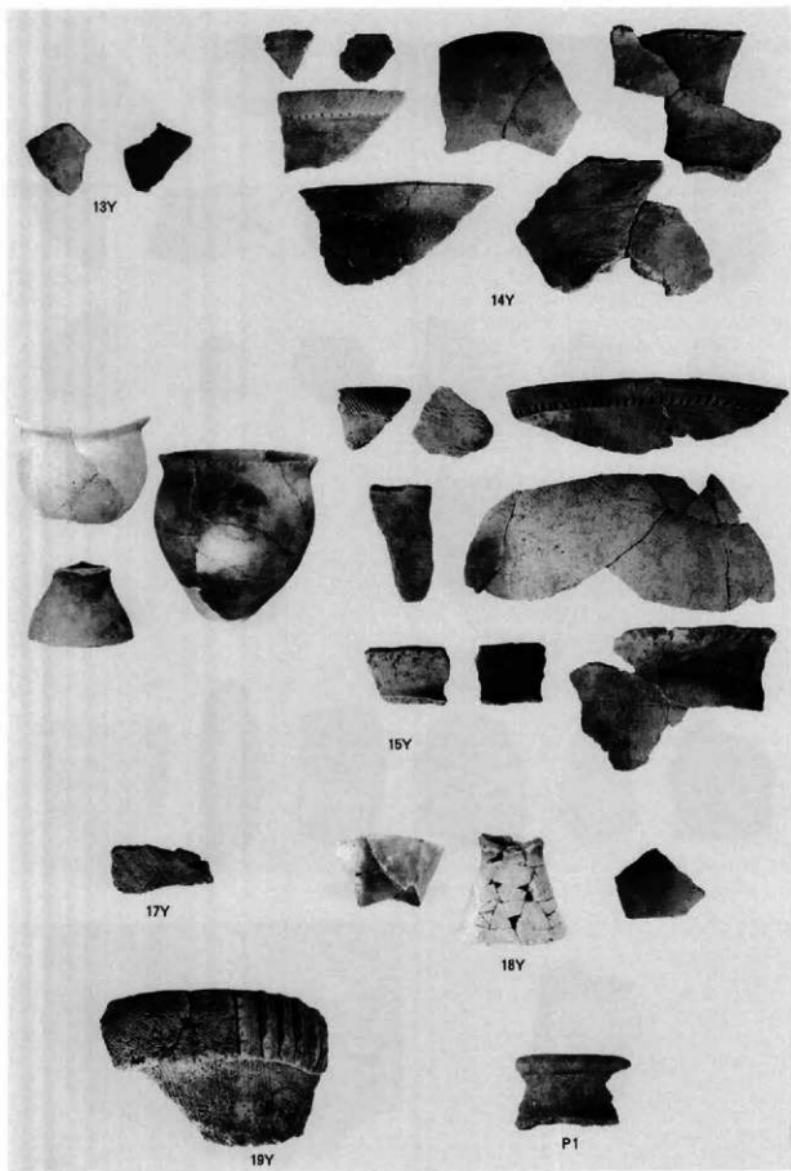
包含屑出土遗物



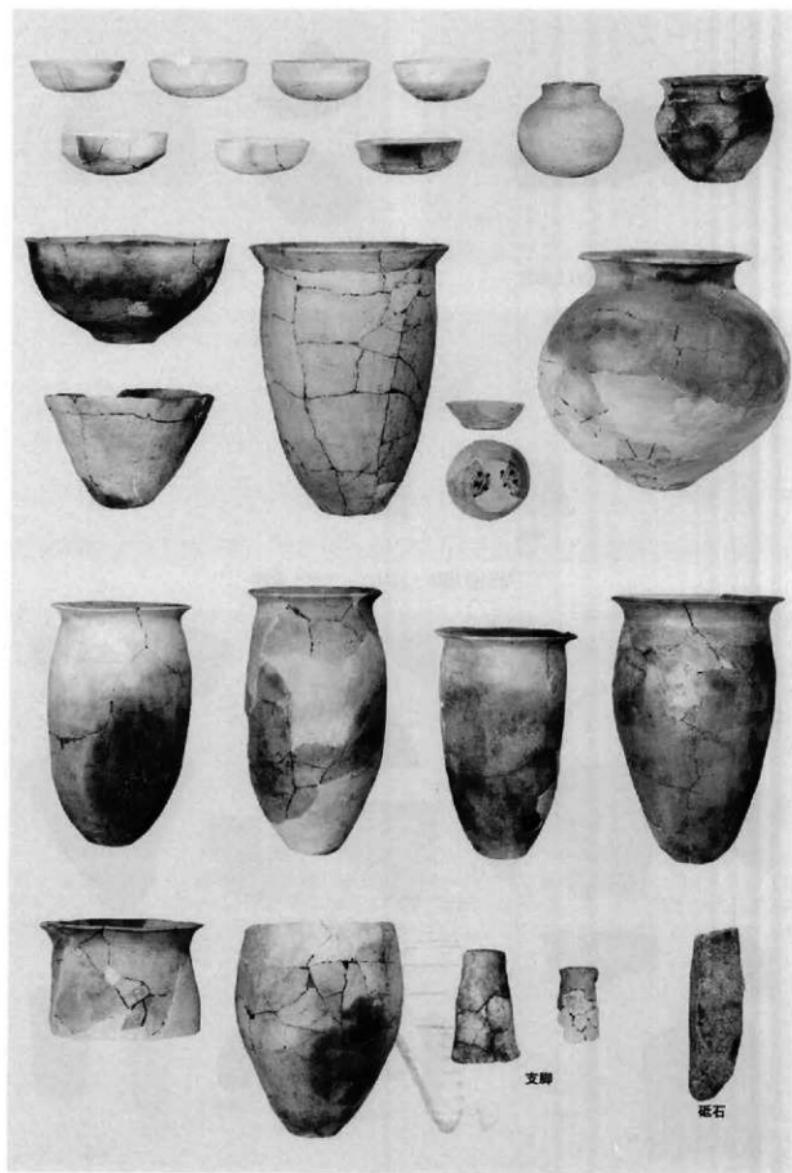
1. 包含層出土遺物



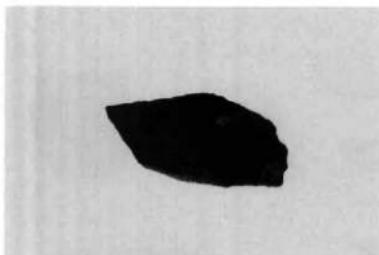
2. 繊維植物痕のある土器



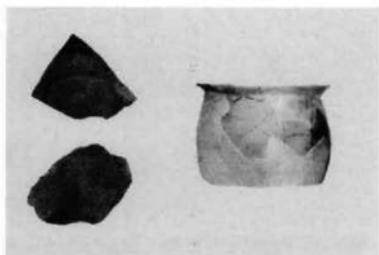
13~15・17~19号住居跡・1号ピット出土遺物



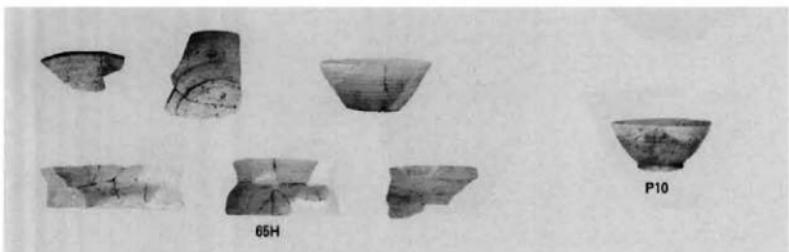
66号住居跡出土遺物



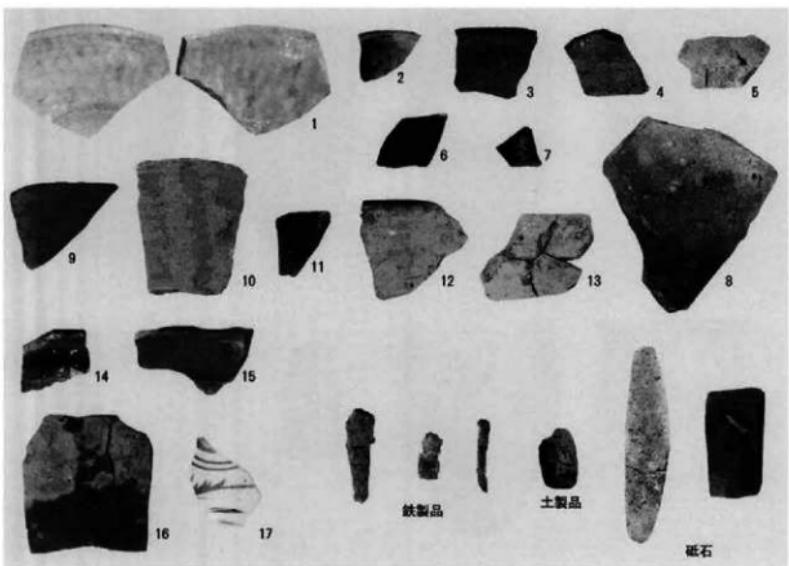
1. 101号土坑出土遺物



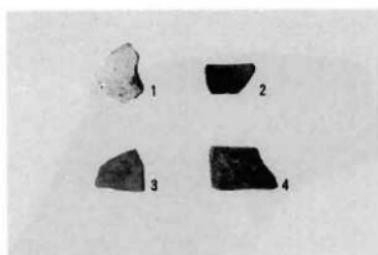
2. 77号土坑出土遺物



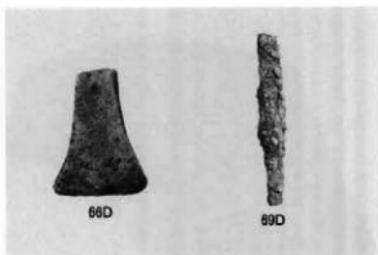
3. 65号住居跡・10号ピット出土遺物



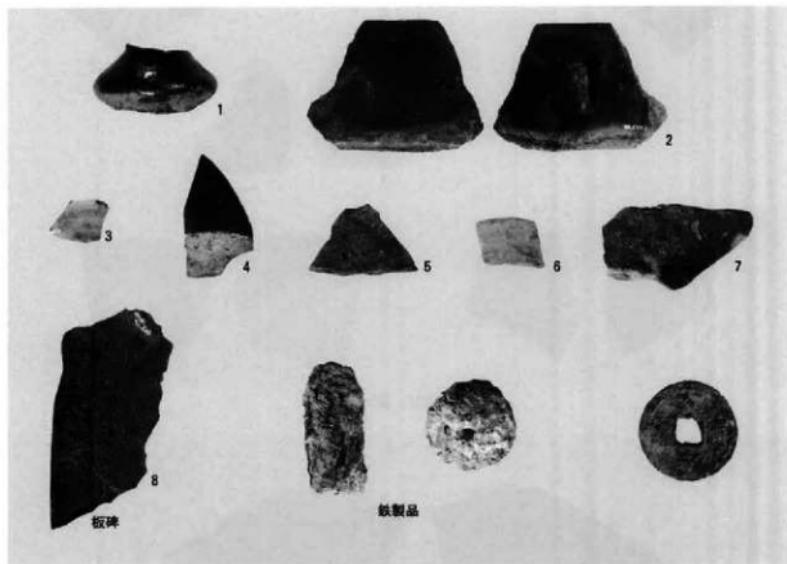
4. 段切状遺構出土遺物



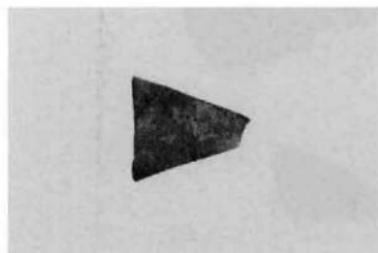
1. 68号土坑出土遗物



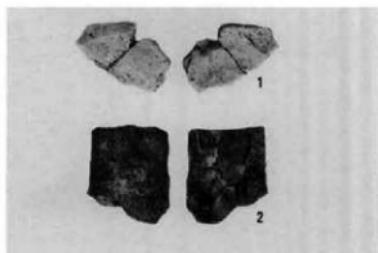
2. 66·69号土坑出土遗物



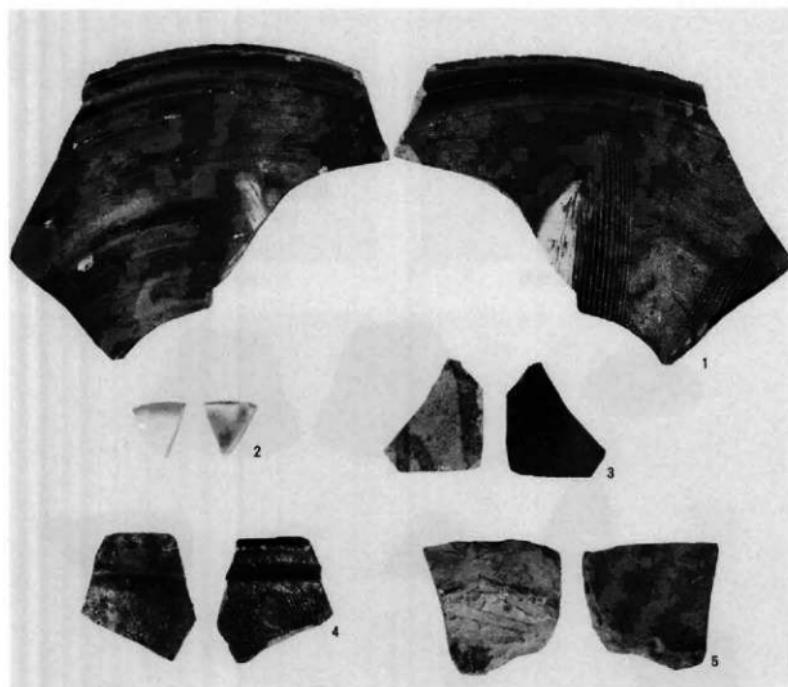
3. 71号土坑出土遗物



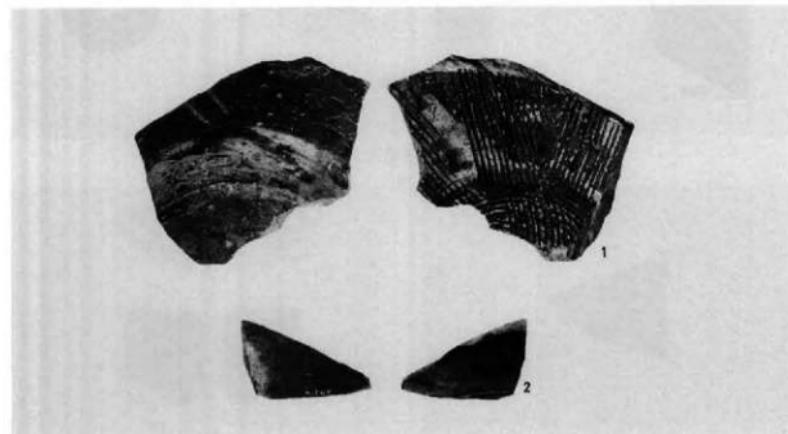
4. 72号土坑出土遗物



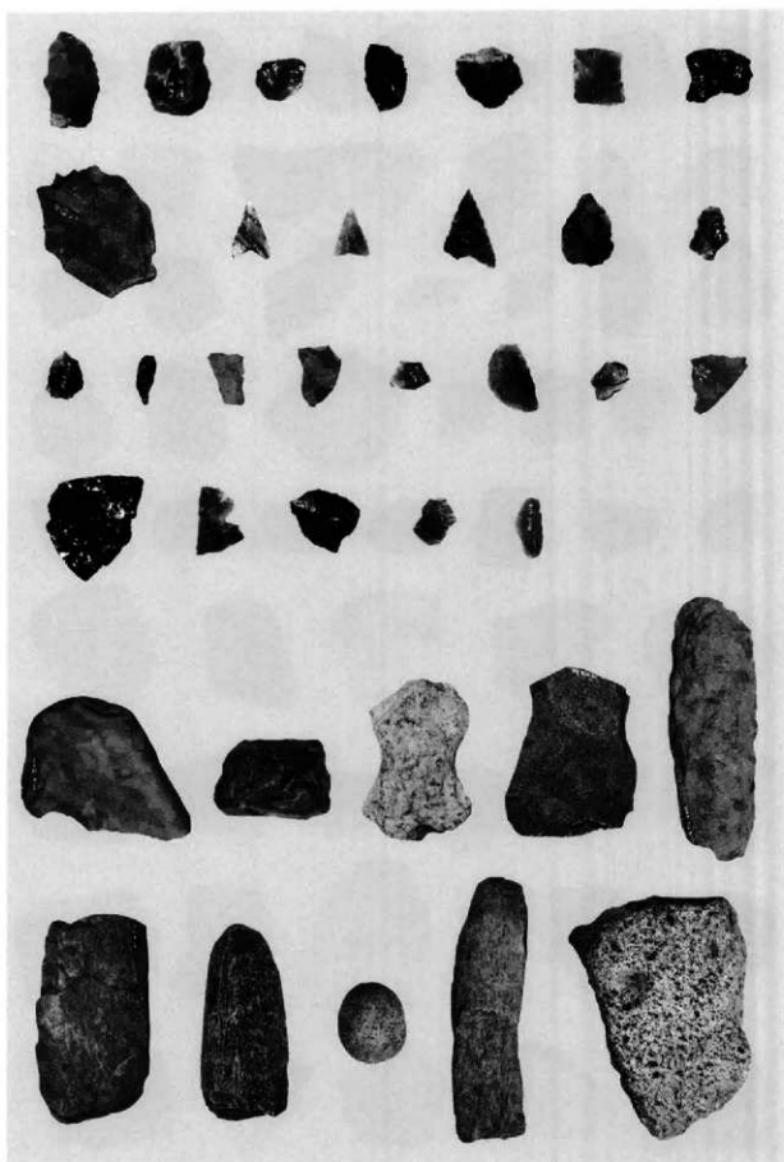
5. 3号井戸跡出土遗物



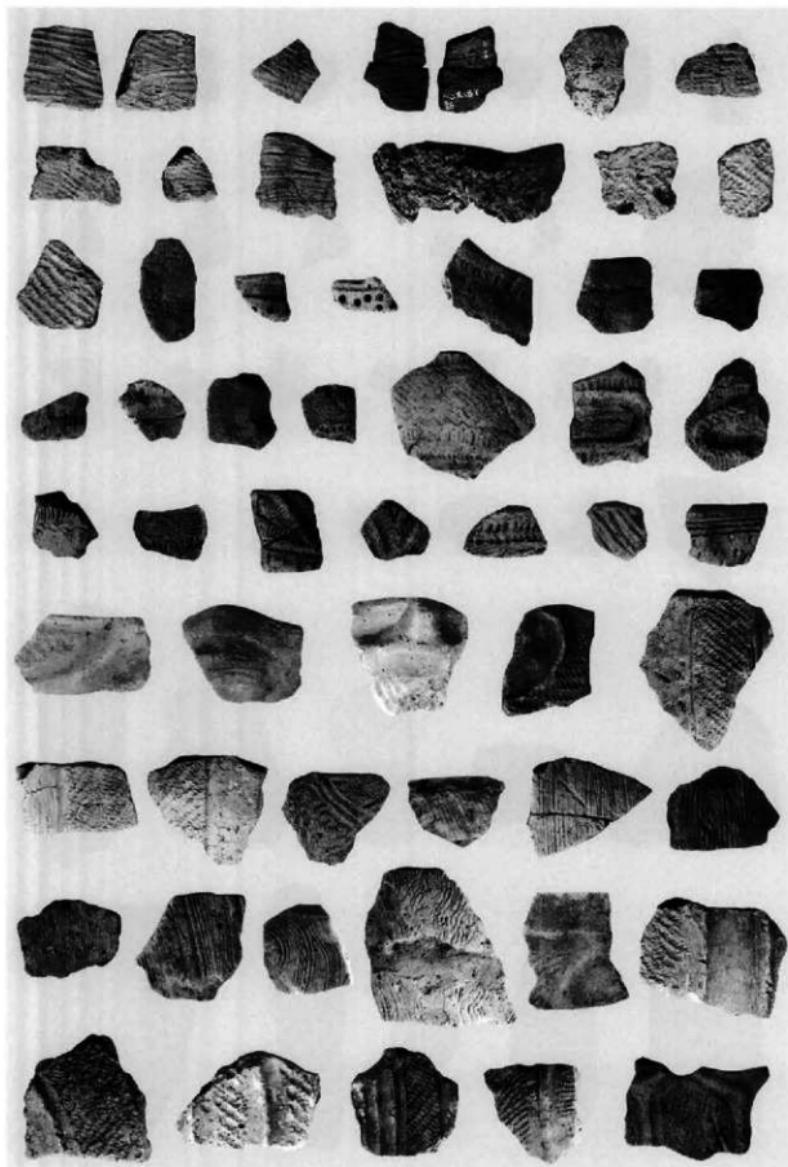
1. 4号井戸跡出土遺物



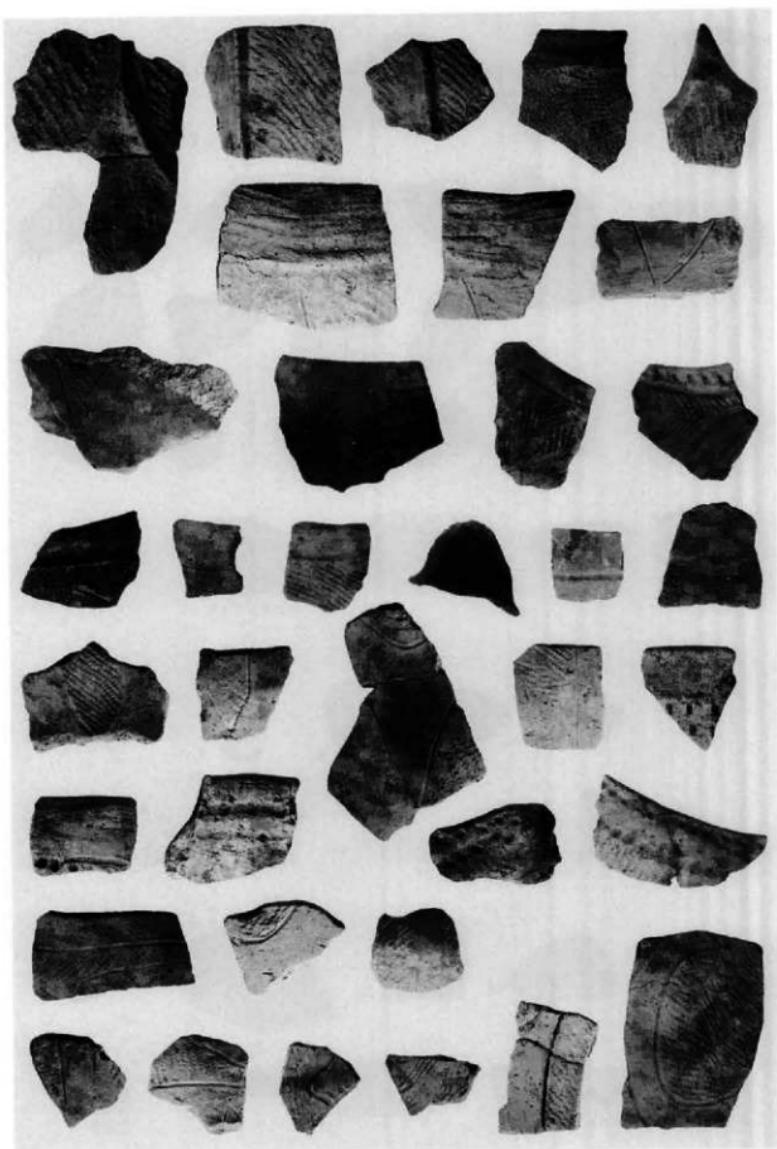
2. 6号井戸跡出土遺物



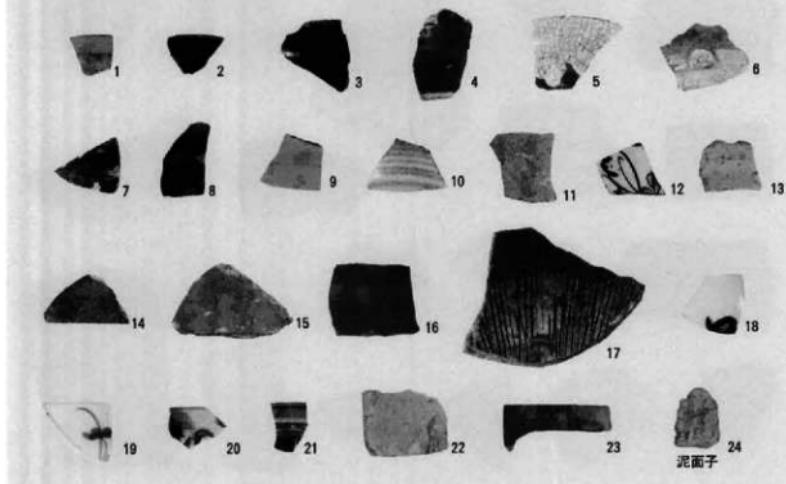
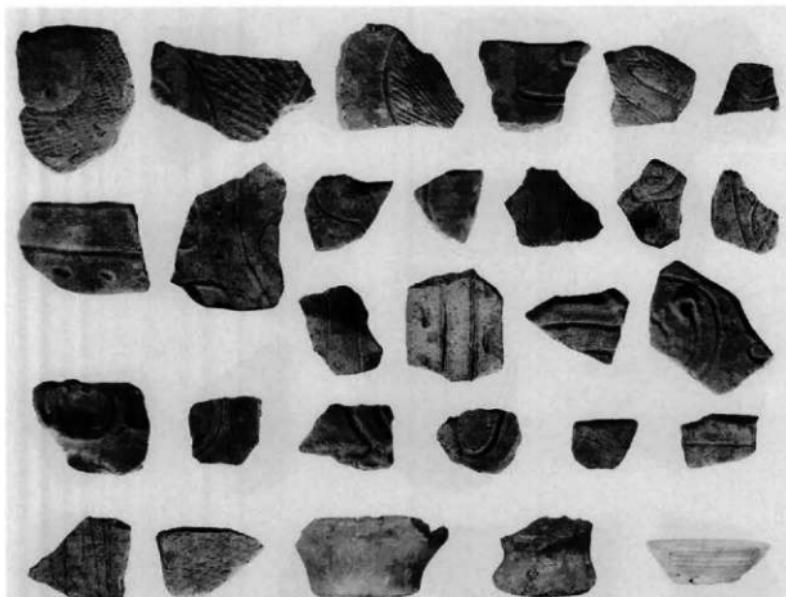
造構外出土石器



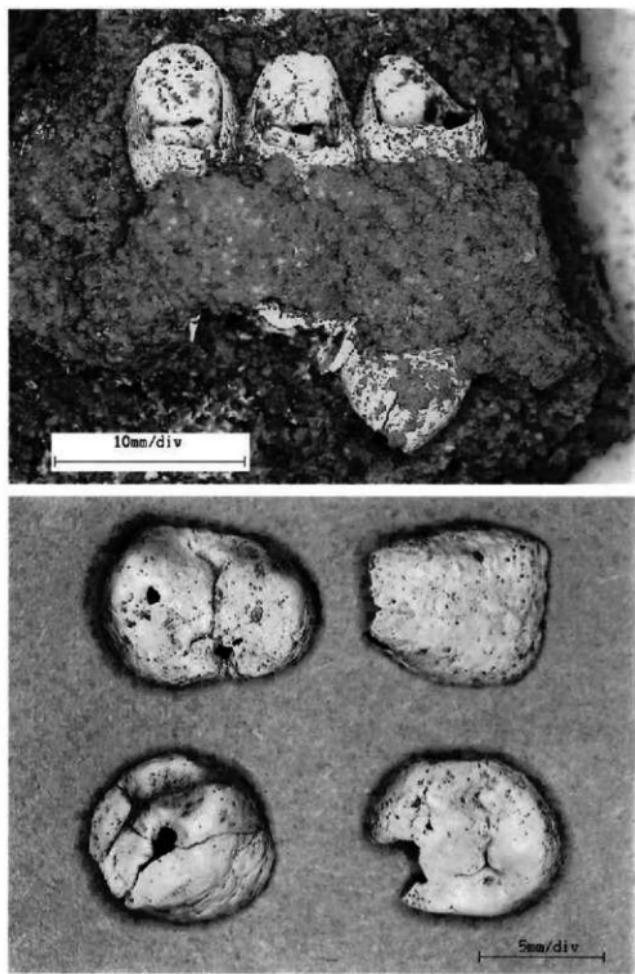
遺構外出土遺物



遺構外出土遺物



遺構外出土遺物



67号土坑出土ヒトの歯

上：歯の出土状況

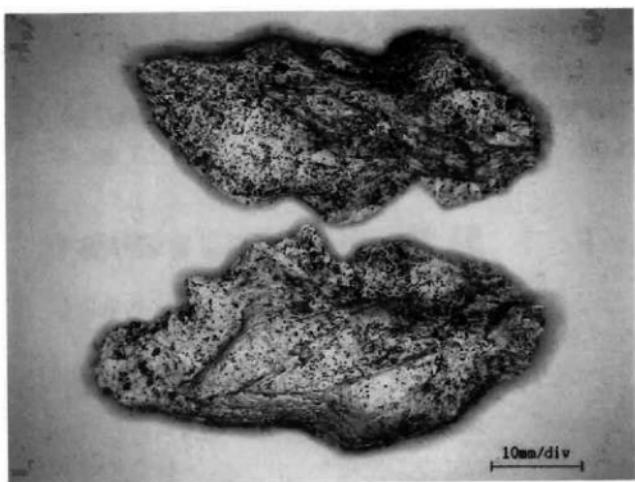
(左上顎の大歯・第1・2小白歯、左下顎の第2小白歯・第1大臼歯)

下：出土した歯

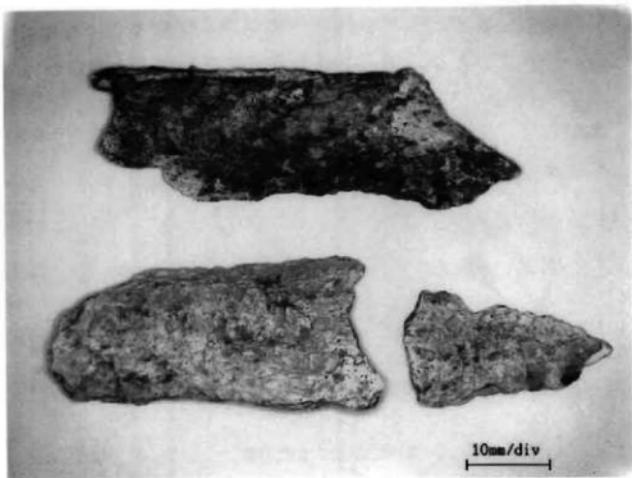
左上：左上顎の第2小白歯 右上：切歯（おそらく上顎左第2切歯）

左下：小白歯？

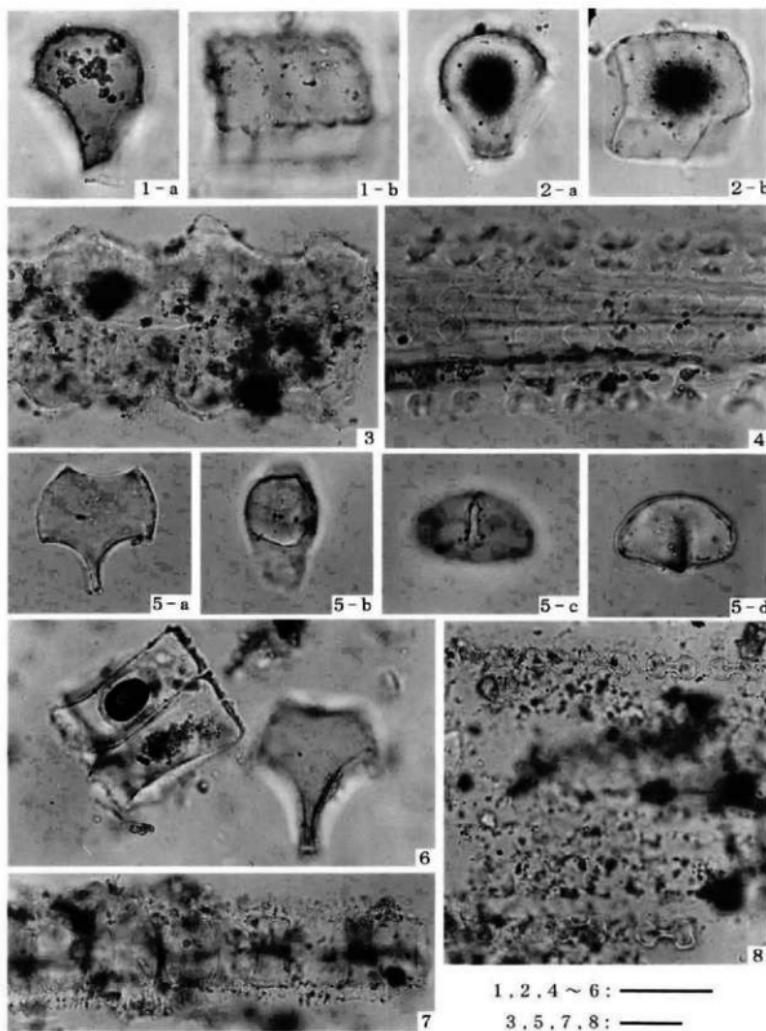
右下：右下顎の第1小白歯？



67号土坑出土ヒトの鼓室部（左右）

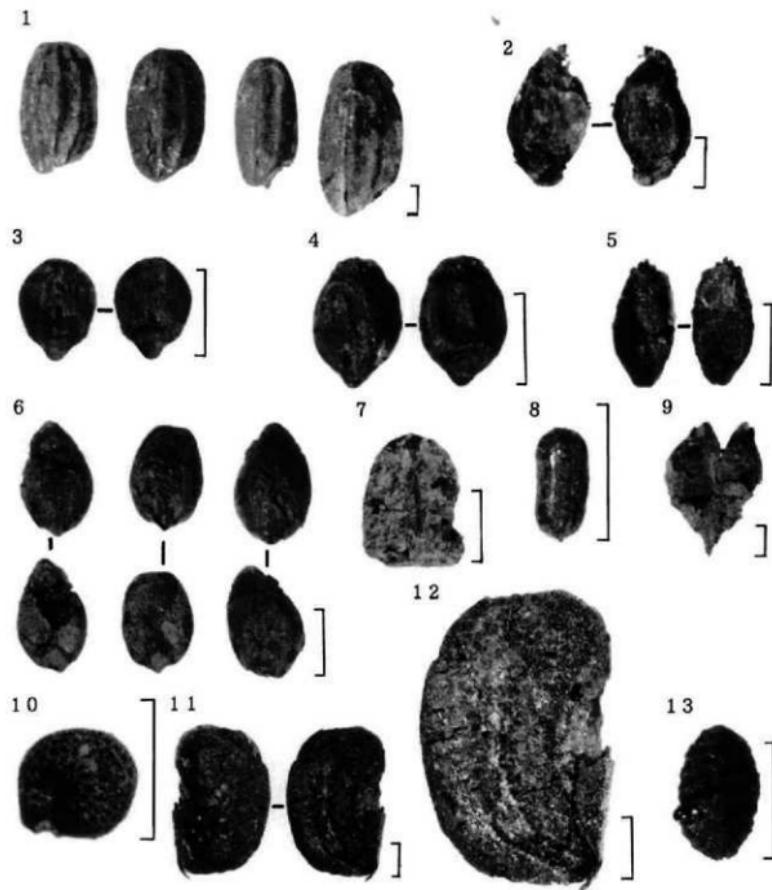


71号土坑出土獸骨



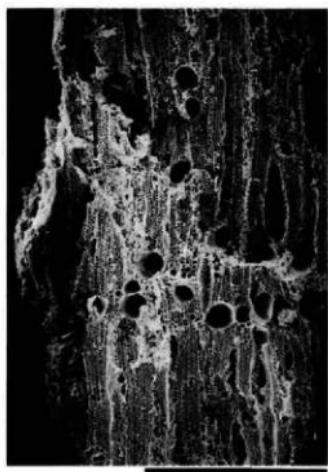
71号土坑出土灰試料の植物珪酸体 (scale bar: 30μm)

- 1、2：イネ機動細胞珪酸体 (a : 断面、b : 側面) 1 : 炭化物 2、2 : 炭化物 3
- 3 : イネ穎部珪酸体破片 炭化物 2 4 : イネ型単細胞珪酸体列 炭化物 2
- 5 : シバ属機動細胞珪酸体 (a : 断面、b : 側面、c : 表面、d : 側面) 炭化物 2
- 6 : シバ属機動細胞珪酸体 (右側 : 断面、左側 2 列 : 側面) 炭化物 3
- 7 : シバ属機動細胞珪酸体列 (裏面) 炭化物 2 8 : キビ族型単細胞珪酸体列 炭化物 2

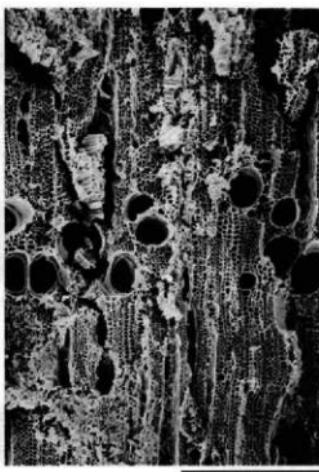


71号土坑出土炭化種実（スケールは1mm）

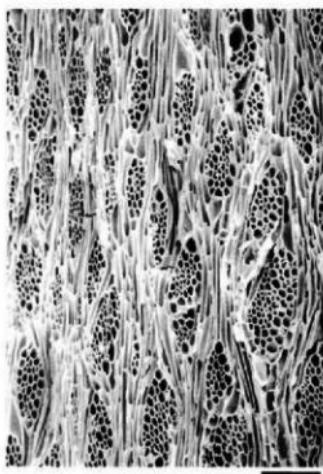
- 1：イネ、炭化胚乳 2：ヒエ近似種、炭化穎果 3、4：ヒエ近似種、炭化胚乳
5：エノコログサ属、炭化穎果 6：キビ近似種、炭化胚乳 7：イボクサ
8：コナギ、炭化種子 9：ポントクタデ、炭化果実 10：スペリヒュ、炭化種子
11：ササゲ属、炭化種子 12：ササゲ属、炭化種子（11の拡大）13：カタバミ属、炭化種子



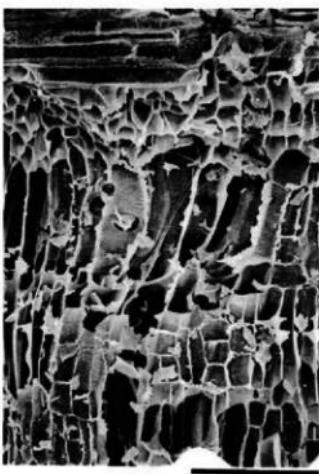
1 a クサギ（横断面）bar:1.0mm



1 b クサギ（横断面）bar:0.5mm

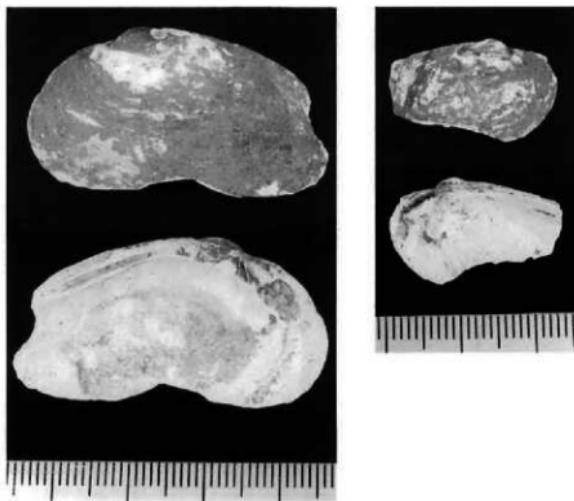


1 c クサギ（接線断面）bar:0.5mm

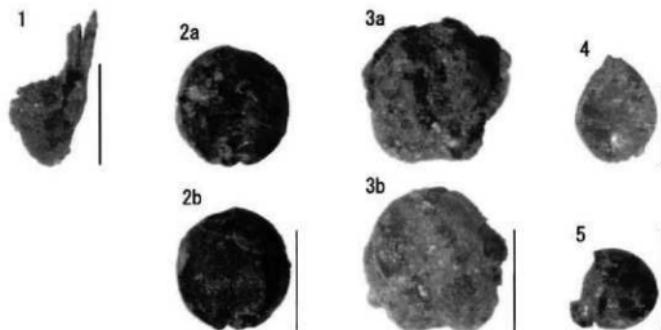


1 d クサギ（放射断面）bar:0.1mm

71号土坑出土炭化材



71号土坑出土イシガイ（左：左殻、右：右殻）



66号住居跡出土炭化種実（スケールは1mm）

- 1 : イネ、炭化穎破片（基部） No.1 2 : アワ、炭化胚乳 No.2
3 : アワ、炭化胚乳 No.1 4 : タデ属、炭化果実 No.2
5 : シロザ近似種、炭化種子 No.3

報告書抄録

ふりがな	なかのいせきだい49ちてん								
書名	中野遺跡第49地点								
副書名	東京電力志木変電所の埋蔵文化財発掘調査報告				卷次				
シリーズ名	志木市遺跡調査会調査報告				卷次	第7集			
編著者	尾形則敏 深井恵子 青木修								
編集機関	埼玉県志木市遺跡調査会								
所在地	〒353-0002 埼玉県志木市中宗岡1丁目1番1号 TEL 048(473) 1111								
発行年月日	平成16(2004)年10月29日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド	北 緯 (°'")	東 経 (°'")	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因		
中野遺跡 (第49地点)	志木市柏町 1丁目1503-1 の一部他	11228	002 35° 50' 00"	139° 34' 22"	19990510 ~ 20020904	890.00	変電所増設工事		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項				
中野遺跡 (第49地点)	集落	旧石器時代 縄文時代 弥生時代後期 古墳時代後期 平安時代 中・近世	石器集中地点 住居跡 土坑 炉穴 遺物包含層 住居跡 土師器 土坑 住居跡 土坑 段切状遺構 井戸跡 土坑	1ヶ所 1軒 10基 1基 全域 6軒 1軒 2基 1軒 5基 1ヶ所 4基 12基	石器・剥片・石核 土器・石器 土器・石器 土器 土器・石器多数 上器 土師器・砥石 須恵器小破片 土師器・須恵器 土師器・須恵器 人骨・陶磁器・かわらけ・鉄製品・石製品・板碑・銅錢など	遺物包含層からは、縄文時代中期後葉から後期前葉にかけての土器・石器が多く出土した。	段切状遺構については、『鎌村旧記』に記載される「村中の墓場」関連の遺構の可能性がある。		

志木市遺跡調査会調査報告 第7集

中野遺跡第49地点

－ 東京電力志木変電所の埋蔵文化財発掘調査報告 －

発 行 埼玉県志木市遺跡調査会

埼玉県志木市中宗岡1丁目1番1号

発行日 平成16（2004）年10月29日

印 刷 株式会社 白峰社